秋山成勲"敵前逃亡"の裏側を徹底追求!

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING

enterbrain MOOK

2009
130
特別定価940yen

桜庭和志vs田村潔司戦実現記念
プロレスからMMAへの壮大な大河ドラマ!

特集 UWF

青木真也「俺がホンモノをやるしかない!!」
三崎和雄 命懸けの格闘技論
川尻達也 なぜK-1マッチなのか?
北岡悟は自宅もキモ強かった!
谷川貞治が秋山成勲に三行半!!
泰葉 電波系インタビュー
"Uオタク"ジョシュが語る桜庭vs田村
前田日明語録で振り返るUWF
金原弘光×高山善廣×ミヤマ☆仮面
BJペン、アンデウソン・シウバが
"お茶濁しマッチメイク"を斬る!!
『やれんのか!』はこうして生まれた

年末年始
決戦直前!!
『Dynamite!!』、UFC、
ハッスル、『戦極』、
新日本プロレス!!
一番おもしろいのは
どこだ!?

生き残りを懸けた年末年始決戦やれんのか!

どんな逆境でも マット界は ハッスルできる!!

説」
VF」
実
ー伝説」
メント!

2009 No.130 CONTENTS

kamipro

表紙写真／タイコウクニヨシ　イラスト／村松正孝

特集 UWF
“桜庭和志vs田村潔司”の背景に迫る!

MMA&PRO-WRESTLING

004 青木真也『Dynamite!!』でも「やれんのか!」
009 迷走する韓国マスコミと秋山成勲
010 川尻達也 初K-1ルール挑戦に覚悟のインタビュー
014 谷川貞治 秋山成勲に仰天サヨナラ宣言!!
018 BJペン、アンデウソン・シウバが日本格闘技界に喝!
113 泰葉、電撃参戦! どうなる!?『ハッスル・マニア』!!
120 1.4新日本ドーム、超! 見どころガイド
122 三崎和雄が語る「男の格闘技論」
126 ジョルジュ・サンチアゴ「ATT一期生物語」
128 “キモ強ワールド”北岡悟の部屋へようこそ!
133 菊田早苗 新日本&Uインター時代の波瀾万丈人生

UWF

026 桜庭和志のUWF魂
028 “蒼い目のUWF信者”ジョシュが語る桜庭vs田村
033 船木誠勝「劣等感と強さの探求で駆け抜けた日々」
038 仲野信市「UWFの源流・昭和新日本プロレス道場伝説」
042 ブッカーK・川崎浩市が語る「内側から見た第二次UWF」
044 前田日明語録で振り返るUWF
050『ケーフェイ』を書いた男・更級四郎が語るUWFの真実
056 小島和宏『週プロ』編集部の“狂った季節”
060 熱狂を通りすぎたマスコミのUWFとは?
066 金原弘光×高山善廣×ミヤマ☆仮面の「よみがえれ! UWFインター伝説」
073 宮戸優光が「桜庭vs田村“兄弟ゲンカ”煽り」を一喝!
076 元Uインター取締役が桜庭vs田村三連戦の真相を激白!
082 堀辺正史「安生洋二こそがUの純真である!」
087 菊地成孔「UWF科学主義の熱狂と挫折」
092 夢枕獏が提言!「UWFとは猪木の一部である!!」

kamipro Special

097 笹原圭一×篠田荘太郎の『やれんのか!』リアルドキュメント!
138 ジョシカク新時代のニュースター・MIKU

Columns

103 花くまゆうさくの『豆リングの汁』
104 椎名基樹の『サムライ三昧』
105 高木三四郎の『リングを捨て町へ出よう』／金原弘光の『どこまでやるの!?』
106 マサ斎藤の『GO FOR BROKE!』
107 掟ポルシェの『萌え萌え女々苑』
108 佐藤譲の『入場曲五十三次』／田中太陽の『鉄火場ゴングショー』

魔王が去りて泰葉が来たる!? 年末年始総力徹底取材!!

ynamite!!』欠場

前逃亡

闘家"とは何かを考えたい

12月11日、都内・某ホテルにて行なわれた記者会見において、秋山成勲の『Dynamite!!』欠場が主催者より発表された。欠場理由は、主催者がリストアップした10選手の対戦案と、秋山成勲が望むマッチメイクに大きな隔たりがあることが主な原因だったようだ。

「まあ、対戦相手がイヤだったのかなって気がしますけどね。対戦相手次第で出場する可能性はありましたけど、秋山選手が考えていることと、ファンや我々が考えていることとギャップがあるんじゃないですかね。もし、秋山選手の考えているカードがいいカードだったら、夢のカードとして実現に向けて動きますけど」（谷川貞治FEG代表／記者会見より）

今回の欠場発表に一番驚いているのは、じつは秋山成勲本人かもしれない。なぜなら、「FEGもTBSも、カードなどの条件面で最終的に譲歩してくるに違いない」と秋山成勲は思っていただろうから。業界の噂によれば秋山は、魔裟斗とのミックスルール（MMA+K―1ルール）で、ホイス・グレイシー戦を逆提案したとされるが……。もしこの噂が真実ならば、ファンの夢と秋山の夢には大きなギャップがある。

振り返ってみると、結局欠場となったが、DREAMミドル級GP1回戦では、無名の戦士イアン・マーフィーが秋山のために用意されていた。『DREAM・4』や『DREAM・6』でもマッチメイクを巡る交渉は難航をきわめたようだ。そこに青木真也が「お茶を濁すな！」と噛みついた！

断っておくが、格闘家の旬は短いし、それぞれの道があるのだろう。だから交渉の場でイベント側と駆け引きすることは、当然の行為と本誌は考える。…………な〜んて、つまらない正論を吐くつもりは毛頭ない。なぜならば、格闘家が「闘う」という根源的な行為をロマンなく放棄してどうするという話だろう。

いまさら言うことでもなく、プロ格闘家は一人の〝表現者〟でもある。秋山成勲が〝プロ〟を名乗るならば、『Dynamite!!』出場を蹴った以上、プロとして何かしらを表現する必要がある。たとえば年末のUFCに登場……、いや、年明けの『戦極』のリングを土足で踏みにじるくらいのアクションを起こせば、今回の大晦日欠場は納得がいく。そんなにおもしろくて興奮できることはそうそうないのだから。

要するにいまの秋山は、プロとして〝なぁ〜にがやりたいのか〟がまったくわからないのである。

そもそも、一部の格闘家が大きな壁に挑戦しなくなった時代――。我々はいま、〝格闘家〟という存在をあらためて考える必要があるのではないのか。

格闘技だから真剣勝負ではない。プロレスでも真剣勝負はある。

では、真剣勝負とは何か――？　格闘家はどうあるべきか。

それは、青木真也から始まる格闘家たちのインタビュー、そして今号の特集テーマである「UWF」からも読みとることができるはずだ。

秋山成勲『Dyna

魔王敵

いま、あらためて“格闘

「マイケルはもういい。大晦日はアルバレスと世界2位決定戦をお見せします！」

いつまでもあると思うな！ 格闘技!!

アオキは やります!!

「マイケルはもういい。大晦日はアルバレスと世界2位決定戦をお見せします！」

青木真也

〝自称〟DREAMの大黒柱・青木真也の大晦日の相手はエディ・アルバレスに決定！
対戦要求していた秋山成勲は青木戦どころか『Dynamite!!』への出場もナシ！
ほかにも魔裟斗、山本KIDら、ビッグネームが軒並み欠場濃厚という異常事態となっている今年の大晦日。
格闘技が生き残るため、バカサバイバーが至極マジメに吠えまくります！

聞き手／ジャン斉藤　撮影／タイコウクニヨシ　試合写真／乾晋也

バカサバイバー♪　生き残れ、これッ!!

秋山成勲の〝敵前逃亡〟について、話を一番聞きたいのは青木真也だ！すでに報道されているとおり、さんざん挑発しまくってきた秋山戦は消滅してしまったが、ライト級屈指の実力者であるエディ・アルバレス戦が決定したワオ木さん。

世界のMMAファイター、関係者が注目するこの一戦。非UFC系においては最強決定戦の呼び声も高いが、大晦日という一般世間が注目する舞台を考えると、じつにハードコアなカードであることも確かだ。そのため秋山戦を期待していたTBSサイドも難色を示していたという。

いいや、世間なんかにわかってたまるか！　そして、秋山成勲を筆頭にして、格闘家が〝お茶を濁す〟いまだからこそ、誰かが格闘技の〝ホンモノ〟を表現しなければならない。世界最強への果てしなきロマン。俺がホンモノだ、絶対にニセモノは認めない。先鋭な格闘技観!!

青木真也の言動は、もしかしなくとも〝若気の至り〟なのかもしれない。しかし、アントニオ猪木から始まって、今回特集するUWFや、PRIDEの明日なき暴走など、過剰な格闘ロマンを持つ者たちの〝若気の至り〟によって時代は切り開かれてきた。いまその〝若気の至り〟を最大限に表現しているのは、この青木真也なのだ。

今回のインタビューは、エディ・アルバレス戦が正式決定する前に収録したものである。だからこそよけいに青木真也の〝闘う者〟としての姿勢が浮かび上がってくるのである。

——青木さん、大晦日が近づいてきましたね。

青木　そうですね。

——まだK—1が終わったばっかりで、『Dynamite!!』の追加カードは発表されてないですけど、青木さんのところには何パターンかカードの話は来てるんでしょうか。

青木　微妙にありますけど、よくわかんない。考えても面倒くせえから。

——面倒くせえですか（笑）。どうやら秋山選手との試合はなくなったみたいですね。

青木　マイコーはないですよ。もうね、ボクの中ではマイコーはマイケル・ジャクソン以下ですよ。ボクの中では夕樹マイコーですよ、ホントに。

——は!?　誰ですか、それ？

青木　知らないんですか、夕樹舞子！　検索してくださいよ、ボクらの世代のカリスマAV女優ですよ。

——へぇ～っ。

青木　これいいネタじゃない？

——いや、わかんないですけど。

青木　「マイコーやってやりますよ」っていうのは、見る人が見たら「夕樹舞子ヤッてやるって、青木すげえな！」みたいな。クックックックッ。

——あいかわらずですねぇ。秋山選手の話はどんな感じで伝わってきてるんですか？

青木　「青木とやるなら○○○○○」ってのたまったらしいですよ。

——ダハハハハ！　マイコーもあいかわらずですねぇ。

青木　ボクのギャラをマイコーに払ってでもやりたかったんですけど、ちょっと無理ですね（笑）。でもホント、何様だって感じですよね。

——で、秋山さんは青木戦どころか『Dynamite!!』にも出ないらしいんですよ。

青木　いいんじゃないですか？（興味なさそうに）。青木vs秋山戦、不戦勝でボクの勝ちですよ。

——なるほど！　でも、秋山選手って青木さんとはやらないとは読んでいたんですが、ほかの選手とはやると思ったんですけど。

青木　まあね。マイコーはね、根性がないっていうか、格闘家として大切な気持ちっていうのがないですよね。

——たまたま今回、青木さんが「相手を選びすぎてる」とか、秋山選手に対して問題提起をしたわけですけど、周りの反響ってどんな感じでした？

青木　いろいろ言われましたよ。競

幻のライト級GP決勝 アルバレス戦正式決定！

今回のインタビュー収録後の12月11日、都内で『Dynamite!!』の会見が行なわれ、青木vsアルバレス戦が正式に発表された。会見では秋山成勲が『Dynamite!!』を欠場することも谷川FEG代表から明かされた。青木は秋山に対して「いつでもやってやりますけど、またお茶を濁しに来るんであれば、来なくていいよって。僕がDREAMでやってるかぎり、上がらせねぇぞっていう気持ちはあります」と怒りの獣神モード。秋山はどこへ行く!?

今年はホテル取ってくんなかったら出ないッス。

真也

技的な部分で「絶対にやめろよ」って言う人もいっぱいいたし、けっこうみんな反対してたんですよね。けど、越えられない壁とかないんだよね。

――自分が思うに、この1年間って秋山選手に限らず、どうも一部の選手が勇気を持ってなさすぎなんじゃないかなって感じるんですよ。

青木 なんなんスかねぇ？ なんかイヤな話はいっぱい聞きますよ。

――そうですよね。青木さんがデビューしてから4年ぐらい経つわけじゃないですか。業界に入ってからそういう匂いみたいなものはずっと感じてきたんですか？

青木 それはそれでいいんじゃないですか？ お客さんが喜ぶ結果になれば。けど、あんまりボクはやりたくねぇなって。

――なるほど。

青木 でも、いまはよくわからなくなってきてますよ、MMAの価値観って。何勝何敗ってところに価値観がなくなってきたでしょ。

――といいますと？

青木 UFCとか観ても、トップ戦線のヤツが8勝2敗だったりするんですよ。ミゲール・トーレスっていう36戦とかやって1敗しかしてないっていう怪物がいるんだけど。そういうのもいるけど、やっぱり誰とやってるかだと思う。評価されるのは。

――確かに、ここ最近は何十戦無敗とか、そういう存在は……。

青木 いないですよ！ いないし、いたらおかしい！

――メチャクチャ強いか、よっぽどうまくやってるかのどっちかですね。

青木 まあね、ノーコンテスト含めて3年無敗っていう大技もありますからね。凄いですよ、ゴイスーだよ。

――そんな選手もいましたね（笑）。そういう意味では、誰とやるかっていうのは凄く問われますよね。

青木 童貞キラーじゃダメなんですよ。格闘家なんだから、強いヤツとやらなきゃっていうのはありますね。

――でも童貞マッチでもお客さんのニーズがあればいいんじゃないかなとは思うんですけど、選手側からするとまた違うんですかね？

青木 え、どういうことですか？

――たとえば、そのカードによってイベントが成り立つとか。

青木 それは全然ありでしょ。でも、そんなことばかりやってると、前にも言いましたけど、DREAMという舞台が誤解されると思うんですよ。そればかりか、いままで桜庭（和志）さんたちが必死に身体を張って作ってきたイメージもぶち壊しちゃうわけだし、格闘技界にとって営業妨害でしかないですよ。

――しかし、いまのイージーマッチって、ファンのことを考えないイージーマッチが多すぎますよね。

青木 そうなんですよ！ 見るからに「はい、これ消化試合」みたいな。

――ボクはイベントのためにはイージーマッチは必要だと思うんですよね。で、秋山選手側に立つと、バリバリのしんどい試合はもう卒業したって言い方もできると思うんですよ。

青木 卒業？ 尾崎（豊）か！

――（無視して）青木さんはまだ若いじゃないですか。秋山さんだけじゃなく、もうキツい相手はいいよっていう選手もいると思うんですよね。そういう気持ちってわかります？

青木 ボクもね、生ぬるい水に浸かって生ぬるいコーヒー飲みたいときだってありますよ。でも、周りが許さない感はありますからね（笑）。

――たとえば、最先端MMAじゃなくても、テーマありきの試合をやるっていうのは凄くわかるんですよ。

青木 それはボクもそう思います。でも、秋山選手のやってることって意味わかんないですもん。

――テーマは見つけづらいですよね。

青木 自分が気持ちいいことして、試合後に彼のポケットに小切手でファイトマネーがたんまり残るかもしれないですけど、それだけですよ。

――ファンには何も残らないですね。

青木 ボクなんかファイトマネーもロクに残んねぇし、ホテルすら取ってもらえねぇときもあるし（笑）。メシだって微妙に食わせてもらえるか食わせてもらえないかぐらいだしなぁ……。だから今年はホテル取ってくんなかったら出ないッスよ。ちょっと青木真也、駆け引きしますよ。

――黒い駆け引きならぬ、青い駆け引き！（笑）。

青木 そう、ホテルに泊まらせてくんなかったら本気で出ない！

――ホテルの地下の寿司屋の割引券ぐらいつけてもらいましょうか。

青木 『寿司三昧』ね（笑）。寿司と味噌汁までつけたら厳しい試合するね。味噌汁つかなかったらイージーファイトだけど。

――なるほど。青木さんの中で「この人は真剣に闘ってるな」って感じるのはMMAに限らず誰かいます？

青木 最近ガチンコすぎるのもちょっとどうなのかっていうのはあるんですよね。全日本キックとか観ていて、山本優弥選手とクリストフ・プルボーってボクの中でのマッチメイクではないのよ。なんでいま、ちょっとスランプじゃないけど、調子がよくない山本優弥に、タイトルマッチをさせちゃうの？ みたいな。まあ、いろんな事情があるんでしょうけど。

――難しい話をしますね、まったくキックを知らない自分に。

青木 わかりやすくたとえると、イマナー（今成正和）がDREAMに出て負けて、DEEPでもいい試合できないときにタイトルマッチをやらせてしまう、みたいな。それもなし崩し的に。それはないだろうっていう。

――難しいですよね。あんまりガチンコすぎるのもよくないし、あんまりテーマがない試合もマズいですし。

青木 ある程度、選手の状況を見てあげるっていうのは必要だと思うんですよね。秋山選手はそれとはまったく違いますけど。でも、一緒だと思われたくないし、総合格闘技が誤解されっちゃうから。もうヨソでお茶を濁していてほしいですね。

インタビューを行なったのはK-1WGP決勝大会の翌日。テレビ観戦したというワオ木さんに、一時は冗談混じりで対戦表明していたバダ・ハリのことを聞いてみると「さすがに、あれはマズイっしょ。合掌！」とのこと。

ご存知の方も多いと思うが、青木とアルバレスは7.21「DREAM.5」でのライト級GP決勝戦で戦う予定だったが、アルバレスは準決勝の川尻戦での負傷により試合続行不可能となり幻に終わっている。ライト級世界2位決定戦の勝者はどっちだ!?

あると思ってたら、なくなるよ！ こ

――他人事ですねぇ（笑）。

今年はホテル取ってくんなかったら出ないッス。ちょっと青木真也、駆け引きしますよ

──たぶん秋山さんは、自分はもう上がりだと思ってるんじゃないか、と。『HERO'S』でチャンピオンになったし。

青木 すげえスゴロクですね、それ。

──そんな青木さんですけど、エディ・アルバレス戦がほぼ決定だって話もありますけど。

青木 ほぼっていうか、アルバレスしかいないです。いまのボクはK─1の試合やりたくないですもん。で、芸能人ともやりたくないし。

──でも、そういう需要がある場合はやるしかないですよね。

青木 それはわかるんだけど、いまはやりたくないです。「今年は大晦日出てもいい」とか言ってる人、あれ誰でしたっけ?

──坂口征夫さんですか?

青木 そうそうそう。たとえばいまのボクが坂口選手と闘うタイミングでじゃないでしょ?

──まあ、そのとおりですね。

青木 ボクはアルバレスとやるから、心配することは何もないですよ。

──大晦日ということを考えると、アルバレスvs青木戦っていうのは、ある意味メチャクチャわかりづらいカードじゃないですか。

青木 じゃあ、やめよっかな。

──いや、世間からするとわかりづらいけど、こんなときだからこそ、こういうガチガチの試合をやるっていうのは頼もしく感じるわけですよ。

青木 「青木真也はPRIDEファンに支えられてて、PRIDEファンに足を向けて寝れねえからゴマをすりまくってる」っていう噂も耳にするんだけど(笑)、いつまでも格闘技があると思ってたら、なくなるよ! このままだと。だからボクはしっかり真剣勝負をやり続けます。

──よっ、青木真也!

青木 またバカにしてるでしょ?

──いやいや(笑)。

青木 みんなちょっと余生を楽しむ時代になってきたじゃないですか、年齢層も上がってきたから。でも、ボクはまだ若いから余生は楽しめねえもん。そういえば、アルバレスとやるかもしれないって中井(祐樹)さんに言ったんですけど、中井さん、超おもしろいですよ。

──師匠はなんて言ってました?

青木 「中井さん、秋山ダメだったんですよ」「あ、そ」「たぶんアルバレスですね」「いいねえ、熱いねえ」とか言って。

──他人事ですねぇ(笑)。

青木 「ボクまだやるって言ってねえんだけどな」と思いながら、中井さんは完全にやる気になってて、急に一人で戦略とか立て始めて、「スイッチしてくるよね」とか言ってて。「だからやるって言ってないんですけど」ってツッコミどころ満載だったんですけど、相当おもしろいですよ。

──すでに戦闘モードなんですね。

青木 ボクよりやる気満々ですよ。

──でも、ライト級では、BJペンがUFCでは敵なしで世界最強と言われて……。

青木 (さえぎって)BJがトップなことは誰もが認めてる。だからBJは殿堂入りなんですよ、ボクの中でも。要は青木真也vsエディ・アルバレス戦はライト級世界2位決定戦。

──東の横綱BJに対して、西の横綱決定戦のほうがいいんじゃないですか?

青木 いや、世界2位決定戦のほうがロマンありますよ! そしたら完全な挑戦者だよ。なんかカッコいいでしょ?

──でも、もう少し準備期間がほしかったという気持ちはないですか?

青木 だって準備したってしなくたって変わらないですよ。結局やることは。準備したからいいってもんじゃないですし。

──青木さんの中で常に準備してるっていうのはあるんですよね。

青木 常に準備。常にもう出待ち(笑)。要はいまの僕のモチベーションは世界2位決定戦なんで。だってボク、いまトップだと思ってないし、世界のトップだと思ってないから。

よっ、大黒柱! 08年の青木真也

[08.3.15 DREAM.1 ライト級GP1回戦]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
-青木真也vsJ.Z.カルバン-
(1R 3分46秒 ノーコンテスト)
07年大晦日にマッチメイクされながらカルバンの負傷のため幻となっていた一戦がDREAMライト級GP1回戦で実現。しかし、試合はカルバンのヒジ打ちが青木の首筋に誤爆し続行不能となりノーコンテストに。青木は号泣。

[08.4.29 DREAM.2 ライト級GP1回戦]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○青木真也vsJ.Z.カルバン×
(2R終了 判定3-0)
3月のDREAM旗揚げ戦でノーコンテストになったライト級GP1回戦の青木vsカルバン戦が第1試合で実現。試合では青木の変幻自在なサブミッションが次々と炸裂し、判定でカルバンに完勝。試合後、青木はやっぱり号泣。

[08.6.15 DREAM.4 ライト級GP2回戦]
神奈川・横浜アリーナ
○青木真也vs永田克彦×
(1R 5分12秒 フットチョーク)
第1試合に登場した青木は永田克彦とライト級GP2回戦で激突。青木は五輪銀メダリストの永田から二度に渡ってテイクダウンを奪うとマウント状態からフットチョークを極めて圧勝。休憩明けの抽選会では宇野戦が決定!

[08.7.21 DREAM.5 ライト級GP準決勝]
大阪・大阪城ホール
○青木真也vs宇野薫×
(2R終了 判定3-0)
『HERO'S』とPRIDEを代表する注目の日本人対決が実現。序盤から青木の奇天烈サブミッションが何度も襲いかかるが宇野は"宇野逃げ"で一本勝ちは許さず。試合は判定で青木が勝利し、一足お先に決勝進出を決めた。

[08.7.21 DREAM.5 ライト級GP決勝戦]
大阪・大阪城ホール
**○青木真也vs
ヨアキム・ハンセン×**
(1R 4分19秒 TKO)
アルバレスが川尻戦での負傷で試合続行不可能となったため決勝戦ではリザーバーのハンセンと対戦した青木。かつてタップを奪ったフットチョークを仕掛ける青木だったが、パウンドをモロに食らって敗戦。試合後は悔し涙。

[08.9.23 DREAM.6 ライト級ワンマッチ]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○青木真也vsトッド・ムーア×
(1R 1分10秒 裸絞め)
大会直前に参戦が決まった青木はWECで活躍するムーアと対戦。青木はわずか70秒、裸絞めで完勝するとマイクで「大晦日にネバーランドでワオワオしませんか」と秋山に対戦要求するも、結局、秋山とはワオワオできず。合掌。

青木真也

——まだ宿泊するホテルも用意されてないですし(笑)・

青木 ……ホテル取ってほしいな。取ってくんなかったら試合しない、真剣に。

——真剣に(笑)。

青木 いつも試合は家から行って、帰りはジムの近くで降ろしてもらったりするんだけど、最近は宿舎1泊だけ取ってもらったりするわけですよ。

——取ってもらってるんじゃないですか。

青木 でも、おそるおそるですよ。「すいません、取っていただけますでしょうか? 大変言いにくいんですが」みたいな(笑)。「できたら朝食もつけていただけると嬉しいです」とか。

——キツい相手とやることによって徐々に待遇を上げていくっていう。

青木 ホテル取ってもらえたら、その次どうしようかな。

——大晦日のテレビ的にはもうちょっと楽な相手というか、名前がある選手のほうがいいみたいな話もあるみたいですけど。

青木 いや、いいんですよ。だってさ、負けて絵になるっていうのも重要なんだって。作られたヒーローなんてダメだって。

——さっきの話で言うと無敗はありえないし、強い人とやっていくことが評価されるべきだ、と。

青木 そう。「やれんのか?」やりますよ、「今年も」って感じですよ。……でも、ホントに大丈夫かなぁ? アルバレスじゃなかったら怒りますよ。

——大丈夫ですか、笹原さん。

笹原(圭一DREAM・EP) まあ、大丈夫じゃないんですか。

青木 笹原さんの大丈夫ってホントわかんないんだって! 「試合はない」って言っといて9月に試合させた男だから、平気な顔して。

笹原 あははは。昔のことは覚えてないですねぇ。

——ちなみに青木さんって、逆境のほうが燃えたりします?

青木 ボク、逆境ファイターですから。「♪ゆ〜け、ゆけゆけっ逆境ファイタァ〜」。

——いやいや、そんなお茶の濁し方をせず。

青木 ボクはお茶濁してないですよ。

——2回目のカルバン戦とか[illegible]相当怒りのエネルギーがあった[illegible]ないですか。

青木 ライガーですね、あれは。

——怒りの獣神ですか。

青木 でも、逆境ってなくないですか、ボク。

——青木さんはないかもしれないですけど、いまマット界自体が逆境じゃないですか。『Dynamite!!』もそうだし。

青木 いや、いまはいまで楽しいし、逆境とかないですよ、絶対。べつに苦[illegible]とも思わないし。

——そこは誌面的に「逆境だからこそ頑張れる」って言ってほしいんですけど(笑)。

青木 でも、それは違う。逆境だからこそじゃなくて、逆境なんかはじめからない。やるしかないんです。だって、うらやんでもその時代にはならないし、人をうらやんでもその人にはなれないし。「北岡悟になりたい」って[illegible]も北岡悟に変われないし。

——北岡さんになりたいんですか?

青木 なりたいわけないっしょ!(笑)。ボクが秋山になりたくても、いやマイコーにはなりたくないな。

——いまの青木真也を120パーセント出しきることが重要だ、と。

青木 そうッスね。もうやるしかかねえから。……ボク、昔と比べてだいぶ大人になりました?

——いや、なってないと思います。

青木 おい!

——いや、でも『武士道』に上がり始めたときと比べると、プロのファイターになってきてますよね。

青木 大人になったと思ったんだけどなあ。考え方の幅も広がったし、もうなんでもありなんで。

——昔だったら認めないっていうことも認められるように。

青木 全然認めます。「♪大人の階段のーぼる〜!」ですよ。昔はね、ホテルも泊まれなかったし。

——まだ言ってる(笑)。じゃあ2〜3年経ったら秋山さんのことも認められたりするんじゃないですかね。

青木 (即座に)それは絶対にないですね! マイコーは格闘家としてのロマンがないです! いや、マイコーだけじゃなくいまの若者はみんなロマンねえんスよ。出るだけで終わりってヤツが多すぎる。

——やっぱり格闘家っていうのは「世界最強になりたい」ってモチベーションがあるわけですよね、みんな。

青木 そうなんです。でもみんな折れてっちゃうんです。だからいいんですよ。ボクとアルバレスで世界2位決定戦ですよ。世界で1位はUFCだけど、2位決定戦が日本で行なわれるってロマンあるじゃない?

——それはロマンがありますね。

青木 いまできる最高のカードだと思う。

——そして、そのあとに青木vsBJ戦も観たいですね。

青木 いいッスねぇ。それはロマンあるなぁ。だから、ボクは全然キツくないんですよ。だって、強くなれるチャンスがこんなにもらえるわけだから。アルバレスなんて、もしかしたら今回が最後の日本かもしれないし。

——アメリカで試合をする機会は多くなりそうですよね。

青木 もうめぐり合わないかもしれないんだから、こんなチャンスをみすみす逃す手はありませんよ。ボクは強くなりたいんです。そして、お客さんに喜んでもらいたい。そのためにアルバレスと闘います! 押忍!

【08年12月7日/都内・DEEPジムにて収録】

あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。世界屈指の極めの力を持つ奇天烈グラップラーにしてムエタイマニアの"自称"DREAMの大黒柱。自らを"ニコ中"と名乗るほど大のニコニコ動画好きでもある。ちなみに今回アルバレス戦が決定したことを聞いた名物親父の正氏は「大丈夫だよ。そんなもん、組んで倒したら余裕だろ」と、なぜか自信満々。パラエストラ東京所属。180cm、70kg。

韓国発秋山〝怪情報〟!!

迷走する秋山、迷走する韓国の報道

『DREAM.6』での試合後、「DREAM以外のリングでもいいから吉田秀彦と闘いたい」と発言した秋山成勲。その後、吉田戦は消滅し、対戦を熱望されていた青木真也との試合も消滅し、さらには『Dynamite!!』への欠場も決定した……。一方、今年韓国でブレイクした秋山は、韓国でも活発に芸能活動をしているため、韓国発の秋山情報も多数報道されるようになった。その韓国での報道は、秋山へのかわいさゆえか、はたまた日本での契約交渉のための情報操作と思われるような、いかにも怪しいものが多い。ここではそんな奇々怪々な韓国発の秋山情報をまとめて紹介する。

文／大川義之

UFCが秋山に高額オファー？

11月18日、韓国のメディアは一斉に「UFCが秋山に一試合5000万円のギャラを提示した」という情報源の不明確な記事を報道。現在、UFCのトップファイターであるレスナーやクートゥアーの一試合のギャラがともに約2500万円と報道されていることを考えると、UFCが秋山にそんな高額のオファーをすることは考えにくい。

のちに『Dynamite!!』での青木戦の交渉で、秋山サイドはUFCからオファーされた（とされる）ギャラに近い額を要求したという情報も流れた。こうした韓国発の秋山関連情報は、その内容の怪しさを含め、なんらかの意図が見え隠れするのが特徴である。

韓国テレビ局が引き抜きを画策!?

その秋山は、11・15『UFC91』をアメリカ現地で観戦しているが、11月28日には、韓国の格闘技専門ニュースサイトの『MFIGHT』で、韓国でUFCを放送するケーブルテレビ局『スーパーアクション』のプロデューサー、シン・ファソプ氏が秋山の引き抜き疑惑をうっかり告白する記事も報道されている。

ファソプ氏は、秋山が『UFC91』の会場に来場したことについて触れ、「じつは秋山選手をUFCに紹介したのは我々なのです。もちろんUFC側も秋山については知っていましたし、話をしたら関心を示しましたよ」と堂々と発言。現在、ネット上では「秋山はフリーになった」という情報が流れているが、FEGの谷川代表は「秋山選手との契約はまだ残っています」とも発言している。

『スーパーアクション』は、韓国でDREAMやK-1を放送するテレビ局『XTM』とライバル放送局だ。このプロデューサーの発言を見ると、秋山の契約問題は、韓国のテレビ局を巻き込んだ事態に発展していることがわかる。

再契約の条件は対戦相手指名権？

また、11月25日には『スポーツソウル』紙がトンデモ記事を報道。タイトルは「秋山がFEGと再契約するうえで最も重要な条件は『対戦相手指名権』」というもの。今年、DREAM側が提示する対戦相手候補の中から柴田勝頼、外岡真徳という相手を選んできた秋山だけに、非常に納得できる見出しだ。この記事は「FEGに精通したある関係者」から聞いた情報として「秋山が直接対戦相手を望む理由は、弱い相手を選んで試合をするという汚名を晴らすため」としたうえで、「今年、秋山がDREAMで復帰してから闘ったのはすべて格下の相手だったが、これは秋山が指名したのではないことがわかった」という驚きの結論になっている。

明らかに韓国での秋山の商品価値を落とさないために書かれたこの記事を見ると、情報を提供した「FEGに精通したある関係者」も、ズバリ言って秋山サイドなのではないかと勘ぐりたくなってしまうのであった。

実際には、秋山サイドは青木真也との対戦を拒否し、さらには〝対戦相手指名権〟にこだわるあまり、『Dynamite!!』にすら出場しなくなってしまったのだが……。

青木戦拒否はショー対決のため？

まだまだ韓国での秋山に関する摩訶不思議報道はあとを絶たない。大晦日を前にして青木真也が秋山を「お茶を濁している」と断罪したうえで対戦表明をしたことは、秋山を韓国のスターと報道する韓国メディアもカチンときたようで、12月6日『ユーコピア』紙は、「極端なグラウンドファイターのアオキが一階級上の秋山成勲（※編集部注＝実際には二階級上）に勝つのは事実上不可能に近い」と表現して青木をこき下ろし、「両者の対戦はスポーツというより〝ショー〟的な側面が強い。結局、秋山は自分の名前を利用しようとするアオキの売名行為を拒否し、アオキはアルバレスとの〝本物対決〟を選ぶしかなかった」と表現して秋山を擁護している。日本の格闘技業界では、青木戦を拒否した秋山が、青木とは別の軽量級の有名選手との対戦を希望したとも伝えられたが、結局こちらも実現せず。

秋山のブレない気持ちとは？

だが、一部ではあるが、韓国でも秋山に対する批判記事も登場している。10月17日の時点で、『マイデイリー』紙は「このまま強い相手と闘わず、芸能活動を続ければ本末転倒」と批判した。だが、当人の秋山はそんな批判もどこ吹く風。11月14日の『東亜日報』に掲載された記事では、この批判について「他の国なら誤解されるかもしれませんが、自分にとって母国は韓国。芸能活動をするのは柔道や格闘技を広く知ってもらうための手段」と意に介していない様子。さらに記者が「人気が落ちるのが怖くないですか？」と尋ねると、秋山は「もちろん落ちるのはイヤですが、逆にいまは人気があるのでいいです。大切なのはどんな状況でもブレない自分の気持ち」とサラリと受け流した。

ケガで負傷中の田村潔司や他団体の吉田秀彦との対戦を表明したり、『Dynamite!!』の出場交渉中にUFCの観戦に行き、結局『Dynamite!!』も欠場する秋山。

傍目には気持ちがブレまくっているように見えるが、秋山の本心とはいったいなんなのか？

武田幸三戦に賛否両論！　初のK—1ルールで『Dynamite!!』に参戦！

「この試練を乗り越えないとDREAMを背負う選手にはなれないと思います！」

初のK—1ルールで『Dynamite!!』武田幸三戦を闘うことになった川尻達也。このオファーを真っ向から受けた川尻は、いまどんな気持ちでいるのだろうか。さらに、大晦日のカード発表を遅らせている〝駆け引き〟問題についても、選手の立場から語ってもらった。

聞き手　ジャン斉藤　撮影　丸山剛史

川尻達也

武田幸三戦に賛否両論！ 初のK－1ルールで『Dynamite!!』に参戦！

――川尻さんのK－1ルールでの大晦日参戦に対していろんな声が挙がってるんです 川尻さん自身、最初にオファーが来たときはどう思いました？

川尻 「え？ マジで⁉」っていう感じです。普通に考えて、7月のDREAMが終わった時点で大晦日は“あの人”とだろうなという気持ちがあったんで。

――“あの人”というのは、川尻さんが対戦要求していた宇野（薫）選手ですね

川尻 それで間違いないだろうって。そのために準備してたわけじゃないですけど、そういう気持ちでしたから。

――それとはかけ離れたというか、今回は対戦相手もルールもまったく違うカードになりましたねぇ。

川尻 それはもうオファーが来たら受けるだけですからね。そりゃできれば僕も闘う以外の選択肢は僕にはないです。

――ズバリ言って、断ろうと思いませんでした？

川尻 いやいや、断る余地ないですよ！ そんなことないでしょう。だって、闘いたい選手がいるうえに“本職”じゃないルールで闘うわけじゃないですか。それは拒否できたと思うんですよ。

川尻 そんなことできるわけないじゃないですか！（同席した笹原EPをチラッと見ながら）ハッキリ言って、選択の余地すらなかったですからね。「総合とK－1どっちがいい？」ってのもないですから（笑）。

――そうなんですか⁉（笑）。

川尻 最初からK－1ルールのつもりで

11月27日に行なわれた Dynamite!! 会見で川尻は「青木くんだけがDREAMを背負ってきたわけじゃない」とコメント ファンを熱くさせるのは選手のこんな心意気やロマンである！

も、一言は言ってほしかったです！ それは謝ります（アッサリ）。

笹原 失礼しました。

――まるで心がこもってないですね（笑）。でも、そのオファーを出してきた主催者の狙いも理解されてるんですよね？

川尻 はい。というか、あんまり相手を選んでもしょうがないんでね。それに、僕はスタッフの人を信頼してますから。何も考えないでそういうカードを組んでるとは思わないし、それを乗り越えてこいというんだったら、しっかり乗り越えて生き残ってやろうじゃないかという気持ちもありますよ。

――つまり、川尻さんは自分をどう見せていくかということに関しては、スタッフにお任せしてる、と。

川尻 そうですね。

でも、こういう選手とやったほうが自分が光るんじゃないかとか、少なからず選手には自分が上がりたい欲ってあるわけじゃないですか。

川尻 もちろんベルトを持ってる人とベルトを懸けて闘うというのが僕にとっては一番ですけど、前回（DREAMのライト級トーナメントで）負けてるんで、そう言える立場じゃないじゃないですか。まあ、僕がチャンピオンだったらわがまま言いますけどね。

――ほう。どんなわがままを？

川尻 僕、めっちゃ言いますよ！ まずはですね、（選手控室の）フルーツ増やしてくださいとか（笑）。

――はあ。ささやかだなあ（笑）。

川尻 とにかく、チャンピオンはそれだけのことを言う権利がありますよ。たとえばトーナメントも途中参加でもいいと思うし、優勝したヤツが俺に挑戦しろって言ってもいいと思うし。でも、僕はチャンピオンでもないし、前回負けてる以上、相手も選べないです。選ぶ気もないし、言われた相手を乗り越えるしかないですよね。

――ただ、今年のマット界って選手がわがままを言うケースが非常に多いと思うんですよ。

川尻 え、誰がですか？

ええっと、誰とは言わないですけど……、そういう駆け引きをするケースがじつに見受けられたんですよね。で、そうやっておもしろくなるならいいけど、ホントにつまらなかった。

川尻 駆け引きってなんですか？ どういう駆け引きですか？（興味津々で）。

――ここで説明するのもなんなんですが

（笑）。たとえば、オファーが来るけど「今回はいいです」と断るとするじゃないですか。

川尻　それだったら「出なくていいよ」ってなりますよね。

——それが、そうはならないんですよ。

川尻　ホントですか!?　僕らが言っても、「あ、そう。んじゃ、お疲れさま」ってなりますよ。

笹原　そうですね（冷たく）。

——いやいや、それが、「そこをなんとか、ぜひちょっと……」ってなるわけです。

川尻　そうすると？

——じゃあ、相手を選ばせてくれとか、ギヤラを上げてくれとか、そういう感じですよね。

川尻　ふーん。でも、それって選手を甘やかしてますよね。たとえば、地位とか名誉がほしくて格闘技をやってる人もいると思うんですけど、僕は強くなりたくて格闘技やってるわけで、地位とか名誉はあとからついてくる副産物みたいなものだと思うんですよ。どこに比重を置くかで違いますけど、強さを求めてるんだったら相手を選んでたらカッコ悪いじゃないですか。

——そこで選ぶのはまだ理解できるとして、僕らが思うのは、選手が相手を選ぶ場合でも、最終的にファンがおもしろいと感じてくれないと意味がないなって。

川尻　そこは重要ですね。べつにやりたくない相手とか興味なくても、ファンが望んでくれればやる気になるし、僕も盛り上がるんですよね。たとえば五味くんとの試合もそうだったし。

——『PRIDE武士道』ライト級トーナメントの試合ですね。

川尻　僕自身はちょっと時期が早いかなと思ってたんですよ。73キロで試合したことなかったんで。それでいきなり一戦目が五味くんだったから凄く迷ったんですけど、あのときが中量級に関しては勝負時だと思ったからやったんですよね。だから、ファンの熱って大事だし、逆にそれをスカしてるヤツはムカつきますけどね。

08年川尻達也が闘った失神してくれない選手たち

強烈なパンチで何度かダウンを奪ったにもかかわらず、まったく白旗を揚げてくれないアルバレス　決勝戦、にドクターストップがかかるぐらい殴ったのに……

川尻の強烈なパウンドを食らいつつも、下から一本を狙いにくるブスカペの執念深さには脱帽。判定決着という、川尻にとっては"大仕事"の一つとなった。

日本のリングに初登場したときの"イロモノ"的な立ち位置からは一変、リーチを活かし着実に実力を伸ばしているマンバに、川尻は苦戦を強いられることに。

ファンの熱って大事だし、それをスカしてるヤツはムカつきます

——ムカつきますか。

川尻　ファイターとしてそこが一番ですよ。それで僕らは食ってるんだから。

——今回、ケースは違うんですけど、ファンは川尻さんにはMMAで大一番を闘ってほしかったという声もあるわけじゃないですか。そこはどう思われますか？

川尻　本音を言えば僕もMMAでやりたかったですよ。でも決まったからには僕は文句を言うつもりもないし、そう期待してたファンも、きっと僕が大晦日に勝てば「よかったじゃん」ってなりますよね。文句言ってるってことは気になってるってことだから、僕の試合結果には敏感になってると思うし。

——要するに、注目されてるってことですよね。

川尻　その中で負けたら「MMAでやっときゃよかったのに」って言わますよ。だからこそ勝って黙らせるというわけじゃないですけど、勝てば理解してくれる人もいるんじゃないですか。

たとえば、日本の格闘技興行って、主催者側が選手の気持ちを理解しようとするばかりに、どうしても甘やかしてしまうというケースがあると思うんですけど、UFCだったら一方的にカードが提示されるじゃないですか。川尻さんはどっちがいいと思いますか？

川尻　いやー、どっちでもいいですねえ。選ぶとしても、たとえばどの選手と手が合うとかはあると思うんですよ。噛み合わない人とやるよりは噛み合う選手とやったほうが盛り上がるじゃないですか。それを選ぶ権利は選手にもあったほうがいいと思いますけど、ただ「コイツとやりたくない」というだけで選ぶというのは、そこはプロモーターがしっかりしてくれないと選手は甘えちゃいますよね。だって、ラクにお金をもらえたほうがいいですから。

——川尻さん、そういう気持ちってあるんですか？

川尻　いや、少なからず誰でもあるんじゃないですか？　でも、そこはファイターとして甘えちゃいけないと思うし。

——ラクしてえなあって思うことは？

川尻　年に一回ぐらいね、ラクしたい（しみじみと）。

——ワハハハハ！　でも今年はラクできなかったですよね。ブラックマンバ、ブスカペ、アルバレスって、地味なうえにラクじゃないというか。

川尻　最悪ですよ！　ブスカペなんかも妙に打たれ強いし、もっとすぐ気を失なってくれる人がいいですよね（笑）。

——ダハハハハ！　そこでプロモーターに対して「俺のこと、どう思ってるんだろう」という不信感ってないですか？

川尻　不信感はないですね。頭にくることはありますけど。それで文句を言うよりは、結果を出して「ざまあみろ！」って

川尻達也

候補が3人いたら、一番強い人を選ぶのが普通じゃないんですか？

言いたいタイプですね。「おまえらの思うようにはいかねえよ！」って。
べつに主催者もそこにへんな意図はないと思うんですけど（笑）。たぶん、今回の主催者側の狙いを言うと、ビッグネームと闘うことで川尻さんを売り出していきたいというのがあったと思うんですよ。やっぱり、アルバレス戦でまた一つ爆発した川尻さんの魅力を世間に届かせたいというか。最初は別の立ち技の選手の名前が挙がっていたみたいですし。

川尻　でも、DREAMのチャンピオンにもなれなかった選手がMAXルールで闘うことって、K−1の選手からするとムカつくと思うんですよ。僕が逆の立場だったら相当ムカつきますから。K−1の選手で総合のチャンピオンと試合やるって言ったら、ボコボコにしようと思いますからね。

——では川尻さんがK−1ルールで闘うということは、そこらへんの覚悟ができたうえでリングに上がるということですよね。

川尻　もちろんそうですね。本当にK−1という競技をリスペクトしてるし、まったくなめてるわけじゃないですから。でも、K−1の舞台を作ってる人は僕が大晦日という大舞台でK−1ルールでやるというのはおもしろくないと思うんですよ。それもわかったうえで、乗り越えてやろうと思うし、そこに意味があるかなって。今回ラクしちゃうと、逃げが入っちゃいますもんね。

——いままで格闘家の人生の中でラクなほうを選んだときってありますか？

川尻　いつもラクしたいですけど、僕はないんじゃないですかね。だって普通なら、たとえば候補が3人いたら一番強い人を選ぶのが普通じゃないんですか？

——凄いなあ。それは意地ですか。

川尻　意地もあるし、そのために格闘技をやってるんだから。弱い人とやるために格闘技やってるわけじゃないですから。僕も何人かの対戦相手を提示されたことあるけど、この人一番強いなと思う人を選んできました。それは青木くんだってそうじゃないですか。

——いやいや、わからないですよ、あの男は（笑）。

川尻　修斗のときから僕にはそういうイメージしかなかったですよ。マッハさんだって、自分がおいしい相手とはまったくやってないですよね。僕はPRIDEって最後にちょこっと出させてもらっただけですけど、みんなそういう選手ばかりじゃないですか。だからPRIDEにはあれだけ熱があったと思うし。

——選手同士のしのぎの削り合いは熱を績んでましたよね。ちなみに、今回の試合って川尻さんの試合が大晦日に放送されるのは初めてですよね？

かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。04年修斗ウェルター級王座に君臨。PRIDEには05年から参戦。DREAMライト級GPでは、ブラックマンバ、ルイス・ブスカペを破り、準決勝のアルバレス戦へ。壮絶な殴り合いで会場を爆発させるが、無念の敗退。「Dynamite!!」ではその殴り合いをに期待すべく、K-1ルールでの武田幸三戦が決定している。171cm、69.9kg

川尻　初お茶の間です。ま、あんまり気にしてないですけど、やっぱり負けることだけは許されないというか。ここ乗り越えないと来年DREAMを背負っていける選手になれないだろうなと思うし、厳しいけど生き残ってやるって感じですね。

——大勢の人に注目される上に、川尻さんにとってはリスクも大きいですね。

川尻　だから「勇気のチカラ」というよりも、僕にとっては覚悟ですね。覚悟を決めてやるしかないですよ。だって観てる人がお茶の間の人で、そういう人ってK−1と総合の違いってわからないじゃないですか。

——ええ、そうですね。

川尻　僕がK−1ルールで闘うことの意味はわからないだろうし、そんな中で仮に何もできずにボコボコにやられたら「あの川尻って選手、凄い弱いじゃん」ってなりますよ。「川尻って、何もできないで終わった人だよね。あの人でしょ？」って。一生そういう見方をされるってのもわかってるし、それが自分にとって僕が格闘家として生きていく中でどういうふうに働くかもわかってます。それも考えたし、それも全部わかった上で覚悟を決めてやってやろうって。

わかりました。今回はFEG系の選手はたくさん出ないので、川尻さんたちに期待するしかないんですよ。

川尻　あ、そうなんですか!?

——魔裟斗選手、KID選手は出ないでしょうし、秋山選手も微妙って聞いてますし（12月6日現在）。

川尻　でもそんな出ないんだったら『Dynamite!!』じゃなくていいんじゃないですかね？『やれんのか！』でやったほうがいいんじゃないですか？　そんなことより、今年視聴率が悪かったら来年テレビあるんですか？

——川尻さんってそういう危機感ってあります？

川尻　ありますよ！　だって、まず何よりも食えなくなっちゃうじゃないですか。……ヤバいですね、それ、全然ヤバいじゃないですか!!

笹原　もう川尻選手に頑張ってもらうしかないですね。

川尻　……いやあ、僕も大晦日に出られるかわからないです。

——ワハハハハハ！　さっそく駆け引きですか（笑）。

川尻　もしかしたら『戦極』とかUFCがアレかもしれないですし。

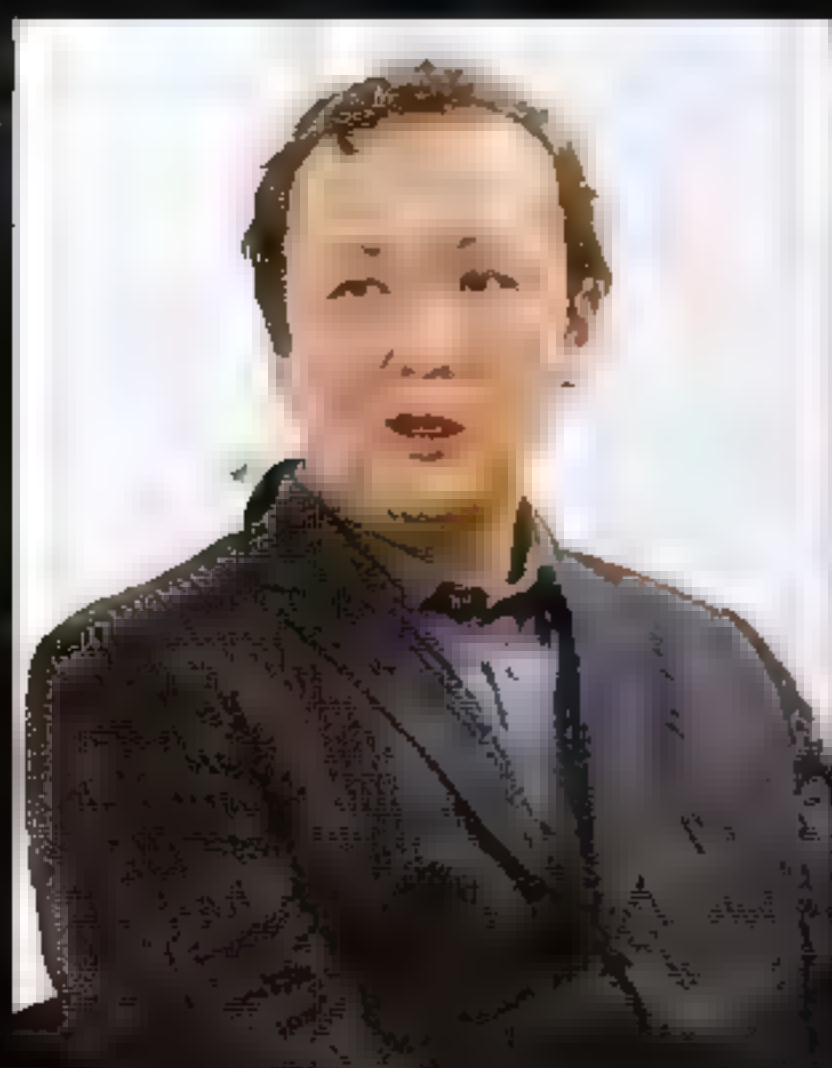
笹原　そうですか。じゃあ、けっこうです。

川尻　………頑張ります。

——今日はありがとうございました！（笑）。

【08年12月6日／都内・ディファ有明にて収録】

秋山成勲の〝黒の駆け引き〟に、キラー谷川がサヨナラ宣言!!

「これで秋山くんがDREAMに出ることもないでしょう」

FEG代表

谷川貞治

12月に入ってもほとんどカードが発表されない『Dynamite!!』。
いったい、どーなっているんですか、谷川さん!というわけで、
魔王をはじめ、おおいに混乱を引き起こしている選手の駆け引きの実態について直撃。
そして、その先にある大晦日の行方とは!?

聞き手/ジャン斉藤　撮影/乾晋也

インタビューを収録したのは12月5
谷川　まあ、交渉過程の話は公にできな
ことじゃない?　出る意志はあったんだ
谷川　憤りというか、秋山くんの場合は
――スバリ、そう聞こえますけど(笑)。

秋山くんの場合は大晦日の事件でかなりスポンサーが引いたんです

インタビューを収録したのは12月5日。なんとK—1WGP直前だというのに、今回は緊急的にインタビューを試みた。本来、サダハルンバにはK—1WGPが終わった段階で話を聞くべきだが、『kamipro』編集部が、とある情報を入手したため、その真意を探るべく駆けつけたというわけである。……決して編集長のジャン斉藤がK—1に興味がないわけではありませんので、悪しからず。

谷川 今日はなんの話？

——今日は消化不良に終わった『Dynamite!!』の大反省会です。

谷川 んぁ〜！ やる前から消化不良だなんて失礼な話だよ！！（怒）。

——でも、有力選手がことごとく不出場だという話ですし、"崖っぷちの大晦日"という感じはしますけど。

谷川 ああ、確かに魔裟斗くんとKIDくんの出場は絶望的です。

——でも、アレですよ。谷川さんには秋山（成勲）選手という頼もしい存在が控えてますからね。

谷川 ……それ、嫌味？ 秋山くんも出ないよ（ボソリ）。

——えぇ!? そんなバカな！

谷川 わざとらしいなあ、もお。秋山くんは「大晦日は出ません」って言ってきたんですよ。

——その件に関して、いろんな噂は耳にしてます。青木戦のファイトマネーにウン千万円という法外な金額を要求してきたり、なぜか魔裟斗とMMAとK—1のミックスルールを逆提案したとかしないとか（笑）。

谷川 まあ、交渉過程の話は公にできないけど。そもそもボクが直接交渉したわけじゃないんだよね。もちろん状況は把握してるんですけど、秋山くんとは年内で……、なんて言ったらいいのかな。

——要するに契約期間が終了する、と。

谷川 まぁ、12月31日までは秋山くんは他団体に出ることはない。そういう状況の中で、いろいろと将来のことも含めて考えてるというか、ボクらと駆け引きしているのかはわからないんですけど。秋山くんの所属事務所も新しく変わって、大晦日の交渉に関してはそういう中で話し合いを進めていたんですね。で、秋山選手のほうから「大晦日は出たい」と。そう聞いたので、それと同時に対戦相手を何人かリストアップしたんですね。それで12月の頭には二人の選手が有力だったんですけど、最終的に今回の大晦日出場は断ってきたんですよ。

——理由はなんですか？

谷川 理由は、対戦相手がイヤだということじゃない？ 出る意志はあったんだけど、今回はやめとくということだったんでしょうね。

——はあ。いろいろ聞きたいことがあるんですけど、何から聞いたらいいかわからない（笑）。まず、その二人の有力候補というのは誰なんですか？

谷川 ええっと、ヘビー級のサウスポーの選手と、ライト級のキモかわいい選手。

——それ、名前を隠すことに何か意味があるんでしょうか？（笑）。

谷川 交渉過程をあんまり言うのもアレかなと思ってさ。まあ、これで秋山くんはDREAMに出ることもないでしょう（キッパリ）。

魔裟斗、KIDら『Dynamite!!』の顔がことごとく出られないうえに、今年DREAMでドラマを積み上げてきた宇野も欠場の可能性大。FEG系選手がほぼ全滅というのは、残念というほか言葉が見つからない

——あら、厳しいですね。

谷川 だって、秋山くんは桜庭戦のクリーム塗布問題で、テレビ局やスポンサーさんに大迷惑をかけていながら、大事な大晦日のイベントに協力できないというわけでしょ？ それはFEGにとってももちろんだし、関係者は誰も納得できないと思うんですよ。べつに秋山くんのことが憎いわけじゃないけど、主催者としてそこは態度をハッキリ示さないと。

——いいかげんにしろ！ という憤りはあるんですか？

谷川 憤りというか、秋山くんの場合はやっぱりね、大晦日の事件でかなりスポンサーが引いちゃったんですよ。TBSは大ダメージですよ。それでも才能はあるし、スター性のある選手だからこそ、ヒール人気も含めて応援してきたというところがあるんです。たとえば日本の復帰戦が世論的に厳しそうだから、韓国でセッティングした経緯もあったしね。

——主催者として秋山選手を守ってきたところはあったんですね。

谷川 それはそうですよぉ。でも、日本の総合格闘技からすると、大晦日イベントって凄い重要なんですよ。大晦日で視聴率を獲ってきたから、普段もレギュラー放送してくれるし、スポンサードしてくれるっていうのが当然ある。K—1MAXは大晦日がなくても一つのブランドとして認めてくれているけど、総合格闘技はまだまだなんですよね。総合は大晦日なくては成立はできないです。フジテレビがなぜPRIDEに力を入れていたかといえば、そこも大晦日ありきなんですよね。

——それなのに、秋山選手はいったい何を考えてるんですかね。もしかしたらまだ駆け引きしてるというか、一度は断れば主催者がいろいろ譲歩してくると思ってたりするんですかね？

谷川 そうでしょう（キッパリ）。

——ダッハッハッハッ。

谷川 笑いごとじゃな〜い！

——いや、充分笑いごとですよ！

谷川 秋山くんはね、おそらく断ってるつもりはないと思うんだよ。そこが面倒くさいんだよなあ。秋山くんの中には「TBSもFEGもオレに出てもらいたいんだろ」という読みがあるんでしょうね。

——要は、弱い相手だったり、大金を積めば出てくるということですか？

谷川 誰もそうは言ってないよ。

——ズバリ、そう聞こえますけど（笑）。

谷川 言える範囲で言うと、対戦候補は10選手くらい出したんです。いろんな幅を持たせてね。大会サブタイトルの「勇気のチカラ」で言うんなら、ヘビー級の選手に立ち向かっていくカードもあったし、あるいはミドル級のトップファイターの案もあったし。下の階級から挑戦させるというプランも出した。だけど、すべてに言えるのは、秋山くんを負けさせたいとか、そういう前提で組んでるつもりはないんですよね。全部、意味のあるカードにしたいだけなんですよ。

——秋山成勲を使ってどうおもしろくするか。

谷川 勝ち負けというよりも、ボクらは誰とやれば輝くのかしか考えないわけでしょ。そういうカードじゃなければ、大晦日でやる意味もないわけだしね。

——秋山選手はその価値観が理解できなかったんでしょうね。

谷川 だから、自分でマッチメイクを決めたいんじゃない？ 自分の価値観の中でやりたいんでしょ。

——そうなったら秋山選手はますます保身に走りますよね。

谷川 極端に言えば、これはアマチュア出身の選手に多いんですけど、ただ勝てばいいという話なんだろね。でも、格闘家としてはなんのためにリングに上がるの？ ってことになると思うんですよ。

——そこは強い相手に立ち向かっていくという姿を求めたいですね。

谷川 秋山くんはプロとは何かということをまったく誤解してますよね。正直、歪んでます。いまの秋山くんはプロとして、お客さんに何かしらプラスになるものは与えてないと思うんだよ。

——歪んだおもしろさしかないですよね。それも本道があってこそ光るものなのに。谷川さんとしては、ミルコと青木、

どちらとやってほしかったんですか？

谷川　どっちも観たかったけど、正直、青木戦は実現しなくてホッとした。

——あ、そうですか。

谷川　うん。なんかこのカードって、秋山くんにリスクがあるとか言われてるけど、青木くんのほうがよっぽどハイリスクですよ。

体重差があるとはいえ、青木から挑発してるから負けたら赤っ恥ですし。

谷川　で、来年以降もDREAMとしては青木くんを育てたいと思ってるから。もし青木くんが負けたりしたら、それは日本の総合格闘技界のためによくないなあと思いますね。

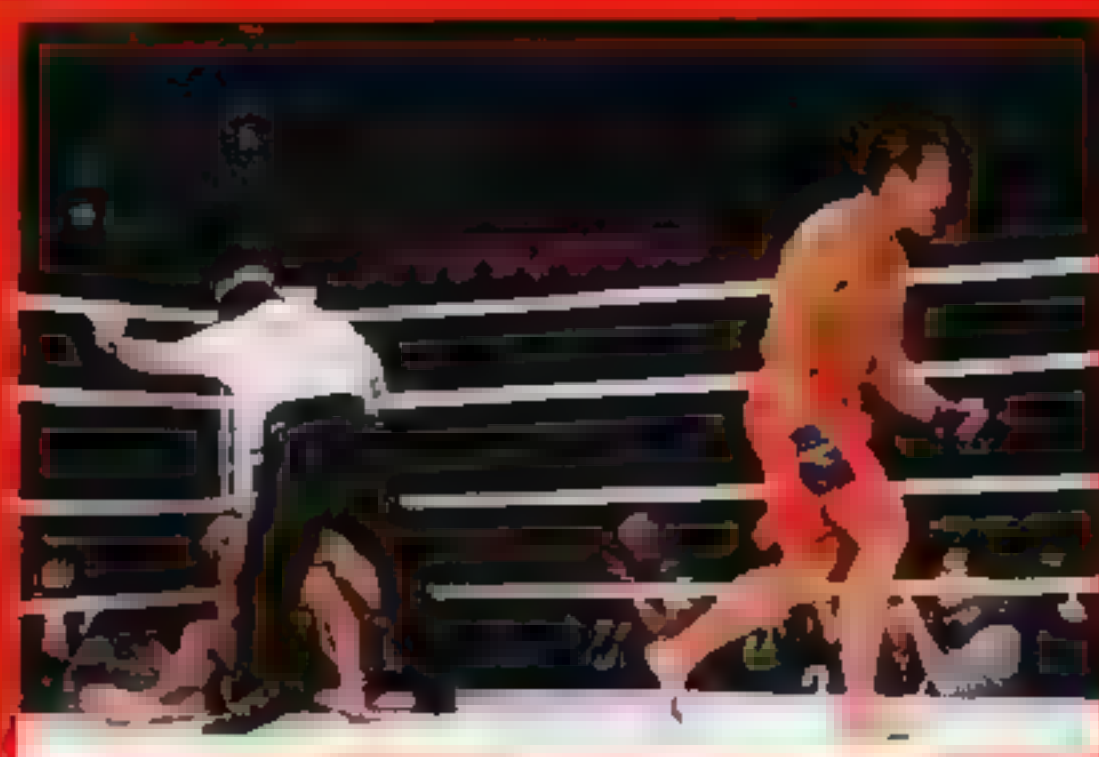
——でも、青木はアルバレスとやるんですよね。このタイミングでアルバレスって、相当キツいカードですね（笑）。

谷川　キツい相手だよねぇ。ホントは青木くんには大晦日っぽいカードを一番やらせてあげたいんだけどな。誰もが知っている知名度のある選手とやってほしいというか。

——要は世間に売り出したいということですよね。もともと川尻さんもそういう意図があって魔裟斗選手とやらせたかったんですよね。

谷川　そうそうそう。川尻くんと青木をもっと世間の人に知ってもらいたい。

——そういう意味では、視聴率王の秋山選手は必要なんじゃないですか？

谷川　なんかみんな凄く勘違いしているけど、秋山くんってべつに視聴率王じゃないよ。視聴率が一番獲れる時間帯に秋山選手の試合を流してるんであってさ。引かれてしまったスポンサーへの対応でもあるんです。「秋山は数字獲りますよ」っていうアピールの意味で。それでも13パーセントがやっとじゃない。でも、マッチメイク次第ではもっと獲れたと思うんだよね。

ヌルヌル事件以降の 秋山成勲トラブル史

——秋山選手って、掛け算になりうる逸材ではありますから。

谷川　そうそう。たとえば、ミルコと秋山くんがやったらプロモーションということでいうと、凄くやりやすいですよね。

——テレビ的にも引きはあります。

谷川　で、秋山くんと青木くんがやれば、これはチケットがバカ売れしますよね。テレビ的に不安だけど、格闘技のヒリヒリした魅力を充分に伝えられると思う。去年の三崎くんと秋山くんの試合みたいに。そういう意味ではチケットを売るカードも対戦相手次第だし、視聴率を獲るのも対戦相手次第。

昔の曙さんみたいに、秋山選手が出れば視聴率が獲れるというわけじゃないんですね。

谷川　それは全然違います。だから秋山くんの根本にあるのは、相手がどうこうじゃなくて、勝たなきゃダメなんだっていうことですよね。勝っていれば自然と人気が出るもんだと思ってる。でも、それは全然違うんだよ！　これはね、とくに総合格闘家が多いんだけど、なんかいちいちおいしさを考えるんだよね。あのね、これは反省を込めて言うんですけど、ボクが「おいしい」とか「視聴率が重要だ」とか言うのは主催者としての立場であって、格闘家がそういう話をしたらダメだよね。テレビ局のために闘ってるような感じがして、ロマンを感じないよね。

ボクたちマスコミもそれをエサにして評価するのもよくないですね。

谷川　だから魔裟斗くんがいちいちそんなこと言わないし、おいしいと思えない選手との対戦になっても自信を持って受けるじゃないですか。あの姿勢が評価されるんですよね。もし、おいしいおいしくないで考えるんだったら、対戦相手としての佐藤（嘉洋）選手はまったくおいしくないですからね。

みんな勘違いしてるけどべつに秋山くんって視聴率王じゃないよ

——しかし、どうして総合格闘家ってそういう人が多いんですかね。今年はそんな1年だったような気もするんです。他団体も含めて。

谷川　なんかさ、選手だけいい思いをしてるよね、ファイトマネーを含めて。主催者やマスコミも一生懸命業界を支えていこうとしてるけど、いまって誰も儲かってるわけでもなんでもないじゃないですか。みんな苦しい中でやってるのに、コイツとやったらお金がもらえるんじゃないかとか、ギリギリまで駆け引きすればいい条件は引き出せるんじゃないかとか、そんな勘違いしている。

本人はうまくやってるつもりなんでしょうけど、セルフプロデュースで成功してる格闘家っていないですよね。

谷川　まったくいないです。一番典型的なのがボブ・サップですよ。サップがノゲイラとかホーストとかとやったときってやっぱりカッコよかったですもんね。

負けてるけど、どんどん株が上がっていって。

谷川　どんどんコマーシャル出演の話がきて、それが一気に自己プロデュースして、アイツとはイヤだ、コイツとはイヤだってなると、一気に落っこちちゃう。

——まあ、サップぐらい人気があったら天狗になってもいいですけどね（笑）。でも、選手がセルフプロデュースに走ったのは、谷川さんが甘やかしすぎたせいじゃないんですか？

谷川　……そうかもしれないなぁ。

——ハハハハハ！

谷川　甘やかしすぎたかもしれない。

クックックックッ。秋山選手に感謝の念がないのは、谷川さんが勘違いさせたとしか思えない（笑）。

谷川　いやぁ、秋山くんにはもともとそういう素質があるからなぁ。

あ、谷川さんは悪くない（笑）。

谷川　でも、秋山くんにはホンモノになってほしかったよなぁ。

過去形ですか（笑）。まだなんとかしたいという気持ちはないんですか？

谷川　いやー、いまはないなぁ。

ない！　じゃあ、こっちからアプローチするってことはないんですね？

谷川　まったくないなぁ。

向こうが歩み寄ってくるとしたら？

谷川　歩み寄るという問題じゃなくて、ホンモノを目指してやってくれるんだったら、嫌いでもなんでもないし、むしろ好きな選手だから応援したいけど、自己プロデュースしてるあいだはうまくいくわけないし、特別扱いしちゃうと業界全体のバランスが崩れちゃうんで。

こうなると秋山選手は使いづらそうですねぇ。

谷川　あのね、よく新しい団体ができるけど、なぜうまくいかないかっていうと、選手に自己プロデュースさせてるからなんですよ。選手が思うがままの大金を払ったり、思うがままのカードを組んだりするじゃないですか。うまくいくわけないですよ、そんなの。

いいか悪いかはともかく、そのマッチメイクに何か企みや狙いがあればいいんでしょうけど、選手の自己満足しかないならおもしろくもなくなりますよね。

谷川　たとえばへんな話、HIROYA

くんにとってK-1甲子園っておいしくないんですよね。自分のセルフプロデュースの中では。やっぱり大人とやりたいとか、もっと強いヤツとやりたいという気持ちもあると思うんだよ。

――要はほかの選手と並びたくないということですよね。

谷川　そういう本音はあると思う。でも、HIROYAくんがK-1甲子園に出ることは凄くいいと思うんですよ。K-1甲子園自体が輝くし、甲子園というジャンルを引っぱってるのはこの男だというイメージもあるし、そこで「優勝者と闘います」って言い出したらもの凄くカッコ悪いですよね。でも、それは彼もたぶんわかってると思うんですよ。

――HIROYAくんの若さで駆け引きしたら、それはそれでおもしろそうですけど(笑)。まあ、そこは来た球を打ってほしいですよね。

谷川　だからファンとか主催者とかマスコミが投げる球にどう応えるかだよね。そこが根本的にわかってない選手の周りには、選手を助長させる人が必ず集まるんですよ。宿命ですね、これは。わかりやすい例でいうと、サップの周りもそうだったんですよ。「おまえを観にチケットを買ってるんじゃないの?」って。

――前から思ってるですけど、選手が成功するためには、実力3割、マネージメント7割じゃないですか。

谷川　ホントにそうだよ。いくら強くてスター性があっても、マネージメントのせいでダメになっていく選手はたくさんいるからね。なんでそんな駆け引きするんだろう?　ってマネージャーっているじゃない。やっぱりさ、選手の都合ばかり聞いていても仕方ないし、素人がその気になって選手がどう輝くか考えてもすぐに終わっちゃうんだよね。

内藤大助vs亀田興毅戦が実現できなかったのも、そういった問題ですね。

谷川　あれもお互いのセルフプロデュースの問題だよね。あの二人が試合しなかったのは、ボクシング界にとってものちのち凄くダメージが残ると思うなあ。だから世間が観たいというニーズに乗っからないのがダメですよね。だから、ボクは凄くいい素材だと思うんですけど、石井(慧)くんとかそういうところを間違えないでほしいですね。そうしたら天下を獲れると思うんですよ。日本の総合格闘技を変えられると思うんだけど。

――いまの格闘家に言えることは、興行論の勉強をしたほうがいいような気がしますけどね。高田さんが凄かったのはそこですよね。ここぞというときには、ちゃんと選ぶじゃないですか。引退試合に田村潔司とやるって凄いセンスですよ。それは髙田さんにやるべきだって熱心に勧めたPRIDEも凄いし、そう決断したのも凄いですし。

谷川　そうだね。だからそういうところのセルフプロデュースも含めて、世間がどう思ってるかを嗅ぎとる力って本当に重要だよ。もしくはおもいきって神輿に乗っちゃう。秋山くんは乗ろうとしないんだよね。乗っかっちゃえば凄く楽なのに。あとは周りが勝手に磨いてくれるから、その中でどんどん自分の役割を演じていけば、もの凄いスーパースターになれたんだけどね。神輿に乗った瞬間にね。

――神輿の乗り方がわからないとか。

谷川　というか、自分で神輿を作りたいんでしょう。だから、秋山くんは自分でやってみたほうがいいんじゃないの?　オレってこういうことがカッコいいと思ってるんだってのを、やってみたほうがいいと思うよ。

――もともと韓国で自主興行やりたがってるって話ですよね。そこでプロデュース業の厳しさを味わってほしいという。

谷川　それを自分の肌で体感しても、秋山くんはわからないと思うなあ。自分でお金を出してやるわけじゃないから。

――冷たいなあ(笑)。もう過去の選手のような扱いですね、完全に。

谷川　ボクの中でもう過去だよ。過去だし、そこに固執してもしょうがないし。そんなにいまの格闘技界に余裕や時間がないからね。そんなヒマがあったらどんどん新しい選手を磨いていかないといけないですよ。そこで新しいドラマを作っていかないといけないし。だから、へんな話、いまでもバブル感覚の選手たちは総取っ替えしないといけないと思ってるからね。駆け引きする選手とか、過去の遺産を引きずってる選手はいらないよ。

――そんなことを言いつつ、大晦日に秋山選手が出てるかもしれないですね。

谷川　可能性はないだろうねぇ。ただ、いろんな意味でもう間に合わないよね。

――もうほかのカード調整も進んでるわけですもんね。

谷川　そう。もう秋山くん抜きで調整し始めているから。べつに面倒くさい選手もいないしさ、次々に決まっていくと思う。まあ、所くんが坂口(征夫)選手との対戦を渋ってるくらいかな。

――そりゃ渋りますよ(笑)。所選手からすれば、金子賢のときもそうだけど、好んでそういう試合をやってるとは思われたくないでしょうし。

谷川　ああ、なるほどねえ。KIDくんなんか扱いづらそうに見えてセルフプロデュースじゃないんだわ。

――そうなんですか。

谷川　KIDくんは全然そんなタイプじゃないよ。

――名前は出さないですけど、○○さんも駆け引きしますよね?

谷川　本人はうまくやってるつもりだろうけど、まったくわかってないタイプだよね。もったいないよねぇ〜。それに引き換え、田村選手とかのセルフプロデュースって、「なるほど」って思う部分があるんですよ。納得しちゃうから口説けなかったりするんですけどね。

――やっぱりそこも一流から三流まであるんですね。そういえば、UFCの契約って、マッチメイクを拒否できないんですよね。それも凄いですよね、そんなにギャラもよくないのに。

谷川　でも、その姿勢って正しいよ。日本でもできないことはないけど、UFCと違うのは、ボクらは選手のことはわかってあげたいよね。それがあまり度がすぎちゃうと秋山くんみたいなことになるんだけど。相手の意向を聞いて、そういうふうに考えてるんだ、じゃあ今回はこういうふうにしてあげようとか。UFCってそんなこととまったく関係ないからね。彼らのマッチメイクは何一つ惹かれるものはないけど、プロだったらやるかやらないかの話だからなあ。そこは見習うところではあるよね。

――とりあえず、いまのハードルは大晦日ですけど。

谷川　大変だけど、頑張るしかないなあ。でもさあ………、ボクの責任じゃないよね。

――んあ〜!　責任回避ですか(笑)。

谷川　いやいや、選手のケガって、ボクの責任じゃないでしょぉ?

――でも、いろんな事情があっても最終的にはプロデューサーの責任は問われますからね。

谷川　でも、こんなに情熱を持って格闘技界を盛り上げようとしてるのになあ。それぞれ選手のことを凄く考えてやってあげてるんだけどなあ。あ〜、ボクって大変だなあ……。

――もう帰りま〜す!

【08年12月5日　都内・FEG赤坂分室にて収録】

[illegible]ノフに「2試合してもいい」と言ったり、[illegible]は「リングはどこでもかまわない」と言ったり、秋山の発言はいちいち自称大黒柱・[illegible]を激怒させた

DREAM 5、同様、秋山の対戦カードがなかなか決まらない中、最終的に組まれたのは、総合初参戦の空手家[illegible]。この試合も勝利を収めた秋山。試合[illegible]

世界のパウンド・フォー・パウンドが
日本のMMAに喝！

三階級制覇を目指すUFCライト級王者

BJ PENN
BJペン

本当のチャンピオンはベルトを巻いてからもハングリー精神を忘れず上を目指すファイターさ

誰もが認めるライト級世界ナンバーワンファイ[illegible]BJペン。[illegible]までUFCライト級、ウェルター級の二階級を制覇しながら、来年1月[illegible]日「UFC94」では一階級[illegible]のウェルター級王者ジョルジュ・サンピエールと[illegible]に挑むなど、王者にな[illegible]常に上を目指している。この男の闘う姿[illegible]ファイター[illegible]

聞き手／石井史彦　撮影／Josh Hedges（UFC[illegible]ンツ

――1・31『UFC94』で行なわれるGSP（ジョルジュ・サンピエール）とのスーパーファイトに向けて体調はどうですか？

BJ　グレート・シェイプだよ。ハードで充実したトレーニングができているんで、とても満足している。

――試合に向けてどんな練習をしていますか？

BJ　GSPはすべての面で優れているワールドベストのトータルファイターだからね。自分もすべての展開に備えて、柔術、レスリング、キックボクシングと、あらゆる要素を織り交ぜて練習しているよ。

――GSPをパウンド・フォー・パウンド最強だと評価する人も多いですが、あなたは彼をどう評価していますか？

BJ　すべての面で優れていて、とても強靭で破壊力も兼ね揃えた素晴らしいアスリートだよ。トップファイターであると同時に、パウンド・フォー・パウンドのトップであるという評価は間違いないことだし、それはみんなが認めていることだ。彼は偉大な世界チャンピオンだよ。

――あなたが考えるパウンド・フォー・パウンドのベスト3を教えてください。

BJ　自分以外では……ヒョードル、アンデウソン・シウバ、GSPあたりじゃないか？　その中で順位をつけるのは任せるよ。いずれにしても、『UFC94』での俺とGSPの勝者がベストのパウンド・フォー・パウンドのファイターといえるんじゃないか？

――ライト級王者のあなたが、ウェルター級王者であるGSPと対戦し

ようと思ったのは、なぜですか？
BJ　もちろん自分がベストのパウンド・フォー・パウンドのファイターであることを表明したいからさ。
――ライト級の"絶対王者"であるだけじゃ、満足できない、と。
BJ　ファイターである以上、上を目指し続けたいからね。
――ライト級にはもう敵はいませんか？
BJ　いや、ライト級にはタフなファイターがたくさんいるよ。ケニー・フロリアン、タイソン・グリフィン、ショーン・シャーク。UFC以外にもシンヤ・アオキ、エディ・アルバレス、JZカルバン、ヨアキム・ハンセンら、日本の団体には素晴らしいファイターがたくさんいる。ただ、それらすべての選手と闘うのは不可能だから、俺は常にそこから這い上がってきた選手の挑戦を受けたいね。
――日本の青木真也選手のことも高く評価しているんですね。
BJ　ああ。彼はベリー・ベリー・グッド・グラップラーだね。ガードからのサブミッションは驚くべきものだし、柔術と柔道の技術も最高だ。彼の試合を観ることは俺自身、エキサイティングだよ。
――あなたと青木選手の試合が実現したら、世界中のMMAファンが大喜びすると思いますよ。
BJ　ファンが興味を持ってくれることは光栄だよ。ただ、いまは目の前のGSP戦のことしか頭にないから、ほかの試合を考える気にならないんだ。もしかしたら、この先、闘うことがあるかもしれないけどね。
――日本人のもう一人のライト級のトップ、五味隆典選手はどのように評価していますか？　彼こそライト級最強と評価する人もいますけど。
BJ　数年前ならともかく、彼はいまファイトに対してシリアスなのかい？　俺から見れば、最近の彼は試合に対してシリアスではないし、全然フォーカスしてないように感じる。昔のように試合に対してフォーカスすれば、世界でもトップの力があると思うが、いまはベストの状態かどうかわからないからね。
――最近の五味選手の試合からは少しもの足りなさを感じますか？
BJ　彼はPRIDEのチャンピオンになるという夢がかなってから、MMAへの興味が薄れたように感じる。おそらく彼はPRIDEチャンピオンになったことで、自分の中でのゴールを迎えてしまったんだろう。じゃなければ、PRIDEがなくなったとき、UFCに来ていたはずさ。もちろん条件面での折り合いがつかなかったということもあるんだろうけど。俺は彼との再戦はいつでもOKだっただけに、残念だよ。
――五味選手はPRIDE王者になったことで、もうMMAで闘うことに、う満足してしまった、と。
BJ　あくまで想像だけど、俺はそう思うね。ファイターというのは自分の中のゴールを達成してしまうと、もう以前のようにハングリーではなくなり、タフなファイトを避けるようになるんだ。ゴミがそうだとは言わないけどね。

シンヤ・アオキは素晴らしいね。俺は"MMAのパッキャオ"を目指す！

――五味選手は1月4日に北岡悟選手とのタイトルマッチという、タフな試合が決まってますからね。この試合はどうなると思いますか？
BJ　ゴメン、キタオカってどんな選手だい？
――『戦極』のライト級トーナメントで優勝したグラップラーです。
BJ　初めて聞く名前だけど、トーナメントのチャンピオンになるのは実力がないとできないことだから、いいファイターなんだろうな。それなら、ゴミが以前のように試合に対してシリアスになり、「絶対に勝つ」というゴールを明確にしない限り、そのキタオカが勝つんじゃないか？
――北岡選手の勝利ですか！
BJ　トーナメントで優勝した勢いもあるだろうし、PRIDEチャンピオンを倒すチャンスというのは、大きなモチベーションになってるだろうからね。ゴミが昔のように試合に対してちゃんとフォーカスすれば彼に勝てるヤツはなかなかいないだろうけどね。MMAは進化するスポーツなんだ。守りに入ったら自分の成長が止まってしまう。本当のチャンピオンは、ベルトを巻いてからもハングリー精神を忘れずに、さらに上を目指す人間なんだよ。ヒョードルにしてもGSPにしても、偉大な王者はみんなそうさ。
――ライト級の絶対王者でありながら、さらに上の階級を目指すBJ選手はその最たるものでしょうね。
BJ　俺の場合はウェルター級だけじゃなく、その上のミドル級も獲って、三階級制覇が目標だからね（笑）。
――UFC三階級制覇ですか！
BJ　この前のマニー・パッキャオvsオスカー・デラホーヤを観たかい？
――はい。パッキャオが階級差を超えて、世界6階級制覇のデラホーヤを破ったボクシングの試合ですね。
BJ　俺はMMA界のパッキャオになる。GSPに勝って、階級差が関係ないこと、そして自分がパウンド・フォー・パウンドであることを証明するよ。

【08年12月10日／ハワイへの国際電話にて収録】

BJ PENN■78年12月13日、米国ハワイ州出身。ブラジル人以外で初めてムンジアルを制した柔術家。総合格闘家としても「天才」と呼ばれ、これまでUFCウェルター級、ライト級の二階級を制覇。09年1月にGSPとのスーパーファイトが控えている。175センチ、76キロ。

【08.5.24 UFC84 I II Will】
米国ネバダ州ラスベガス／MGMグランド・ガーデンアリーナ
UFC世界ライト級タイトルマッチ
○vsショーン・シャーク
（3R終了時 TKO）
薬物使用で王座を剥奪された前王者ショーン・シャークと対戦。BJは高度なボクシングテクニックで試合を完全に支配。ほとんどジャブだけで前王者を圧倒し、3R終了時に戦闘不能に追い込んだ。強すぎ！

【08.1.19 UFC80 Papid Fire】
英国ニューカッスル／メトロレディオアリーナ
UFC世界ライト級王座決定戦
○vsジョー・スティーブンソン
（2R 4分2秒 チョークスリーパー）
スティーブンソンと空位になったUFCライト級王座決定戦で対戦。BJはUFCで4連勝中と波に乗るスティーブンソンを立っても寝ても殴り続け、血だるまにした上で、チョークで完全勝利した。

【06.3.4 UFC58 USA vs Canada】
米国ネバダ州ラスベガス／マンダレイベイ・イベントセンター
×vsジョルジュ・サンピエール
（3R終了 判定1-2）
2年半前、マット・ヒューズの持つUFCウェルター級王座挑戦権を懸けGSPと対戦。激闘を展開したが僅差の判定負け。BJに勝ったGSPはブレイク。『UFC94』での再戦はこのときの借りを返す闘いだ。

タナも絶賛!! UFC史上最強のミドル級王者

Anderson SILVA
アンデウソン・シウバ

アキヤマよ ファイターはファンに雇われている。ベストな相手と闘うのは当然だ

アンデウソン・シウバ――。かつては日本のPRIDEを主戦場とし、現在ではUFCのミドル級で連戦連勝し、史上最強の王者として君臨する男である。その実力は多くのプロファイターから絶賛され、ダナ・ホワイトをして「"パウンド・フォー・パウンド"（体重差を無視した世界最強）はヒョードルじゃない。アンデウソンだ」と言わしめた。誰とでも闘う絶対王者が、リスキーな相手と闘いたがらない日本の格闘家を斬る!

聞き手・撮影／[illegible]　試合写真／Josh Hedges

――アンデウソンさん、こんにちは！　今回は日本のPRIDEで闘っていた経験があり、現在は"パウンド・フォー・パウンド"と絶賛されるアンデウソンさんにいろいろお聞きしたいと思います！

シウバ　OK！　なんでも聞いてくれ。

――まず、『UFC90』のパトリック・コーテ戦についてですが、あなたの闘い方はクネクネとした動きで、まるでダンスを踊っているようだった、なんて意見もありますけど……。

シウバ　ダンスだって!?　断じて僕は踊ってなんかいないよ！　僕は相手がミスを犯すように誘いながら闘っていたんだ。そしてコーテは僕の狙いどおりミスを犯した。あの試合をもう一度注意深く観てごらん。2ラウンドに僕が彼のヒザを蹴ったあとから、彼の足運びに問題が出始めたことがわかるはずさ。

――失礼しました。見直してみます！　現在、アンデウソンさんは"UFC史上最強の王者"と言われていますが、PRIDEで闘っているときは高瀬大樹、長南亮選手に一本負けしています。当時といまと何が違うと思いますか？

シウバ　自分ではあんまり変わってないと思うけどね。まあ、いまはずっと経験豊かなファイターになっているかな。グラウンドも進歩したし、ボクシング、ムエタイ、そしてレスリングの技術もはるかによくなった。自分がベストに到達するための練習体系についても詳しくなったよ。

――いや、メチャクチャ変わっていると思います！（笑）。

シウバ　そうかもしれないけど（笑）、

対戦相手を選ぶヒマがあったら

人の選手と闘っただけでも尊敬に値

ギを削っているからね。闘うべき相

きているよ。僕は誰とでも闘うし、い

対戦相手を選ぶヒマがあったら誰とでも闘える準備をすべきだ

ただ、PRIDEでは自分のよさを見せられるだけの機会を得られなかったとは思う。僕がシュートボクセから離れたら、PRIDEは僕を呼んでくれなくなった。幸い、UFCでは充分にチャンスをもらえているよ。

——リング外での政治力の影響もあったと？

シウバ　そう聞こえたかい？（笑）。

——そのPRIDEはもう消滅してしまいましたが、その後の日本の格闘技界はずいぶん変わってしまいました。選手がリスキーな相手と闘いたがらないんですよ。こういう状況についてどう思いますか？

シウバ　選手にはそれぞれ自分の考え方があるんだろうけど、自分のことについて言えば、僕は決して対戦相手を選んだりはしない、絶対にね。一番大事なのは、しっかりトレーニングすること。ちゃんと練習していれば、いい試合ができるからね。

——それはファイターの基本的な部分ですね。

シウバ　そうさ。メンタルな面では、僕は対戦相手のスタイルやカテゴリーにかかわりなく、「相手を選ぶな」、「挑戦をやめるな」と教えられてきた。僕はしっかり練習してベストな相手と闘うだけだよ。ほかの人はどうかわからないけどね。

——『UFC91』では、あなたと同じ階級の秋山成勲選手も現地で観戦していましたよ。

シウバ　アキヤマ？　彼のことは知っているよ。デニス・カーンやカズシ・サクラバを倒しているんだろ？

——桜庭戦はローションを塗っていてあとで失格になりましたが……。

シウバ　よく知らないけど、その二人の選手と闘っただけでも尊敬に値するよ。サクラバもデニスもMMAの歴史を創ってきた選手だからね。

——ただ、秋山選手は今年、外岡真徳、柴田勝頼選手といったルーキーとしか試合をしていないんですよね。

シウバ　ファンにとっては残念なことだね。僕たちファイターはそれぞれのMMAプロモーションと契約してはいるけど、それはファンにいい試合を見せるためなんだよ。そういう意味で、プロのファイターはファンに雇われているということを忘れちゃいけない。ファイターがベストな相手と闘い、自分のベストを試合に注ぎ込んでファンを満足させるのは当然なことなんだ。これは非常に大事なことだよ。

——では秋山選手はミドル級のトップ10に入ると思いますか？

シウバ　サクラバとデニスはトップ10に入るファイターだから、彼の結果だけを見れば、そこに入っていても不思議じゃない。ただ、この階級には世界中のトップファイターがシノギを削っているからね。闘うべき相手と闘っていない人のことを言うのは難しいな。

——相手を選り好みする選手についてどう思いますか？

シウバ　いいんじゃないの？　彼らがそれで満足してるならね。ただ、そういう選手がUFCに来るとしたら、最初から苦しむことになるだろうね。少なくとも僕はUFCで一度たりとも相手を選ぶことが許されたことはない（キッパリ）！　選手は、まずマッチメイカーが指名するどんな相手とでも闘えるような準備をすべきなんじゃないかな。

——アンデウソンさんが言うと説得力がありますね（笑）。UFCのミドル級で相手のいなくなったあなたには最近、チャック・リデルやジョルジュ・サンピエールとのスーパーファイトが噂されています。階級を越えた闘いに興味はありますか？

シウバ　もちろんさ。彼らはMMAのレジェンドだからね。ファンが僕と彼らの試合を望むなら、準備はできているよ。僕は誰とでも闘うし、いい仕事ができると信じているよ。

——自信マンマンですね。あなたがボクシングをするとか、もうすぐ引退するという噂がありますが、それは本当ですか？

シウバ　ボクシングは、いつか必ずやってみたいことなんだ。そのためにはできるだけ早くMMAでの闘いをやめたほうがいいんだろうけど、いまは自分が契約しているUFCの試合のためにハードな練習を続けているよ。UFCとの契約が終わったらMMAを引退するつもりさ。

——ええっ⁉　本当に引退を考えているんですか？

シウバ　ああ。ただ契約が終わったときに、いまの自分の判断が正しいかどうかがわかるだろうね。

——早すぎる気もしますが、もし引退するならMMAで何を達成したいですか？

シウバ　僕は自分にしかやれない方法で相手をKOし続けたい。サッカーならマラドーナ、ボクシングならモハメド・アリのような、常に違いを見せつけるような選手になること。それが僕の成し遂げたいことだよ。

——引退前にまた日本で試合をする機会はありますか？

シウバ　UFCが日本で大会をするなら、いつでも試合をしに行くよ。

——わかりました。今日はどうもありがとうございました！

【08年12月8日／カナダへの国際電話にて収録】

ANDERSON SILVA■1975年4月14日、ブラジル出身。日本では01年に修斗で桜井“マッハ”速人を撃破して注目を浴びる。PRIDEに進出してからは高瀬大樹や長南亮に不覚をとったが、UFCで覚醒。ミドル級の絶対王者として君臨中。8連勝中でミドル級では敵なし状態。188センチ、84キロ。

[08.10.25 UFC90 Silva vs Cote]
米国イリノイ州ローズモント：オールステートアリーナ
UFC世界ミドル級タイトルマッチ
◯ アンデウソン・シウバ vs パトリック・コーテ ×
（3R 0分39秒 TKO）
アンデウソンの最新試合は、今年10月の「UFC90」でのパトリック・コーテ戦。余裕を漂わせながらも随所で鋭い打撃を見せて相手を圧倒。UFCで初の3ラウンド目に突入したが、相手が足を痛めたため、実力の底を見せずに4度目の防衛に成功。

[08.3.1 UFC 82 Pride of a Champion]
米国オハイオ州コロンバス：ネイションワイドアリーナ
UFC世界ミドル級・PRIDEウェルター級統一タイトルマッチ
◯ アンデウソン・シウバ vs ダン・ヘンダーソン ×
（2R 4分52秒 チョークスリーパー）
「UFC82」では、PRIDE二階級制覇をしたダン・ヘンダーソンとPRIDEウェルター級とUFCミドル級のタイトル統一戦に挑んだ。アンデウソンはダンヘンが相手でも、伸びのある打撃で流れをつかみ、2ラウンドにチョークでタップを奪い、タイトルを統一した。

[07.10.20 UFC 77 Hostile Territory]
米国オハイオ州シンシナティ：USバンクアリーナ
UFC世界ミドル級タイトルマッチ
◯ アンデウソン・シウバ vs リッチ・フランクリン ×
（2R 1分7秒 TKO）
ミドル級前王者、リッチ・フランクリンとは二度にわたって対戦。「UFC64」ではパンチの連打からのヒザ蹴りでKOしてタイトルを奪い、「UFC77」でも同じ展開で返り討ち。この試合のあと、フランクリンはライトヘビー級に転向している。

プロレスから総合格闘技へ!
壮大なる大河ドラマ

The Roots of MMA
UWF

闘いの原点を探れ!

日本における総合格闘技の歴史を語るうえて、欠かすことかできないのがUWFた。
またMMAか世に出るはるか前、フロレスから真剣勝負の総合格闘技へ移行させる運動体たったUWF。競技と興行の両立を目指し、
試行錯誤の中から現在の格闘技界は作られてきた。Dynamite!! て桜庭vs田村か実現するいま、
あらためてMMAの原点であるUWFを掘り下けてみよう。

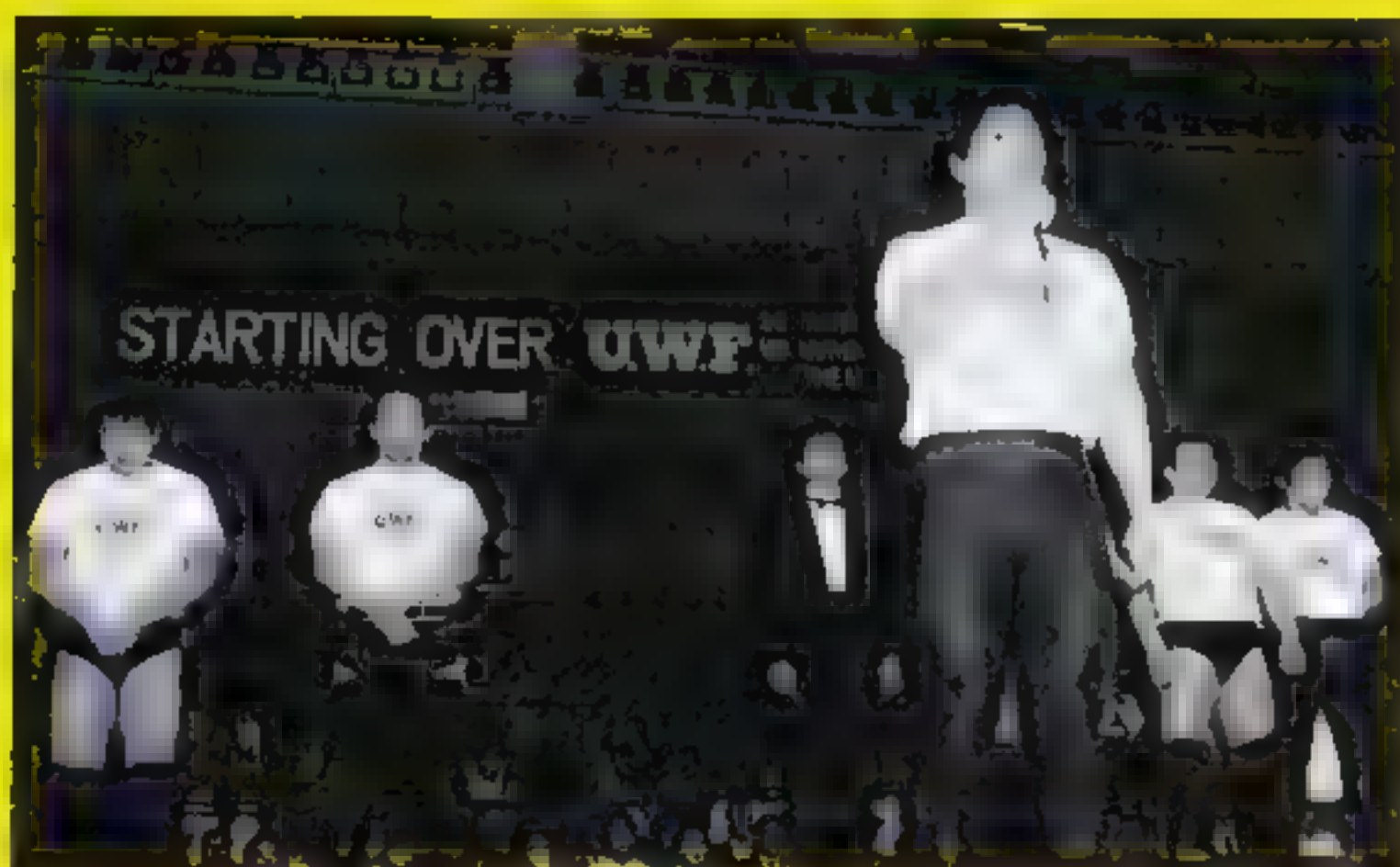
聞き手 堀江ガンツ 撮影 田村vs桜庭 平工幸雄

体GUIDE

Uの流れを汲み高田vsヒクソン戦でスタートしたPRIDEも活動を休止した現在。UWFを特集するといっても、Uをリアルタイムで体感している人は、少なくなってきているだろう。そんなUを知らない読者の皆さんのために、特集ページをスタートする前にあらためてU系を団体別に解説させていただきます。

構成／堀江ガンツ

第二次UWF

[活動期間]88年5月～90年12月

主な所属選手

前田日明／高田延彦／山崎一夫／中野龍雄
安生洋二／宮戸茂夫／船木優治／鈴木実
藤原喜明／田村潔司／冨宅飛駈／垣原賢人

月一回の興行システムUWFブームは社会現象に

前田日明か新日本を解雇になったのを機にUWFを再興した団体。わずか6人での旗揚げだったが、プロレスファンの前田への期待から、いきなり人気爆発。「真剣勝負」をアピールしたスタイルが一般層にも受け、UWFブームか起こった。興行形式も従来の地方巡業スタイルから、月に一度大会場で開催するイベント形式に変革。大人気を博したUWFだったが、前田と船木ら若手に考えの相違が生まれ、金銭問題で選手とフロントの対立もあり、わずか2年半で3派に分裂した

第一次UWF

[活動期間]84年4月～85年9月

主な所属選手

前田日明／スーパータイガー／藤原喜明／木戸修
高田伸彦／山崎一夫／マッハ隼人／ラッシャー木村
剛竜馬／グラン浜田

これがUWFの原点格闘プロレスの運動体

前田、佐山、藤原、高田ら新日本プロレスでセメントの腕を磨いた精鋭が始めた格闘技スタイルのプロレス団体。キックと関節技を主体としたスタイル、レガースをつけたコスチュームなど、UWFの基本的な様式はすべて第一次UWFで形勢された。この過激なプロレスは、UWF信者と呼ばれる熱狂的ファンを生み、後楽園ホールが聖地となったが、前田と佐山の対立、さらに資金難が重なり1年半で終了。佐山以外の主力メンバーは、古巣・新日本に闘いの場を求めた

リングス

[活動期間]91年5月～02年2月

主な所属選手

前田日明／田村潔司／山本宜久／成瀬昌由
高阪剛／坂田亘／滑川康仁／金原弘光
山本健一／長井満也／横井宏考／伊藤博之

ヒョードル、ノゲイラらを発掘した世界規模の格闘ネットワーク

UWFの3派分裂により前田日明がたった一人で旗揚げした団体。日本人選手不足を逆手に取り、オランタ、ロシア、グルジアなどとネットワークを築き、海外の格闘家を多数招聘また初期は正道会館と提携し佐竹雅昭らも参戦。世界各国のさまざまな格闘家が統一ルールの下で試合をするという格闘技イベント形式を成功させた。前田引退後、99年より完全リアルファイトとなり、ヒョードル、ノゲイラらを発掘するが、02年、WOWOWの放映打ち切りにより活動休止となった

UWFインターナショナル

[活動期間]91年5月～96年12月

主な所属選手

高田延彦／山崎一夫　安生洋二　宮戸優光
中野龍雄／田村潔司／垣原賢人／金原弘光
高山善廣／桜庭和志／山本健一／佐野友飛

桜庭和志を輩出した「最強」を標榜したプロレス団体

第二次UWF解散を受けて、高田をエースに旗揚げした団体。「プロレスではない」ことを売りにした第一次UWFに対し、Uインターは「プロレスこそ最強」というコンセプトに変更、それが当時のUWFファンに「プロレスへの後退」批判されたこともあったが、桜庭、田村、金原らを生み出すなど、U系の中で最も強さを追求した団体であったと、のちに再評価される。当初は高田人気で武道館を毎回満員にする人気を博したが、新日本との対抗戦を機に求心力を失なっていった。安生の道場破り等、U系史上最も破天荒な団体でもあった

特集を読む前にこれだけは知っておこう!

UWF系全団体

パンクラス

[活動期間]93年9月〜

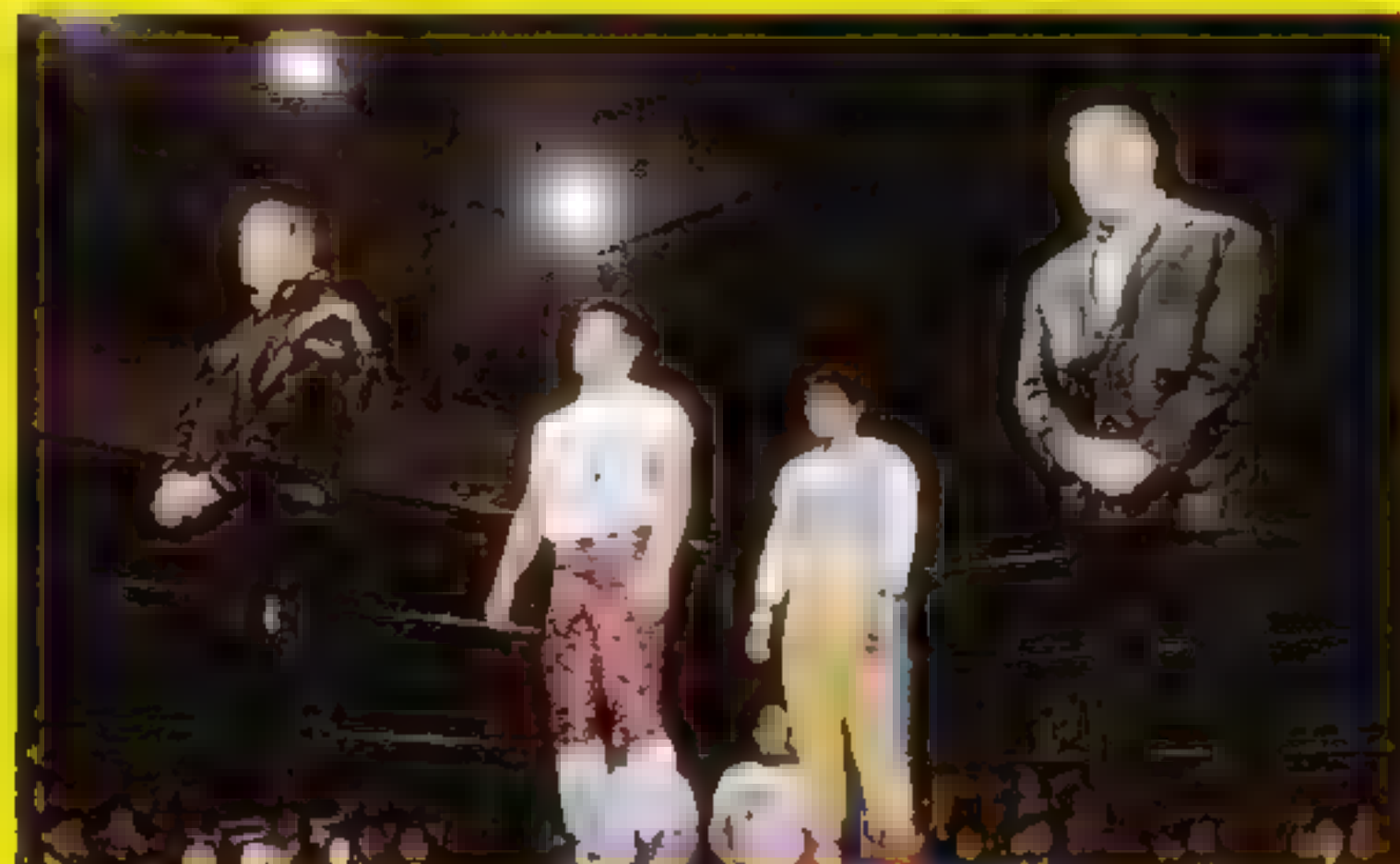
主な所属選手

船木誠勝／鈴木みのる／高橋義生／柳澤龍志
冨宅飛駈／稲垣克臣／国奥麒樹真／伊藤崇文
近藤有己／美濃輪育久

U系初の完全実力主義総合格闘技への実験団体

船木、鈴木らが藤原組から独立して旗揚げ。U系初の完全実力主義団体として、旗揚げ戦では"秒殺"と呼ばれる短時間で決着がつく試合が続出。鮮烈なインパクトを与えた。旗揚げメンバーのケン・シャムロックが第1回UFCに出場したことから、早くからバーリ・トゥードに対応する練習に取り組み、高橋義生が日本人で初めてUFCで勝利する。しかし、2000年にエース船木がヒクソン・グレイシーに敗れ引退。現在は後楽園、ディファ有明を中心とした小規模大会となっている

プロフェッショナルレスリング藤原組

[活動期間]91年3月〜

主な所属選手

藤原喜明／船木誠勝／鈴木みのる／冨宅飛駈
高橋和生／柳澤龍志／石川雄規／臼田勝美
池田大輔／田中みのる／小野武志／小坪弘良

メガネスーパーの資金力をバックにドーム大会を実現!

プロレス団体SWSを運営していたメガネスーパーがスポンサーとなり、文字どおり藤原が中心となり旗揚げ。豊富な資金力からロベルト・デュランを招聘し船木と格闘技戦を行なったり、U系で唯一、東京ドーム大会を開催したりしたが、SWSとの交流等に不満を持った格闘技志向の船木、鈴木らと藤原との考えの相違から溝が深まり、船木らはパンクラスとして独立。その後、石川雄規らもバトラーツとして独立し、現在は藤原の個人事務所となっている

格闘探偵団バトラーツ

[活動期間]95年11月〜

主な所属選手

石川雄規／池田大輔／アレクサンダー大塚
モハメドヨネ／船木勝一／小野武志
田中稔／日高郁人／岡本魂／土方隆司

PRIDEで一瞬だけ輝いた美しき清貧U系団体

石川雄規が藤原喜明以外の藤原組全選手を引き連れて旗揚げした団体。スター選手ゼロのド貧乏団体だったが、バチバチのファイトスタイルで徐々に人気を集め、初期はリングスと交流。その後、島田裕二がPRIDEのレフェリーを務めたことから、アレクサンダー大塚が「PRIDE.4」に出場。大物マルコ・ファスから大金星を挙げてブレイク。両国国技館大会も成功させたが、その後は選手の離脱が相次ぎ、現在は道場がある地元・越谷を中心に小規模に活動中。

キングダム

[活動期間]97年5月〜98年3月

主な所属選手

安生洋二／金原弘光／桜庭和志／垣原賢人
高山善廣／山本健一／松井大二郎／上山龍紀
佐野友飛／豊永稔

桜庭、金原が頭角を現わしたU系初のVTスタイル団体

安生洋二が中心となり、ヒクソン戦を控えた高田を除く旧UWFインターのほぼ全選手で旗揚げした団体。U系としては初めてオープンフィンガーグローブ着用による顔面パンチとマウントパンチを公式ルールとして導入。きわめてバーリ・トゥードに近い闘いとなり、ここから桜庭と金原という実力派二人が台頭。桜庭はUFC-Jでマーカス・コナンを破り一躍プロレス界の救世主と呼ばれた。興行的には不振が続き、1年もたずに団体は崩壊してしまうが、のちのPRIDEの礎にもなった

いまさら言うまでもないことではある

するタイミングだって、ある程度は自由に

あるのだろうが、素人には読みとれない。

シターというプロレス団体で育った桜庭

桜庭和志にとってのUWF

意識するまでもないくらいに刷り込まれた“プロ意識”

12.31『Dynamite!!』で運命の田村潔司戦に臨む桜庭。"UWF最終章"と銘打たれたこの対決、Uへの思い入れが人一倍強い田村と比べて、桜庭はどこかUに冷めたスタンスを保っているがはたして——?

写真/タイコウクニヨシ

いまさら言うまでもないことではあるのだが、UWFとはプロレス団体であり、そのリングで行なわれていたのはまぎれもないプロレスである。つまり純粋な、世間で言われるところの〝スポーツ〟や〝真剣勝負〟ではなかった。

スポーツでも真剣勝負でもないプロレスの試合がなんのために行なわれていたか。もちろん〝見せるため〟だ。プロレスの大会とはすなわち興行であり、チケットを買って入場した観客に見せるために、試合は行なわれる。もちろん、選手は仕事と割り切ってやっていたわけではないだろう。それぞれに野望があり、理想がある。自己実現という要素がないわけがない。ただ、それでもプロレスの第一義は、極端な言葉を使えば〝見世物〟なのだ。

だからスポーツ、真剣勝負より下なのだ、というつもりなどまったくない。むしろその逆だ。ここで考えたいのは、人に見せることを第一の目的として行なわれる試合をやってきたこと、UWFインターナショナルというプロレス団体を〝職場〟にしてきたことが、のちの桜庭和志にどんな影響を与えたのかである。

すぐに思い浮かぶのは〝責任〟という言葉だ。団体に所属し、そこでプロレスの試合をすれば、すなわち責任がつきまとう。若手には若手の、中堅には中堅の、そしてエースにはエースの役割があり、選手たちはそれをまっとうしなければいけないのである。

「アマチュアとつながった〝スポーツ〟の世界では、責任が伴なうのはトップクラスの選手だけだろう。たとえばリング上でディフェンシブな試合をしたとしても、それはその選手の自由なのである。どの階級で闘うかも選手が選ぶことだし、試合をするタイミングだって、ある程度は自由になる。ケガをしていたり、オファーから大会までの期間が短いため練習時間が足りないと感じたり、もっと言えば対戦相手が強すぎると思ったら、選手は試合を断ってもかまわないのだ（結局、そういう選手はプロモーターやジムの会長から信頼されなくなるのだが）。

格闘技の世界ではないが、先日も驚くようなことがあった。ラグビーの日本代表選手リストを見ていたら、候補に挙げられたが辞退した選手の一覧も載っていた。その理由は二つ。〝負傷〟はわかる。だが〝自己都合〟という選手もいるのである。それも二人も。ラグビー選手にとって、日本代表を断るほどの〝都合〟って、いったいなんなのだろう。もちろん何かしらの事情はあるのだろうが、素人には読みとれない。そして、素人には読みとれなくてもいいのが、ラグビーの世界かもしれない。

桜庭はホジェリオに負けはしたものの、最後まで勝負を捨てずに立ち向かい、メインの重責をはたした。ちなみに田村はセミで総合デビュー戦のロニー・セフォー相手に無難な秒殺勝利。ここでも好対照な二人なのであった。

プロレス団体に所属するプロレスラーに〝自己都合〟などありえない。それぞれのポジションで、その役割をはたす責任があるのだ。よほどの負傷ならともかく、個人的な理由で興行に穴を開けてはならない。それはプロレスの興行というショーを成り立たせるための、最低限の要素だろう。ひとたびプロデビューしたなら、どんなポジションであれプロレスラーはショーの構成要素の一つであり、誰か一人でも欠ければショーは〝欠陥品〟となる。

桜庭和志は、そういう場所でプロとしての第一歩を記したのだ。その影響がのちにどんなかたちで表われたのかは、桜庭の対戦成績を見ればすぐにわかる。2000年、彼は1月の『PRIDE GP開幕戦』でガイ・メッツァーと闘い、決勝大会ではホイス・グレイシーを倒した直後にイゴール・ボブチャンチンのパンチを食らった。夏にはヘンゾ・グレイシーに一本勝ちし、シャノン〝ザ・キャノン〟リッチ戦を挟んで12月にハイアン・グレイシー戦。驚くべきハードワークであり、対戦相手もほとんどが一流ファイターである。付け加えるなら、その翌年3月にはヴァンダレイ・シウバと闘って壮絶に散った。

プロである以上は相手を選ばない。多少の無理を押しても試合に出る。そのことで興行の成功に貢献する。それがUインターというプロレス団体で育った桜庭の、おそらく意識するまでもないくらいに刷り込まれた〝プロ意識〟なのだ。

有名な話だが、あえてもう一度紹介しておきたいエピソードもある。2003年『男祭り』、桜庭の対戦相手決定は遅れに遅れ、最終的に候補に残ったのはエル・ソラールとアントニオ・ホジェリオ・ノゲイラ。桜庭が選んだのはホジェリオだった。理由は「ボクにも意地がある」。

それはファイターの意地というだけではなく、プロとしての意地でもあっただろう。楽な試合と厳しい試合、ファンが喜ぶのはどっちか、興行の盛り上がりに貢献できるのはどっちか。それを考えて厳しい試合を選ぶのが、つまり桜庭の〝意地〟なのだろうと思う。

そしてUインター、キングダム、PRIDEと、所属団体（主戦場）が崩壊してきた体験も、彼のプロ意識に大きな影響を与えたはずだ。プロフェッショナル・ファイターは終身雇用ではない。選手やスタッフが全力をつくさなければ、いや、全力を尽くしたとしても〝職場〟が失なわれる可能性がある。ならばなおさら、手を抜いてはならない。自分勝手は許されない――。

この原稿を書いている最中に、秋山成勲が「Dynamite!!」を欠場するらしいという噂を聞いた。詳しいことは現時点ではわからないのだが、理由を突き詰めれば〝自己都合〟だろう。考えてみれば、秋山は柔道時代も合わせて、本当の意味で何かに〝所属〟したことがないのだ。秋山の欠場を「自分勝手だ！」と糾弾する権利は僕にはない。ただ、プロとして自分以外の何かのために闘ったことがないというのは、所属団体が崩壊する以上に悲しいことかもしれないとは思う。

（橋本宗洋）

ルキックでヴァンダレイを1メートルぐらい吹っ飛ばしていた。タムラは現在のMMAであまりに過小評価されているけど、本当にデンジャラスなファイターなんだよ。

――なるほど。でも、それだけにもっと早く二人の闘いが観たかったという声も多いですけどね。

ジョシュ　確かに、今回のサクラバvsタムラ戦は、どちらが勝ってもチャンピオンになるわけじゃないし、MMAのトップ10ランキングに入るわけでもない。そういう意味では、この試合はグローバルなMMAシーンにとってはあまり影響のない試合と言えるかもしれない。しかし、ピークをすぎてしまったとはいえ、サクラバとタムラが闘うということは、彼らの歴史に関わる試合であることは間違いないし、ボクたちUWFファン、カクトウギオタクがこの一戦を観ないということは、UWFからMMAへと繋がる壮大な物語のクライマックスを見逃すのと同じことなんだ。

ジョシュがプロデビューした96年に3度行なわれた田村vs桜庭戦。1、2戦はシュートだったと言われるこの闘い。4度目の勝者はどっちだ?

タムラは過小評価されすぎている。彼の打撃はヴァンダレイ・シウバが警戒するほどなんだ

大河ドラマの最終回を見逃しちゃうようなもんだ、と。

ジョシュ　これが最後かどうかはわからないけど、大きなクライマックスであることは間違いない。でも、この一戦に興味を抱けないMMAファンというのは、この一戦がMMAの歴史を語るうえで大きなクライマックスになっていることを知らないんだよ。とくにアメリカ、ヨーロッパのMMAファンは、このカードの意味を理解していない。みんなJZカルバンvsヨアキム・ハンセンの試合についてはネット上でも多くの意見を闘わせているけれど、彼らはタムラvsサクラバ戦の背後にどれだけ大きなスピリットやヒストリーが存在しているか知らないし、この試合が大晦日のイベント全体を飲み込んでしまうほど大きなエネルギーを持つものであるか、まったく理解していないんだ。

まあ、海外のファンが理解できないのは、仕方がないかなとも思いますけどね。

ジョシュ　ところが日本のMMAファンにも、この一戦の価値を理解してない人がいるだろ？

ここ数年でMMAを見始めたファンはそうでしょうね

ジョシュ　そんな人たちに、この一戦が持つ大きな意義と価値を伝えるのが、UWFオタクであるボクや『kamipro』の仕事なんだよ。

――なるほど。我々に課せられた重要な仕事なんですね（笑）。

ジョシュ　UWFインターで行なわれた彼らの3連戦（96年）は、本当に素晴らしかったからね。とくに最初と2番目の試合はシュートだったと思うしね（ニヤリ）。

――そんなことまで知ってるとは……さすがマニアですね（笑）。

ジョシュ　サクラバは当時、無名の若手にすぎなかったけど、すでに熱心なファンには、その輝きが届いていた。ただ、あの頃は実力的にタムラのほうが少し上回っているように見えたけどね。あの最高の3試合を行なったあと、彼らは別々の道を歩んで、ようやく今年になって再戦が実現するわけだけど……、思うにタムラはサクラバに対して〝先輩〟であるという意識が強すぎたと思う。この再戦がここまで遅れたのは、それが理由なんじゃないかな。

やはり後輩とガチンコ勝負というのは、なかなか心情的に難しいものがあるんでしょうね。

ジョシュ　タムラがUインターを辞めたあと、サクラバがPRIDEでどんなにスターになったとしても、タムラの頭の中にあるのは、〝後輩〟としての姿だったんだ。そして、タムラが決断を先延ばしにしているあいだに、二人の肉体には大きな違いができてしまった。タムラは幸運にもそれほど大きなケガは負わなかったけど、サクラバはそうじゃなかった。だから今回の試合は昔と同じような試合にはならないと思う……。

――UWFインターでの27歳同士の闘いと、今回の39歳同士の闘いでは当然、展開は違ってくるでしょうね

ジョシュ　ただ、それでもボクはいまのサクラバとタムラのベストの試合を観たいと思ってるんだ。ボクはいまでも彼らの大ファンだからね。だけど、今回はちょっとタムラに肩入れしたい気持ちがあるけど。

どうしてですか？

ジョシュ　サクラバ戦が終わったら、ぜひタムラともう一度UWFスタイルで闘いたいんだ。IGFならそれができると思う。

――ああ、宮戸（優光）さんがIGFのエグゼクティブ・ディレクターになりましたから、その試合もまた可能かもしれませんね。

ジョシュ　可能性はいつだってあるさ。ボクはいつでも彼と闘う準備はできている。あとはタムラが試合をしたいと思うかどうかだね。彼との再戦はただやるだけじゃダメだ。UWFの素晴らしさを広くアピールするために、みんなに注目されるような状況でやりたい。だから、サクラバvsタムラ戦のあとというのは、タイミング的に最高だと思う。

――宮戸さんがIGFのエグゼクティブ・ディレクターになったことに

ついてはどう思いますか？

ジョシュ　素晴らしいアイデアだよ！（即答）。これはボクがミヤトサンと仲がいいから言ってるわけじゃない。彼はUインターの前期にブッカーとして完璧なプロフェッショナルレスリングをプロデュースしていたし、リアルなプロレスを復活させるにはいいことだと思う。

――今回、猪木さんと宮戸さんが合体して、大晦日には桜庭vs田村戦が実現するというのは、ジョシュさんの言う"本物のプロレス"をアピールするチャンスかもしれないですね

ジョシュ　そのとおりだね。ボクもミヤトサンがイノキサンのいるIGFに加わったことで、さらにプレッシャーに感じているし、これまで以上にベストをつくそうと思っている。そして、サクラバvsタムラ戦という本物のプロレスが生んだ、MMAの素晴らしいファイトがいま実現することを嬉しく思うよ。

――ジョシュさんは、桜庭vs田村戦のどこに一番期待していますか？

ジョシュ　う～ん、どこが一番というのは難しいね。ボクはこの試合を本当にずっと前から観たいと思い続けてきたんだ。だからこの試合が、いま自分が関係している『戦極』やパンクラス、そしてIGFではなく、DREAM（『Dynamite!!』）で実現しても、その気持ちに変わりはないよ。ビジネスとしては残念ながら、いまボクはDREAMに協力することはできないけれど、ファンにこの試合の素晴らしさをもっと感じてほしいというのは、正直な気持ちさ。ボク個人としてはこの試合がどのような結末を迎えるかにかかわらず、最後まで見届けようと思っている。最後はハッピーエンドにならないかもしれないし、遺恨を残すかもしれない。ただ、何があっても、もう二度とこの試合が再び組まれることはないと思うから、この貴重な一瞬を目に焼きつけておきたいんだ。

――ハッピーエンドで終わらない覚悟もできているということですね。

ジョシュ　ああ。ただ、タカダサンとタムラの試合を覚えているかい？　彼らの関係はいいときもあれば険悪なときもあったし、試合をするまでは非常に複雑な感情を互いに持っていた。けれども試合中、そして試合が終わったあとは互いに心の底からピュアな状態になっていただろう？

――そうでしたね

ジョシュ　サクラバがタムラに対して、同じようにピュアな気持ちになるかどうかは、正直わからない。サクラバのタムラに対する気持ちは、きっと複雑で深い感情があるだろうからね。でも、どんな結末になろうとも、この一戦が描きだすすべてのことを見届けたい。サクラバvsタムラというのは、そういう試合さ。

――ジョシュさん自身は、大晦日、どうされる予定ですか？

ジョシュ　本来ならリングサイド最前列でサクラバvsタムラを観たいんだけど、ボクはいま『戦極』に上がっているし、1月21日に『アフリクション』の試合があるから、そのトレーニングもあってアメリカにいると思うよ。サクラバvsタムラは映像で観ることになるね。

――では、1・4『戦極』への出場も難しそうですか？

ジョシュ　できることなら出場したいよ。でも、20日後に『アフリクション』の試合があるから難しいかな。ボクは短い間隔で試合をしたことは何度もあるから、まだわからないけどね。

――『UFC91』で行なわれたランディ・クートゥアーvsブロック・レスナーの試合は観ましたか？

ジョシュ　観たよ。ブロックは意外と簡単に勝っちゃったな、と感じたよ。タックルにもいけたし、パウンドもできていたしね。ランディもうまく闘っていたけどね。個人的にはブロックはエリック・パーソンのCSW道場で練習していたから、彼が勝ったのは嬉しかったよ

――ランディに勝ったことで、ブロック・レスナーを「最強のプロレスラー」と呼ぶファンもいますが、それについてどう思いますか？

ジョシュ　ノー！　最強のプロレスラーはもちろんボクさ。彼と闘ったら1ラウンドか2ラウンドで自分が勝つよ。彼にはまだまだ穴が多いからね。

――では、レスナーがノゲイラと闘ったらどっちが勝つと思いますか？

ジョシュ　おそらくノゲイラが勝つと思うけど、ブロックが正しいゲームプランを立てて、そのとおりに闘えるなら彼にも勝つチャンスは充分にあるよ。なんといっても、彼はヘビー級というリミットを最大限に利用できるほど身体が大きいし、非常にパワフルだ。ノゲイラにとっても手ごわい相手であることは間違いない。ノゲイラはボブ・サップ戦でも大苦戦したし、レスナーはサップとは比べ物にならないほどテクニックがある。彼はデカいといっても、寝たらおしまいのでくの坊じゃない。ズールやセーム・シュルトとは違うんだよ。

――1・21『アフリクション』で行なわれるヒョードルvsアルロフスキーはどっちが勝つと思いますか？

ジョシュ　ヒョードルが勝つよ。アルロフスキーも強力なパンチを持っているし、デンジャラスなファイターではあるけれど、ヒョードルがテイクダウンしてパウンドして終わりさ。モンダイナイ（日本語で）

――ヒョードルが、アルロフスキーを倒したら、次はいよいよジョシュさんの出番じゃないかと思いますが、来年、ヒョードル戦が実現する可能性はあるんでしょうか？

ジョシュ　可能性はあるよ。ボクの来年の目標は、ヒョードルとの試合を実現させることだからね。この試合は、世界最強の男を決める闘いになるだろうし、自分のMMAキャリアのおいても最大の闘いになると思う。それだけに、最高のタイミングで闘いたいと思っているよ。

――できれば、その試合は日本で観たいんですけどねえ……（笑）。

ジョシュ　ボクとヒョードルの闘いを一番理解してくれるのは、日本のファンだろうから、できればボクもそうしたいけど、状況的にはちょっと……（苦笑）。

――難しいですかね（笑）。

ジョシュ　そういったスーパーファイトがまた日本で組めるように、ボクも日本のMMAをもっと盛り上げたいとも思っているし、サクラバvsタムラがそのきっかけになればとも思っているよ。

【08年11月22日　都内・某ホテルにて収録】

こんな結末になろうと、この一戦が描きだすすべてのことを見届けたい。そういう試合さ

Josh Barnett

JOSH BARNETT■1977年11月10日、米国ワシントン州出身　UFCヘビー級、パンクラス無差別級のベルトを巻いた、世界のトップファイター　自他ともに認めるUFCインターオタクであり、IGFでプロレスラーとしても活躍　191cm、117kg

劣等感と強さの探求で駆け抜けた日々——。

自分が一番弱かった だから強くならなきゃいけなかった

新日本プロレスからDREAMまでをすべて告白!

船木誠勝

15歳で新日本プロレスに入門し、UWF、藤原組、パンクラス、そして現在進行形のDREAMに参戦し、格闘技界の変遷をすべて体験してきた男、船木誠勝。強さを求めてプロレスから格闘技へと移りゆく中で、船木が通過したUWFとはいったいなんだったのか。いまあらためて船木自身が振り返る。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／梅木麗子

The Roots of MMA
UWF
闘いの原点を探れ!

—船木さんって、いま現役の総合格闘家の中ではおそらくプロとしては一番古い選手になるんですよね。

船木　新日本の頃から考えると、そうかもしれないですね。デビューしてから24年ですから。

—24年！

船木　ええ。従来のプロレスしかない時代から、異種格闘技戦があって、UWF、パンクラス、そしていまの総合格闘技の形態になるまで全部経験してますからね。

—進化の過程を見てるだけじゃなくて体感もしてる、と。それで、今回は"進化の過程"という部分で重要な役割をはたしたUWFの特集なんですが、そもそも船木さんはプロレスは真剣勝負だと思って新日本プロレスに入門したんじゃないんですよね？

船木　違いますね　真剣勝負ではないと思ってました　なぜかというと、タイガー・ジェット・シンとかがサーベルを持っているのに実際に切ろうとしないで、柄で叩くんですよね　本当に憎い、本当に倒したい相手だったら、実際に切ると思うんですよ

—切りますか！

船木　でもそれをやってなかったんで、どこか決められた範囲の中での闘いなんだなと思ってましたね。自分だったら殺す寸前までやるのになと思ってたんですけど、そうではなかったので冷静に観てました。

—船木さんだったら本当に憎い相手は刺していただろう、と

船木　刺してましたね。ただ、プロレスラーは身体も鍛えてますし、それこそ1対1で闘ったらどのスポーツ選手、どの格闘家とやっても一番強いとは思ってました。

—新日本に入門してからもそれは変わらずそう思いました？

船木　入門してからは、それこそ関節技や絞め技がこんなに苦しいものだとは思わなかったですね　逆にカルチャーショックを受けました。

—道場に入ってプロレスの凄さと怖さを知ったというか

船木　テレビで観てたプロレスとは違う何かがあるなと感じましたね　そうなってからは、もう「その強さってなんなんだろう」って追求したい気持ちになりました

—初期の段階からそっちにハマっていったんですか。

船木　そもそも入門当時って結局なんにもできなかったんですよ　柔道とかほかの格闘技もやったことないし、抑え込まれたら関節技極められっぱなし。新弟子の頃のスパーリングは、もう苦しい痛いの1時間なんですね　そっからどうにかして脱出しなきゃいけない。そうなると「脱出」＝「自分が強くならなきゃいけない」になるんですよ。自己防衛を含めてそこを突破しないと先に進めなくなりましたね。

—苦しみから逃れるためには、強くなるしかなかった、と。

船木　だから、入門する前はタイガーマスクみたいなルチャリブレもできるプロレスラーに憧れてたんですけど、最初の段階で全然方向が変わってしまいました。

—プロレスの試合をやってても意識は違うところにあったんですか？

船木　そうですね。デビューした15歳の頃って、やっぱり思うように身体が動かせないんですよ　先輩にもやられてばっかりだし、前座の中で唯一出せる空中殺法だったドロップキックも出してはみるんですけど高さが足りないって怒られたり、やること成すこと裏目に出てました　だから、本当の強さを身につけないとダメだということで、試合が始まる前に（獣神サンダー・）ライガーさんや佐野（直喜）さんとずっと関節の練習をしてましたね。藤原（喜明）さんが第一次UWFから帰ってきてからは、毎日1時間ほどマンツーマンで試合が始まる前にスパーリングしてて。

第一次UWFが崩壊し、電撃的にUWF勢が新日本プロレスに復帰した当時、デビュー直後だった船木は前座でUWF勢との対決が多く組まれた。UWFにプロレス技で対抗していた当時、プロレスラーとしての船木が一皮むけた時期でもあった。

お客さんを沸かせるために派手な技を出すのはつまらなかった

—先輩レスラーから「何やってんだ！」って言われなかったですか？

船木　それは言われなかったですね　その代わり、自分が強くなったっていう自信も含めて、試合するにしても余裕が出てきたんですよね。それでUWFの若手たちが新日本プロレスで闘ってた時期があったじゃないですか。

—第一次UWFが崩壊して新日本に戻ってた時期ですね。

船木　そのときにUWFの選手はそれこそ格闘技で向かってくるんですよ　だから、こっちはそれを利用してプロレス技を出す。たとえばタッグマッチだったらアキレス腱をかけてる人にギロチンドロップしたりとか、逆エビかけてる人の背中にドロップキックを打ったりとか　それがけっこうお客さんに受けたんです。そしたらマスコミが「いま新日本の前座がおもしろい」って書いてくれたんですよね。

—プロレス技でUWFと"勝負"することで、プロレスのおもしろさを感じた、と

船木　その後、『トップ・オブ・スーパージュニア』に出場したあと、海外に行ったんですけど、海外遠征では日本のスタイルしか知らないと、けっこうカルチャーショックなんですよ　お客さんを喜ばせる試合、いわゆる派手な試合をしないと使ってもらえない　あきらかにお客さんの沸き具合で判断するんで、毎日試合をさせてもらうために、それこそ昔憧れてた空中殺法をけっこう使いましたね　ただ、自分自身お客さんを沸かせるために派手な技を出すというのはつまらなかったんですよ。

—普通プロレスラーは、観客を沸かせることに喜びを覚えて、プロレスにのめり込んでいくもんだと思いますけど、船木さんは違ったわけですか

船木　違いましたね　帰国したらUWFに合流するのは決めてましたから、海外での1年間は半分遊びですよ。もう契約しちゃったんで最後に純プロレスを楽しもうという感じで。言葉は悪いですけど、卒業旅行みたいな感じですね。

—以前、kamiproで武藤敬司さんと対談を組ませてもらったときに、武藤さんが「ハイスパートがバチンと決まったときの快感ってあるでしょ？」って言っても、船木さんは首を傾げてたことがあったんですよ

船木　ああ、自分はハイスパートよりは、アドリブ的な攻防でお客さんが沸いたほうが嬉しいんですよね。

—それこそ、先ほど話題に挙がったUWFと新日本の若手同士の対決みたいな試合というか

船木　そうそう　あんな感じで型にはまってない試合のほうがいい　それのほうがリアルじゃないですか。

真剣勝負じゃないならプロレスの要素を入れたほうがいいと思って

だから、キレイとか感動よりもビックリするほうがいいですね。でも、武藤さんがあんなにプロレスにハマるとは思いませんでしたね。若手の頃は「この人、なんでプロレスラーになったんだろう」って思いましたから（笑）

——全然プロレスLOVEじゃなかったんですか？

船木 だって、入門して3日か4日ぐらいで「辞める」って言ってたんですから

——そうだったんですか!?

船木 自分とか蝶野さんに「俺、今日辞めるって言うから」って言ってて、あの怖い山本さんに半笑いで言ってましたから「山本さん、俺、辞めます」って

——それは、かなり武藤さんらしいですね（笑）

船木 それに対して山本さんはすんごい真面目な顔で「ダメだ！」って言ってるから、もうハタから見てると漫才みたいでおかしくて。武藤さんも「ダメだ！」って言われて「あ、そうっすか」って（笑）

——ダハハハハハハ！

船木 だから、あ、ダメって言われれば引くんだ」と思っておかしかったですけどね

——それがいまとなっては「プロレスLOVE」で、プロレスラーの象徴になってるわけですからね

船木 武藤さんの場合はプロレスやってるうちに好きになったんでしょうね。だって、入ったときは全然プロレスに詳しくなかったですから

——逆に船木さんは柔道とかやってなかっただけに、関節技に魅せられるようになったというか

船木 これは避けて通れないと思いましたね。さっきも言いましたけど、自分が一番弱かったんですよ。一番若いんでズルができないですし。確かに武藤さんや蝶野さんは高校卒業してからの入門だから中卒の自分とは最初からハンデがあったんですけど、同じ年度の新弟子として一緒に生活するわけですから、やっぱり人一倍努力しないとダメでしたね

——従来のプロレスじゃなく格闘技をやりたいと思ったのはいつ頃からなんですか？

船木 18ぐらいです。UWFとの一連の対抗戦があった頃で、これを競技にしてみたらおもしろいなと思ったんですよ。その頃、修斗ってありましたっけ？

——一応ありましたね。でも顔面の防具を着けたりとか毎回のように形態とかルールが変わってた時代ですけど

船木 自分はそういうアマチュアっぽいかたちではなく、最終的にはパンクラスという形態になったんですけど、18歳ぐらいのときにそういう興行があってもいいんじゃないかと思ってましたね

——海外に行ってるときは第二次UWFがそれを実現してたと思ってたんですか？

船木 あ、やったんだ！と思ってました。雑誌の写真を見ても、蹴りが当たってる瞬間の写真ばっかり載ってて、凄く期待は膨らんだんですよ。だから、日本に帰ったらもうおもいっきりやるだけだなと思ってました

——じゃあ、帰国して実際にUWFを観たとき「えっ!?」っていう感じだったんですか？

船木 最初、前田さんに「プロレスの技は絶対に禁止だ」って言われたんですよ。でも、「これプロレスなんじゃないのかなあ」って思ってましたね

——まだ「〝プロレス〟だと思われないような試合をする」という段階だったんですかね。

船木 だからUWFは発想が先にいってて、スポーツとして、格闘技としてのプロレスをやるってことだったんですけど、リング内はまだそれができてない状態だったんですよね。自分は、だったら逆にプロレスの要素をもっと入れたほうがいいんじゃないか」と思って、ドロップキックを出したりしたいんですけど、どうもそれがダメだったらしく、「スポンサーが離れた」とか言われたんですよ

——スポンサーに対しては「真剣勝負の格闘技です」って言ってたんでしょうね

船木 だから、自分自身何をやればいいんだろうって悩みましたね。そうこうしているうちに腕を骨折したもんで、半年ぐらい休まなければいけない状態になったんですけど、そのあいだずっと「じゃあもっと格闘技っぽく、やんないといけないな」って考えて

——今度は、真剣勝負だと謳っているからには総合格闘技を取り入れていかないといけないと思ったわけですね

船木 だから、第二次UWFの最後の1年ですよね、自分が一番活躍できたのは

——当時はUWFスタイルとして船木さんも凄く輝いてたと思うんですけど

船木 たぶんそれは高田（延彦）さん、山崎（一夫）さん、前田（日明）さんたちがちょっと前のスタイルで闘ってたからだと思うんですよ。自分のスタイルが斬新に見えたのかもしれないですね。

——最初の高田さんとの試合では、掌打で顔面攻撃を導入しただけで、UWFの最先端だったわけですからね。高田さんみたいな大スターの先輩を掌打でKO寸前に追い込んだりしたら内部で問題にならなかったですか？

船木 ならなかったですね。結局は格闘技路線を謳っているわけですか

第一次UWFのボブ・バックランド戦でコーナーポストを使ってドロップキックを放った船木。この行為で船木は反則負けとなったが、このドロップキックがUWFの方向性を含めて業界内で大きな波紋を起こした

船木誠勝のファイター人生

1984年	新日本プロレスに入門
1985年	当時、史上最年少の15歳でプロデビュー。第一次UWF崩壊後、新日本プロレスに電撃復帰したUWF勢との対戦が注目を集める
1988年	欧州遠征へ。ドイツ、オーストリアなどで活躍
1989年	欧州から帰国後、第二次UWFに参戦
1990年	12月の松本大会を最後にUWF解散。ウェイン・シャムロックを相手に最後の大会のメインイベントを務める
1991年	藤原喜明、鈴木みのるらと藤原組を設立
1992年	[illegible]分裂
1993年	パンクラス設立
2000年	ヒクソン・グレイシー戦で敗戦を喫し引退を表明
2001年	俳優に転向、パンクラスの顧問になる
2007年	『Dynamite!!』桜庭和志戦で現役復帰

ら、それはあたりまえじゃないですか。それよりも「ちょっとアイツは進みすぎなんじゃないか」という目では見られてたかもしれないです。だからあんまりいい顔をされてなかったでしょうね。

　UWFが3派に分かれるときには、そういう部分で内部的にもUWFに対する考え方とかに違いがあったんですか？

船木　3つに分かれてたんですよ「いまはこれでいい」という人、「これ以上進化させても意味がない」という人と、そして「もっと進化させないといけない」という3パターンがありました。

　船木さんは3つめの考えだった、と。

船木　でも、前田さんは「いまはこれでいい」という考えで「船木がやろうとしていることをやるには、あと5年必要だ」って言ってましたね　ただ、まだ若かったんで「5年は待てないですね！」ってアッサリ言いましたけど。

　当時、UWFでもお客さんが沸かなきゃしょうがない、という考えだったんでしょうね。

船木　実際にグラウンドの地味な攻防は沸かなかったんですよ　それもちょっと悔しかったですね　自分がやりたいことを、なぜお客さんは理解してくれないのか、前田さんたちがやってることがなぜこんなに響いてるんだろう。いまから考えると、もう前田さんや高田さんの蹴りはブランド化してたんですよね。だから、前田さんや高田さんが蹴っただけで単純に会場が沸くんですよ　迫力とか凄さじゃなくて、単純に人気があるというか　猪木さんの延髄斬りと構造は一緒ですよね。

——お客さんに「これが得意技だ」ということが浸透していて、前田さんや高田さんが蹴ると「待ってました！」という感じになっていた、と。

船木　でも自分にはそういう〝得意技〟がなかったんで、どうにかして内容でかき乱さないといけないなと思って、とにかく動き回ってましたね。

——観る側もまだプロレスのフォーマットだったんでしょうね。

船木　だから自分がアキレス腱をかけてもウンともスンとも言わないのか、藤原さんがアキレス腱の体勢に入っただけでもの凄く沸くんですよ　だったら自分はドロップキックを出すとか、そういう発想になったんですよね。で、実際にドロップキックを出すと沸くんですよ。でも会社はいい顔をしないんですよね。「次から気をつけろよ」って。

——でも、後期は船木さんの掌打で会場が沸くようになりましたよね

船木　それは、高田さんを掌打でKO寸前まで追いつめたというのがあったからでしょうね　船木が掌打を出すと何かが起こる　というような感じで

　掌打は船木の得意技　ということが認知された結果だった、と

船木　ええ　だからその後、パンクラスで初めて受けをすべて排除して、攻撃だけの闘いをやったんですよ。でも、その瞬間にシーンとする現象がまた起こってしまって。やってはみたものの、本当にこれでよかったんだろうかと感じました。ただ、そのときに助かったのが、マスコミが「秒殺」という新しい言葉を考えてくれたことだったんですよ。

——早く決着がつくことが一つの売りになりましたよね

船木　でも、実力が同じぐらいの選手の闘いになると、今度は決着がつかなくて、30分引き分けとかになってしまうんで、秒殺じゃないときのだらけ具合というのか……そこでまた悩みました。だからパンクラスもUWFのルールが基盤だったんで、最初は普通に5ロストポイントと30分勝負でやってましたけど、30分で決着がつかないし、最後はスタミナも切れて、イカ同士の闘い　みたいな感じになって、お客さんからも野次が飛んでたんですよ。

——しかも、そういう試合ってだいたい前座なんですよね

船木　そうなんです　極める技術が未熟だから、極まらないんですよ。だから前座は15分、第3、第4試合あたりが20分、メインクラスが30分とかいろいろ考えましたね。あとはロストポイントは5は多すぎるから3にしようとか。いろんな意味で軌道修正していかないといけないのがパンクラスでしたよ

　真剣勝負やるだけでなく、いかに見せていくかというのも模索するというか。

船木　毎月興行は打たなければいけないですから、あまりケガ人を出すと興行が打てなくなる。だからヒールホールドは禁止にしたりとか、常に解決しないといけない問題が2興行おきに出てくる感じでしたね。

　総合格闘技の技術自体も試行錯誤の連続だったんじゃないですか？

船木　そうですね　パンクラス旗揚げ2年目は技の研究に費やしてた時間が長かったです。

——グレイシーの技術を習得したりとか

船木　いろんなものを試しましたね　自分は、パンクラスもいつかはアルティメットとクロスするんじゃないかなと感じてたんですよ。だから、いまのうちにそれに対抗する策を練っておかないといけないなと思ってました。新日本プロレスでセメントの練習を究めておかなきゃマズイんじゃないかなと思った感覚と似てますね。

　船木さんの話を聞いていると、いまの総合格闘家とは成り立ちがまったく違いますね　いまの選手は技術を教えてもらってそれを磨く作業ですけど、船木さんの場合は真剣勝負ってどういうことなんだろう、柔術っていったいなんだろうとか、そういう部分からスタートして、トップ選手になってからも技の研究をするわけですからね。

船木　KID選手とかは柔術家をブラジルからコーチとして呼び寄せて練習をしてるじゃないですか。まず、そういうことは考えられなかったですね。だって敵じゃないですか。それを倒すには、自分たちの力でなん

掌底が船木の象徴として認知させたのが、この高田戦。開始早々、船木が掌底を連打し高田がダウンしかけた試合で、この試合をきっかけに「船木が掌底を出したら何かが起こる」ということをファンの意識に植えつけた。

とかしなきゃいけないと考えてましたから。

――柔術家と練習しても、それで極められようものなら、『格闘技通信』とかで「船木が極められた！」とか出て、騒がれるような時代ですからね（笑）

船木　でも、その柔術家とスパーリングをやったおかげで、そのあとUFCで二度目の（ケン・）シャムロックvsホイス・グレイシー戦があったとき、どういう作戦をとればいいかわかったんですよ。

――船木さんはシャムロックのセコンドでしたもんね。

船木　あのときは絶対に負けさせられないと思ったんで、勝たなくてもいいからとにかく負けるなって言ったんですよ　で、自分が研究した結果、「絶対に動くなよ」ってアドバイスしたんです。相手は必ずタックルに入ってくるから、絶対に動くなって　必ずリングの中心から絶対に動かないで、あとはパウンドを打っていけ、と。それを何時間やってもいいからとにかく負けるなって言いましたね。……あの試合、結果的にはどうなったんでしたっけ？

――延長ドローでした

船木　でもホイスの顔が腫れたんですよね　だから、シャムロックは凄く嫌がってたんですけど、自分と一緒にロスのマチャド柔術に行って、とにかく動くとやられる、動くとやられるというのを身体に叩き込んだんですよ

――柔術の基本的な技術すら、出稽古してやられて覚える、やられて盗むっていう時代だったわけですよね　だから最近、鈴木（みのる）さんにインタビューする機会があったんですけど、「俺もパンクラスで格闘技を一生懸命やったんだけど、プロレスラーのガチンコの域を出なかった」って言ってたんですよ。

船木　それでいいんじゃないですかね　だって、それ以外の世界を知らないですから　当時、25歳くらいの自分らがタイムマシンに乗って、いまの技術を学んでいまと同じ練習ができたら違ったんでしょうけど、それはできませんからね

――船木さんたちの世代の試行錯誤があって、いまの技術、いまの環境があるわけですしね。そういう時代の船木さんが8年ぶりに復帰してDREAMで闘うって、あらためて凄いことですね

船木　何考えてるんだって感じですよね（笑）

――前田さんや船木さんとかがよく「いまの格闘家が知らない技もあるよね」みたいな話をしてることがあるじゃないですか　足関節にいく前の技だったり、そういうのはやっぱり実戦で役立ちますか？

船木　役立つときもありますね　ただ、流れの中で経験してる人が多いし、一回経験してる人にはかからないですかね　でも自分が思うに、プロレスラーって極めの部分は一番得意だと思うんですよ。みんな若手時代にそれでさんざんやられてやってきてるんで　いまの選手は極める体勢に入る前のバリエーションをたくさん知ってるし、ボディコントロールもうまいんですけど、最後の極めがそれほどでもないんですよ。逆に自分らは極めを徹底的にやってたんで、その体勢に入ればパッとハマりますよ。

――なるほど。

船木　逆に言うと、そこがいま一番の自分の強みかもしれないですね。だから、いま桜庭のジムで一緒に練習してるんですけど、なんか手が合うんですよ

――ほう　やっぱり源流が一緒だからなんですかね。

思うに、プロレスラーって極めの部分は一番得意だと思うんですよ

船木　まったく違和感ないですね　何をやってくるかもわかってるし、向こうもわかってる　で、5分スパーリングすると他の誰とやるよりも疲れるんですけど、桜庭が強いのはやっぱり極めなんですよね。そのときに全身で取りにきますよ、カニみたいに

――取ったら離さないって感じなんですね

船木　キャリアの浅い選手はそこがわからないかもしれないけど、もう取るとなったら取るんですよ。で、桜庭と同じ発想をしている人がいるんですけど、誰かと言ったら、それがヒクソンなんですよ。それを息子のクロンですか、彼に教えてるらしいです

――ヒクソンも必ず"仕留める"っていう方か、ほかのグレイシーとは違うのかもしれないですね。格闘技はやっぱり一本取る姿勢がないとおもしろくないから、桜庭さんやヒクソンがファンを惹きつけるのもわかりますね

船木　そう思います　負けたくないとか言うんだったら、じゃあなんのためにやってるの？　って思いますよ。闘うんだったらお互いに取りにいかないといけない。でも動いたほうが負けるというパターンが最近出てきてますから、凄く難しい時代になってますよね。

――カウンター狙いのほうが極めやすく見える、と

船木　でも不思議なのが、残り時間30秒とかってなると急に動きだしたりするじゃないですか　だからみんな動かないなら30秒10ラウンドとかでやるしかないなって

――ダハハハハ！　それで判定なしにしたほうがいいですよね　でも、いわゆるU系を通過した選手は自分からいかなきゃいけないという意識があるじゃないですか。

船木　だからやられちゃうんですよね（笑）。

――でも、ファンもそういう姿をファイターには見せてもらいたいと思っていると思うんですけどね

船木　というか、それをするしかないんですよ　たとえ自分の身体が犠牲になったとしてもやらなきゃいけない。それがプロなんで。それこそファンは勇気をもらいにきてるわけですから。だから、なんでしょう。若い選手にはプロだっていうところをもっと意識してもらいたいですね。自分が最高のプロだとはまったく思わないですけど、15のときからプロとしてやってて思うのは、観るお客さんがいて初めて成り立ってる世界だということですね　何かをつかんでもらって帰ってもらわないと闘う意味がない。僕はそう思いますね。

【08年12月1日　都内・玉川高島屋にて収録】

MASAKATSU FUNAKI

ふなき　まさかつ■1969年3月13日、青森県出身　84年、新日本プロレスに入門。第二次UWF、[illegible]を経て、93年にパンクラスを旗揚げする　第4・6代「キング・オブ・パンクラシスト」に輝くも、2000年5月　ヒクソン・グレイシーに敗れ、現役を引退。200?年「Dynamite!!」桜庭戦で現役復帰。08年　DREAM 6　ミノワマン戦で復帰後初の勝利を挙げた　182cm、85kg

“髙田延彦の同期”仲野信市が語る

UWFの源流

昭和新日本プロレス道場伝説

酒もセメントも強い
それがプロレスラーですよ!

UWFの源流といえは、前田、髙田らかいた時代の新日本フロレス道場。セメントの練習て強さを求め、酒の飲み方ても誰にも負けないというイスムはここから生まれたのた。その時代を同期生として知る元レスラー仲野信市が、Uの源流を語る!

聞き手　堀江ガンツ　トビラ写真　原 悦生

The Roots of MMA
UWF
闘いの原点を探れ!

「道場でやっているセメントの技術を試合でも見せよう」
そんなかたちでスタートしたUWF。つまりUWFスタイルの原点は、前田、高田らがすごした時代の新日本プロレス道場にあるのだ
そして、その時代に前田、高田らとともにしのぎを削ったのがこの仲野信市。とくに高田とは同期入門で同い年ということもあり、ライバルであり、親友でもあった。
現在はプロレスを引退し、大手運送会社に勤める仲野だが、新日本のレスラーだったプライドはいまでも持ち続けているという　そんな仲野に当時の新日本プロレス道場の思い出を振り返ってもらった。

―仲野さんは新日本プロレスで高田（延彦）さんと同期なんですよね？
仲野　そうですね　あと前田（日明）さん、平田（淳嗣）さん、ジョージ（高野）さん、（ヒロ）斉藤さん、保永（昇男）さん、新倉（史裕）、山崎（一夫）、小杉（俊二）、（高野）俊二が当時の合宿所のメンバーです。
―素晴らしいメンバーです（笑）今回はUWFの特集なんですけど、のちのUWF系に脈々と流れる「ケンカも酒も強くなきゃいけない」っていう精神はまさに当時の新日本が源流なんじゃないかと思うんですよ
仲野　確かにそれが新日本の伝統ですよね　プロレスラーはなんでも負けちゃいけないっていうのは
―入門すると、まずその精神を叩き込まれる感じなんですか？
仲野　叩き込まれるっていうか、やっぱり当時の新日本に入ってくる人は、強くなりたい、っていう気持ちで入ってくるんで　セメントに尻込みしてたり、酒も豪快に飲めないヤツは認めないっていうか　それができないヤツは「こいつはニセモノだ」みたいな感じはありましたね
―酒が飲めなきゃレスラーじゃない（笑）。
仲野　だから15～16歳で入ってくるじゃないですか。練習も当然ですけど、そういうことも教わるんですよ　「ちゃんこを頭で食べるんだ」とか
―どういうことですか？
仲野　身体を大きくするためには、ちびちび食べてる場合じゃないですから　食えないヤツは頭からぶっかけちゃうんですよ。
―ヒールかけならぬ、ちゃんこかけ（笑）
仲野　あとは酒飲んで酔っぱらって眠った新弟子がいたら、先輩より先に寝るのは許せない　ってことで、そいつの口に糞したりね（笑）
―寝てる口に糞！　ひどい（笑）。
仲野　そういう毎日なんで、それで逃げ出して、親から山本（小鉄）さんに苦情が来たり
―虐待じゃないか　と
仲野　でも自分らの感覚は、そんなことで逃げるヤツはプロレスラーにはなれないっていうのがありましたから　一般の世界と比べてもらったら困る。命懸けで試合するわけですから。そんなことで挫けるようじゃ務まらない　誰かから教わったわけじゃないんですけど、こういうもんだっていう気持ちでいましたよね
―練習なんかも極限までやってたわけですよね。
仲野　それはもちろんそうですし　合同練習以外にも、疲れてボロボロなのに、夜、誰か1人が道場に行けば、みんな「そうはいくか！」ってやってましたからね　だから高田なんかと飲みに行って、ディスコは飲み放題だからウィスキーなんか何本も空けるんですけど、朝の1時とか5時頃に　こんなことしてる場合じゃない、練習しよう　ってなって
―ベロベロになりながらも、ふと気づくわけですか（笑）
仲野　それで道場に帰って寝ないで早朝から3時間練習したり　そういうのもしょっちゅうでしたね
―やっぱりプロレスラーという概念がいまとは違いますよね
仲野　全然違うでしょ？　それがなくなったから、プロレスも下火になったんじゃないですか。レスラーはやっぱり、すべてにおいて特別な存在じゃないといけないと思うし　そういうのって絶対、リング上でにじみ出てくると思うんですよ　それがないから魅力がなくなっちゃったんじゃないですか。
―たぶん、いまのレスラー、格闘家からすると、仲野さんたちの世代のプロレスラーは、なんのために強くなろうとしてたのか、理解できないんだと思うんですよ。プロレスって勝ち負けを競う競技じゃないですよね
仲野　競技じゃないですね
―それでも「強くなりたい」っていうのは、どういう感覚だったんですか
仲野　それこそプライドですよ。「レスラーたるもの強くなければダメ」それだけです　「プロレスラーが一番強くなきゃいけない」っていうのが猪木さんの教えでしたから
―だからこそ、セメントの練習もする、と。
仲野　あの当時って、セメントの練習があたりまえでしたから　あとは「道場破りが来たらどうするんだ」とか、そういう覚悟はみんな持ってましたよね
―道場でとくに強かったのって誰でした？
仲野　甲乙つけがたいですけど、合宿所のメンバーだと前田さんかな　やっぱり強くなりたいっていう執念が一番あったのは前田さんと高田ですよね　高田なんか6時半から試合が始まるのに6時20分くらいまで藤原さんとスパーリングやってましたからね　感心しましたね、あれは
―スターになりたいとかじゃなくて、強くなりたい
仲野　強くなりたい　だから巡業にもサンドバッグを持参して蹴りの練習したり、いつも強くなるための練習をしてましたね
―でも、デビュー前にはプロレス

のケーフェイ的な部分を教わるわけですよね。

仲野　それは山本さんから教わりましたね。「プロレスは真剣勝負だぞ。だけどみんなプロレスでメシを食ってるから、ケガさせちゃいけない」って言い方でね。セメントって勝つためのものですから、ゴッチさんのやり方で、たとえば目に指を入れたり、ケツの穴に指を入れたりもあるんですよ。

——あ、それも含むのがセメントなんですか

仲野　そうです　だから殴ったり、蹴ったりする場所も急所というものがあるんで、それを教わるんです。プロレスは受けるのが前提だから、ケガしない場所を教わる。あとは具体的にどうこうっていうのは教えられずに、リンクに放り込まれるわけですよ

——いわゆる「プロレス」のやり方はまったく教わらないんですか？

仲野　教わりませんね　見よう見まねでロープになんか飛ばしたら、殴られましたから。だからガチンコで関節取って、殴って。でも、先輩のほうが強いから、いいようにコントロールされるうちに、だんだんプロレスの意味がわかってくるんです。

——リングでやられながら覚えていくわけですか。

仲野　そうですね

——いわゆるハイスパートっていうものも教わらずに？

仲野　ハイスパートは新日本プロレスでは教わらないですね。だからジャパンプロレス（長州力ら維新軍を中心とした団体）として、全日本のリングに上がるようになって、マイティ井上さんに控所に呼ばれて、「おまえらそんなことも知らないのか」って怒られましたもん（笑）

——全日本の人からしたら考えられないことなんでしょうね。

仲野　考えられない　だから同じプロレスでも全然ジャンルが違うんですよね、あの頃の新日本と全日本は。自分らは魂を込めて試合すれば、ハイスパートなんて必要ないと思うし。ハイスパートって強いとか関係ないし。

同い年の同期生として、ライバルであり親友であった髙田と仲野。二人にとって、プロレスラーとしての自我を形成した新日本プロレス道場は青春そのものだろう。髙田の下駄にも注目

自分もやりましたし、猪木さんもルスカとセメントやってましたね

——そうですよね（笑）。

仲野　だから全日本の人たちって、試合前にみんなでリングに上がって、ハイスパートの練習をしてるんですけど、それを見るのが嫌でしょうがなかったですね　お客さんは入れる前ですけど、警備員とかが観てる前であれをやるっていうのは、信じられなかった

——いまって、ハイスパート的なプロレスができるようになったらリングに上がれちゃうような風潮がありますけど、逆なんですね。

仲野　そういうプロレスができるかどうかなんて関係ないんですよ　たとえば学生プロレスみたいなのが入門してきたら、練習でそいつが持ってるプライドを潰すところから始まりますからね。アスリートだってそう。谷津（嘉章）さんが鳴り物入りで入ってきたときも、みんな「そうはいかねえぞ」って、道場の基礎練習で潰しましたから。もちろんアマチュアレスリングをやったら敵わないですよ　だからリングに上がる前の基礎体力で潰して、リングに上げさせないようにして（笑）。

——ダハハハハ！　その前の勝負で勝つ、と。

仲野　はい。やっぱりアマレスの基礎体力と違いますからね。それでヘバると「ざまあみろ」と（笑）。気持ちよかったですよね。

——では、アスリートよりもそういう体力はみんながあったっていうことですよね

仲野　もちろんありますよ

——それは凄いですよね

仲野　やっぱり10歳すぎた先輩なんか見てても、普段はマイペースでやりますけど、いざとなったらさすがだなって思わせてくれるんで。星野（勘太郎）さんなんか、ダイナマイト・キッドがナメてかかってきたとき、顔面パンチで鼻を折りましたからね。それからキッドの態度も変わりましたよ。いざとなったら、そういうことをやれる覚悟はみんなありましたね。

——だから対抗戦での意地の張り合いは凄かったんじゃないですか？

仲野　ハンパじゃなかったです。全日本に行ったときは、開場前の練習量でまずビビらせてましたからね。向こうにアピールするように大声で号令出して、試合前に練習で勝ってるんですよ。あとは全日本とジャパンで野球大会があったんですよ。そのときなんて、絶対に負けるなって野球の特訓やってましたから。

——たとえ野球でも負けちゃいけない（笑）。

仲野　普段の合同練習のあと、多摩川の土手で野球道具一式揃えて、特訓ですからね。おかげでジャパンのボロ勝ちですよ

——元巨人軍の馬場さんは悔しかったでしょうね（笑）。

仲野　とにかく、どんなことでも「負

僕らが若い頃に総合があったら
全然違う髙田が観れたと思います

ける」ってことは許されなかったんです。くだらないことでも一丸となってましたね。

――じゃあ昔、ガチンコの総合格闘技があって新日本のレスラーたちが出るとなったら、大変なことになってたでしょうね。

仲野 あの頃だったら、技術的な実力差はあるでしょうけど、こんな結果にはなってないんじゃないですか。みんな覚悟決まってましたから、命懸けで向かってたと思うんですよ

――いわゆる競技をやるってテンションじゃないわけですよね

仲野 じゃないですね。殺し合いのつもりでやってたと思います。ギブアップは絶対にしなかっただろうし

――要は総合格闘技の練習方法を知らなかっただけっていう部分もありますしね

仲野 あの頃は総合格闘技自体がありませんでしたから、道場のセメントで充分通用したんですよ。

――新日本の道場にはウィリアム・ルスカとか、イワン・ゴメスもいたんですよね

仲野 いましたね。僕もルスカとよくセメントやらされましたし、猪木さんもよくルスカとセメントやってましたよ。

――猪木vsルスカのセメントですか！ それは見たいですねえ！

仲野 何回か見ましたけど、どっちも極められなかったですけどね。猪木さんは、どう見ても極められてるんですけど、絶対まいったしないし。

――練習なのにタップしませんか

仲野 やっぱり猪木さんが先頭を切ってそういう姿を見せてましたから、プロレスはこういうもんだと思いました。

――猪木さんが道場でセメントやるなら、みんな従いますよね。ルスカって、やっぱり一番強かったんですか？

仲野 強かったでしょうね。でも、強いのにスタン・ハンセンとかにプロレスではまったく敵わないんですよ。ルスカはそれがおもしろくなくて、よくハンセンが試合してるあいだに控室で、ハンセンのブーツにションベンしたり、メガネをマジックで黒く塗ったりして挑発してたんですよ

――そんな陰険なことをやってましたか（笑）

仲野 ハンセンもケンカじゃ敵うわけないから、無視してましたけどね。あんなのもルスカが強さに自信があるからできるわけで。

――でもそれはプロレスに溶け込めるわけないですね（笑）。ただ、そういう強さも内包してたのがプロレスの世界だった、と

仲野 そうですね

――じゃあ、仲野さんからすると、UWFがのちに総合格闘技になる流れっていうのは、理解できました？

仲野 それは当然の流れだったと思います。ホントはあれが猪木さんが目指してたところじゃないのかなと思うんですよ。目指してたんだけど、社長の立場があるし、会社の業績もあるからできなかった

――時代が違っただけで、そういう強さを目指す姿勢はあったわけですね

仲野 だからね、僕らが若い頃に総合格闘技があって、高田がちゃんとそれ用の練習ができたら、PRIDEでも全然違う高田が観れたと思いますよ。受けが前提というプロレスをあれだけ長くやってきた高田が、ああいう勝負に出るだけで凄いことだと思います。そして、桜庭とか田村とか、自分を超えるレスラーを育てたんだから、たいしたもんですよ。

――……その高田がなんでハッスルやってるんですかね？（笑）

仲野 そこが不思議ですか（笑）。まあ、完全な真剣勝負をやってしまったがために、エンターテインメントに振り切ったんだと思いますけど。

仲野 極端ですよね。あれもおもしろい人はおもしろいんだけど、僕みたいな昔のプロレスしか知らない人間は見方がわからない

――なるほど（笑）。

仲野 でも、いま自分は運送会社で働いてて、じつはハッスルの道場が自分の地区内にあるんですよ

――あ、そうなんですか？

仲野 だから高田とも偶然会ったりしたんですよ。それで「今度飲もうよ」みたいな話になったんですけど、自分は行けないですね。

――どうしてですか。

仲野 行ったら二日酔いじゃ済みませんから。一週間くらい会社を休まないといけない（笑）

――ダハハハ！ ただ飲みに行くだけじゃ済まない、と（笑）

仲野 僕らが一緒に飲むっていうことは、そういうことですから。俺も高田に「弱くなったな」って思われたくないから、飲むなら負けられないし そのためには、酒が飲めるように身体の準備もしなきゃダメだしね。引退した人間が、簡単にできるようなことじゃないですよ（笑）。

――酒を飲むのもリングに上がるのと一緒だ、と（笑）。

仲野 そういうプライドは持ってますから。だから長州力がいまだにリングに上がってることが信じられない。ハッキリ言って、しがみついてるだけじゃないですか。昔の長州力からは考えられないですよ。偉そうに言わせてもらえば、自分は潔く38歳で引退して、運送業の新弟子から始めて、いま係長になってますよ

――凄いですねえ！

仲野 僕はプロレスラーとしてのプライドがありますからね。だから運送の仕事でも、絶対に負けちゃいけないってやってきましたよ。それを天下の長州力が自分の生活のために、プロレス界の足を引っぱってるのは見てられないです。かつての親分だから、カッコいい男でいてほしい。新日本のレスラーなら、そういうプライドを忘れてほしくないですよね。そのプライドは僕にとっても宝なんですから

【08年12月2日 都内・某所にて収録】

1980年頃、仲野が新弟子時代の試合前のヒトコマ。観客を入れる前のリングで猪木相手にスパーリングを行ない、うしろで藤波、さらにリング下では高田も見守っている。古き良き新日本の風景だ

なかの・しんいち■1963年3月14日、神奈川県横浜市出身。78年に新日本でデビュー。84年にジャパンプロレスに移籍。全日本のリングでアジアタッグ、世界ジュニア王座を獲得。その後、SWS、SPWFを経て夢ファクトリーではエース兼コーチを務める。01年に新日本（無我）のリングで引退。現在は大手運送会社で世界一のセールスドライバーを目指している

録で振り返るUWF

UWFが求心力を持ち得た要因は、先鋭的なファイトスタイルもそうだが、エースである前田日明の言葉によるアジテーションによる部分も大きい。従来のプロレスを改革し、総合格闘技へとプロレスファンを導いていった革命家であった"黒髪のロベスピエール"前田日明の言葉とともにUWFの歴史を振り返ってみよう。

構成／堀江ガンツ

俺はファンに媚びたくない。乞食のようなレスラーには絶対になりたくない！

●84年4月11日、UWF旗揚げ戦。大宮スケートセンターの控室で

UWFが産声を上げた日、UWFの象徴である前田日明の発言。「俺は[illegible]」[illegible]UWFスタイルを作り上げる原動力となったことは間違いない

ジャーマンやって、1、2、で跳ね返されるプロレスはプロレスではない。必殺技は本当に必殺技なんだ

●84年4月11日、UWF旗揚げ戦。大宮スケートセンターの控室で

当初、前田が目指していたのは、格闘技スタイルというより、カール・ゴッチの[illegible]

いままでとは違う俺のプロレスを見てくれ！

●84年4月17日、UWF蔵前のリング上。藤原とのデスマッチ後

第一次UWFオープニングシリーズ最終戦の藤原喜明戦後のコメント。[illegible]

負けたら出直せばいいんだ。負けることなんか、怖くない

●84年[illegible]

[illegible]UWFのリアリティにもつながっていた

八百長観たけりゃ新日本に行け！

●84年 地方興行で「猪木出せー」という野次を聞いて

UWFのエースながら、まだまだ知名度の低い若手でもあった前田。自分が認められないいら立ちと自らのプライドから、野次に言い返すこともあったのだ。

一年半、UWFでやってきたことがなんであったかを確認するためにやってきました

●85年12月6日、[illegible]のリング上

[illegible]エース前田が発したマイクでの挨拶。前田、高田らは第一次UWFでの闘いから、1年半前とはまったく違った[illegible]険なムードを漂わせるレスラーに成長していた

我々UWFは、このシリーズ、一試合たりとも手を抜いたことはない

●86年2月5日、大阪城ホールのリング上。UWF代表者決定リーグ戦の最終戦＝藤原戦に敗れたあとで

[illegible]わたってUWFスタイルを新日本のリングで見せ続けた前田の最終戦でのコメントは、暗に「新日本勢は手を抜いた試合もしている」ことを指摘したコメント。こういった前田の[illegible]

アントニオ猪木なら何をやっても許されるのか！

●86年2月13日、UWF道場。猪木vs藤原戦について

UWF代表の藤原が猪木に挑んだ試合は、猪木が反則である金的（と思われる）蹴り[illegible]からのスリーパーで藤原を絞め落とし勝利。この猪木の勝利をたたえるマスコミに対し、前田の怒りが爆発。"神"である猪木に異議申し立てをした前田の"正論"は、猪木という存在を徐々に脅かしていく。

The Roots of MMA
UWF
闘いの原点を探れ

前田日明語録

プロレスファンを牽引した言葉のアジテーション

(猪木に)負ける自信がない

●86年2月14日、UWF代表者… [illegible]

切符を買ったファンにどう釈明するのか? 10年先、20年先のプロレス界を考えるのなら、ファンに不信感を与えるようなことは絶対にしてはならないはずだ

●86年3月26日、東京体育館大会での猪木vs前田戦が中止… [illegible] から、一騎打ちでは何をやってくるかわからないということで、回避されたとされるが、これによって「猪木は前田を恐れている」というイメージがつき、前田は闘わずしてさらに強者のイメージを増大させていった。

猪木はトシをとったな。全然、迫力がなく拍子抜けしたよ

●86年3月21日、[illegible] 対決のあと [illegible] タッグながらついに実現した猪木vs前田。二人のコンタクトは少なかったが、[illegible]

プロレスというものは、総合格闘技でなければならない。つまり、蹴ればキックボクサーを上回り、投げては柔道家を上回り、関節の極め合いではサンビストを上回る……それが理想のプロレスラーの姿であるべきです

●86年8月12日 [illegible]

寄港する先がなかったUWFが、ある島にやっとたどり着き、無人島だと思ったら仲間がいた

●86年8月12日、[illegible]

キックが速いって? 佐山さんほどじゃないだろう

●86年9月、ドン・ナカヤ・ニールセン戦を前にして
伝説のニールセン戦を前にした発言。自分のキャリアに誇りを持つ前田は、「佐山のキックを受けてきた自分なら問題ない」と、自分だけでなく佐山も持ち上げる見事なコメント。こうした発言がファンにはなんとも嬉しいのだ

猪木さんとリングの上で闘えば闘うほど、なんかこう寂しくなってくるんだよね

●86年12月[illegible]

星野さん、やっちゃっていいんですか!?

●84年4月29日、三重県津市体育館 アンドレ戦の試合中
あまりにも有名なアンドレ・ザ・ジャイアントとの"セメントマッチ"。アンドレがプロレスの枠を超えた攻撃を仕掛けてきたこの試合は、前田潰しのためにアンドレを何者かがけしかけたと言われている。危険を察知した前田は「星野さん、やっちゃっていいんですか!?」と、リングサイドの星野勘太郎にシュートで応戦することを表明すると、危険なヒザへのローキックを連発し、アンドレを試合放棄へと追い込んだ。アンドレという幻想の塊を大の字にさせたことで、前田幻想が巨大化。前田を潰すはずが、逆に前田人気がさらに高まる結果となった。

俺と長州選手がやることになるんだったらね、俺は俺のやり方で闘わなくちゃ意味がない。ちょっと危ない試合をしないとダメだと思う

●87年2月13日、UWF道場。団体の枠を超えたニューリーダー対決について [illegible] 全日本から、新日本へ出戻りが噂された長州力に対するコメント。もし長州と闘ったらUWFスタイルで応戦することを宣言した。これが長州顔面蹴撃事件へとつながっていく [illegible]

自分が新日本道場の新弟子だった頃、猪木さんはプロレスというものに厳しいプライドを持って常に厳しい闘いを繰り広げていた。当時の猪木さんの姿は、いろんな意味で現在の自分たちの原点です

●2月20日、中野サンプラザ [illegible] 対する本心だろう。UWFの原点とはまさに、猪木が作り上げた、かつての新日本プロレス道場だったのだ

世代闘争とか言わんと、誰が一番強いのか決めたらええんや！

●87年6月12日、両国のリング上で。長州のアピールに応えて「世代闘争」がじつは猪木軍（ナウリーダー）vs長州軍（ニューリーダー）で [illegible]

俺は"夕焼け番長"って漫画が好きだったけど、（長州は）"言うだけ番長"だな

●87年10月25日、両国国技館。世代抗争が空中分解して
ユーモアにの中に、長州に対する痛烈な皮肉が込められた前田の名言。「ダジャレ好き」という猪木イズムを受け継いだ前田の最高傑作だろう。

ひとことだけ言えば好きなようにやらせてもらう

●10月31日、UWF事務所。6人タッグで当たる長州戦について [illegible] 6人タッグマッチですら、何が起こるかわからない、危険なムードがただよっていたのだ

新生U.W.F. 第1回記者会見

いま一番、光っているのは天龍選手だと思う。とにかく、凄いリアリティがあるんだ。その生き方には共鳴できるし、オレにとっても心強いかぎりだ

●87年10月31日、UWF事務所
長州の [illegible] 天龍源一郎に対してエールを送る発言

言うことないよ。見てのとおりだ

●87年11月9日、後楽園ホール。[illegible] サソリ固めをかけようとした長州の顔面を背後から蹴り上げ、長州の片目を大きく腫れ上がらせた前田。この蹴りは、猪木から「プロレス道にもとる」[illegible] 長州戦でついに爆発したのだ。これが前田の新日本での最後の試合となる。

『選ばれし者の恍惚と不安、二つ我にあり』

●5月12日 新生UWF旗揚げ戦後楽園ホール大会
長州蹴撃事件をきっかけに、新日本を半ば追放されるかたちで契約解除となった前田は、高田延彦、山崎一夫、中野龍雄、安生洋二、[illegible] 新生（第2次）UWFを旗揚げ。たった6人の小団体だったが、新日本での2年間で前田の人気とカリスマ性は全国区に [illegible] 熱心なファンのパワーで、UWFは旗揚げから人気が爆発した。

紹介します……船木ゆうじ選手！

●89年 [illegible] 後楽園ホール大会の [illegible] しながら、ようやく凱旋した次期スター候補生だった船木優治（まさはる＝当時）[illegible]

皆さん、理解してほしいです。UWFは殺し合いではありません！

●89年4月14日、後楽園ホール大会での山崎一夫戦後
アクシデントによる大流血でドクターストップとなり、中途半端な結果で終わってしまった山崎戦。前田は「殺し合いではない」とマイクでアピールすることで、従来のプロレスの流血戦とは違うことをファンに教育していったのだ

プロレスを真剣にやれば、死ぬことだってあります

●88年 [illegible] 新生UWF旗揚げ第2戦 [illegible] の試合後
当時のUWFはキックでダウンを奪い合い、20分以上闘い抜くと [illegible] 前田は [illegible] ことをアピールした。

『あなた、プロレスラーですか』って聞かれて、下を向いたり、言い訳をしたり、したくないんですよ

●88年11月3日、東京・八王子 中央大学講演会
UWFの原動力は、プロレスラーであることのコンプレックスであることがわかる発言。しかし、それがあったからこそ、自信を持って「プロレスラーだ」と言えるものを作るというのが、UWFだったのだ

誰がどう言おうと、気にすることはない。そういう相手には、悔しかったら横綱になってみろって言ったらいいんだよ

●89年9月7日、[illegible]
[illegible]ホビー・オロコンというカードに不快感を露わにしたが、前田にとって[illegible]で立つ人間というのは、尊敬の対象なのだろう。

UWFというのは、猪木さんの一番純粋な部分が進化したものだと思うんですよ。だから、俺は猪木さんを絶対否定しないです。批判はするけど、否定はしない

●「週刊プロレス」89年4月18日号
UWFを言語化していった前田だが「俺の発言の出どころは、俺が新日本に入った頃の猪木さんが言ってたこととまったく同じ」と常々言っている。UWFは猪木が描いた理想の実現でもあったのだ。

俺たち全員、人間凶器になっちゃうよ

●89年10月19日、[illegible]
向けての強化合宿でのコメント。[illegible]で応戦することを示唆した発言[illegible]

田村は凄いものを持っている

●「週刊プロレス」89年11月14日号
まだデビュー1年半の田村をヒザ蹴りの連打で破壊しつつ下した前田。それこそ人間凶器だったが、[illegible]

やっと"後楽園ドーム"にたどり着くことができました

●89年11月29日、東京ドーム
東京ドームを後楽園ドームと発言した前田。「これは言い間違えたわけではなく、UWFの聖地でもあった"後楽園"という場所に思い入れがあるから」とのことだが、真偽は不明。

メガネスーパーが統一のリングを作っても、UWFスタイルは絶対に守る。たとえ異種格闘技戦でも、それがプロレスのリングなら天龍選手とは闘えない

●「週刊プロレス」90年5月22日号
当時UWFの冠スポンサーだったメガネスーパーが、プロレス団体SWSを設立し、そこで天[illegible]

神（社長）はビジネスマンとして山っ気があるんでしょ

●「週刊プロレス」90年9月11日号
[illegible]の分裂は、このときから始まっていたのかもしれない

効き目やちょっかいを出す者は、容赦せずに叩き潰すよ。たとえそれが外の者であっても、中の者であっても

●90年10月25日、大阪城ホール
[illegible]

UWFという名は捨てます

●91年[illegible]
3派に分裂してしまったUWF。高田派の団体が「UWFインターナショナル」、藤原派が「新UWF藤原組」と、それぞれUWFを団体名に入[illegible]を使わず「リングス」という団体名を発案。そしてUWFを名乗らなくても、自分が目指すものが、イコールUWFだと表明した。

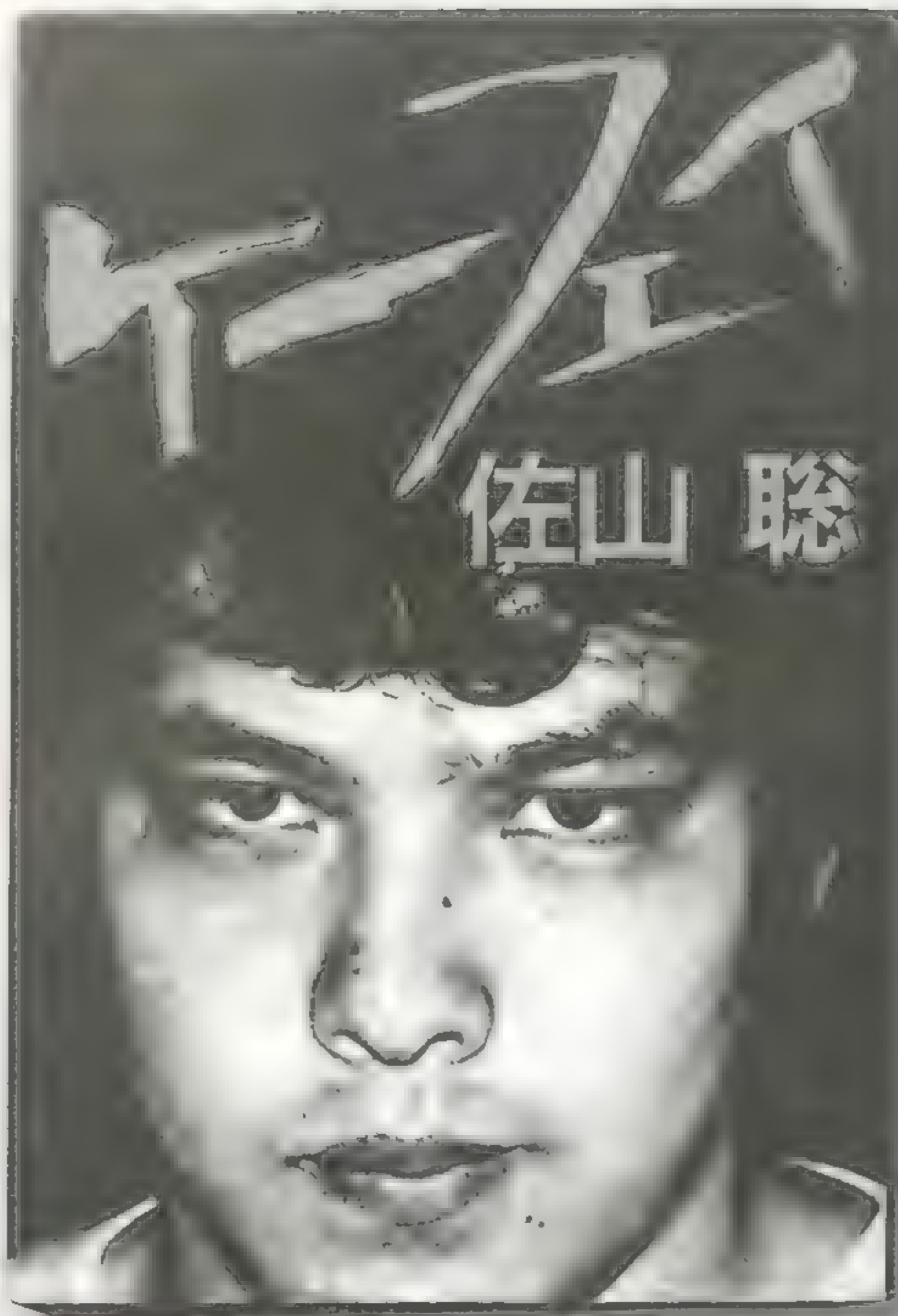
俺は新日本にいた頃の合宿所時代が一番好きなんだ。あのときはマシンがいて、高田や山ちゃんがいて、当時の佐山さん、当時の藤原さんがいた。ほかにもみんなたくさんいた。それで、みんなが何か一筋の光に引かれるように、何かを見つめて強くなろうと励んでいた。俺は、その光ってなんだろうとずっと考えていたら、ある日それがカール・ゴッチさんだということがわかったんだ。でもね、ゴッチさんは俺に言ったんだよ。もっと以前に生まれていれば、プロレスに対する誇りが持てたってね。そのゴッチさんでさえはたせなかった夢を実現するのが、UWFの役割だと思う

●91年[illegible]
[illegible]

長いあいだ、ファンの皆さんにご心配おかけしまして、申し訳ございませんでした。これからは、さらに選手12人、一致団結して本当の夢を追っていきたいと思います。これからもUWFを、よろしくお願いします

●90年12月1日、UWF松本大会のリング上で
無期限出場停止処分となっていた前田が会場に現われ、全試合終了後に全選手がリングに上がり万歳。選手全員が団結していることを観客と、神社長らフロントに対してアピールした。しかし、この12人が揃うのは、皮肉にもこれが最後となってしまう。

マスコミが作った Uの幻想と実像

ケーフェイ
佐山 聡

UWFがこれほどまでに後世まで大きな影響力を持つようにななった要因は、マスコミ、とくに活字媒体の力によるところが大きい。UWFは第一次、第二次ともほぼ地上波テレビ放送を持たなかっただけに、その主義主張、そして革新的なイメージは『週刊プロレス』をはじめとする雑誌によって、ファンに届けられたからだ。ここではそのUWFが存在した時代の活字媒体関係者に、当時のUWFを取り巻く状況について語ってもらった。

〝『ケーフェイ』を書いた男〟が語る

ケーフェイを超えたUWFの真実

〝Uの常識〟を覆す!
驚愕のインタビュー!!

『ほとんどジョーク』著者
イラストレーター

更級四郎

前田さんは最初は第一次UWFで頑張っていきたくなかったんです

タイガーマスクとして一世を風靡した佐山サトルが、第一次UWF時代に出した"暴露本"『ケーフェイ』。従来のプロレスの矛盾点、そして現在の総合格闘技に通じるシューティングの理念を書いたこの本を実際にゴーストライターとして執筆したのが、この更級四郎氏なのだ。

更級氏は『週刊プロレス』誌上で「ほとんどジョーク」という読者投稿ページを担当していたイラストレーターとして知られているが、じつは第一次UWFにも外部ブレーンとして深く関わっていた。『ケーフェイ』も第一次UWF、そしてシューティングのプロパガンダの一環たったのだ。

そんな第一次UWFの内部を深く知る更級氏が、今回初めてUWFの真実を語ってくれた。

更級 前にやった僕のインタビュー(『生前追悼ターザン山本!』に掲載)どうでした?

――凄い反響がありましたよ。なんといっても『週プロ』誌上で連載していた『ほとんどジョーク』のイラストレーターが、じつは第一次UWFに深く関わっていて、あの『ケーフェイ』のゴーストライターまで務めていたってことが判明したんですから、それは驚きですよね。

更級 そうでしたか(笑)

――今日はUWFについて、さらに詳しく聞いていきたいんですが、そもそも更級さんがUWFと関わるきっかけはなんだったんですか?

更級 巻き込まれたっていうのかな まだ新間(寿)さんが新日本プロレスにいる頃、新間さんが本を出すことになって、その表紙イラストを描いてくれっていう依頼が僕のところに来たんです。でも、断るつもりだったんですよ、新間さんってあんまり評判がよくなかったから(笑)

――まあ、当時は一番ブイブイ言わせてた頃でしょうからね

更級 ただ、新間さんの下にいた新日本の伊佐早(敏男)さんという人が一生懸命話してくるし、僕を伊佐早さんに紹介した人がベテラン記者だったから、その人の顔を立てて話だけは聞いたんです そしたら、僕が渋ってるのはお金だと思ったのか、お金は精一杯の額を用意してます。50万円でどうでしょう って言うんですよ。イラスト1枚ですよ。

――イラスト1枚50万円って、それは破格ですね!

更級 僕がそれまで書いた本の表紙イラストって、一番高くて20万円だからね 「そんなにもらえないよ」って言ったんですよ。そしたら「もうこの額で予算を組んでますから」って言うんで、ビックリしてね それでお金が良かったことと、紹介者の顔を立てるために引き受けたんですよ で、なぜこんなに破格のお金を僕に払ったかというとね 要するに新しい団体に協力してくれよってことだったみたいなんです

――なるほど その当時から、新間さんがUWF旗揚げに動いていて、それに協力してもらうための"手付金"みたいな意味合いですか。

更級氏は新日本黄金期に「闘魂スペシャル ザ・レスラー」というパンフレットの表紙イラストも担当 このオファーも新間氏、伊佐早氏から来たとのことで、これもUWFへとつながっていったのか

更級 うん 僕は当時、『月刊プロレス』で連載を持っていて、まだ世に出ていない若手選手や前座レスラーを毎回2ページで取りあげてたんです 当時はまだ若手選手が雑誌に載るなんてことはなかった時代だから、僕の連載で初めて雑誌に主役として取りあげられた選手も多かったんですよ 藤原(喜明)さんも、佐山(サトル)さんも、大仁田(厚)さんも渕(正信)さんもみんなそうですよ。

――当時としては凄く斬新な企画ですよね。

更級 そんな関係もあって、彼らがペーペーの頃から取りあげてるから、自分で言うのもなんだけど、好感を持たれていた部分があったんですよね 佐山さんがタイガーマスクで全盛の頃、僕を「先生!」なんて呼んでいたし そうすると周りは「ティグレ(佐山のあだ名)はずいぶんあの人になついてるんだ」って思いますよね だから伊佐早さんなんかは最初から僕に選手引き抜きを協力してもらおうと思ってたのかもしれませんね

――のちのち引き抜くために、若手選手に信頼されている人をいまのうちに取り込んでしまおう、と でも、UWFは結局、仕掛人の新間さんがすぐに退陣してしまいましたよね

更級 僕が聞いた限りは、最初、UWFは新間さんが作って、猪木さんがそのあと来て、フジテレビで放送するはずだったのが、結局、テレビがつかなくて、新日本から切り捨てられちゃったんですよ 先兵隊で行った前田(日明)さんとか、フロントの伊佐早さんらにしてみたら「冗談じゃない!」ってなりますよね。

――会社命令でUWFに行ったのに、切り捨てられたわけですからね。

更級 そしたら、伊佐早さんからまた電話がかかってきて、「もう猪木さんは関係ない 自分たちでUWFを続けていきたい 若い選手を根こそぎ引き抜いて、新日本をぶっ潰したいから、引き抜きに協力してほしい」って言われたんですよ でも、会社ぶっ潰すのに協力できないでしょ?

――そりゃそうですね(笑)。

更級 だから最初は断ったんですよ ところが一週間ぐらいしたらまた電話があって「どうしても会いたい」って、タクシーで迎えに来ちゃったんです それで前田さん、剛竜馬、ラッシャー木村さん、それから浦田社長をはじめとしたスタッフが食事している場所に連れていかれたんです

――「俺たちだけで頑張っていこう!」っていうメンバーですね

更級 いや、スタッフとか木村さんたちはそうでしょうけど、前田さんはホントはUWFで頑張っていきたくなかったんだと思います。

――ええ!? そうなんですか?

更級 自分を見捨てた猪木さんに対する恨みはあったでしょうけど、「ここで頑張っていこう」なんていう前向きな思いはなかったと思います。だって自分以外はみんな国際プロレスの選手なんだから。

――ああ、確かにそうですね。

更級 国際の人たちはもう団体も潰れて帰るリングがないから、「ここで頑張ろう」って思うけど、前田さんはね でも、エースである前田さんがいないと客が集まらないのはみんなわかってるから、辞めるに辞められなかったんですよ。

――文字どおりUWFに巻き込まれてしまったんですね

更級 だから、あのときの前田さんの表情って、いまでも凄く覚えてるんだよね、暗い顔してた それで「騙されちゃったんだってね 大変だね」って話をしてね 前田さんも僕が佐山さんや藤原さんと親しくしてたのを知ってるから「先生、協力してください」って言ってきてね だから僕がUWFに協力することになった一番の要因は、あのときの前田さんの顔を見ちゃったからですよ。騙されてホントにかわいそうだった。

――ヒドい目に遭った前田さんに頼まれたからこそ、協力することになったわけですね。

やる練習でしょ。やっぱり四六時中、

シングのジムなんかで練習してた。

みんな言ってた。

ロレスよりリアリティのあるプロレ

たんですか！

84年■月11日、大宮スケートセンターで旗揚げした第一次UWF　これがそのオープニングメンバー　左からマッハ隼人、グラン浜田、ラッシャー木村、前田日明、剛竜馬、高田伸彦（当時。高田は新日本からの貸し出し。浜田はこの2カ月後に早くも離脱。国際プロレス勢の中でエースが前田という不思議な布陣だった　（写真・上）

84年6月29日、新日本プロレスから藤原喜明、高田伸彦（当時）がUWFへの移籍を表明　これにUWFのエース前田日明を加えた3人は、当時「藤原組」と呼ばれた、新日本プロレス道場の先鋭集団でもあった　更級氏はこのときのUWFによる藤原引き抜きに強力。新日本道場の"仲間"が合流したことに嬉しさが隠せない、前田の明るい表情も印象的だ　（写真・右）

更級　そしてしばらくして、伊佐早さんから連絡が来て「引き抜きに協力してほしい」と。そこで名前を挙げられたのが佐山さんと藤原さん

——これは当時から格闘技路線でいこうという中でピックアップされたんですか？

更級　いや、そういうことじゃなくて、前田さんの意向ですね。UWFに残ってくれたエースの前田さんのために引き抜こう、と。佐山さんは当時、タイガーマスクとして大スターで、二人とも前田さんの兄貴分でしたからね。引き抜きに関して、実際にお金の話なんかは伊佐早さんがやったんですけど、「本当に藤原さんが来てくれるか自信がない」って言うんですよ。で、僕が藤原さんと話したんですけど、藤原さんは当初、積極的にUWFに来る意思はなかったんです。

——そうなんですか!?

更級　だっていつ潰れるかわからない団体なんだから。

——資金があるわけでも、テレビ中継があるわけでもないですからね。

更級　でもね、藤原さんは新日本での自分のポジションがおもしろくなかったわけですよ。だから迷ってはいたんです。それで藤原さんに「どう思うか？」みたいなことを聞かれてね。そのとき「いままでどおり新日本でパッとしない前座でやっていくか、新しい団体で関節技の鬼としてメインイベンターをやるか、この二者択一だね」って。

UWFに来れば、万年前座だった藤原さんにメインイベンターの座が用意されている、と。これは揺れますね。

更級　しかも、『週刊プロレス』はUWFを応援することが決まってたから「移籍すれば、いきなりカラーグラビアに出るよ」って。それで前田さんの頼みということもあって、藤原さんは移籍を決意したんです。

——レスラーとしての欲が、安定より冒険を選ばせた、と。

更級　それで藤原さんは伊佐早さんに言ったみたいなんだよね。「道場の若い連中をごっそり連れていきますから」って。でも、ついてきたのは高田（延彦）さんだけだった。

——そういえばそうですね。

更級　前田さんも「藤原さんが来れば若手はみんなついてくる」って言ってたんだけど、そうはならなかった。それはね、前田さんが思ってるよりは、若手のほうが計算高かったんです。だって上が抜ければ自分が出世できるわけだから。

——なるほど。

更級　では、なぜ前田さんと高田さんが藤原さんについていったかっていうと、藤原さんみたいな関節技を身につけたら強くなれるって本気で信じてたから。つまり、猪木さんに一番騙された二人なんですよ。

——猪木さんに騙された？

更級　うん。ある意味ではね。堀江さんは、前田さんや高田さん、あと藤原さんなんかが本当に誰と闘っても強いって思ってました？

——もちろん思ってましたよ。

更級　それは柔道家やアマチュアレスラーに比べても？

——そうですね。

更級　でも、僕はそうは思ってなかった。僕はプロレスも観るけど、相撲とかボクシング、アマレスの仕事もしてたんですよ。そうするとね、中学や高校を出てプロレス団体に入っても、そう簡単には強くはならないっていうのが、もうハッキリしてる。ホントに強い人は、中学の頃からスポーツで高校に引っぱられて、大学はタダで入って合宿生活で強くなるためだけの生活を送るんですよ。

——確かにそうですね。

更級　新日本プロレスも厳しい練習はしてるけど、それは巡業の合間に

やる練習でしょ。やっぱり四六時中、勝つための練習をしてる人とは違いますよ。でも、若い頃の髙田さんたちはそれを知らなかった。ホントに新日本で練習をやってれば強くなれるって思ってたんだよね。

—よく言えば純粋、悪く言えば世間知らずというか。

更級 プロレスはキング・オブ・スポーツ、最強の格闘技だっていうのは、猪木さんの宣伝文句なんですよ。若い髙田さんや前田さんは、最初のうちはそれを純粋に信じていた。でも、プロレスラーの中でも競技の世界を知ってる人は、そうじゃないってわかってたんですよ。

—アマレスで五輪代表だった谷津嘉章さんなんかはそうだったみたいですね。

更級 そして佐山さんなんかもそうなんですよ。巡業の合間に道場で練習しても強くなれないって知ってたから、UWFに来ても自分が強くなろうっていう気はなかった。

—ええ⁉ そうなんですか。

更級 彼はマーク・コステロって選手と試合したでしょ？

新日本の若手時代にキックボクシングの試合に出たんですよね。

更級 そこでボロボロに負けたんだよね。そのとき自分たちプロレスラーが強くないこと、道場の練習じゃ強くなれないことを知っちゃったんですよ だからその後はキックボクシングのジムなんかで練習してた。

だからシューティング（修斗）を作ろうとはしたけど、自分がシューティングの選手になろうとはしなかったわけですか……。

更級 だから佐山さんはわかってたけど、前田さん、髙田さんは途中まではわかってなかった。そういう意味では、猪木さんと新間さんがうまくやってたんだよ。ゴッチさんという本当に強い人をコーチで連れてきて、疑問の余地がないようにもっていったからね。

—プロレスラーであるゴッチさんが圧倒的に強いからこそ、自分たちも頑張って練習すれば、ゴッチさんみたいに強くなれる、と。

更級 でも、ゴッチさん自身はオリンピックレスラーだから、もともと強くて、モノが違うんですよ。だから新日本の若手選手がゴッチさんに関節技を習っても、ゴッチさんにはなれないんです でも、前田さんや髙田さんは純粋だったから、本気で強くなれると思って練習してたんだよね。だってさ、空手をやってた田中っていう人は知ってる？

—前田さんの空手の師匠である田中正悟さんですか？

更級 そう 前田さんはね、彼にボクシングを習ってたんですよ 考えられないよね。やっぱりボクシングはボクシングのトレーナーに習わないと上達しないって格闘技の関係者はみんな言ってた。

—そりゃそうですね（笑）。

更級 だから強くなりたくても、その方法論を知らなかったんですよ。

—では、前田さんと髙田さんというのは、猪木さんとか新間さんが作った"ストロングスタイル"っていう幻想を真に受けちゃった、ということですかね。

更級 だから真に受けてなかった人は藤原さんについてこなかったんですよ だからね、あのとき藤原さんについてきた髙田さんは、一番純粋だったし、一番強くなりたいと思ってた人だよね。だって、新日本に残ってたら、エースになれたんだから。

—強くなりたいから、猪木さんの後継者の一人という座を捨てるって、相当なことですよね。

更級 髙田さんは「強くなりたい」っていう気持ちももちろんあったけど、むしろ強くないのに、強いかのようにシラをきってプロレスをやるのが嫌だったんだと思う。当時「恥ずかしい」ってことをよく言ってたから

—UWFが格闘技路線になったのは、そういった髙田さんや前田さんの純粋さがあったわけですね。で、佐山さんは、自分がやりたいシューティングの実験の舞台として、UWFを使ってる感じだったんですか？

更級 いや、当初はシューティングの実験という考えはなかったと思うな。佐山さんがやろうとしてたのは、まず第一にプロレス。猪木さんの継承なんですよ。

—最初から猪木さんを継承するプロレスがやりたかったんですか⁉

更級 猪木さんはもともと従来のプロレスよりリアリティのあるプロレス、殺気立ったプロレスをやって、将来的には真剣勝負もできる団体にしたいという構想があったんですよ。

—へえ、そうなんですか。

更級 佐山さんは、それをやるって感じだったんだと思う。佐山さんと猪木さんって似てるとこがあるんです。プロレスの天才だけど、自分が単なる演技者みたいに見られることを非常に嫌っていて。

—ああ、そういう感じはありますね。そこにコンプレックスがあるというか。じゃあ、『ケーフェイ』という本を書いたというのもそういうところからですか？

更級 だから『ケーフェイ』を書くようになったきっかけっていうのはね、第一次UWFの頃、佐山さんが毎日のように僕の家に相談に来てたんですよ。何を相談に来たかというと「ホントらしく見せるためにはどうしたらいいか」って

—はぁ……どうしたら、真剣勝負のように見えるか、と

更級 「そりゃ無理だろ」って言ったんだけど、「だったら、いままでのプロレスと明らかに違うなって、観客がわかる方法を、先生何かアイデアないですか？」って言うんですよ。しょうがないので、僕が考えたのは、たとえば2部制にしたらどう？って。選手が12人いたら、上から6人がAリーグ、下6人がBリーグ。Aリーグで成績が悪いと、Bリーグのトップと入れ替わるという。

—ああ、第一次UWFは確かにA、Bに分かれてリーグ戦やってましたね。あれは更級さんのアイデアだったんですか！

更級 要は相撲の幕内とその下の十両ですよね。それは佐山さんも「いいですね！ すぐやりましょう」って、すぐに採用されて、UWFはA、Bに分かれてリーグ戦をやるようになったんですよ。

—それは佐山さんが、ほかのレスラーたちに「こうやっていくから」みたいなことを言ってやるんですか。

更級 それは外部の僕にはわからないけど、ある日、僕の家で相談してるとき「藤原さんとのリーグ戦決勝は、どうなったらリアリティがあるか」って話になったんです。そのとき僕が言ったのは「佐山さんのキックの乱打を藤原さんがロープ際で受けるがままのサンドバッグ状態になって、最後はレフェリーストップで終わるっていうのはどうだ？」って。そしたら佐山さんが「あ、ヘビー級ボクシングみたいな終わり方ですね！ これはいままでのプロレスにない。やりましょう」って言ったの。でも、試合では失敗したんですよ。

—どうして失敗したんですか？

更級 藤原さんは蹴りの乱打で棒立ちにならなきゃいけなかったんだけど、それをしなかった 蹴られたら倒れて、そのたびに睨みながら歯を食いしばって立ち上がってきちゃって。藤原さんとしては、根性で何度も立ち上がる姿を見せたかったんだろうけど、それはスポーツじゃありえないでしょ？

小橋建太のプロレスになっちゃいますね（笑）。

更級 衝撃の幕切れにならない。やっぱりプロレスをリアルに見せるの

新日本に残ればエースだったのに Uに来た髙田さんが一番純粋だった

って難しいんだよね　そうやってリアルに見せることに苦労してるとき、前田さんが僕のところに来てね「先生、俺、2部に落ちてもいいですよ」って言ってきたんです。

——えっ!?　確かに一度、前田日明がBリーグに落ちたことがありましたね　あれは自分から申し出たんですか！

更級　大変なことだよ　普通にしてたらエースなのに、自分から2部に落ちるっていうんだから　前田さんはわかってたんだよね　エースである自分でも、少し気を抜けばBリーグに落ちてしまうっていうところを見せれば、UWFの厳しさやリアリティがアピールできるって

——自分が犠牲になって、UWFを確立させようとしたってことですよね　凄いなあ

更級　それだけUWFのために必死だったんだよ　だから、そのあと高田さんが初めて山ちゃん（山崎一夫）に負けたんだけど、これは高田さんも前田さんの姿を見て、リアリティのためにはやらなきゃダメだ、と思ったんだろうね　僕はこれでうまくいくと思った。ところがね、今度は佐山さんが高田さんに負けたんだけど、その前の藤原さんとの試合で肩を脱臼して、肩のケガが原因で高田さんに負けたっていうストーリーにしちゃった。それはダメだろうって思ったよね。だって前田さんが2部に落ちてやってるのに、自分はケガって　いう、エクスキューズをつけるって、それはないでしょう。

——佐山さんの脱臼って、藤原さんがアームロックで脱臼させて「友だちの腕を折ってしまった……」って涙するやつですよね？　あれは脱臼してなかったんですか？

更級　してないと思いますよ

——そうでしたか（笑）

更級　あれはないと思ったな。もちろん佐山さんには言わないけどね　リング内はレスラーの自由だから。でも、あれを見て前田さんも高田さんもガッカリしたと思う。前田さんは何敗もして2部に落っこちて「練習不足だから負けた。また一からやり直す」ってマスコミにもコメントしてるのに、ケガかよって　そのケガも、藤原さんの関節技でケガしちゃったってことになってる。だから佐山さんの考えとしては、藤原さんの顔も立つし、自分の顔も潰れないって思ったんじゃない？　でも、それじゃまるっきり従来のプロレスと同じだから。

——先鋭的で走りすぎなイメージの

第一次UWFは途中から、思想的な面とファイトスタイルでUWFを引っぱるスーパー・タイガーこと佐山サトルと、エースであり資金難に陥ったUWFという団体を守ろうとする前田の対立というリアルな構造にとなり、最終的には袂を分つこととなった

前田さんが「俺、2部に落ちてもいいですよ」って言ってきたんです

ある佐山さんに、そういったプロレス的な考えがあったというのは意外ですね

更級　やっぱり若いときからプロレスをやってるから、先鋭的なことをやりたい気持ちはあっても、自然とプロレスラーの性（さが）みたいなものが出てしまうんでしょう

——佐山さんはUWFでマッチメイカーもされてたんですか？

更級　そうですね　だから僕の家に来てもリーグ戦の星取表とにらめっこしながら、誰々を何勝何敗にしたら同点になる」とかやってたよ

——そんなことまで（笑）。では、UWFのマッチメイカーである佐山さんのブレーンが更級さんだったということですね。

更級　ブレーンって、そんな偉そうなもんじゃないですよ（笑）。ただ、佐山さんが毎日のように家に来て、何か知らないけどいろいろ相談してきた。まあ、話し相手だね。僕はプロレス記者じゃないから、プロレスの世界も少しは知ってるけど、外の世界も知ってるわけだから　プロレスを理解してる外の人の意見を聞きたかったんじゃないかな

——なるほど。斬新なことをやるには、業界外の知恵を得ないとできないでしょうからね。

更級　そうやって佐山さんがUWFを引っぱっていってたんだけど、途中からね、佐山さんから「なんだかんだ言っても、自分が一番人気があるんだ」みたいな感じが出るようになっちゃったんです　やっぱりルタイガーマスクだから人気は抜群だし、まだ前田さんの人気は本格化する前だからね　どうしても自分が一番という態度が知らず知らずのうちに出るようになって　佐山さんはまったく悪気はないんだけどね

——人気からすると自分がトップなのはあたりまえだし、思想的にもUWFを引っぱっていってたわけですしね

更級　うん　佐山さんは考えるの得意だから。彼がマッチメイクしておもしろくなった部分はありましたよね。だってUWFの初期はひどかったもん。マッチメイクは剛さんがやってたんだよ

——剛竜馬がUWFの初代マッチメイカーですか！（笑）、

更級　笑うでしょ？　UWFの初期、あんまりにひどいんで。たまたま長野県の松本に行ったとき、旅館で高田さんと一緒に風呂に入ったときに「マッチメイク誰がやってるの？　あれじゃ客入らないよ」って言ったらモジモジしながら「木さんか……」って。

——そりゃあ初期と後期じゃUWFのイメージが違うわけですね（笑）。

更級　それで佐山さんがやるようになったんですよ。

——では、佐山さんは演者として天才でありながら、マッチメイクの才

能もあったわけですね。自分がプロ

ものを出すことになったんですか？

——なるほど。この「ケーフェイ」は

理ですね（笑）。

をアピールしたというね。

佐山さんの前は剛竜馬がUWFのマッチメイクをやってたんです（笑）

能もあったわけですね。自分がプロレスの天才だから、どうしても自分が目立つように持っていってしまうというか。

更級　それにリング上でもリング外でもトップをやるには、経済力があるか、あるいはホントに強くないとほかの選手がついてこないんですよ。で、結局は前田さんにしても、藤原さんにしても、佐山さんがそれほど強くないのはわかってるわけ

——ええ!?　そうなんですか!?

更級　だっていままでずっと道場でお互いにスパーリングをやってるんだから。そういうことが選手はわかってる。でも、佐山さんはプロレスの天才だから、強く見えるんだよね。それが複雑だった。でも、ゴッチさんは「佐山をエースに」ってずっと言ってました。そうじゃなきゃお客が入らないから。自分が強いけど客を呼べないレスラーだったから、そのへんはわかってたんだろうね。でも、選手間に不満はあったと思うよ。

——そういったこともあって、内部に亀裂が入っていったんですかね。

更級　佐山さんはネームバリューが違うから、トップで当然だったんだけど、みんなと一緒に練習をしなかったというのもあるんだよね。そして『ケーフェイ』っていうのは、そうやってUWFがダメになりかかる前に作ったんですよ。

——あれは、どうして〝暴露本〟的なものを出すことになったんですか？

更級　あれは、さっき言った「UWFがほかのプロレスと違うことをアピールしたい」っていう佐山さんの考えと、あとは「週刊プロレス」の杉山さんとターザン（山本）さん、そして僕のアイデアだね

——なんで業界内部から、暴露本的なものを出そうという発想になったんですか？

更級　「週刊プロレス」っていうのはUWFを推してたんだけど、さらに持ち上げていくためにも、もっと革新的なことをして、プロレスを変えていくようなものじゃなきゃならない。で、ああいうものを出すと、論争が盛り上がるし、UWFはほかとは違うこともアピールができる。でも、専門誌としての立場があるから自分たちで出すわけにいかないから、外部の僕が書くことになったんです。で、佐山さんに「従来のプロレスをぶち壊すなら、暴露本しかないよ。プロレスは格闘演劇だっていうことはできる？」って聞いたら「言えます」と。それで「出しましょう」となったんですよ。

兄弟のように仲がよかったという前田と髙田。彼らの強さに対する純粋な思いがUWFとなり、それが多くの人間の手によって現在の総合格闘技に育ったことは間違いないだろう

——なるほど。この『ケーフェイ』はいま読んでもおもしろいですけど、現在の総合格闘技にとってはあたりまえのことが書いてあるんですよね。

更級　そう。あたりまえのことばっかりでしょ？　要するにUWFはプロレスじゃないということをアピールするためには、プロレスがいかにスポーツ競技ではないかということを説明するのが一番だったんですよ。それで逆説的にUWF、シューティングはスポーツ競技なんですよ、ということですよね

たとえば、多くのプロレス技は相手の協力なしではかからない。でも、UWFそういうプロレス技を使わないからスポーツなんだという論理ですね（笑）

更級　でも、あの本を出したことで、佐山さんは普通のレスラーとは違うっていうイメージが出たと思うよ。

——もの凄く出ましたね。

更級　でも、それがまた前田さんたちにとったら「佐山さんばっかり」っていう感情になっちゃったのかもしれない

——ますます佐山さんが最先端みたいになっちゃったわけですからね

更級　前田さん自身ではなく、前田さんを推してた人たちは「前田さんこそ」っていう思いがあったんだと思う。僕自身もフロントスタッフや選手から、「佐山さんばっかり」っていう目で見られるようになったし

——〝佐山派〟の人間だ、と

更級　でも、僕自身は当時、前田さんのほうに力を入れていた。前田さんの純粋さはいいなって。でも、田中（正悟）さんとか、前田さんを支えてる人たちが、俺と（ターザン）山本さんを排他したかったんだと思う。要するに前田さんが俺とか山本さんといろいろ相談するのを嫌がったんだと思いますよ。でも、佐山さんにはそういう強力な取り巻きみたいなのがいなかったから、僕らといろいろ自由に話してたんですけど

——そして、選手間が分裂するようなかたちで、第一次UWFは終わってしまったわけですね

更級　だからね、UWFはなんだったかというと、要するに新しいプロレス団体をこしらえたっていうことです。ただ宣伝としては「本格的だよ」「猪木さんの標榜したストロングスタイルの本物はこっちだよ」ということをアピールしたというね。

——真剣勝負の団体というか、真剣勝負というコンセプトを打ち出したプロレス団体ということですね。

更級　だからよけい「高田さんは凄い」って思うんですよ。お金のためっていうのはあったんだろうけど、よく真剣勝負をやったと思うよ。プロレスのトップに立った人間が、負けたら名前が落ちるっていうリスクを振り切って、よくやったと思うんだ。やって正解だったけどね

——あれができてPRIDEがスタートし、高田さん自身、引退後もPRIDEの統括本部長をやったり、タレントとしても成功したりしてますからね

更級　そりゃ成功するよ。PRIDEをやったことで、何もうしろめたいことはないんだから。どんなことをインタビューで聞かれても、逃げる必要はない。高田さんだけは、もうホントらしく見せる必要がなくなったんです。一番純粋だった彼がUWFを超えたんだよね。

【08年11月26日　栃木県・那須塩原駅前の喫茶店にて収録】

さらしな・しろう■1947年生まれ。週刊プロレス創刊時より、01年まで長期連載された読者投稿ページ「ほとんとショーク」を自ら発案。選者兼イラストレーターとして活躍。全日本プロレスの「独占」ポスターも作成した

「『Uはつまらない』とは言えない空気が漂っていました」

元『週プロ』記者が明かす

U絶頂期『週プロ』編集部の“狂った季節”

UWFをとこよりも深く、そして熱く報道したマスコミといえば間違いなくターザン山本編集長時代の『週刊プロレス』である。大会のたびに増刊号を発売し、バカ売れしていたUWF絶頂期の『週プロ』編集部でインディー、女子プロレスをメインで担当していたのが、現在はライター&エディターとして活躍する小島和宏氏だ。そんな小島氏が語る『週プロ』編集部の“狂った季節”とは?

聞き手/ジャン斉藤　試合写真/平工幸雄

元『週刊プロレス』記者

小島和宏

The Roots of MMA
UWF
闘いの原点を探れ!

——小島さんは『週プロ』記者時代、いわゆるインディー担当で、『週プロ』とUWFの関係をわりと客観的にご覧になっていたと思うんです。その視点から、いかに『週プロ』とUWFが狂っていた……っていう言葉はちょっとアレですけど(笑)。

小島　まあ、狂ってたんでしょうね(笑)。じつはUはけっこう取材はしてたんですけど、UWF自体はあまり好きではなかったんです。僕が高校生のときに第一次UWFができて、まだそのときはメインでタッグマッチやって、飛んだり跳ねたりのプロレスもありながら関節の攻防もあった。でも、そのうち格闘技路線に変わっていったじゃないですか。UWFを観に行った友だちが「あれこそが本物だ! 新日、全日とは違う」と。そうやってみんな格闘技のほうに行っちゃったんで、これはいかん、と。

——UWFはプロレスの敵なんじゃないかと?

小島　そうですね。だから第一次UWFは一度も観に行ってないんですよ。プロレスファンを僕の周りからどんどん奪っていった存在だったんで、あんまりいい印象はないですね。

——第二次UWFにはどんな印象がありました?

小島　その頃はバイトで『週プロ』に入ってたんですけども、旗上げ戦と有明コロシアムは純然たるファンとして観に行ってます。旗上げ戦は〝時代の目撃者〟になりたかった。有明はジェラルド・ゴルドー vs 前田日明という異種格闘技戦のノリだったんで、

UWFの増刊号は編集会議でページの取り合いになってました

のめり込んで観れたんですけど。あと、その年の暮れに髙田vsボブ・バックランド戦が大阪府立（体育会館）であって。僕、WWFが好きだったんで、バックランドを観に夜行列車で府立まで行って、セミファイナルまで会場でグーグー寝て、バックランドの試合だけを観て帰ってきたっていうことがあったんです。だから、UWFに対する思い入れっていうのは非常に希薄だったんですよ（笑）

――プロレスから真剣勝負へ移行していく熱狂ってあったと思うんですけど、小島さんはその熱にはうなされなかったっていうことですね。

小島　のめり込んだらプロレスから離れてしまう自分が見えたんで、僕はプロレス側の人間でいたいなっていう気持ちがあったんでしょうね。

――でも『週プロ』自体は第二次UWFを猛烈にプッシュされてましたね。

小島　はい、してましたね。まず『ゴング』がそんなに大きく取り扱わないっていう理由があったんだと思うんですよ。雑誌としての個性を出すにはほかがやらないものを扱う、とあと僕が入ったときにはUWFの増刊号を毎大会出すというシステムができあがってて。

――かなり売れたんですよね、UWFの増刊号。

小島　売れてたと思いますよ。UWFってテレビで放映してなかったじゃないですか。『東スポ』も結果ぐらいしか載せてないし。まあ、お互いの利害関係としては一致したんですよね、Uとしても『週プロ』が宣伝媒体として必要だったし、『週プロ』としても販売促進のビジネス的な面があった。ホントに印刷とデザイン代しか経費はかかってないんじゃないですか。それで会社（ベースボール・マガジン社）に対してアピールできたし、それで『週プロ』は自由にできることができたんで、そういう意味では活字プロレス的なものがUによって確立されたわけじゃないですか。

――UWFで商売ができたから、当時の『週プロ』編集長だった（ターザン）山本さんがムチャをやっても許されたというわけですね。

小島　ええ（笑）。僕が88年にバイトで入って、その年に第二次Uが旗上げするんですけど、そのときが『週プロ』の売り上げが底をついてた時期だったと言われてたんです。新日本の台湾遠征かなんかの表紙の号を出されて、これが底だ！」って山本さんに言われました。「君はどん底のときに入ったんですよぉぉお！」って（笑）。そのどん底からUWFによって『週プロ』がよみがえっていく。プロレス中継が深夜枠に移っても、ファンも雑誌だけあればいいやみたいな世界ができてきて。

――じゃあ、Uがなかったら活字プロレスも……。

小島　なかったと思いますよ。あの時点では『ゴング』がそんなにUを推さなかったことはプロレスを守る意味では正しかったんだろうし、新日本が『週プロ』に怒ったのは、いま冷静になって考えたらおっしゃるとおりですよね。

――まあ、大会ごとに増刊号を出してたわけですからね。

小島　もう月刊誌ですよね。で、その編集会議があると、みんなページの取り合いになって、「この試合は俺が書きたい！」とか。結局、1ヵ月に一回しか試合がないから、道場に取材に行ったりして、書きたいことがみんな溜まってくる。それを試合リポートに放り込みたい情熱があったんだと思うんですよ。でも僕はその情熱がまったくないんで、「あ、なんでもやりますよ」って感じだったんですが、それでもレポートは凄いプレッシャーだったですよね。

――それだけ注目されていたら。

小島　結局、読者は『週プロ』しか情報源がないので一字一句を読み逃すまいとかまえてるわけですよ。ビデオが出るまでのタイムラグはそれで埋めるしかないんで。凄いプレッシャーでしたね。読者もほかのプロレスより一段高いところにあるという意識があったじゃないですか。それもあって、へんなこと書けない、ヘタなことできないっていうのがあって。

――あまり興味がないのにたいへんですね（笑）。

小島　取材に出始めた頃はとにかく読者との真剣勝負に緊張しましたが、そのうち「あきらかに読者のほうがUに対する知識も豊かで愛情もある道場に取材に行くこともないので深い話もなく、小手先だけの技術で試合レポートを無難にこなす自分」に嫌悪感を感じましたねぇ。これは『週プロ』の記者としてやってはいけない仕事だと思うようになりました。ただ、編集部の人数が足りなかったので、増刊号要員として駆り出され続けたのですが……

――どうしても興味は持てなかったんですか？

小島　う～ん、「正しい」って言ったらおかしいけど、正しいことですよね、UWFがやってることは。方向性は凄く正しいものをやってるし、プロレスが生き残るためにはこれなんだろうけど、観ていま一つおもしろくないっていうのが……（笑）。

――よく言われますよね、第二次Uの試合はおもしろくなかったって。

小島　まあ、編集部内には「つまらない」と言ってはいけないような空気が漂っていたので、心の中で思うだけで口には出せませんでしたけどね。そんな空気が『週プロ』編集部や誌面に一体感や連帯感を無言のうちに生み出していたのかもしれませんけど。

――その一方で、「第二次UWFもプロレスなんだ」という理由で冷めてった人もいたわけですよね。

小島　それはけっこう多いと思いますよ。横浜アリーナで髙田vs船木のときかな。あのあたりから「あれ？」っていうのは当然出てきましたよね。

――船木さんの掌底を浴びて髙田さんが起き上がれなかったけど、試合は続行されて、髙田さんのキャメルクラッチで勝負は決して。

小島　あのときは凄く困った空気が流れたのは覚えてますね。見ちゃいけないものを見ちゃったっていうのがあるじゃないですか。

――それはもっとうまくやってほしかったってことですか？

小島　そう……ですよね。「そういうものは出ないようにやらなきゃいけないんじゃないの？」っていう。

――当時の『週プロ』だと、もっとうまくやってほしかったっていうよりも、格闘技に移行してくれよっていうようにも読めたんですけど

小島　それはポーズだったのかもしれないですね。UWFは格闘技をちゃんとやってるという前提だったんで、ちょっとしたことで崩れちゃうもろさはあるじゃないですか。そこですよね、UWFのおっかないところは。一つでもボタンのかけ違いがあると、観てるほうがいろんな矛盾に気づいちゃうもろさはあったですね。

――当時の『週プロ』としては、あのスタイルのままやってほしかったんですか？

小島　だと思いますよ。まさか分裂するとも思ってなかったし、あのまま

ぼくの週プロ青春記
90年代プロレス全盛期と、その真実
小島和宏

今年3月に白夜書房から出版され、現在も好評発売中なのが小島氏が『週プロ』記者時代を赤裸々に振り返った『ぼくの週プロ青春記』だ。ターザン山本編集長時代の『週プロ』がいかに狂っていたのかとともに、インディー、女子プロの裏事情もまるわかり！ 必読です!!

大きくなっていって、UWFスタイルが市民権を得て、新日、全日と並列するのかまったく別物になるかはわかんなかったですけど、普通に順調に進んでいくもんだと思い込んでたんで。『週プロ』は、スタイルとしてのUWFを望んでいたんでしょうね

――そのスタイルを読者には格闘技として捉えてほしかったんですか?

小島　っていうか、当時はまだプロレスが真剣勝負という前提があったわけですからね。逆に言うとUWFがちゃんとしたものをやってると、世間からのプロレス全体の見え方が上がるわけじゃないですか。ホントはみんなこれぐらいできるんだけど、エンターテインメントとして、デスマッチやタッグマッチをやってるんだよ、みたいな

――要するに、猪木さんが落ちてきた頃だからこそ、ストロングスタイルの部分を誰かが担わないといけないということでもあったんですね

小島　それをUWFが担ったということですね　UWFがプロレスのイメージ全体を引き上げてってくれれば、対外的にほかの団体も助かる。けど、新日としては、要は自分のとこから出てった人間が持ち上げられていたら、それはつまんないですよね。

――新日本がかつて担ってたものをいまUWFがやってるってことですからね　でも、その担い方もUWF内部ではいろいろ意識は違ったと思うんです　選手の対立は小島さんのところにも届いていたんですか?

小島　聞こえてきましたね　結局、前高山（前田日明、高田延彦、山崎一夫）の位置は揺るぎないわけじゃないですか。不自然ですよね、船木（誠勝）や鈴木みのるが勝てないのは　それに結局、世代交替がないとファンだって「……おかしいな」って思うもんなんです　新日本に上がったときに「常勝チャンピオンなんかクソ食らえだ!」って言っていた前田が第二次UWFでは常勝チャンピオンになってたわけですから、辻褄が合わなくなってるんですよね。で、実際に試合やっても、若い選手と比べたら、蹴りの切れ味だって劣るわけじゃないですか　そういう危うさは一歩引いた僕の立場からも見えましたよね。

第二次UWF絶頂期の89年7月、その後インディーのカリスマとして一時代を築いた大仁田厚が「格闘技の祭典」で青柳政司と異種格闘技戦で激突。青柳相手に反則暴走した大仁田（レガース姿）は、3カ月後、FMWを旗揚げする。試合後の乱闘には佐竹雅昭の姿もあった

――一方で前田さんの言うこともわかるわけですよね。興行としてやっていかなきゃいけないっていうのは。

小島　そこは、いまとなってはわかるけど……ってことですよねえ。当時の前田は「俺たちが正しいことをやってるんだ!」って言ってたわけで　でも、ファンからすると、だんだん「おかしいなあ……」ってことですよ、格が見えてきちゃって、第二次UWFが旗揚げした翌年に、高田が前田に勝ったりして、そこでお客は「ああ、やっぱり実力主義だ。高田が前田に勝っちゃうんだ」っていう手ごたえがあっただけに、「船木たちが勝てないのはどうなんだろう?」っていう疑問は浮かんでいたでしょうね

――では、神社長らフロントと選手の対立、そこに前田さんと若手選手の対立が複雑にクロスしていたわけですね

小島　そういうことでしょうね　でも、一番内部に食い込んでいた安西（伸一）さんは僕らにはそういうことは言わないので　「君らは観たまま純然たる試合レポートを書いてくれ」っていう感じで。最初の頃はUの原稿を書いたらまず安西さんにチェックされてましたから。

――『週プロ』でUWFをリードしていたのは、山本さんというより安西さんだったんですか?

小島　僕はそう思いますけど。山本さんは……、自分で仕掛けたということもあるんでしょうけど、『ぼくの週プロ青春記』でも書きましたが、骨法の堀辺先生とか柳沢（忠之）さんとか、外部ブレーンの意見をまとめて原稿にしてましたから

――そこらへんは『生前追悼ターザン山本!』（小社刊）にも詳しいですね

小島　僕らからすると安西さん、布施（鋼治）さん、宍倉次長たちの情熱のほうが凄かったですね　一緒に青春を駆け抜けていった前田や高田らがスターダムにのし上がっていくっていうこともあったんでしょうけど　よく安西さんに言われたのが「もっと熱を込めて書いてくれ。情熱が足りない」みたいなこと

――一番困る指導ですね（笑）。

小島　だって熱ないんだもん、そりゃそうだよねって話ですよ（笑）。とにかく安西さんから何度も直しを食らって。で、ほどなくして「小島はUには向いてない」って話にはなってくるんです　東京ドーム大会の編集会議で、「小島くん、申し訳ない。君はUのドームに行けない」という話をされて。観たいだろうが、新日本の金沢（大会）、テレビマッチだから一人で行ってくれ」と。僕的にはそんなショックでもないんですけど、みんなからしたらUのドーム大会はある意味でクライマックスでしたからね。第二次Uが分裂したあと、『週プロ』とU系の関係というのはもの凄くいびつになっていきましたよね。山本さん、安西さんは前田さんや高田さんとは絶縁に近い関係になって。

第一次UWFを観てたら僕の人生変わってたんじゃないかと思います

小島　山本さんは信用できない男だっていうのがあったんじゃないですかね（笑）。

――なるほど（笑）。では安西さんは？

小島　安西さんが『格通』に移ったというのもきっかけでしょうけど、やっぱりUの分裂からおかしくなっちゃったんですよ。Uの分裂がすべての悪ですよね。いろんなバランスが全部おかしなことになっちゃって。

――でも、ある意味、プロレスを格闘技にするっていう方向性ではパンクラスが一つのゴールじゃないですか。

小島　パンクラスに関しては社長の尾崎（允実）さんが昔『週プロ』でバイトしてて、そこで次長と親交があったこともあって、パンクラスを推そうっていうのがまずスタイルうんぬんの前にあったんだと思います。『ゴング』との違いも出せるし。それで結局、UWFがやろうとしたことのもう一歩先のことをやり始めたんで、これは読者も乗っかってくるだろうという読みがあったんでしょうね。でも僕の興味はもう……僕が思ってるプロレスとは違うなあって。リングスになって、よりつまんなくなったなあって（笑）。パンクラスなんて一回も原稿書いた記憶がないですね。

――そんな小島さんにとって、Uっていうのはなんなんでしょうか。スタイルとかは別として。

小島　やっぱり第一次UWFは僕からプロレスファンの友だちを奪っていった存在であって、第二次UWFの成功はプロレスのイメージも引き上げてくれたかもしれないですけど、プロレスファンを格闘技のほうにひっぺがしてく存在ではありました。

――よくPRIDEやK-1はプロレスファンを奪っていったみたいなことが言われますけど……

小島　僕はUWFからだと思いますよ。結局PRIDEが受け入れられる下地を作ってしまったわけですからね。

――UWFがなくてもヒクソン・グレイシーは日本にやってきたかもしれないですけど、興行としてここまで成功はしてなかったでしょうね。

小島　しなかったと思います。そう考えると新日本が『週プロ』を取材拒否したのは、当然のことですよね。

――あの取材拒否は正しい（笑）。

小島　正しいと思いますよ。ロープに飛ばないこととか、UWFはプロレスをまず否定するところから始まっている。そこはのめり込めなかったし、のめり込めた人はもっとプロレスの……猪木さんの言う市民権的な部分に共鳴したんでしょうね。

――UWFをプッシュすることで、『週プロ』はプロレスファンを奪い取っているって意識はありましたか？

小島　いや、ないと思いますよ。ないでしょ、当然。

　ということは、あのときのプロレスが市民権を得るためには格闘技的なものじゃなきゃダメだっていう意識があったということですよね。

小島　それはあったでしょうね。ちょうど新日も全日もゴールデンから落っこった時期だったんで、プロレスの上がり目がないわけですよね。そんな中でプロレスファンとして「プロレスってホントは凄いんだよ！」って言えるものがUだったけど、それがどんどん格闘技のほうに行っちゃったら、ファンもどんどんプロレスから遠のいちゃったわけですね。

　そこは難しいギャンブルだったわけですね。

小島　でも、逆にUがあったから、FMWが存在しえたというか。やっぱり"正しいこと"より"おもしろい"じゃないので、当時のFMWがやっていたことは、正しくないけどおもしろいプロレスですよね。

　FMWのほうがプロレスらしかった。市民権を得るために出ていったはずのUWFが、いつの間にかプロレスの香りがどんどん失なわれてしまったということですね。

小島　でも、ここまで格闘技は好きじゃないと言っておいてアレですけど、実際にPRIDEで全盛期のミルコの試合を見せられたらプロレスに戻れなくなっちゃうよなっていうのは確かにありましたよね（笑）。

　ダハハハハ！

小島　2005年のグランプリの準決勝を会場で観てて、こんなことが世の中で行なわれてたのか！　と。

　小島さん、遅すぎです（笑）。

小島　Uから20年遅れで、ああ、これは確かにおもしろいなあ」っていう（笑）。だから、僕、ホントに第一次UWF観てたら人生変わってたんじゃないかと思いますよ。そのまま『週プロ』に入ってたとしても、「俺、UWFが大好きなんですよ！」みたいなノリでレポートを書いていたかもしれないです。どっちがよかったかは知りませんけども（笑）。

　お話をまとめると、猪木さんがやってきた市民権運動があって、それをUWFが受け継いで、その担い手が時代とともに変わってきて、いまはまったくプロレスと関係ない魔裟斗とかがそれを担ってたりするわけじゃないですか。

小島　ああ、そういうことですよね。

――となると、今回行なわれる田村vs桜庭戦というのは、UWFの存在意義の一つだった市民権運動的な側面は担ってないとは言えますよね。そこは失ってないというか。

小島　だから、この08年に行なうことの意味や、どんな試合になるのかなって興味はありますよねぇ。僕はUインターの記事はバッドニュース・アレンの試合ぐらいしか書いてませんけど（苦笑）。

　そうでしたか（笑）。今年の大晦日はどのようにすごす予定ですか？

小島　大晦日はお笑いライターとして日テレをリアルタイムで観て、純然たるファンとして『ハッスル』を録画すると思いますが、9時またぎや10時またぎには桜庭vs田村戦が気になってTBSをザッピングでチェックするんじゃないかと思います。個人的には『PRIDE・34』のリングに二人が並んだのを生で観た時点で、ひと区切りついているんですけど……やっぱり気にはなりますよね。だから当時Uに熱狂してた人は絶対に観なきゃいけないような気はしますよ。『週プロ』もケツ拭かなくちゃダメですよ、そういう意味では。

　増刊号を出すべきですね（笑）。

小島　そうですね（笑）。『週プロ』があんなにプッシュしなかったら、今回の試合もないわけだし。

【08年11月26日　kamipro編集部にて収録】

出すたびにバカ売れしていたという『週プロ』のUWF増刊号だが、やはりクライマックスは89年11月の東京ドーム大会だろう。このときの増刊号は当時としては異例の全90ページ、定価500円という超特大ボリュームだった。

こじま・かずひろ■1968年、茨城県出身。中学時代より熱心なプロレスファンで、大学進学と同時に『週刊プロレス』の記者となる。インディー、女子プロを中心に8年間『週プロ』記者として活躍するも、現在はフリーライター&エディターとして活躍。現在発売中の『クイック・ジャパン』81号ではサンドウィッチマン、『日本映画style』では映画監督デビューする木村祐一をインタビューしている。

「Uはいまに至る『台本』を自然に作ってくれたね」

“狂った季節”を通りすぎたマスコミが語る

Uが“本物”になるのに20年かかった理由

“リアルファイト”という理想と現実の狭間で揺れ動いたUWF。
この革新的団体への思いが強すぎるがゆえに、当時のことについて口を閉ざすマスコミも存在する。
ここでは84年の旗揚げからUを追い続けながらも、その“狂った季節”をクールな目で見つめてきた
フリーライターの李氏に、いまに至るUの道程を振り返ってもらった。

聞き手／ジャン斉藤　試合写真／平工幸雄

フリーライター
李 春成

旗揚げ戦の前田vs山崎を観て「……ああ、またか」って思ったね

——今日はUWFをリアルタイムで取材していた李さんに当時を振り返っていただきたいんですが……。

李　（さえぎるように）とりあえず、昼だし軽いのからいっとく？

——か、軽いのというと？

李　昨日、いい白ワイン開けたんだよ。

——李さん、まだお昼ですけど（笑）。

李　（聞かずに）あとおいしいサラミがあるからさ！（グラスにワインを注いで）じゃあ、カンパ～イ！

——カ、カンパ～イ！（一口飲んで）……えー、では酒の肴にUWFの話を（笑）。

李　旗揚げ戦は大宮スケートセンターだっけ？（84年4月11日）

——そうですね。

李　覚えてるな。控室に行ったら前田日明に「あまり見かけない顔だけど誰？」って言われたんだよ。それで名刺を渡して「李です」って自己紹介したら、「なんだ、俺と同じ名前じゃないか！」って言われてさ（笑）。あ、いきなり話が脱線しちゃったね。

——いえいえ、前田さんらしいエピソードで。第一次Uは猪木さんのテレビ朝日に対する駆け引きから生まれた団体ですが、当時のマスコミもそういう認識だったんですか？

李　それは時間を追って、だんだんあきらかになったことで、その時点ではわからなかったんじゃないかな。

——どういうプロレスをやる団体かっていうのも？

李　うん。だってさ、原宿に酒飲みに行ったら駅前にポスターが貼ってあるんだよ。新間（寿）さんを中心にアントレ・ザ・ジャイアントとかハルク・ホーガンとか、当時のスーパースターがズラリだよ。「なんだ、この団体は？」って思った。でも、結局ポスターだけで終わっちゃったけどね。で、途中から接点が生まれてさ。

それはどういうことですか？

李　俺、仕事で腰悪くしたときに友だちに誘われてスーパータイガージムに通ってたことがあるんだよね。当時はジムが二コタマ（二子玉川）から三軒茶屋に移って、山崎一夫とか宮戸優光とかがインストラクターで指導してたんだけど、

腰痛のリハビリを兼ねてジムに行った、と。

李　そうそう、それでいろいろ取材を始めるんだけど……うん、俺はUWFについて当時の『週プロ』じゃ"リアル"とは書いてないんだよ。よく"本物部分"って言葉を使ってたの

——"本物部分"。

李　「本物部分を求める～」とかさ、それはまだリアルファイトへの過程だと思ってたから。

——微妙なニュアンスを使ってた、と。李さんとしてはUがこのままリアルファイトに徐々に近づいていけばっていう考え方だったんですか？

李　やっぱりさ、急には無理なわけじゃない。そう考えるとUWFって自分たちのファンを差別化して捉えた、いわゆるオーディエンス・セグメンテーションを取り入れた団体だったよね。いまのプロレス界でいうと、典型的なのはドラゴンゲートなんだけど、どんどん社会が多様化していく中で、イベントはセグメント化していったほうが商売になるんだよ。大風呂敷を広げない身の丈経営というかさ。そこまでUのフロントが考えてたかどうかわからないけど

まあ、第一次U自体は興行的には大成功を収めましたよね。

李　ただ、旗揚げ戦の前田日明vs山崎一夫を観て、「……ああ、またか」と思ったね。

それは結局はプロレスの域を脱していなかったということですか？

李　うん、「またか」というより「まだか」という感じだな。前田vs山崎だって山崎の勝ちじゃねえかよってさ

——失望が入り混じってた、と。

李　やっぱり組織って、いろんなキャラクターがいたほうがいろんな意見が出て強いベクトルが生まれると思うんだけど、一歩間違うとバラバラにもなりかねないわけじゃん。Uもその二面性をはらんでいて、佐山が抜けたのでちょっとその方向性もずれちゃったのかなって。でも佐山がいたら結局は崩壊だったかもしれないし……難しいとこなんだよ。

——佐山さんその後、修斗を設立されましたね。

李　そうそう。だって、オープンフィンガーグローブとかルールだとか、いまのMMAの原型を作ったわけだからね。佐山にしても、そして前田にしても、あれだけのエネルギー持った人間はいなかったからね。前田ってさ、船木（誠勝）に「いつになったらリアルファイトをやるんだ」って聞かれたそうじゃない？

それで「まだ早い、5年待ってくれ」って答えたって言われてますね

李　その「まだ早い」の意味だよな……なんなのかってことで。俺が思うのは、やっぱり最後の最後で力が足りなかったんだろうな。でも現実、その前田のリングスから（エメリヤーエンコ・）ヒョードルとかああいう選手が出てきたんだから、前田のスカウティング能力もたいしたもんだけどね。だけど、第一次Uの頃だと前田は簡単には負けちゃいかんのよ（笑）。だから、「まだ早い」って意味は興行的なことだよね。

李さんは興行的な成功と、競技の確立の狭間で葛藤はありませんでした？

李　いや、単純に成功したことは嬉しかったよ。だって当時、たしか『日経トレンディ』の流行語候補だかにUWFがノミネートされたんだよ。プロレス的なものが入るって凄いんだから

いまのプロレス界だと考えられないですね。

李　そこには俺のプロレスへのコンプレックスもあるかもしれない。プロレスとかサッカーも当時はそうだったんだけど、雑誌とか書籍の企画を企業に持ってくときって説明するのが大変なわけよ。「えっ、なんで猪木じゃなく前田なんですか」ってよく言われたんだよね。

そういったこともあったからこそ、UWFブームには感慨もひとしおだったんでしょうね。でもほどなくして第一次Uは分裂して。

李　俺、第一次Uの分裂後にマスコミとして一番最初にほとんどの選手を取材してるのよ。『Number』で「UWF自壊の構図」って記事を書いたんだけど。ちょっと持ってこようか。あとなんか必要なものある？　サラミも食ってね。あ、タバコ吸う？

あ、大丈夫です、お気遣いどうも（笑）。

（しばらくして『Number』を持ってくる）

李　はい、これね。俺、この取材のときに前田から怒鳴られたんだよな（笑）

——確かに、冒頭から「突然、前田日明が声を荒らげた」って書いてありま

"10年早い男"佐山聡。修斗がシューティングと呼ばれていた時代に、オープンフィンガーグローブ以外にも、UFCに先駆けて八角形のリング（オクタゴン）を使用するなど常に新しい格闘技の風景を我々に見せてくれた

すけど（笑）。

李　昔から前田は「ほかのスポーツだったら経験者が解説者やってるのに、なんでこの世界だけ違うんだ。あんたたちにわかるわけがない」って言ってさ。でも、やっぱり長く観てればそういうのもわかるし、元選手がマスコミの役割ができないこともあるわけで。確かに俺はリングに上がらないけど、それこそ神聖な場なんだからターザン（山本！）みたいに上がっちゃダメじゃん（笑）。だから、それは聞いてておかしいなと思ったしね。このときに一緒についてきた編集者はボクシング経験者で、なんか前田にキレそうになってるんだよ「俺とやってみるか」みたいな（笑）。

――それは穏やかじゃないですね（笑）。でもよくこの分裂直後の時期の選手に取材ができましたね

李　専門誌もできなかったんだよ。このときは「この人も語ってくれたんだから前田さんもお願いします」みたいな感じで順繰りに外堀を埋めていったんだよ。

――解散直後だと一番ドロドロしてたときですよね　いろいろ言われてますけど、前田とほかの選手はなんで溝ができてしまったんでしょう？

李　やっぱり旗揚げ戦の前田vs山崎が象徴してるんじゃないかな。それに対して疑問を抱えてずっとやってる選手がいたわけじゃない。

――方向性のずれですね。たとえば船木や鈴木（みのる）が真剣勝負の世界に行きたいというのはわかるんですけど、ほかの選手もその方向に行きたかったんですかね？

李　それはないだろうね。自分たちが現役のあいだは自分たちの力ではできないだろっていう、前田と同じような認識だったんじゃないの

――結局、第二次Uはどこに行こうとしてたっていうのが非常に見えづらいですね。

李　だから、興行の成功で満足しちゃったんじゃないの。現実と理想の狭間の中で、理想に向けて大きな仕掛けをするだけの資金力もないわけだし。でかいスポンサーをつけるフロントの能力も欠けているわけですよ　いい選手を作るとか「プロの興行はこうあるべき」とかあったかもしれないけど、それと経営は別だから　小室哲哉じゃないけどさ、アーティストは結局アーティストで終わっちゃうんだし、プレイヤーはプレイヤーで終わっちゃうんだよね　Uに誰かちゃんと企業運営できる理念を持ったスタッフがいたら、また違ったと思うんだよ。まぁ、猪木さんと同じくらい個性が強すぎる人たちが集まっていたのが、Uのおもしろさだったんだけど。

――第二次Uの分裂以降も李さんは取材はされてたんですか？

李　最初に旗揚げしたのは藤原組だよね？　俺、好きだから観に行ってるよ　けっこう俺はFMWもJWPも好きだったし（笑）　でも、一番興味があったのはパンクラスですよ。「これは何かやってくれるんじゃないか？」っていうものを感じたね。それは93年10月のUFC第1回大会以来だね。（ウェイン・）シャムロックがなんだかよくわからない選手にアッサリ負けて。この大会はもしかしたら……っていうのがあったんだよ。

――リアルファイトじゃないかってことですね。リングスはどうでした？

李　俺は前田に嫌われちゃったから

――え、先ほどの怒鳴られた取材からですか？

李　いや、それとはまた違って、『週刊SPA！』の取材。『SPA！』の売り物ページで「エッジな人々」って連載があるんだけど、そこでリングス時代の前田日明を取材したの　90分くらいのロングインタビューで、話の大部分は日本刀のことばっかりだったんだけど（笑）

――例によって得意な話を（笑）

李　で、そのページに注釈か入ってるんだけど、それは編集部が作ったもので俺は監修してないのね。その注釈で、"藤原喜明"って言葉に、プロレスファンの編集者が「関節技の鬼と言われるがじつはその姿は単なる大酒飲みで～」みたいなことを書いたんだよ　さらに、俺が「前田は原稿にうるさいから絶対チェックに出してね」って言ったのに送らなくてさ　それで全部俺のせいになっちゃって。

――それまた前田日明らしいエピソードですね（笑）

李　俺、手紙とかFAXとかあらゆる手段を使って前田とコンタクトとろうとしたんだけど、返ってくるのはつれない返事ばっかなんだよ　「李春成っていうクレジットが出てる以上、管理するのは当然じゃないか」って。でもそれは編集権にかかわる問題で、俺に関係ねえじゃんって話なんだけどさ。だって、全日本プロレスが『週プロ』を取材拒否とかならわかるけど、「李春成」って個人じゃねえかよっていう（笑）

前田が船木に言ったとされる「まだ早い」は興行的な意味だよね

90年10月25日に大阪城ホールで行なわれた前田日明vs船木誠勝。試合後、いつになったら真剣勝負ができるのか船木に問われ、「5年待て」と口にしたとされる前田。その一言には現実と理想のギャップに対する悩みがうかがえる

持っていき方一つでUの選手はアスリート集団になってたかもね

――U系って原稿チェックとか内容確認含めてみんな厳しいですよね、他人を意識しすぎているのか。

李 いい意味で個性派集団だったしね それもさっきの組織の話じゃないけどこれをまとめるのは大変だよ。前田みたいな凄いエネルギーがないとさ。

――それこそカリスマじゃないと。

李 佐山は佐山でカリスマだったわけでしょ。高田の場合は神輿に担がれることで、カリスマ性が出てきてそれがPRIDEだったんだろうし。人間ってそれぞれいろんなタイプがあるからね

――第二次Uが解散して20年近くなりますけど、いまだに「田村vs桜庭」みたいに試合のテーマとして使われるってことは、強烈な運動体っていう証ですよね

李 やっぱりプロレスラーって息長いね(笑)。そのカードに反応するファンって30代が多いでしょ。多少高いお金払っても観に来るわけだけどこれがあと5年続くかどうかだよなみんな若くないしね

――いま現実にあたりまえのように真剣勝負が行なわれてますが、そこに至るまでの過程に自分はおもしろさを感じるんですけど。

李 UWFはナチュラルなかたちでいまに至る「台本」を作ってくれたっていう感じだよね。プロレスっていうのはストーリーがあるから。リアルファイトのストーリー作りは難しいじゃない ナチュラルなまま放っておいて作られるものは、ほんの一握りなわけだからさ その中から出てきたヒョードルとか(ヴァンダレイ・シウバっていうのは「美しいE者」だなって思うけどね

――もしも第二次Uがリアルファイトに舵を振り切ってたらどうなってたと思います?

李 どうなんだろうな。Uがいまだに続いてたとして……ちょっと考えにくいな。やっぱりそんなに早くチェンジできないでしょ。ミリ・センチ程度の進歩はしても、現実と理想のギャップはなかなか埋められないんじゃないかな

――当時はそのギャップにマスコミも苦しんだというか、いまとなって振り返りたくないって人もいるみたいなんですよね。

李 それはなんでかわからないな

――前に李さんが書いたコラムで誰かとお酒飲んでるときに、「マスコミはUを総括するべきだ」って詰め寄られたっていうことを書いてたのが印象に残ってるんですよ

李 それ、この『週刊SPA!』の編集者だよ(笑)。

――あ、そうなんですか(笑)。

李 彼にさ、高田がヒクソン・グレイシーに負けた日に偶然、新宿のゴールデン街で会って言われたの。めちゃくちゃ暴れちゃってさ、ラガーのマスターと殴り合いになって(笑)。

――高田が負けてヤケを起こした、と。

李 泣きそうになってるんだよ 結果に対してこっちは全然、あたりまえだと思ってるのにさ。

――U幻想を与えたマスコミは責任をとるべきだっていうことなんですかね?

李 そういうことでしょ。俺たちをこんなに盛り上げておいて、「伝える側」の責任だって言われてさ、こっちは「そう?」っていう感じでさ(笑)

――クールですね(笑)

李 俺はおもしろければいいやと思ってるから スポーツだけじゃなくて、演劇だとか映画だとかの取材もやってるから、要するにエンターテインメント空間として観てるわけで。いくらおもしろくするためでも「なんでもあり」じゃまずいけど、要するに健全であればいいと思うし、重箱の隅つつけばいろいろあるかもしれないだろうけど、そういう意味で俺はPRIDEには疑問を感じてなかったよ。Uに関しては過程なんだからしょうがないでしょっていうスタンスかな。さっきも言ったように、優秀なスタッフがいないかぎり理想に近づいていくのは難しいなとは思ってたね。

――持っていき方一つでUの中で理想を実現していたかもしれないと

李 もうちょっと早く"本物部分"の、"部分"が取れて"本物"になっていたかもしれないね。でも、そんな簡単に物事は変えられないよね とくにいつまで経っても自民党のこの国民性じゃさ(笑)。そういう意味じゃ、最終的にはいいところに着地したんじゃないのと思うよ

――実質20年でここまできたわけですからね

李 サッカーで言えば浦和レッズはいつも埼玉スタジアムが超満員だし、クラブワールドカップのチケットもプレミアム状態だし。Jリーグも92年の設立だから、ここまでくるのに16年かかってる。そういうもんだよ。

――大きな過程としてUの存在意義があったわけですね。

李 当時は会場も凄かったもんね、シーンとしちゃってさ。マットでドタンバタン、「イテテ」とかそういう音しか聞こえないんだよ。それで、観る側もだんだん覚えていって。元プロボクサーとかそれこそアスリートたちも観に来てたからね。

――そのくらいに注目を集めていた運動体だった、と。

李 だから持っていき方一つではUの選手はアスリート集団になった可能性があったってことだよね。アーティスト集団じゃなくて たぶんそこらへんがいまだに消化しきれないマスコミのトラウマになってるんだろうね(笑)。

――なるほど(笑)。今日は貴重なお話をありがとうございました。

李 お、こんなんで大丈夫? じゃあ本格的に一杯付き合ってもらおうか(笑)。

【08年11月26日 都内・某所にて収録】

本文中の李氏執筆による「自壊の構図」は、『Number』265号(平成3年4月20日発行 文藝春秋刊)に掲載 前田をはじめ髙田や船木の証言をもとに、U分裂の真相はいったいどこにあったのか、多角的に迫っている。

り・はるなり■1956年6月24日、東京都出身。84年のロサンゼルス五輪を契機に編集者からフリージャーナリストに転向。スポーツを柱にしながらも、広い意味でのエンターテインメント空間を描いてきた。著書に『不器用な王者たち』(ぴあ刊)、『職業・柔道家』(ネコ・パブリッシング刊)など。ブログアドレス http://plaza.rakuten.co.jp/starsoccerbp12/

あまりにもシブすぎるUWFインター旗揚げ時の集合フォト。なお、この写真は2枚組ポスターとして販売されたが、もう一枚は「一枚岩」を表わすために、ただぽんとに大きな「岩」の写真のポスターという、暴狂ぶりだった。

あらゆる意味で

「最強」プロレス団体 UWFインターナショナル

証言特集

桜庭和志vs田村潔司のルーツはここにある!

大晦日の『Dynamite!!』で運命の一戦を迎える桜庭和志と田村潔司。その二人のルーツといえば、"最強のプロレス団体"UWFインターナショナルだ。プロレス界に一時代を築いただけでなく、のちの格闘技界にも大きな影響を与えたUインターの真の姿を当時のメンバーたちに証言してもらった。

構成／堀江ガンツ　写真協力／鈴木健(市屋苑)

あの"カッキー"がミヤマ☆仮面となって語る
最強最狂のプロレス団体！
UWFインターの真実!!

インター伝説
×ミヤマ☆仮面（垣原賢人）×金原弘光

Uインターの頭脳がマスコミにもの申す!

ワイドショー的な"兄弟ゲンカ"の煽りで桜庭vs田村戦を汚すな!

U.W.F.スネークピットジャパン代表

宮戸優光

桜庭和志、田村潔司のルーツであるUインターの現場を取り仕切り、Uインター解散後も二人と密な関係を持つ宮戸優光。"Uインターの頭脳"として数々の仕掛けを行なってきた宮戸は、今回の田村vs桜庭をどう見ているのか?　またプロレスを愛する人間としてこの一戦のどこに期待しているのか。あらためて直撃してみた。

聞き手／堀江ガンツ　トビラ写真／菊池茂夫

――桜庭vs田村戦決定という一報を聞いて、宮戸さんは率直にどう思われましたか。

宮戸　ずっと興味があるカードでしたけど、理想を言えばね、両者が肉体的にも精神的にも一番いい時期に実現すべきカードだったな、という印象はありますよ。ただ周りから、はたしてピークなのかという疑問符がつく中でね、いまだにこれだけ話題になるっていうことの凄さっていうかな。僕がまだ現役だったUインター時代に下の選手だった二人が、いまだに話題になるということに対してね、嬉しさや誇らしさはありますよ。

――やはり、我がことのようにという感覚があるわけですか。

宮戸　Uインターの選手というのは、僕にとって家族みたいなもんですからね。ある種、肉親みたいな。人が、このある程度限られた期間の中でしかなかなか脚光を浴びられないスポーツの世界で、これだけ長く注目されているというのは、ホント自分のことのように誇らしいですよ。だからいま、この一戦に対するマスコミの煽り方がね、プライベートともいえる部分をちょっとほじくって、僕から見たら兄弟ゲンカという話で盛り上がってるでしょ。そうやって、いわば兄弟間のプライベートな揉め事を、遺恨というかたちにして煽るやり方は、気持ちいいもんじゃないね。

――兄弟間の不仲をクローズアップされるのは、家族としては嫌なことだと。

宮戸　なってね、家族間や夫婦の問題に対して、関係ないマスコミが口出しするのはおかしいでしょ。興行というのは煽りも大事ですけど、いま行なわれているのは非常にワイドショー的な気分の悪い煽り方だと思いますね。僕自身としては、Uインターのファミリーの一員として、やっぱりあいつら凄かったんだということを見せてほしいだけですよ。

――でも、この対決を語る上で、やっぱりUインター時代の先輩後輩で、それこそ家族に近いような濃密な時間をすごしたことがあるという関係性は、外せませんよね。そこを強調するわけじゃないですけど。

宮戸　だからね、外野が細かいことをどうのこうの言うのはおかしいと思いますけど、彼らの近くにいた僕から見るとね、2人のあいだにちょっとした問題があるとしたら、それは、2人が同い年だったからという部分があったと思う。それがなかったら、ここまでああだこうだってなってなかったと思う。

——同い年でありながら、プロレスの道場の先輩後輩という上下関係がやはり先端ですか

宮戸　この業界は極端に言ったら1日でも早く入門していれば先輩ですから。その中でタムちゃんという人は、先輩後輩というポジションはキチッと守る人だからね。そしてサクは、サクで、そのへんはアバウトというか、タムちゃんほどカッチリしてないわけだから。先輩であり兄貴であることはわかっていても「でも同い年じゃねえの？」っていうのが、あるんだと思う。

——ましてや桜庭選手は大学4年という、ある程度、大人になってから入門したわけですからね。

宮戸　本人もそういう世界だとはわかってたとは思うんですよ。だから入門したての新人の頃は、先輩後輩という絶対的な関係があってもそれが理解できていたけど、入門して3～4年経ったときっていうのは、この世界である程度、大人になりましたっていう段階だと思うんですよ。でも、その段階でも同い年の兄貴、弟っていう関係が延々とつきまとって、そこに不満はあったのかもしれない。

——もう、いいかげん、単なる新弟子じゃないんだというか

宮戸　そういう気持ちは、どうしても出てきますよね。やっぱりある程度まで成長したら、自分を認めてほしいっていう思いは、人間誰しもあるし、それこそ実の親子のあいだでもあるじゃないですか。いつまでも赤ん坊扱いされたくないというのがね。

——宮戸さんもデビューしてから何年も「新弟子」って呼ばれ続けることに対して、そういう思いがあったわけですよね？

宮戸　だからね、ああいうのはつらいですよ。いつになったら自分は認められるんだろうって。僕の場合は、自分よりずっとあとに入ってきた人間が名前で呼ばれてるのに、まだ「新弟子」って呼ばれてたわけだから（苦笑）。そういうことは、周りから見れば些細なことかもしれないけど、とくに下の人間は気持ち的につらいんですよ。

金銭問題と人間関係で内部分裂した第二次UWFのあとを受けて旗揚げしたUWFインターナショナルは、設立当初から「一枚岩」をアピール。その後もマット界屈指の団結力を誇る。まさに最強のプロレス団体となった

タムちゃんとサクの問題というのは二人が同い年だから生まれたと思う

とはいえ、先輩後輩という関係はずっとついて回るものでもあるわけだから、難しい部分ではあるよね。

——でも今回、田村選手がこの一戦をやろうと決断したということは、桜庭は絶対的な後輩なんだという意識が、かなり少なくなったからじゃないかとは思うんですけどね。

宮戸　ああ、なるほどね。だから、いままでタムちゃんがなぜやらなかったのか、あるいはどっちがやらなかったのか知らないけど、何かそういう時期がきたってことなんでしょう。だって、もし本人たちが望んだって、プロモーターやファンが望まなきゃ実現するわけないんだから。そういう意味では時期が一つになったんじゃないかな。

——両者が比べられながら、ちゃんと個々の歴史を作ってきたからこそ、いまだに話題になるんでしょうからね。

宮戸　タムちゃんとサクの試合だけじゃなくてね。今回、僕がIGFで猪木さんと仕事を一緒させていただいたことだって、これが何年か前だったら、実現しなかった組み合わせだったかもしれない。やっぱり時期やタイミングというのはあるんですよ。タムちゃんとサクもそういうタイミングだったんでしょう。こういう一つの時代の節目となる試合なんだから、そこをあんまりネガティブな話題で引っぱってほしくないね。

——ちっちゃい話にしてほしくないと。

宮戸　汚してほしくないんですよ。僕はファミリーを汚されてる気がするんですよね。そんな、ちょっとしたことだったらないって言ったら申し訳ないけど、本人としたら大きな問題でも、一歩引けばちっちゃな問題だと思うから。そのへんはちょっと報道も押さえてもらって、清々しい闘いであってほしいですね。この素晴らしい一戦をくだらない遺恨話に置き換えてほしくないんです。なんでかっていったら、二人とも格闘技人生の中で、一つの幕引きのときが迫ってるわけじゃないですか

——年代的にはそうですよね

宮戸　幕引きは別としても、一つの締めなわけですよ。繰り返しになるけど、それをワイドショー的なお家騒動みたいなかたちで、野次馬みたいに煽って汚してほしくない。やっぱり、かつて我々のプロレスに熱狂しながらも、いまは離れていったファンの人たちなんかが「彼らがやるなら観に行こう」と思うようなね、清々しいファイトが理想だと思いますよ。

——この一戦が実現することによって、いまの格闘技は、こうした歴史の上で成り立ってるんだよっていうことが、あらためてわかるような戦になればいいですよね。

宮戸　そうですね。歴史の再認識をするような試合になってくれればいいですよね。まさしくそうだ。いま総合だなんだって言ってるけど、実際な

プロレスの道場という特殊な訓練所 だからこそ特別な人間が育つんです

んで総合っていう流れができたのか、彼らは一番あいだに立った人間たちですからね。そういうことを再認識する機会になるんじゃないですか。

――いまの格闘技界は、人を含めた多くの選手が闘ってきた歴史の上で成り立ってるわけですからね。

宮戸 やっぱね、みんな歴史を知らないとダメですよ。プロレスの歴史にしてもそう。そういうのを知らないのは、やっぱり恥ずかしいことです。誰が井戸を掘って、いまその水を飲んでいるのか。我々にしたってゴッチさんやルー・テーズ、ロビンソン、あるいはさらに古い多くの名レスラーたちが掘った水を飲ませてもらってたんですよ。そういうことを忘れて「この水はスーパーで買いました」とかね、ヘタすりゃ「俺が井戸を掘ったんだ」ぐらいのバカなことを言ってるのがいるから。そういう歴史を知らないということは恥ずかしいし、それが恥ずかしいとも思わないった恥知らずもこの業界で増えてきてますからね。

――やはり猪木さんがいなかったらUWFはないし、UWFやUインターがなかったらPRIDEもなかったわけですからね。

宮戸 そうそう。そもそも猪木さんがゴッチさんを新日本のコーチに呼んでなきゃ、キャッチ・アズ・キャッチ・キャンは下に伝わってないわけだから。じゃあ、そのカール・ゴッチに技術を教えたのは誰なんだ、ビリー・ライレーだ、ビリー・ライレーは誰に学んだんだ、あるいはルー・テーズは誰に教わったんだとか、そういうことに興味を持たないと。いま自分たちが口にしている水がどこから流れてきたのかを知らないと、この業界がおかしくなってきますよ。

――すべては歴史の上で成り立っていると。

宮戸 あとね、歴史といえば、かつてあったプロレス道場のシステムっていうのは、やっぱり大事ですよ。いま団体が道場を持って、赤ん坊から大人まで育てるシステムがないでしょう。あの厳しい道場というシステムがなくなったのが、この業界の弱さだと思う。昔プロレス界に間違いなくあったあのシステムの中で、いまの総合というものが行なわれていたら、やっぱりプロレスラーが一番だったんじゃないかって思いますよ。

――やっぱり道場で鍛えられたプロレスラーこそ最強ですか。

宮戸 そこでテストで選りすぐられた人間だけが入門できて、それでも10人入ったら9人辞めるような訓練と生活の中で選手を育てるんですよ。これはやっぱり凄い人間が生まれるし、プロレス界自体も、たぶんそのシステムがなくなってきてから質が落ちたんですよ。

――誰でもプロレスラーになれるような状況になっちゃいましたからね。

宮戸 じゃあ、総合はどうかっていうと、確かに小さいジムとかが増えて、いろんな人が格闘技に触れられるようになって、底辺は広がったと思いますよ。ただ、かつてのプロレス道場のような特殊な訓練所っていうのはもうない。これがもし、かつてのプロレス道場のようなシステムの中で総合の選手を育てていたら、たぶん日本はまだ世界レベルの選手がたくさん出てきましたよ。

――あんなシステムの格闘技道場は、世界中探してもなかなかないでしょうからね。

宮戸 いまあるジムっていうのは、基本的に生徒を辞めさせないシステムでしょ？ 自由だから休みたいときに休めるシステム。ところがプロレスの道場は、ついてこれないヤツは辞めてもいいのが前提だから。また、疲れたって休めない。自分の限界は自分じゃ決められない。普通のアマチュアスポーツにはないんですよ。そういう中から、田村、桜庭っていうのは生まれたんだから。

みやと・ゆうこう■本名・宮戸成夫。1963年6月4日、神奈川県出身。85年に第一次UWFに入門。第二次UWFを経て、Uインターでは取締役に就任。99年に「U.W.F.スネークピットジャパン」を設立。今秋からIGFのエグゼクティブ・ディレクターに就任した

――だからこそ、いまだに生き残ってるというか。

宮戸 そうそう。それは船木さんも然り。やっぱり、ああいうシステムの中で育った人間は凄いですよ。だからいまは、総合の選手はたくさんいるけど、頭抜けたこれがプロだ、と言われるような人がいないでしょ？

――選手層は厚くても、特別な選手はなかなかいませんね。

宮戸 なぜってそういう育て方をしてないんだから。そりゃ出てこないと思いますよ。合宿所に入れて、厳しい練習の中でメシも食わせて、ゼロから育てる気がないんだもん。まあ、僕も他人事みたいに言っちゃったけど、かつてあった道場の必要性というものを、IGFの名古屋大会（11月24日）が終わって、なお強く感じましたね。この業界の弱さはそこだなって。これはマット界全体の問題。プロレスだとか総合だとか関係ないですよ。

――やはり桜庭vs田村がクローズアップされるのは、彼ら自体が凄い選手であると同時に、彼らを超えるような若いプロが育ってないということも言えるかもしれませんよね。

宮戸 そうなんですよ。スター不在ですね。たとえば、やれ柔道の石井（慧）選手が来るとなったって、それは昔で言えばジャンボ鶴田だから。

――石井慧＝ジャンボ鶴田ですか（笑）。

宮戸 オリンピック選手が我々の業界に入ってくることは素晴らしいことかもしれないけど、ただジャンボ鶴田ばかりが入ってくるのを狙っていていいのか。相撲界だって、学生横綱を入れることもあるけど、歴代の横綱のほとんどは生え抜きですよ。そういう中枢がしっかりした中で、ジャンボ鶴田みたいな選手が入ってきてくれれば、またおもしろいわけだから。やっぱりその中枢になる人間を生んで育てるっていう作業は捨てちゃったらダメだと思います。もともと日本における相撲界やプロレス界っていうのは、特殊な人間を連れてきて、特殊な訓練を受けさせて、特殊な人間＝スターにするのがこの世界なんだから。そこを忘れちゃいけない。

――特殊な世界だからこそ、ファンはお金を払って観に行くわけですからね。

宮戸 そういうことなんですよ。普通の兄ちゃんが月謝払ってある程度育っても、それじゃあお客さんは1万円、2万円は払ってくれない。やっぱり特殊な人間が特殊な訓練の元で育った選手だからこそ、思い入れをもって観てくれるんです。タムちゃんとサクには、そういったことをもう一度思い出させるような素晴らしい試合を期待したいですね。本当のスターを生み出す作業を業界は怠っちゃダメですよ！

（08年11月27日／都内杉並区高円寺UWFスネークピットジャパンにて収録）

3連戦最後の試合は桜庭にシュート指令を出したの

元Uインター取締役が桜庭vs田村3連戦の真相を激白！

元UWFインターナショナル取締役
鈴木 健

『Dynamite!!』での桜庭vs田村戦の決定で、再びクローズアップされているのが1996年に行なわれた両者の3度にわたる一騎討ちだ。今回の一戦を前に、UWFインターナショナルのフロント代表として活躍（暗躍？）した鈴木健氏に当時のUインターの舞台裏から、いまだから語れる桜庭vs田村の3連戦の真実、さらには、この一戦に対する鈴木氏の思いまで、さっくばらんに語ってもらいました！

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄

――ついに田村vs桜庭戦が実現するわけですけど、Uインターの元取締役として、かつての二人をよく知る鈴木さんは、決定の報を聞いてどう思いましたか？

鈴木 ついに来たかと。やっぱりね、この試合は世紀の一戦と言ってもいいぐらいの凄い闘いだと思うんだよね。だって、Uインターがなかったら、PRIDEはないでしょ。そしてPRIDEがなかったら、いまのような日本格闘技界の隆盛は絶対ないわけだよね。

――それは間違いないですね。

鈴木 そこまで作り上げていった大元の大元、Uインター出身者で最後に残った最強の二人が闘うわけだからね。で、田村は田村なりにたくさんジムを作ってるし、桜庭だって今年自分のジムを作ったじゃない？　その二人が闘うっていうのは、桜庭が自分のジムを持ったことで、個人同士の闘いだけではなく、道場を賭けての大一番にもなっちゃったんだよね。

――お互いの道場の看板を賭けた闘いでもある、と。

鈴木 そう。だから、よく過去の因縁を持ち出して煽られたりしてるけど、過去だけじゃなくて、負けたら道場にとって死活問題にもなりえるわけだし、未来につながる闘いとも言える。そういうことを考えると、いろんな意味で究極の闘いって言えるんじゃないかな。そういうことも含めて、ファンの皆さんもあとから気づいて「こんな試合を見逃したのか！」と思ってももう遅いからね。べつに自分がUインターに関係してたとかを抜きにして、この試合は観なかったら絶対にあとから後悔するよ。

――お互いの現時点での存在を懸けた闘いでもある、と。

鈴木 そうでしょ。だから俺の意見としては、どっちにも勝ってほしいんだけど、あえて言えばどっちにも負けてほしくない。

――今回、桜庭vs田村戦が決定したことで、Uインター時代に3度行なわれた二人の闘いがファンや関係者のあいだでクローズアップされてるんですけど、あれはどういった意図で

"抹殺指令"とかそんなんじゃない。田村vs桜庭3連戦を組んだ理由は……

組まれた試合だったんですか？

鈴木　逆にどう言われてるの？

――一部では「桜庭はUインターを離脱する田村を潰すためのヒットマンだった」とか言われてますね。

鈴木　あ、そう。全然そんなことないよ（笑）。

――そんなことはないですか（笑）。

鈴木　ただ、3戦目のときに桜庭に「ちゃんとシュートサインを出して、これで試合をしてね」って言っただけだよ。

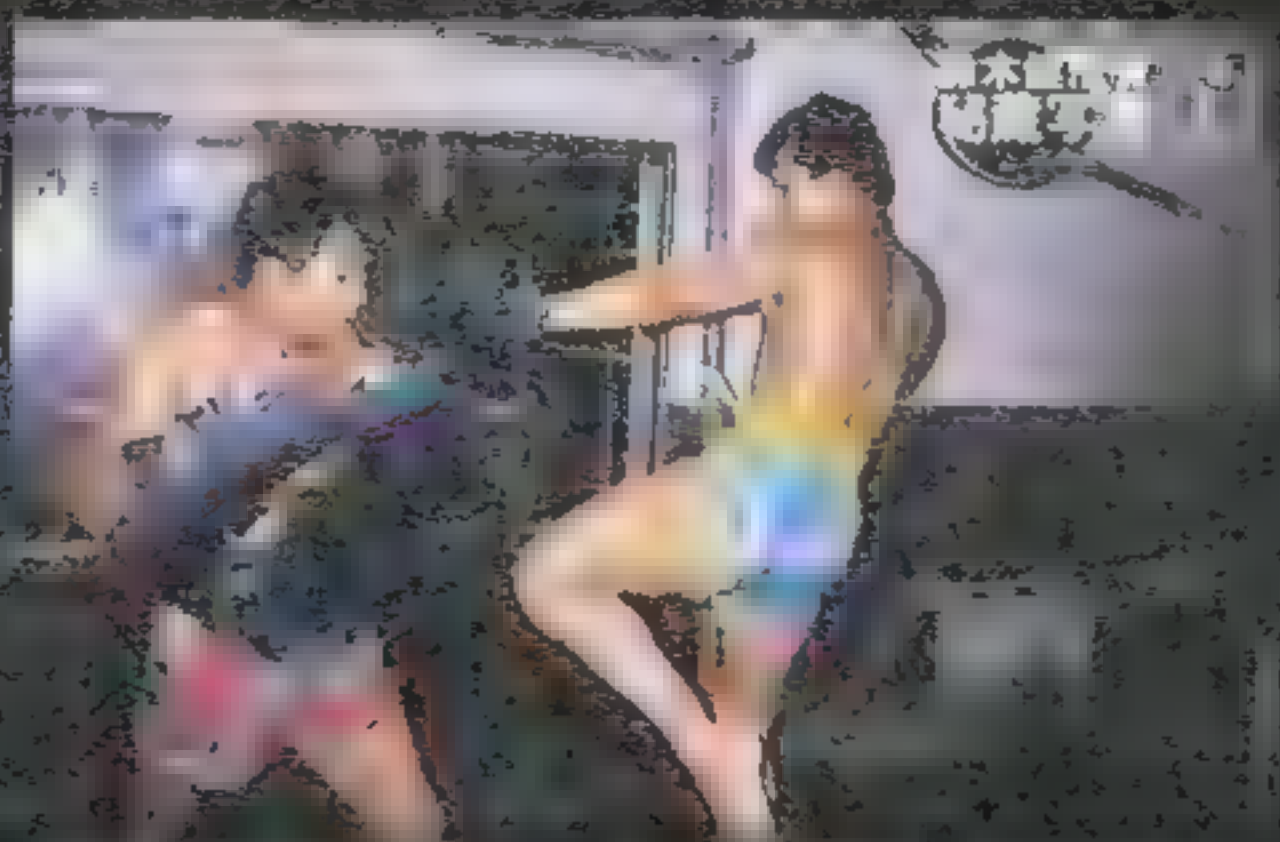
――やっぱり「抹殺指令」を出してるんじゃないですか！

鈴木　違う違う。そんなんじゃなくて、本当に強いのはどちらか知りたかったし、ファンのみんなにも正しく観てほしかった。でも、結果的には俺が観たかった内容ではなかったのよ！ それは先輩後輩の上下関係もあったみたいで。田村は田村で、Uインターを辞めてリングスに行くって決めてたのに、負けて行くわけにいかないっていうのもあったと思うし。

――それもあって、鈴木さんは「潰しちゃえ」ってことで、桜庭選手にシュート指令を出したんじゃないですか？

鈴木　いや、桜庭は当時からかなりの実力者だったんで、キッチリとした試合をするようにって言っただけだよ。もともと、なぜあの試合を組んだかっていうと、当時、新日本との対抗戦があったでしょ。その中で、これこそがホントのUインターのスタイル、この試合が基本なんだということを最低でも1試合は見せたい。それには田村vs桜庭戦を見せておくのが一番だって判断したんだよね。

――ピュアなUWFインターの戦いを見せるのに最適なカードだったと。では第1試合っていうのは何か意味があったんですか？

鈴木　やっぱりオープニングマッチって絶対にその日の興行を左右させるから。そこでインパクトを与えることができるわけじゃん。だから第1試合に持ってきただけで、べつに他意はないよ。第1試合でインパクトを与えて、そしてメインイベントでもインパクトを与えて、上と下で押さえる。その頃は世の中は対抗戦がほとんどだったから、みんなどこで何が起こるかわからなかったよね。

――ちなみに、あの頃、鈴木さんがマッチメイカーだったんですか？

鈴木　もともと宮っちゃん（宮戸優光）がやってたんだけど、もうあの頃は抜けたあとだから、安ちゃん（安生洋二）と俺がマッチメイクして高田さんに確認するっていう感じ。

――最終的には高田さんが決めてたわけですね。

鈴木　そうだね。やっぱり決定権は高田さんにあるから。これダメだってときもあったね。

――田村さんは新日本との対抗戦に出ないことになって、桜庭さんと対戦する3月1日までほとんど試合には出てなかったですけど、あのときは干されていたんですか？

鈴木　いや違うよ。あとで知ったんだけど、本人もいろいろと悩んでたらしいんだよね。でも結局マッチメイクできないわけじゃん。人もいなかったし。

――基本的には新日本との対抗戦だったわけですからね。

鈴木　そうそう。だからみんな集まって「新日本とやるぞ！」ってなったときに、田村は「やります！」って手を挙げてないわけじゃん。だからマッチメイクがうまくできなかっただけで、全然干してるわけじゃない。ちゃんと道場にだって練習に来てたはずだしね。Uインターは選手個人個人の意思を尊重してたら、たまたまそうなっちゃっただけで。

――K-1から田村vsパトリック・スミス戦のオファーが来たときはどんな感じだったんですか？

鈴木　あれはK-1からっていうか、（石井）館長から電話がかかってきたんだけど、会社に話が来る前に、たぶん田村と館長のあいだで話はついてたんだと思う。だから筋としてはちょっと順番が逆なんだけどね。ホントは俺のところに話が入って、その話を高田さんに打診して、田村と話して……っていうのがよかったんだけど、館長が言うには「田村とはもう話ができてるから」ってことだったから。

――でも、パトリック・スミス戦での勝利で田村さんの人気が急上昇したわけですけど、興行に利用しようという考えは全然なかったんですか？

鈴木　うん。だから結局本人の意思だよ。その頃からたぶん前田（日明）さんからも「リングスに入らないか」って打診が来てたと思うし。

――桜庭さんとの3連戦を組んだ頃、田村さんは抜けるだろうなっていうのはうすうす感じてましたか？

鈴木　わかってた。だって辞める前に大幅なギャラアップを要求してきたんだよ。「これだけもらえるなら、Uインターで頑張る」って。ということは、その額をタムちゃんに提示した団体があったということだよね。

――それがリングスだったと。

鈴木　そう。Uインターの財政事情も楽じゃなかったから、その額は払えないってことで。結局、タムちゃんは出ていっちゃったんだけど、それ以前にUインターから心が離れていた部分もあったと思うんだよね。

――それは新日本との対抗戦があったからですか？

鈴木　それもあったけど、もっと前に高田さんが、きわめて近い将来、引退するって宣言したときがあったでしょ？ ああいう団体のトップが辞める、辞めないってなると、団体の人気ってどんどん落ちていっちゃうんだよね。

――確かに、あの時期Uインターの求心力ってかなり落ちてましたよね。

鈴木　でも、タムちゃんはあの頃から独立心と上昇志向があって、高田さんが抜けても俺がトップでやっていくっていう気持ちで、そう宣言してたんだよね。だから静岡の大会だったかな。高田さんが選挙準備かなんかで欠場してて、タムちゃんがメインのとき、高田さんが会場に表敬訪問したことがあったんだよ。そしたら、試合後にタムちゃんが怒っちゃってね。「俺がメインでやってるのに、なんで来てるんだ」って。

――いまのUインターのトップは、高田さんではなく俺だ、と。

UWFインターではスタンディングバウト部門があったこともあり、ボーウィー・チョーワイクン、ゴーンさん（故人）という二人のタイ人トレーナーが道場に常駐していた。写真は田村のタイでのムエタイ修行時の一枚。得意の左ミドルキックの原点はここにある？

鈴木健所有 秘蔵写真 2

専門家からの評価も高い田村の打撃だが、桜庭もUインター時代、毎日のようにボーウィーらと練習し、PRIDE後期からはブラジルのシュートボクセでトレーニングを積み自信を深めている。これまでの対戦は寝技での決着となっているが、4度目は打撃決着もあるか？

桜庭vs田村戦を前にUインターについておさらいするのに最適なのが02年12月に発売された鈴木健氏の『最強のプロレス団体UWFインターの真実～夢と一億円～』（小社刊）。迷わず読めよ、読めばわかるさ！

最後の田村戦は実力で桜庭が劣っていたとは言えない部分がある

鈴木 それぐらい独立して、トップに立つんだという気持ちがあった。でも、対抗戦が始まったり、状況が変わっていって、居場所がなくなりつつあったところで、前田さんが引き抜きに動いたんだよ。

――状況的に引き抜くには最適な時期だったんでしょうね。

鈴木 これはのちにリングスの関係者から聞いたんだけど、Uインターじゃ、とても払えない額だった。やっぱりWOWOWがかなりお金を出してたんだろうね。

――ちなみに、田村さんがUインターで最後の試合をしたときって、まだ契約は残ってたんですか?

鈴木 もう残ってなかった。というか契約書にサインしてなかったから、最後の頃は契約なしで試合してたんだよね。だから、こっちには契約の優先権はあったんだけど。こっちも桜庭との3連戦が終わったら辞めるんだろうなってわかってたから、桜庭にも「(シュートサインを作って)これでやれ」と。でも、そうはならなくて、ウチにとっては踏んだり蹴ったりだよね(苦笑)。

――見事に勝ち逃げを許してしまったと(笑)。

鈴木 だから桜庭の名誉のためにも、あの最後の田村戦は実力で桜庭が劣っていたとは言えない部分があるってことは言っておきたいね。あと、キモと桜庭がやったときもシュートマッチじゃないからね。これも桜庭の名誉のために書いてほしいけど。

――桜庭さんはシュートボクシングの大会(96・7・14「S-cup」)でキモと総合ルールで闘って4分ちょっとで肩固めで負けてるんですよね。

鈴木 でも、試合が終わってから桜庭に「どうだった?」って聞いたら「弱いッスよ」って言ってたしね。その次にキモは高山(善廣)とやるんだけど、あれも桜庭と一緒だから。「S-cup」の大会後、打ち上げ会場でキモに会って、2試合の約束をしたのよ。

――本来なら、桜庭さん、高山さんがやられて、その次に安生さんがやるはずだったんですよね?

鈴木 そうそう。安ちゃんには「(シュートサインを出して)これでいいから」って言ってたんだけど、結局キモが逃げちゃった。「そりゃないよ」って思ったけどね。

――要は勝ち逃げされちゃったわけですよね。

鈴木 そうなんだよ。安生vsキモ戦のために桜庭と高山には犠牲になってもらったのに、申し訳ないことしたと思うよ。キモとのあいだに入っていた人がキッチリとキモと2試合の契約ができたと言ってたんだけど、結局はできてなかったんだよね。その人は、のちのちPRIDE関係だかのときに詐欺事件を起こして逮捕されたってスポーツ新聞に出ていたのを見て、本当に自分は人を信用しすぎる業界素人だなと思ったよ(苦笑)。

――そんなことがありましたか(笑)。

鈴木 あと、タムちゃんがリングスに入るちょっと前に前田さんと高田さんが一緒に飲んでるんだよね。

――エッ、そうだったんですか?

鈴木 たしかリングス入団発表の1週間ぐらい前に、ひさしぶりに前田さんから高田さんに連絡がいって二人で飲んで親睦を深めていたらしいのよ。でも、その席ではタムちゃんの話は前田さんから一切出てなかったって。で、ウチは北海道で興行があったんだけど、そのときの新聞に「田村、リングス入り決定」って出てて「え、マジ? 先週話したときには何も言わなかったのに裏で引き抜き工作してたのか。それはないだろ!」って高田さんが激怒しちゃってね。

――それは会場とかでですか?

鈴木 いや、そのときはバスの中だったんだけど、田村が引き抜かれたことというより、高田さんの怒り方にビックリしたよ(笑)。「前田日明、ふざけんな!!」って、あまりの怖さに近寄れなかったからね。

――そんなことがありましたか。

鈴木 過去にそういうこともあって、いまはその4人の人間関係も凄く複雑になっちゃってるからね。もう、みんな騙し合いのムチャクチャ!(苦笑)。

――そうなんですか(笑)。高田さんに桜庭vs田村戦を立会人として見守ってほしいという声は多いですけど。

鈴木 いまは難しいだろうね。高田さんは、タムちゃんとも桜庭ともいろいろあったからね。ただ、全員が男の中の男だと信じているから、必ず時間が解決してくれると思うけどね。

――そういえば、Uインター、キングダム時代の借金の1億円を返済されたみたいですね。

鈴木 そうなんですよ。今年の10月末で1億円返した。高田さんは俺より1年ほど前に完済し終わったみたいだけど、高田さんと違って、こっちはただの焼き鳥屋のオヤジだよ? 1本100円ちょっとの焼き鳥を焼いて1億円返したんだから。

――1本100円として、単純計算で100万本近く焼いていると(笑)。

鈴木 そうかもしれない(笑)。でも、割引きをしてもらったり、「利息はいらないよ」と言ってくれたり、請求書が来なくて時効になったり、かなり業者の人たちにも助けてもらったけどね。

――いろいろありながらも、無事完済できたと。

鈴木 大晦日は会場に行けないって人はウチの店に来てもらいたいね。その日は家から大きいテレビを持ってきて「Dynamite!!」とかを観ながら、鍋を囲んで年越しするのが恒例になってるんで。

――まあ、定員は限られてるんでしょうけども。

鈴木 そうなんだけどね。まあ、観る場所はともかく、今年の大晦日は桜庭vs田村戦を楽しみましょう!

(08年11月29日 都内・市屋苑にて収録)

96年5月の日本武道館大会での桜庭戦を最後にUインターを離脱した田村。試合後に"U"の象徴とも言えるレガースを客席に投げた田村は次の舞台として前田日明率いるリングスを選択。翌月に行なわれたNKホール大会でのディック・フライ戦がリングスデビューとなった

UWFと真剣勝負

三大論客が語る

真の真剣勝負に挑んだUの純真

安生洋二こそUWFの理念を最も忠実に実行した男である!

日本武道傳骨法創始師範

堀辺正史

第二次UWF全盛期、ターザン山本のブレーンとして『週刊プロレス』誌上でUWF論を展開し、"U"を言語化してきた堀辺師範。まだMMAが世に出る前から「UWFは真剣勝負をやれ!」と言い続けてきた堀辺師範にUWFの真髄とはいったいなんだったのか、いまあらためて総括してもらった。

聞き手／堀江ガンツ　トビラ写真／平工幸雄

UWFは猪木が異種格闘技戦で築いた真剣勝負の「イメージ」を受け継いだ

大晦日の『Dynamite!!』で桜庭vs田村戦が決定したということで、いまこそ「UWFの真髄とはいったいなんだったんだ」ということを総括したいと思いまして、かつて『週刊プロレス』誌上等でUWFを言語化した堀辺先生にお話をうかがいたいと思います！

堀辺　UWF……もはや懐かしい言葉ですね。いま格闘技やプロレスを観ているファンの中には、Uを知らないファンもたくさんいるんじゃないですか？

そうですね。第一次UWFが解散したのは、もう18年も前ですからね。

堀辺　その18年も前になくなった団体が、いまだに話題に上るというのは、やっぱりUWFが一世を風靡した時代があり、それが現在までかたちを変えて続いているってことだと思うんですよ。

そうでしょうね。

堀辺　で、UWFとはなんだったかと一言で言うと、歴史上初めて「我々は真剣勝負の格闘技をやる」と宣言したプロレス団体なんですよ。

プロレスでありながら、真剣勝負を宣言した団体。

堀辺　そう。真剣勝負を宣言しちゃったんですよ。実際にやったかどうかは別として（笑）

やったかどうかは別ですか（笑）

堀辺　その前にはアントニオ猪木が異種格闘技戦というものを行なって、「プロレスラーの中でアントニオ猪木だけは、真剣勝負の異種格闘技戦を行なえる」という「イメージ」を作って、上位概念になっていましたけど、それを個人ではなく団体としてやろうとして誕生したのがUWFだと思うんですね。だからUWFというのは「真剣勝負」が売りだったし、宣伝文句にこれほど「真剣勝負」という言葉が使われた団体はないんじゃないですか？

確かに、真剣勝負があたりまえの格闘技団体は「真剣勝負」をことさらアピールしませんもんね（笑）

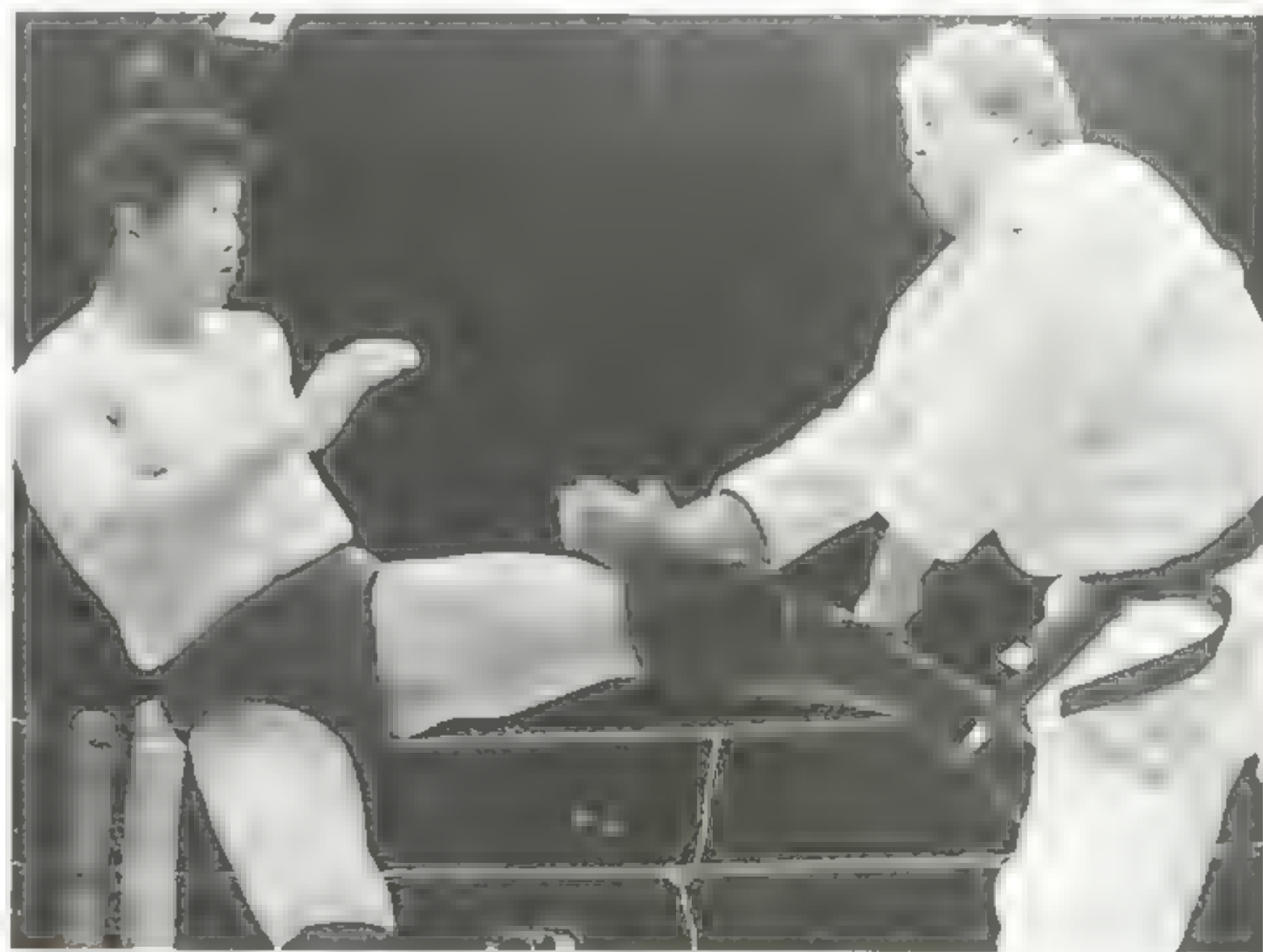
堀辺　逆に言えば、プロレスがどれほど真剣勝負とかけ離れていたかということでもあるんですよ（笑）　だからこそUWFは「俺たちは一般のプロレスラーとは違うんだ」というイメージを作り出すことができて、従来のプロレスに対する上位概念になりえたわけですね。そして、真剣勝負だということに説得力を持たせるために、登場したのが「ルールブック」という言葉です。それまで新日本や全日本のプロレスにはルールブックがなかったんですよ。

ルール自体が曖昧で、あってないようなもんですからね（笑）

堀辺　でも、それじゃあスポーツといえないだろうということで、格闘競技としてのルールを整備して、きちんとしたルールブックを作成して、市民権を得ようということが盛んに言われた。だからUWFというのは、真剣勝負をすると宣言し、ルールを確立し、そのことによって市民権を獲得する。この3つが揃ってUWFという概念が動き回ったと言えると思います。

——裏を返せば、プロレスが八百長視され続け、市民権を得ていなかったことに対するレスラーとファン両方のコンプレックスがUWFを生んだというか。

堀辺　まさにそうですね。両方のコンプレックスがぶつかり合って混合して、蜃気楼のようなかたちでUというものが出てきたわけです。こうして「真剣勝負」を標榜することで熱烈な支持を受けたUWFですけど、試合を観ていくにつれて「ルールブックを作ったりして、"真剣勝負をやってます"とは言ってるけれど、これは従来のプロレスを格闘技っぽくやってるだけじゃないのか？」というような疑問がだんだん出てきたんですよ。

ズバリ言って、看板に偽りありなんじゃないか、と。

「真剣勝負」のイメージを打ち出し、社会現象と呼ばれるまでの人気を博した第二次UWF。その絶頂期である89年11月には東京ドームに進出。堀辺師範の「UWFは猪木の格闘技戦を団体としてやろうとした」の言葉どおり、6大異種格闘技戦が行なわれた

堀辺　そして実際、UWFは純然たる真剣勝負じゃなかったわけですよね。だから私も『週刊プロレス』で連載してた頃、（ターザン）山本さんに「UWFは真剣勝負をすると言いながら、いつまで経ってもやらないね。『やれ！』って書かなきゃダメだ」って何度も言ったんですよ。でも、山本さんは「そんなことは書けない」って言って、ケンカになったりしたこともありました。

先生はUWFが「近い将来、真剣勝負をやってくれるだろう。真剣勝負の総合格闘技を実現させてくれるだろう」ということで、応援していたわけですよね？

堀辺　はい。私だけじゃなく、当時のファンでUWFが純然たる真剣勝負ではないことに気づいていた人の中には「いつか実現してくれる」という先行投資のようなかたちで応援していた人もいたと思うんですよね。でも、UWFはなかなかそれをやってくれなかった。そうこうしているうちに93年にアルティメット、いまのUFCがアメリカで行なわれたんです。

——UWFが「やる」と言っていたことを先に実現させてしまった、と。

堀辺　そうです。UWFが実現を公約していた「真剣勝負」をまさに強烈なかたちで実現した。しかも、ノールールという究極なかたちにおいてですから、時代が一気にバーリ・トゥードに傾いたわけです。ここからわかることは「真剣勝負」というのは、単に「結果が決まっていない競技」という意味ではない、ということなんですよ。

——ほかの意味が含まれているんですか？

堀辺　単なる競技としてどっちが勝った負けたということも真剣勝負ですけど、

格闘技においては、競技じゃなくてホントの実戦、ケンカにおいても強いという意味が強く含まれる。それが「真剣勝負」のもう一つの意味だったんです。

――なるほど。確かにバーリ・トゥードが生まれる前もキックボクシングや極真空手といった、真剣勝負の格闘技はありましたけど、それは真の意味での真剣勝負ではなかったわけですね。

堀辺　なかったんです。つまりルールを超えて誰が一番強いかという意味も含んでいた。そして、UWFが「真剣勝負」という言葉を使ったとき、単なる競技ではなく、ケンカをやってもUWFが世界最強なんじゃないかという「最強幻想」が生まれたからこそ、多くのファンが応援したんだと思います。

――キックや空手のような限定された技術ではなく、UWFは総合格闘技を標榜したからこそ、「真剣勝負」という言葉の中に「最強」を連想させて、それによって人気を得たわけですね。

堀辺　だから、概念的、イデオロギー的にはUFCよりUWFのほうが早くでき上がっていたんです。ただ、UWFは観念の世界だけでそれを実現することができなかった。そのUWFがファンに約束した「真剣勝負」という夢を実現させたのが、グレイシー一族なんですよ。だからこそ、グレイシー柔術やUFCというのは、瞬く間に日本に広まったんです。逆にUWF系は急速に力を失なっていってしまった。

――確かにそうでしたね。一気に時代遅れのものになったというか。

堀辺　UWFは「真剣勝負」という概念を打ち出すことによって、既成のプロレス団体やジャンル別格闘技に圧倒的優位に立つことができたんです。UWF人気が爆発したとき、既存のプロレスは「観るに値しないもの」みたいに思われた時期がありましたよね。ところがUFC、グレイシーの出現により、UWFがかつての既存プロレス団体と同じように、「観るに値しないもの」のレッテルを貼られてしまったんですよ。

――自分たちが言ってたこととの逆襲に遭ったというか、まさにグレイシーにお株を奪われてしまったわけですね。

堀辺　こうなってしまうとね、UWFがもう一度、時代の表舞台に立つためには、グレイシーに「真剣勝負」で勝つしかないんですよ。でも、UWF系のトップレスラーたちは、誰もその勝負に踏み出せなかった。その中で、唯一グレイシーに対して本当の意味での真剣勝負に挑んだのが、安生洋二ですよ。

――ヒクソン・グレイシー道場への道場破りですね。

堀辺　あの単身、ヒクソンの道場へ乗り込み、道場破りを行なったということは、単に格闘競技でヒクソンと試合をしたというわけじゃないんです。一匹の男として、命を懸けて、ルールもへったくれもあるか！というかたちで闘いを挑む。これこそが、先ほど言った単なる格闘競技を超えた真剣勝負。UWFファンが夢見た究極の闘いじゃないですか。だから、私なんかからすると、安生こそがUWFの理念を最も忠実に実行した男である。そういう評価ができるんですね。

――なるほど。究極の他流試合であり、究極の異種格闘技戦に挑むのがUWFのレスラーだという、勝手な幻想をファンは持っていましたけど、それをホントに実行したのが安生だった、と。

堀辺　それを唯一、真っ先に行なったんですよ。現在、真剣勝負の総合格闘技というのはあたりまえになってますよね。でもそれは、試合会場を設定して、ルールを細かく決めて、ファイトマネーを交渉して、さまざまなビジネス的要素の中で、格闘競技をやっているわけです。ところが安生は、そんなビジネスを超えちゃってるんですよ。

――非公開の道場破りですから、当然、ファイトマネーなんかないわけですもんね。

堀辺　「ファイトマネーなんかいらない、観客もいらない、テレビ局も関係ねえ。俺たちがやってきたこと、俺たちの強さを証明するため、ファンを裏切らないため

89年11月のUWF東京ドーム大会で、安生は"ムエタイの巨象"チャンプア・ゲッソンリットと対戦。結果はドローとなったが、これがUWF史上初のシュートマッチだと言われている。安生は総合格闘技時代の先駆者でもあったのだ

安生洋二の波乱のレスラー人生

キングダムのエースに君臨

97年、Uインターは会社組織を刷新しキングダムとして再出発。安生の案でU系で初めてグローブを導入。現在のMMAに近いルールを採用。これがのちの桜庭大ブレイクへとつながっていった

パーティで前田に小突かれる

96年6月『FIGHTING TVサムライ!』の開局記念パーティで、Uインター時代に揉めた前田日明と再会。このとき安生は前田に裏拳で小突かれたというが、これがのちに大事件へと発展する

ゴールデンカップスでブレイク

道場破り失敗、新日本との対抗戦に敗退と、Uインターも安生自身もどん底に落ちた中で、安生は開き直ってお笑いハチャメチャ路線に変更。高山善廣、山本喧一を従え、妙なかたちでブレイク

UWFインターのポリスマン

Uインター時代は「裏の実力者」として、いわゆる"ポリスマン"として君臨。Uインターとリングスが揉めたときは『前田日明に200パーセント勝てる』と断言するなど、常に矢面に立った

に俺はやってやる」と。おそらく安生は、そういった思いに駆られて道場破りを敢行したと思うんですね。そういう意味ではUWFの真剣勝負の純粋形態、最高理念を安生が一人で実現したということが言えるわけです。

——安生こそが最もピュアなUWFを体現した男だった、と。

堀辺 素晴らしい男ですよ。それこそ「安生、おまえは男だ!」と親指立てて、のけ反りながら言ってやりたい!

——安生こそ「男認定・第一号」にふさわしい、と(笑)。

堀辺 ところがあの時代、そんな安生をマスメディアは賞賛することができなかったんですよね。「彼こそがUWFの申し子だ」みたいな意見は、どこにもなかった気がします。

逆に「バカなことをやった」「UWFの恥さらし」みたいなかたちで断罪されましたよね。負けて帰ってきたあとは、UWFインターの会場でもひどいブーイングでしたし。

堀辺 でも、いまなら安生がやったことの凄さというのが、ファンも理解できると思うんですよ。UWFのトップレスラーの中に、あれだけの勇気を持った人間は誰もいなかったんだから。しかも、いまと違ってね、闘い方もよくわからない時代ですからね。

——まだ、日本で一度もバーリ・トゥードの試合が行なわれていなかったわけですからね。

堀辺 そんな時代にビジネスとしての試合ではなく、相手の本拠地である道場に乗り込んでいくなんていうことは、真剣中の真剣じゃないですか。ヒクソンだって、もし負けたらやっていけないわけだから、生きては帰さなかったんじゃないかとも考えられますよね。

——もし殺しても法律的に「正当防衛」になるでしょうからね。

堀辺 まさに命懸けの闘いですよ。それを一銭の得にもならないにもかかわらず、UWFやプロレスを守るために道場破りを敢行した男の純粋さっていうのは、幕末の志士にも通じるものがありますよ。やっぱり男たる者、利害を超えて命を懸けなきゃいけないときがある。そういった安生のような男を生んだからこそ、私はいまでもUWFを肯定することができるんです。

——UWFが目指していたものは間違いじゃなかった、と。

堀辺 でもね、この安生がやったようなことを、ファンが一番期待していたのはじつは前田日明に対してなんですよ。

ああ、確かにそうかもしれませんね。

堀辺 前田日明人気というのは、ただ単にリング上で強いとか、トップレスラーであるということじゃないんですよ。いざとなったら、危険な一線を越える闘いをするんじゃないかということへの期待感と、その純粋性みたいな部分がファンを魅了し、前田幻想を生んでいたんです。

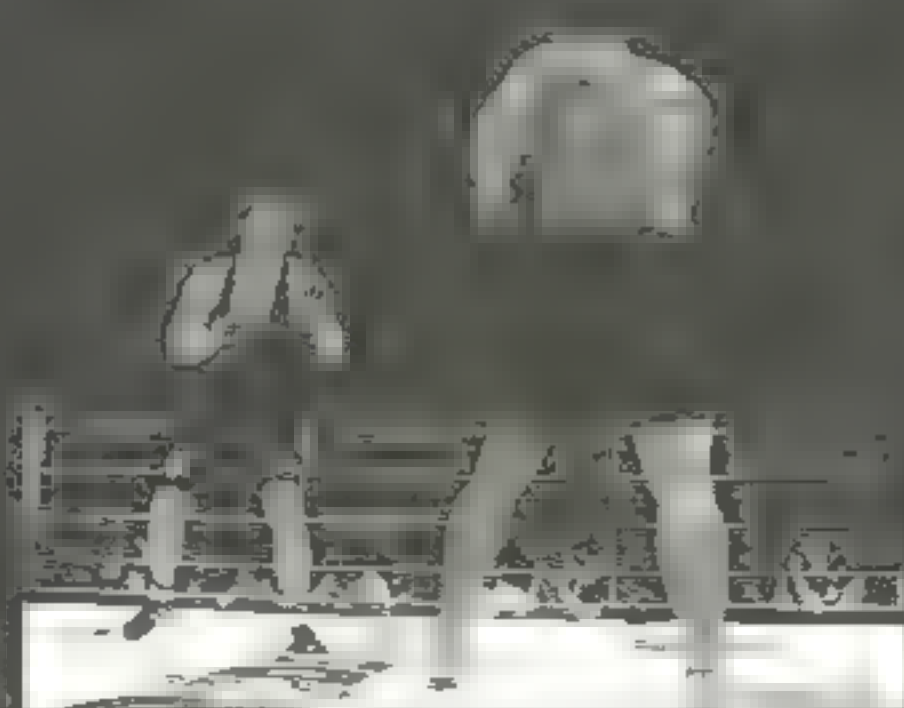
アンドレ・ザ・ジャイアント戦や長州力の顔面蹴撃などから、セメント、シュートも辞さずのイメージが前田幻想を支えて、スポーツを超えた強者のイメージを作り上げてましたからね。

堀辺 そして、その前田の危険なイメージがUWF人気の根底でもある。ルールを整備してスポーツとして行ないますとしながら、ルールを飛び越えてしまうという危険なイメージを持っている、その両輪が前田人気、UWF人気を引っぱっていた。だから、安生のような行動を前田日明は最も期待されていたし、ファンもそういう男だと思って前田に心酔してきたわけですよね。でも、実際に彼がリング外でやっちゃったのは、格闘技記者とかパンクラスの社長みたいな一般人でしょ?

ファンが前田日明に求めていたことを実行したのが安生洋二という男ですよ

97年10月11日 PRIDE 1 でヒクソンと相対した髙田延彦のセコントについた安生。道場破り失敗という自らの"不始末"によって、髙田をバーリ・トゥードのリンクに出してしまった安生の心中はいかほどのものがあったのか

アン・ジョー司令長官で活躍

そして現在、「別人」を主張するアン・ジョー司令長官に扮し、「ハッスル」に欠かせないバイプレイヤーとして活躍。Uインター時代のように(?)高田総統を名実共に支えている

グレイシーと10年越しの対戦

ヒクソン道場破りから丸10年の節目に、安生は同じグレイシー一族のハイアンと「PRIDE男祭り」で対戦。腕十字により敗れたものの、高田の目の前でグレイシーと闘いケジメをつけた

前田日明襲撃事件を起こす

99年11月19日、UFC-Jの会場で安生は背後から前田日明を急襲。前田はそのまま倒れ込み失神。安生は傷害罪により30万円の罰金刑となった。二人の因縁の深さを痛感させられる大事件だ

バーリ・トゥード&K-1出陣

安生はPRIDEスタート前からU-JAPAN、UFC-J等に出陣。日本人バーリ・トゥーダーの先駆者でもある。またK-1にも二度出場し佐竹雅昭とも対戦。「夜の街ではK-1ファイター」を名乗った

安生、髙田の敗戦がなければPRIDEも桜庭人気もあそこまでの熱狂は生まなかった

──まぁ、そうですね（笑）。

堀辺　だから彼は安生のことをボロクソに言ってるみたいですけど、それを言ったら男が廃りますよ。真剣勝負だから負けることもある。でも、殺されるかもしれない極限の闘いに打って出た男の勇気と純粋さを否定することは誰にもできない。しかも、ああいった闘いで負けるということは、心的外傷を相当被ったと思うんですよ。

安生にとってヒクソン戦は相当なトラウマだったらしいですからね。

堀辺　それを考えるとね、当時、彼に石を投げた人たちも、いまだったら彼がいかに凄い男なのかがわかるんじゃないかな。そうやって正当な評価をしてあげるべき存在ですよ。

──あの道場破りがあったからこそ、その後の高田vsヒクソン戦につながって、PRIDEも誕生したわけですからね。

堀辺　だから、その後にヒクソンとやった高田の勇気もたたえなきゃならない。安生が負けて、もはやUWF系のトップレスラーで誰かがヒクソンとやらなければしょうがない状況になったんですよ。高田延彦がそれを引き受けたからこそ、時代が大きく動いていまがある。あのとき高田が負けたことで、UWF神話がある種終わった。でも、そこから総合格闘技という新しい時代の扉が開かれたんです。

──そして、あの敗戦があったからこそ、グレイシーを破った桜庭人気の爆発があったわけですよね。

堀辺　そうなんです。一度、表舞台から落ちたと思われたUWF戦士がグレイシーに勝っていった、だからこそあの熱狂があったのは間違いないでしょう。もし桜庭選手がUWFインター出身じゃなかったら、あそこまでの熱狂は生まなかったんじゃないでしょうか。

そして田村潔司もヘンゾ・グレイシーに勝ちましたけど、これも安生、高田の敗戦があったからこそ、大きな意味が生まれたわけですね。

堀辺　だからUWFとグレイシーというのは、脚本家のいない大河ドラマなんですよ。物語があったんです。でも、最近の総合格闘技というのは、その物語を喪失しているんですね。リングの中で行なわれている闘いだけで、それが物語として語られるような連続性を喪失してしまった。そこが、いま一つファンが熱狂できていない要因なんじゃないでしょうか。

──最初の話に戻ると、結果が決められていない競技という意味での「真剣勝負」でしかないというか。

堀辺　それじゃほかのスポーツと同じレベルなんですよね。格闘技には競技や単なる勝敗を超えた物語が不可欠なんですよ。だから今年の大晦日に、桜庭vs田村という試合が組まれることは、チャンスでもあるんです。彼ら二人には、単なる勝った負けた、どっちが強いということを超えた感情とストーリーがある。歴史を背負った者だけが見せられる闘いというものを、ぜひいまの時代に見せてほしいと思いますね。単なる競技じゃない、真剣勝負を期待したいです

そういえば桜庭選手は「時間無制限、素手のバーリ・トゥードでやりたい」と言ってるんです。

堀辺　それは素晴らしい！　そういうことですよ、いま私が言いたかったことは。いま総合格闘技って、何かかたちが決まってしまって、その優劣を競ってるだけに見えてしまうんですよ。桜庭選手はそれをぶち壊して、この感情の対立のような試合をさらに燃え上がらせようとしているわけでしょ？　これは素晴らしい言葉です。

こういう発言をしたら、必ず波紋が起こりますからね

堀辺　やっぱり格闘技は一般のスポーツと同じようなものになったら、その魅力は半減されてしまうんですよ。桜庭選手はそれを感覚的にわかってるね　総合格闘技というのは、一朝一夕でできたものではなく、創っては壊しての連続だったんですよ。そしていま、競技として確立しつつあると思われる中で、桜庭選手はさらに一石を投じた。これは大晦日、どんな闘いになるかわかりませんよ。

──少なくとも単なる格闘競技ではないでしょうね。

堀辺　やっぱりそこにUWFの真髄があるわけだから、桜庭選手と田村選手には、そういう闘いを見せてほしいですね。

【08年11月19日　都内中野区・骨法武術館にて収録】

日本格闘技界の歴史に残る桜庭和志vsホイス・グレイシーの決闘　このときの桜庭の勝利は、安生や髙田がヒクソンに敗れた歴史かあったからこそ、巨大な意味を持ったのた

ほりべ・せいし■1941年、茨城県水戸市出身50年にわたる命懸けの求道の末、喧嘩芸骨法、さらに全局面打撃術koppoを創始。格闘技・武道評論の第一人者として本誌や『わしズム』などでも活躍している

STARTING OVER U.W.F.

The Roots of MMA
UWF
闘いの原点を探れ!

プロレスの
魔法をあばいた
革命集団

UWF科学主義の熱狂と挫折

音楽家であり文筆家
菊地成孔

毎回、鋭すぎる言論でおなじみの菊地成孔氏も完全にUWF直撃世代の一人。普段はクールな菊地氏が、生涯で最も大きな革命だったという第一次UWFから、大きな傷になったという第二次UWFまで、思い入れ充分に語りつくした!

聞き手／真下義之

デオがありますよ。もしかしてPR
ッて熱狂すればともに生きられる
るのかというのと同じく難しい
アルタイムで見たことはなかった

第一次Uの佐山にはカタルシスと素人も観てわかる解明性があった

菊地さんは、UWFというプロレスから格闘技に移行する運動体の過程をどうご覧になっていたのかなって。

菊地　最初はいきなりだった印象があります。助走は少なくとも私には見えませんでした。

――UWFは突然出現した、と。

菊地　「猪木ガチ、馬場の16文はアッポー（笑）」という雰囲気の中から、異種格闘技戦を経て熟成されてきたと追想する方がいらしたら、それは記憶の捏造ではないかと思います。当時のほとんどのファンには、「毎週金曜の『ワールドプロレスリング』に無邪気に熱狂してたら、バタバタとダメになって、いきなりへんな団体ができた」というふうにしか見えなかった。さまざまな場に、よくある風景ですが。

――PRIDEみたいに、一番いいときに激震が起きてしまって。

菊地　んで、『週刊プロレス』で佐山（サトル）がマスクを脱ぎ、「UWFって団体が立ち上がったらしい」と。で、秒速で佐山が実権を握って、シュート路線になって。そこからのプロパガンダが凄かったですね。「どういう流れでこうなったか」という説明に、理念と現場の歴史がピッタリ一致して。

――「大変なことが起きてる」って実感はありました？

菊地　完全に革命だと思いました。さっき言った「理念と現場の歴史が、完全に一致したプロパガンダ」こそ革命に必需ですから。私は当時20歳でしたがいかなる革命も、ついぞリアルタイムで見たことはなかった。革命ではなく、革命的サブカルチャーにマスメディアによって遭遇するという時代の始まりでしょう『仮面ライダー』でもウインドウズ95でも『エヴァンゲリオン』でもなく、ワタシにとってはUWFです。

――そこまでの存在でしたか。

菊地　男子たるもの、人生に一度は革命や革命家に燃えるものでしょう。百度や二百度や永遠の人もいるでしょうけれども（笑）とにかくワタシには一度きりでした。リアルタイムの強い現前性があり完全に乗れた、というのは。

――それは、「真剣勝負」っていう部分が大きかった？

菊地　そうですね。「いままでのプロレスは八百長だけど、俺たちは真剣勝負だ」というシンプルなスローガンに加えて、「プロレスは完全な八百長じゃなく、道場では真剣勝負をやってる、それを外に出した団体だ」という非常に説得力の高い現場からの説明がついていた。ポジショニングのポの字もない青年に、疑う余地なんかないですよ。

――存在自体に意義があった、と。

菊地　「うわー。それ言っちゃうんだ」という、もの凄いヤバ感がありました。いまの若ノ鵬どころじゃないですよ。「軽薄短小」と言われた時代にねえ

――第一次UWFで、そのぐらいのテンションでした？

菊地　いや、第一次Uの立ち上げが一番燃えましたね。「木戸（修）はホントは強いんだ！」とか。「テレビ東京の『世界のプロレス』枠で放映が決まった」って報道を聞いたときの身悶えするような快楽は忘れられないですね（しみじみと）。

――試合自体はいかがでした？

菊地　現在の認識から逆算すれば、彼らは真剣勝負ふうのプロレスをやったわけですけど、当時の我々だけじゃなく、彼らもそれを「真剣勝負だ」と思ってたと思います。これは自分の青春期の美化とかいう、くだらんことではなくて（笑）。状況論や認識論の問題です。全員の動きがプロパガンダに忠実になっていく。ことくに佐山の動きは天才的で、あれだけ人気があった初代タイガーから、何か抜けの悪い本名になったのに乗れない人は周囲には皆無で、むしろ倍乗りって感じがありました。あとにも先にもこんな現象は佐山にしか起こってないですよね。

――つまり、「真剣勝負」という打ち出しにも説得力があった、と。

菊地　猪木の異種格闘技戦は、不穏な空気が伝わってくるだけでカタルシスがなく、いまから思えばそれもガチの顔つきのダークサイドとして真実ですが、佐山らには何よりもカタルシスもあり、素人にも観てわかる解明性があった。先ほども言いましたが、佐山の主観にも半ヤオという認識はなかったと思います。それがどれぐらいの長さだかはわかりませんが。

――主張と実践にブレがない、と。

菊地　佐山という人はまず信じて行ない、事後的に自己批判を起こして逆上し、顔は笑っている人だと思います。だから、いま第一次Uの試合を観たらどうなるかわからない。そこ（書庫を指差して）にいっぱいビ

デオがありますよ。もしかしてPRIDEに見えるかもしれない。まあ、見えないだろうけど（笑）。

――その佐山体制が崩れた、前田vs佐山戦はどう思われました？

菊地　報道だけで知るわけですが、謎の試合とは思わずに、「革命集団なんだから、そりゃあ内ゲバになるよな」と。逆説的に「これこそガチだ。ガチは膠着するんだ」と。「じゃあ、膠着しないガチは？」というふうに考えますよね。要するに「ケンカガチ」と「スポーツガチ」の区別さえファン自身がゼロから考えた素晴らしい石器時代ですよ。結局、「ガチとはいえ人間の営為には絶対演舞性が混入してくる。逆も真」という、きわめて正当的な地点に着地するわけですが。

――『八百長★野郎』（小社刊）のインタビューでも語られてましたね。

菊地　「競技性の中にも演舞性は含まれ、演舞性の中にも競技性は含まれる」という人間工学の基本的な事象について、UWFで初めて真剣にリアルに考えたんですね。それまでは、プロレス時代ですから「術中にハマッて熱狂すればともに生きられる」というセントラルドグマ（宗教的な原理）の中で幸福だったわけですが、UWFの登場でそれが溶けた、と。

――プロレスの宗教原理が溶解してしまった、と。

菊地　科学主義の中枢は、それまでの宗教の完全否定ではありませんが、いずれにせよUWFによって演舞とかガチとかヤオって考え方が解禁になった。これは楽園追放ですが。とはいえ、それについて考えること自体、死ぬほど楽しかったです。まだ20代ですからね（笑）。

――ザ・青春ですね（笑）。そこまで佐山さんや前田さんを走らせたものはなんだったんでしょうか？

菊地　厳密にはわかりません。たとえば、全共闘世代の行動原理を検証しようという動きは過去いくらもありましたが、当時の世界での学生のデモクラシー意識、反米意識の波及がどうとか、「カルシウムが足りなくてキレた」とか。結局、なぜ革命が起こったかを解明するのは、なぜ戦争が起こるのかとか、なぜ平和が保てるのかというのと同じく難しい。

既存のプロレスへのコンプレックスとも言われますけども。

菊地　先ほど言った、見事なアジリ構造ですよね。「ショーの才能と道場の実力は別」という、「うまくできてるなあ」といまでも感心します。これをシンプルに音楽の世界に移して、「演奏が本当にうまいヤツはショーの才能がない」と言ったとします。まったく曇りのない一面の真実ですが、あの時代のUWFの説得力の足下にも及びませんよ。藤波（辰爾）はガチでは何もできない、とかね。

――ショーマンとしては天才ですが。

UWFの登場で演舞とかガチとかヤオとかって考え方が解禁された

菊地　そこには賃金や階級（※菊地注＝体重のことではありません）の話がからんでくる。「ガチは弱いけどショーマンとして才能があるヤツがいい金を取って、強いヤツらは不満だ」と。「いや、ショービジネスなんだから、それでいいんじゃない？」というのは、現在のノリですよね。階級闘争や民族闘争という原理的な闘争心に、まとめて着火したわけです。そんな前田と佐山がブツかるというのは、さらにそこに個人の身体性や民族性や天才性のあり方が全部からんでくる。いまだったらあの二人は文字どおり、階級差（※菊地注＝こっちは体重のこと）で終わりですよ。反プロレスを標榜した競技だったら、階級差はむしろつけるべきなわけです。第一次Uはプロレス的無階級の名残が佐山vs前田という構図を生んだ。革命前の名残がうずくんですよ。

――なるほど。

菊地　前田と佐山というのは、真の二項対立です。第一次Uの当時、表では「キックと関節技」、つまり佐山と藤原を二項対立とするポップな対立概念が出ていた。でも、真の二項対立は佐山と前田で。ワタシはいまでもほぼこの二人の原理主義ですが、それでも「なぜ革命運動が起こったのか？」という説明はつかない。UWFは「最強は誰だ？」という神学の難問に挑んでいったと思うんです。新日本プロレスという鉄火場のオーガニゼーションでも最強値は測定されない。プロレスはそもそも凄く大人なジャンルですから。つまり汎用的な宗教であって、「最強は誰かはわからない」という真理を前提に「最強」を物語にしていくものですから。

最強幻想のドラマというか、

菊地　オリンピックの金メダルが一義的に最強を意味していると思う人などいまや誰もいません。ただ、「プロレスのチャンピオン」という存在は、まあ「高級すぎた」というか。じつに20世紀的な宗教ですよ。

――適当じゃなくて高級（笑）。

菊地　だからUWFは真理を求めて、〝大人〟に突っかかったわけよね。年齢の話ではないですよ。

そのUWFは、出戻りで新日本へ帰ってくるわけですが、

潰すか？ 潰されるか!?
新日本vs前田日明列伝

"出戻り"Uと新日本が開戦！
85年末、新日本へ出戻ったUWF勢だったが、試合ではUWFスタイルを貫き、ロープへ飛ぶことも拒否。写真のように新日本勢や猪木へ容赦ない攻撃を浴びせ、ヒリヒリした抗争劇を展開していく

イリミネーションマッチの罠
新日本vsUWFの5vs5イリミネーションマッチ（86年3月26日、東京体育館）では、UWFが優勢だったものの、終盤に新日本側に加入した上田馬之助が前田を場外へ道連れにする"前田殺し"を敢行

アンドレとのセメントマッチ伝説
新日本が"前田潰し"を画策したと言われる試合（86年4月29日、三重県津市体育館）。試合中、アンドレが体重を浴びせる異様な展開に、前田はアンドレのヒザに危険な蹴りを集中。試合放棄に追い込んだ

長州顔面蹴撃事件で解雇通告
新日本に復帰した長州軍との6人タッグ（87年11月19日、後楽園ホール）で背後から前田が長州の顔面蹴撃。長州は右前頭洞底骨折の重傷。新日本は前田に無期限出場停止処分、やがて解雇処分を下す

菊地　そのとき、私はすでに〝まだらヤオ〟的な目線で。最初は「ホントに神様はいるのか？　いないんじゃないの？　でも毎日祈るし、祝祭のときは我も忘れるよ。そのほうが豊かだし」という、つまりは中道左派的な、非常にいい信者でしたが、こうしてあるとき「神はいない」というUWF革命に燃え、これも歴史のよくある顔つきですが、革命勢力が神を永遠に払拭したかというと、しないわけです。ターンが往復した、と。またぞろ神の力が強大になってきてね。

――猪木という神が復権しましたね。

菊地　ただ、第一次Uはのちに悪徳商法が発覚する豊田商事がスポンサーになり、社名が「海外UWFになる」って告知が出たあとに潰れた。つまりファンはブラックパワーによって潰れたと思ってたんです。

――PRIDEと似た感じですね。

菊地　新選組とか白虎隊みたいに一志半ばで体制に潰された」「自滅したが理念は正しかった」と。この段階でファンは二手に分かれたと思うんです。「シュートだけど、会社がダメになった」って人と、「結局、プロレスなんでしょ？」って人に。後者は少数派だったでしょうが

――業界に近い人とかですね

菊地　その頃はワタシも含め多くの人々が、UWF始まりの哲学議論にも現象学議論にももう飽き飽きしていて、刺激だけを求めていたような気がします。FMW以降が準備される下地ですが。まあ、それはともかくあれだけシンプルなプロパガンダとアジテーションの力に満ちていたUWFも、この段階では前田の「俺の考える真剣勝負と佐山さんの考える真剣勝負は違う」とか「佐山さんの理想をかなえようと思ったら、みんな干上がってしまう」といった、明確なような歯切れが悪いような、突っ込みたいけど突っ込めないような重苦しい言葉だけが残されていて。一方、佐山の言うことは、天才らしくなんだか全然意味がわからないままニコニコしている、と。

――「選手を食わせなきゃいけない」というのが、前田さんの重要なキーワードになりますよね。

菊地　ただ、純粋に理念を追求すると食えないというのであらば、つまり前段階では半ヤオにするんですか？」とストレートに前田に聞いた人はいないですよね。

――とても突っ込めないですよね。

菊地　前田は「まずは団体を食える状態にして、それから純粋な競技にするんだ」という、一種の発達論を、苦しげにですが反復します。これは、じくじたる思いで最初だけは半ヤオに手を染めます、ということを構造的に含んでしまっている。ここを拘泥させないように、命懸けで突っ込む人物が現われなかったのではないか？　と思われるのが前田の不幸であるとも言えるのではないでしょうか。ある時期から前田は、「おっかないから誰も何も言えない」という状態で、常に一人で考えてる人になってしまい、そこが前田の美しいところなんだけど。

――外野の声は入らないというか

菊地　ワタシは、いまでも前田日明を清濁併わせ飲んで完全肯定です。ですので当時は「いやあ、これは苦しそうだなあ」「でも、そこが前田だよなあ」という感じでした。

――では、前田vs（ドン・中矢・）ニールセン戦とかも冷静な目で？

菊地　いやいや、あれはヤバかったでしょ。「前田たちは体制内改革で異分子として新日本に戻ってきたから、潰されるという危機に常にさらされてる」というのは、ワタシはリアリティショーだと思ってましたそれは、あの試合があったからです。

――その神話はありましたね。

菊地　アンドレ（・ザ・ジャイアント）戦とあわせ、矢面に立った前田に手を替え品を替えた刺客がくる、と。あれは長い日本プロレス史上でも、ベスト3に入るゴッドアングルでしょう。ゴッドアングルつうのも懐かしすぎますが（笑）

――確かに劇的な物語でしたね。

菊地　レオン・スピンクス（同日のメインイベントでの猪木の対戦相手。元ボクシングヘビー級王者）は歯の折れた金魚だけど、前田vsニールセン戦はそれに対する、しかもキツめのガチだったが前田がそれをはねのけた、と。あの試合は、いまではヤオだったとか言われますが、ワタシはそれを聞いても転向する気はまったく起きません。よしんば前田日明にそう言われたとしても転向しないと思います。そういう意味では、ワタシはあの試合に関しては一時的に幸福な信者に戻るわけです。革命に失敗した人間のとるべき、唯一にして最高のかたちを示した名作ですね。オンエアされたときは、ウチで友だち5、6人で観てまして。2ラウンドから座ってるヤツなんかいなかった（笑）。

――そこまで没入しましたか（笑）。

菊地　全員が立って、声もかれてて（笑）。途中、ニールセンが逆片エビでマウスピースが取れそうになったとき、ゴングが鳴ったんだけど、ギブアップと勘違いした高田（延彦）が「勝った！」って飛び込んできて、高田と一緒に「バンザーイ！　あれ、違うの？」って「バンザイなしよ」のリアル版を6人くらいで全力でやって（笑）。

――ワハハハハハ！

菊地　あの試合は、ほかのあらゆる試合のように、当事者でさえわからない複雑な裏事情もあるのでしょうが、ごくごく一般的な意味において「奇跡」といって差し支えないです。

――そのあと、第二次UWFが立ち上がりますが、これは真剣勝負としてご覧になってました？

菊地　ワタシはボクシングファンから入ったから、打撃の技術が落ちるってことしかわからなかったですね。ただ、「パンチが軽い」と思っても、この人たちがやろうとしてるのは全方位的なことだから、あるセクションが落ちてもしょうがないという下方修正で観てた。第二次Uが起こした〝下方修正させる力〟は凄かったですよね。ジェラルド・ゴルドーvs前田戦は会場に行ったんですけど。

――有明コロシアムの試合ですね。

菊地　その試合も「スッキリしねえな。でもガチってこういうことか」と。ただ、第二次Uの佐山vs木戸戦のほうが断然カタルシスがありました。これは先ほど言った前田と佐山のあざやかな違いで、前田の重みは坂口（征二）と似ていて、凄味が伝わりづらいから、ノシノシしてるように見えちゃう。それを「ヘビー」だか

新日本からの刺客、ドン・中矢・ニールセンと前田の異種格闘技戦（86年10月9日、両国国技館）は不完全燃焼のメイン（猪木vsスピンクス戦）と反比例する緊張感あふれる大激戦に〝格闘王〟前田が本格ブレイクする起点となる。

第二次Uは〝下方修正〟しながら観ていて、その修正がキツかった

らしかたないんだ」って、またしても修正して観てて。

恐竜みたいな感じですよね。

菊地　石井（和義）館長が、K-1へビー級の動きを速くすることに最大の意味を見いだすきっかけになったと思うんですが、第二次Uはそういう修正込みで観てたので、なんと言うかな、安心して半ガチの総合ショーだと思ってました。

――第二次Uでは気持ち的には少しクールダウンしましたか？

菊地　まあ、革命失敗後の世界の出来事ですよね。でもシラケてもいなかったです。それより「この集団はやがて内ゲバで離散するだろうなあ。第一次のときみたいな感じじゃなく」と思ってました。船木（誠勝）、鈴木（みのる）が入ってきてからは、世代闘争を含んでしまったし。

――どんどん先鋭化していって。

菊地　第二次U末期は、「ああやっぱり……」と。ただ、いまの状況は末期の裏話がインターネットやら暴露本で出揃ってから振り返ってるから、記憶も最初からそう思ってたような気になってしまうんですが。第二次Uに関してはあまりに、裏ネタの宝庫じゃないですか？

ええ。誰と誰が共謀したとか

菊地　赤裸々な話ばっかりでね。そこはダーティジャーナリズムに対する踏み絵っていうか、「どこまで知りたくて、どこまで信じたいか？」ばっかりがファンに試されてる状況ですよね。ワタシはあんまり裏話に萌えない派ですが。

そこまで見たくなかった、と。

菊地　ワタシは常に〝裏話〟ですべてがわかると信じています。裏話は弱者の欲望です。とまれ、第二次Uは修正させる力に満ちてましたから。「みんないろいろあるけど、仲間ではあるだろう」という幻想への執着はありましたね、個人的に。なんでだろうか？　前田の孤独感に惹かれているからこそでしょうけど。

――では、第二次Uが一枚岩じゃなかったってわかったときは……。

菊地　普通に傷つきました。「裏切りや集合離散があるのは世の常。ましてや、革命集団にして金もがっぽり儲かってるんだから」とイヤというほどわかっていたのにです。完全な通過儀礼と言うか、ビートルズの解散でそれを被った人もいれば……というヤツですね。ワタシは第二次Uによって何かが決定的に傷ついて大人になった。そう思ってます。

――じゃあ、ツライ思い出というか。

菊地　修正の強要という問題もあると思います。普通のプロレスを観ていた頃も修正はしていたけど、その合理化にツラさはまったく伴なわなかった。でも、第二次Uへの修正には常にツラさが伴ないました。守ってもいい魔法を暴いちゃった人たちに対して修正を行なわなければならないというのはキツイことですよね。

第二次U初のビッグマッチ（88年8月13日、有明コロシアム）、前田vsジェラルド・ゴルドー戦はゴルドーが打撃で追いつめるも、最後は裏アキレス腱固めで前田が逆転勝利。内容的には前田らしさに乏しい苦しい試合となった

経理上のトラブルに関し、前田がUWFをフロント批判。フロントは前田を5カ月の出場停止処分という泥沼状態に。90年12月1日の長野大会終了後、リング上で前田と全選手が団結も、この2日後の会議でまさかの分裂劇へと発展

プロレスという魔法をあばいたUWFが危なっかしく見えてきたらキツいでしょうね。

菊地　科学から生まれた近代社会にも疑わしい部分はあるけど、そこで社会に対して思う不安な感じと、宗教に対して「キリストなんかいないんじゃないか？」という不安な感じは意味がまったく違う。とくに日本では。ですから、プロレスへの懐疑と修正はむしろ甘い行為でしたが、第二次Uに対しては懐疑や修正がキツかった。

――自我が崩壊しそうな感じで。

菊地　最後の離散も、「離散するだろうな」って思ってたのにもかかわらず全然キツいわけです。

そこを経て、PRIDEという真剣勝負の世界に到達しましたが

菊地　ただ、私の中ではパーセンテージが違うだけでUFCもまだらヤオだし、PRIDEも全然まだらヤオです。人間は純粋な虚偽も純粋な作為もできません。現在の格闘技ファンは、その前提で観ている人と、その前提がない人に二分されると思います。

本来は引けない、と。

菊地　あとは、たとえば車にはいろんなメーカーがあるけど、「俺はポルシェなんだ」といった、青春が終わった大人の趣味の問題として、分派した中で一番好きなブランドはいまでもリングスです。リングスが最強に近かった」と言っているわけではありません。単にすべてが趣味に合っていたわけです。だから、やっぱり自分が地面に立ったのが何年だったってのは常について回りますよね。まあ、第二次Uは「いつかこの男は私を捨てる」と思いながらも「愛してる、愛してる」って暮らすのと一緒ですよね。捨てられるのはわかってたけど、いざ捨てられるとけっこうツラいっていう（笑）。

ワハハハハハ！

菊地　第二次Uが、最後の松本大会の2日後に分裂したときも、「こんなキツいことが世の中にあるのか？」って落ち込んでね。あのとき私に、「ガキみたいなこと言うなよ（笑）」と言ったヤツがいたから、ムキになって「知った口利くんじゃねえよ。お利口さん」と言い返して（笑）。

――菊池さんがそこまで熱く!?

菊地　最初からプロレスを観てないようなヤツに「何が一枚岩だ。ずっとやってんじゃん。猪木、馬場の時代から」って言われて。彼の言ってるほうが正しいですけど（笑）。

――確かに正しいですね（笑）。

菊地　すでに私の青春は第一次Uで終わってはいたけど、第二次Uで焼けぼっくいにちょっと火がついて、第二次Uの解散とともに完全に終わりまして。そこから先は、純然たる大人として観戦し続けてますね。明言しますが、大人になってからのほうがずっといいです（笑）。

――菊地さんはUで大人になった、と。今回もありがとうございました。

【08年11月27日／都内・菊地氏の事務所にて収録】

きくち・なるよし■1963年生まれ。音楽家、文筆家。ジャズ・ミュージシャン活動の一方、音楽、料理、ファッション等の著作多数。格闘技批評に『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍～僕は生まれてから5年間だけ格闘技を見なかった～』（白夜文庫）。

獏さんといえば、徹底した現場主義!!

体の中で「おい、みんなで真剣勝負をやり

そこでUWFなんですけど、その運

ってたんだよね。潰れたら、もう現れなく

UWFとは猪木の一部である——!!

アントニオ猪木から始まった"いつか"への思い

真剣勝負

密航的プロレスファン

夢枕獏

聞き手　ジャン斉藤

“猪木の一部”がUWFとなって、そのUWFが今度は猪木自身を超えていった

獏さんといえば、徹底した現場主義!! 経費で取材して現場主義をうたいやがるそこらの記者とは違うのだ！ というわけで、UWFもあたりまえのように密航していた獏さんはいったいあの現象をどのように目撃していたの？

——今回特集するUWFは、プロレスから真剣勝負へ移行する運動体であったと思うんです。

獏 その流れのちょうど中間点にあった団体だから、もしUWFがなかったらいまの格闘技界はまったく違うものになってただろうね。シューティングもなかっただろうし。シューティングがなければ、いまの修斗もなかった。そうなると青木（真也）くんはいったいどうなってたんだろう（笑）。

——そうですよね（笑）。プロレスからの移行という意味では、アメリカのプロレスと格闘技は地続きではないと言われているじゃないですか。たとえばブロック・レスナーみたいに、もともと格闘技の才能や興味もある選手がチャレンジするケースはありますけど。あくまで一部とはいえ、ジャンル自体が移行していくのはちょっと異常ですよね。

獏 うん、アメリカじゃ起こらないよね。プロレス団体の中で「おい、みんなで真剣勝負をやりたいねえ」なんてことを言い出したら、普通は「オマエ、バカじゃないのか!?」って言われると思うんだよね。

——いかに狂っていたのか（笑）。

獏 プロレス界に入っていくということは、ケーフェイを承知して入っていくわけだから。強さに憧れてプロレスラーになるっていう人間は、アメリカには少ないだろうねえ。

——でも、日本の場合は、強さに憧れてプロレスラーになった人たちがたくさんいるわけですよね。

獏 で、そういう人たちはプロレスの実態を現場で知ったときに「なんか違うんじゃないか……」っていう迷いがやっぱりあったのかもしれないね。

第一次UWFを離れた佐山は、シューティング（現・修斗）を設立 今日まで多くの人材を輩出していく その旗揚げ戦をちゃんと目撃しているんだから、さすがは獏さんだ!

——そこでUWFなんですけど、その運動体を獏さんはどのようにご覧になってたんですか？

獏 俺はねえ、昔はプロレス自体がイコール、アントニオ猪木だったんだよね。で、猪木がどんなプロレスをやるのかということに凄く興味があって、ずっと観ていたんだよ。そしたらその道の途中に前田日明や佐山タイガーが現われた。

——格闘技志向が強いレスラーの登場ですね。

獏 なんていうんだろ？ 俺からすると“猪木の一部”がUWFになっていった感じがするんだよね。そのUWFが今度は猪木自身を超えていってしまったんだよねえ。もともとのことでいえば、ああいうことを猪木にやってほしかったということだよね。

——獏さんにとって、猪木さんがやってきた異種格闘技戦自体を一つのジャンルとして確立してほしいという願いがあったんですか？

獏 俺はね、その願いはあったんだけど、それがまさか目潰しと噛みつき以外みんなOKみたいな当初のバーリ・トゥードのようなスタイルの試合っていうのはありえないと思ってたんだよ。あるとすれば異種格闘技戦しかないだろうと思ってたんだよ 総合格闘技という独立したジャンルが、あの当時は現実的にはまだ無理だと思ってた。

だからこそ、UWFの出現には心が惹かれるところがあったわけですね。

獏 俺はUWFの追っかけをやってたから。わざわざ九州まで行ったりねえ。

いわゆる“密航”ってヤツですね（笑）なぜ、そこまでしたんですか？

獏 もう、いま観ないと潰れちゃうと思ってたんだよね。潰れたら、もう観れなくなっちゃうからね。そういう危機感だよ。応援しなきゃいけないとも思ってたし、九州に行かなかったがために「この前、九州でやった試合が最後になりました」ってなったら悔しいんで。

どうして、そういう危機感があったんですか？

獏 テレビ放映がなかったっていうことだね やっぱり興行ってのはテレビでやらないとダメだろうと思ってたんだよ。ところがこれが意外と長続きして。

消滅したのも内部分裂ですもんね。結局、UWFというのはじスタイルだったわけじゃないですか。獏さんは格闘技のほうに移行してほしいという思いはなかったんですか？

獏 俺はもともと格闘技志向だったんだよ だから猪木にも早く格闘技をやってほしいというか、真剣勝負をやってほしいという気持ちでずっと観てたんだよね。もしかしたら猪木にその気はなかったのかもしれないんだけど、猪木は実際にアクラム・ペールワンと真剣勝負をやったり、ときどき怪しい試合をやってたりしてんだからねえ。

——モハメド・アリ戦にしても

獏 猪木の怪しい試合があったから、俺の脳内プロレスはもったんだと思うんだよ。猪木の幻想でプロレスは残った。たとえ一回でもそういう試合が起きると「いつかまたやるだろう?」っていう興味は残る、だから俺はプロレスを観続けたんだよね。

——あの刺激がまたいつか味わえるんじゃないか、と。

獏 で、その“いつか”をUWFにも求めて。結局、Uの中でもその“いつか”はホ

ントに教えるほどしかなかったと思うんだけど、

――第二次UWFに途中から入った船木さんや鈴木さんは、格闘技願望が強かったわけじゃないですか。猿さんはその二人の気持ちって理解できました？

猿　理解できるというか、船木と鈴木、彼らは何かやるだろうと思ってたねぇ。それはいまから思うと単純なことなんだけど。船木がずっと骨法をやってたっていうね

――骨法幻想でしたか

猿　そうそう。堀辺さんは論が立つというか、それまで格闘技論ということをきちんと発信する人がいなかったんだよね　とくにプロレスと絡めた格闘技議論はやってなかった。普通の格闘技団体はみんなプロレスを相手にしてなかったじゃない。

そう考えると、UWFにとって堀辺さんの存在は非常に大きいんですね。

猿　Uの幻想を支えてるいろんな石垣があったと思うんだけど、そこに骨法の堀辺さんの石垣は間違いなくどこかのピースとして入ってると思うね

週刊プロレスもそうかもしれないですね

猿　週刊プロレスっていうか、（ターザン）山本さんだよねえ（笑）。山本さん、長州力に「Uはオマエだよ」みたいなことを言われて嬉しかったと思うんだけど。

――そう考えると、やっぱりメディアの力というのは大きいですね。

猿　そうだね　ボクらは直接、選手に取材できる立場にはいないんで。だからやっぱり、マスコミがどういうふうに発信するかだったからねえ　また、マスコミの発信をそのまま信じるんじゃなくて、どう裏読みするかっていう話なんだけど（笑）とにかくマスコミが発信しなければ、裏読みもできなかった頃なんで

――猿さんにとってはある意味、パンクラスなんかが"いつか"だったわけじゃないですか。

猿　そう。"いつか"っていうのはパンクラスからだよね　パンクラスと、あとシューティングだよね。シューティングの旗揚げ戦、俺は観に行きましたよ～、

――さすがですね（笑）

猿　これはちょっとね、もう観客なんか誰もいないようなところでやっててね（笑）　でもね、そういうときは優越感があるんだよ。

Uの幻想を支えてるいろんな石垣の中に、堀辺さんと山本さんがいた

――いわゆる歴史の証人になったわけですからね

猿　俺はそれまで空手やキックの試合は観てきたんだけど、そのどれでもないわけだよ。出る選手もプロレスラーではなくて、シューティングを目指してきた人間だからプロレスの下地はないんだけど、キックボクサーに比べたらキックはできないし。でも凄いんだよ！

――ただ、興行としては回ってなかったということですよね。

猿　シューティングは回ってなかったね。

――90年代初期というのは、"さまよえる格闘家"じゃないですけど、総合格闘家はみんなが食えなかった時代ですもんね。

猿　平（直行）くんなんかもゼンショー（すき家　などを運営する会社）の社員として働いてて。いま思えば健全な姿だよね　スポーツ選手が企業の社員になって、一部の仕事はやるけれども、基本的にはアスリートとしてのコンディション作りができたわけだから

逆にUWFはどういう方向に着地しようとしてたんでしょうか

猿　いやあ～、わからない　ホントにいつか格闘技にジャンプしようと思ってたのかねぇ

――その気はなかったのかもしれませんよね　現実として真剣勝負だとつまらなくなる可能性があるし、スター選手が負けてしまうことを考えると、なかなか難しいですよね

猿　難しいよ～。「ケガしたらどうするんだ!?」とか「みんな食っていかなきゃいけないから、そっちのほうが大事だろ」っていう現実的な視線っていうのはあったよね　そこで「そんなのは関係ないんだ」っていう感じがあったのは、シューティングの若者たち　佐山聡の教えを受けた若者たち。もういまじゃ、みんなジムを持ってたりしてるけど。

そしてUFCも始まったじゃないですか。猿さんは当然そっちのほうに興味が向くわけですよね。

猿　ちゃんとやるところが出ちゃったら、しょうがないよね、もう。あと大きかったのはK－1の登場かな　興行として完成されたK－1の存在は大きかった。

――UWFがプロレスから格闘技に向かっていくものだとすると、K－1は格闘技から格闘技興行へと向かっていった。

猿　極端なことを言うと、総合格闘技というものが真ん中にあったとすると、極真会館というのが北側にあって、南側にあったのが猪木なんだよ。で、その両方から中心に向かって近づいていったんだよね　その中心に向かって近づいていったのが、猪木の側からいうとUWFであって、そこからまたシューティングとかパンクラスというものを経て総合に向かって近づいていって。極真会館からは正道会館が出て、正道会館からK－1になって、どんどん総合に近づいていった感じがあるねえ。

――では、UFCはどういう位置づけになるんですかね？

新日本プロレスの選手が総合格闘技に討って出るのは、アントニオ猪木の"呪い"でもある（強要という声もあるが）。最近はその呪いは解けかかっているが……

みんなが猪木にダマされたというか、でも、ダマされてよかったと思っている

獏　俺はねえ、UFCは基本的には前田光世なんだよね。

――グレイシーに柔術を伝えた伝説の柔道家ですね。

獏　俺は前田光世のことをずっと追っかけているときに、ある人がヘンなビデオを持ってるというのを聞かされて、そのビデオをダビングしてもらったの。で、観てみたらブラジルのヒクソンvsズールとか、ブラジルのバーリ・トゥードがいっぱい入ってるヤツだったんだよ。

――へえ～！　それってUFC以前のエピソードですか？

獏　うん　それでホリオンに連絡をとることもできたんだよ。

――凄い（笑）。

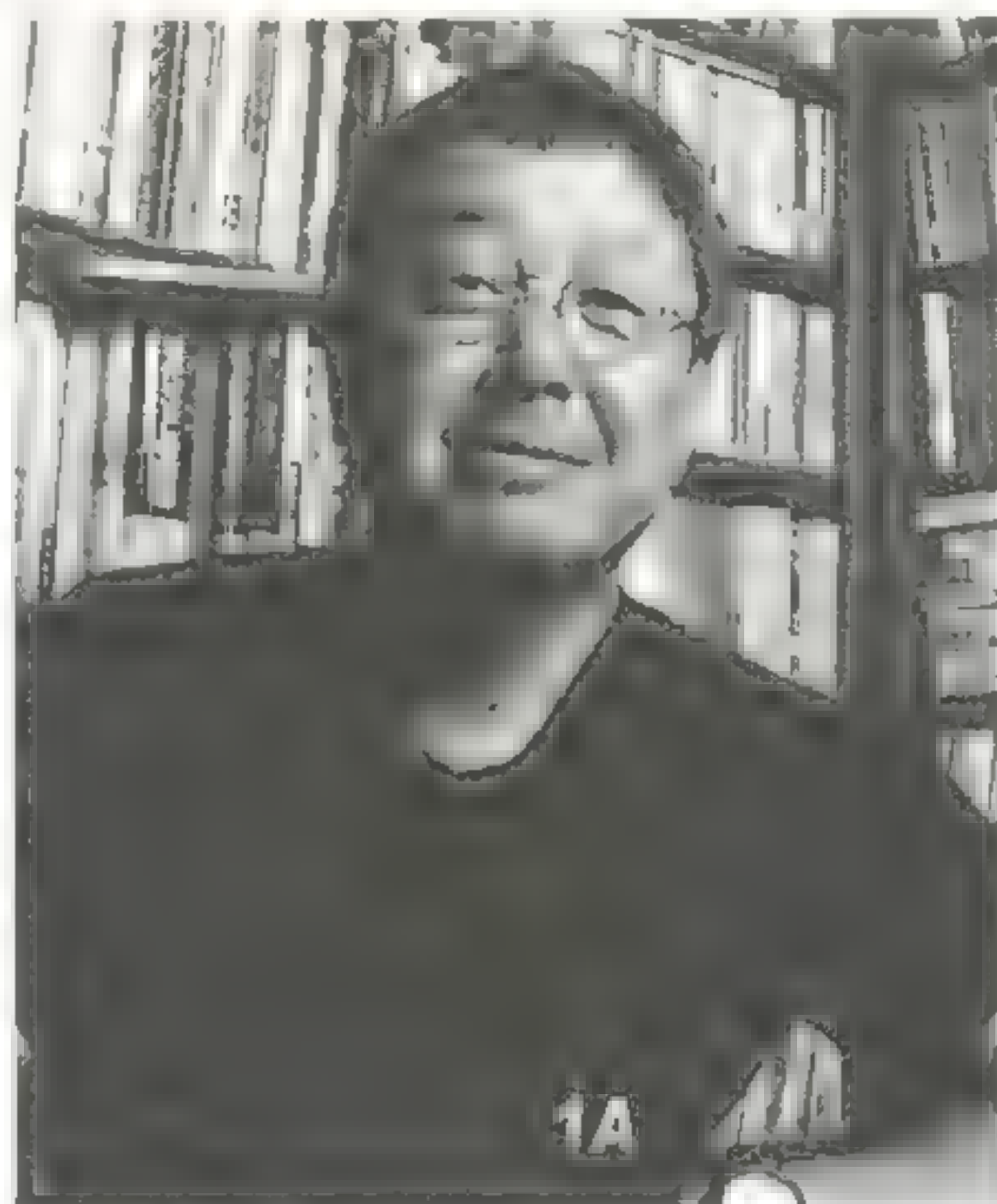
獏　当時、俺は〝バレッツーズ〟っていう呼び方だと思ってたんだけど、いまでもやってるなら観たいっていうのをホリオンに問い合わせてもらったんだよね　そうしたら、今度UFCをやるっていうのがわかった。でね、向こうから選手募集のパンフか何かもらったの　それを翻訳してもらったら、「二人の男がリングに入っていって、一人の男が出てくる」っていうキャッチが入ってるんだよ（笑）。「こりゃあ凄いな」なんて思ってたね。

――まさに歴史の生き証人ですね（笑）。

獏　で、そのUFCの登場はホントに予想もできなかったわけだけど、極真と新日本という団体がなければ、今日のような対応はできなかったと思うんだよね、競技的にも文化的にも。具体的にいえば、そこにUWFがあったからすぐに理解できたんだよ、UFCがなんであるかっていうことが。やってるほうも、観るほうもすぐにわかったんだよね

――極真と猪木の〝いつか〟はあそこなんじゃないか、と。

獏　うん　極真はいつも「世界一の極真」っていうことを言い続けてきた。猪木は猪木で「世界一の格闘技はプロレスである」と言ってた

――しかし、格闘技は何を話しても猪木さんと極真にたどり着くんですね（笑）、

ゆめまくら・ばく■1951年1月1日、神奈川県出身。「陰陽師」シリーズなどで知られる人気小説家。熱心なプロレス・格闘技ファンで、思い入れたっぷりの語り口でその魅力をわかりやすく伝えてくれる

獏　う～ん、大山総裁と猪木の影響は大きいよねぇ　問題は猪木が全然やらなかったことだよね（笑）　みんなが猪木にダマされたっていうか、俺はダマされて、いまの格闘技界としてはよかったと思ってんだけど。プロレスが世界一の格闘技だという猪木のメッセージにみんな突き動かされたわけだから。

――前田日明も高田延彦も。

獏　そう。それでハシゴを外されたとき、みんな困ったんだけど、未来の〝いつか〟のために闘い続けた。そうしたらUWFがあったっていうね。で、田村vs桜庭は巷ではどういう評判なんですか？

――「いまさら……」っていう声はありますよね。

獏　〝いまさら〟ねぇ……。でも〝いつかは〟でしょ

――そうなんです！

獏　〝いまさら〟だけど〝いつかは〟であって、来年やるんだったら今年みたいなそれにねぇ、確かに〝いまさら〟っていうのは誰もが思ってると思うんだけど、その心の揺れがいいんだよ。「田村vs桜庭をいまさら、やるのか」っていうね。でも観ちゃうっていうね。そこだろうなあ～、やっぱポイントは　だから、人が試合するときに、たとえ動きがなくても「おお～っ!!」って思うよね。

――動いても驚くだろうし。

獏　そうそう　そういえば、この前からWOWOWでUFCが始まったじゃない観たんだけどね、やっぱり知らない選手同士の試合って、たとえいい内容の試合をしてもね、テンションが途中までなんだよね。客観的に、いい試合だなとは思うんだけど、やっぱりいい試合かどうかでテンションが決まるんじゃないよね。思い入れがあるかどうかだから　選手のことを知らないとどうしようもないよねま、それは日本独特の感覚なのかもしれないけどさ。

――まあ、アメリカだと賭けができるんで、また一味違うんでしょうけど。

獏　ああ～、そうか　でね、俺は田村vs桜庭戦がおもしろくなるようなエピソードを一つ耳にした。

――え、なんですか？

獏　ある団体の某選手が桜庭と大学が同じで、ボクの知ってるある人が、その某選手に「ところで桜庭選手って大学のときどういう人だったの？」って聞いたんだって　そしたら某選手がね、「勘弁してくださいよ」って、何も言わなかったんだって「あの人はシャレになんないですから」って

――へえ～！

獏　で、とうとうどういう人だったかっていう批評もしなかったんだって。これを聞くと、桜庭が「素手でやりましょう」とか、ちょっと笑いながら何か言うときのその裏にある何か凄い塊のようなものが、見えてくるような気がするんだよね（笑）。

――何かあるんじゃないかと（笑）。

獏　本当はかウソかの裏は取っていない話で、都市伝説のような、そういう楽しみもありますってことで。

――わかりました。今回もありがとうございました！

【12月1日／電話取材にて収録】

UWFの先に見えていた〝いつか〟を我々はあたりまえのように目の当たりにしている――、とも言えるし、してないとも言えるのではないだろうか。

格闘技と真剣勝負はイコールではない。プロレスと真剣勝負がイコールであったりもするときがある。安住の地を求めたときにジャンルは衰退して、運動体が持つ精神性は失なわれていく。我々もMMAに〝いつか〟を求めて観続けるべきなのだ。ダー（ヨダレ）。

kamipro SHOPPING

Back Number

【kamipro特選劇場】

129号は"テレビと格闘技"特集!!
メディア界の著名人が続々登場!!

No.129 ダンディ坂野インタビュー

浅草キッドインタビュー

129号には、本誌でもおなじみの浅草キッドも登場! 今年10月に放送を終了した格闘技情報番組「SRS」を支えてきた二人。PRIDEの隆盛、格闘技バブル、フジテレビショックなど、13年間の格闘技界とメディアの関係を一気に大総括!

リニューアル第4弾は"テレビと格闘技"を大特集!!

読みつくせ!! テレビ界の天国と地獄

No.92 以降の「Kamipro」は
http://www.enterbrain.co.jp
でお買い求めください。

ゲッツ!!

元祖! 紙のプロレス

すべて **50%OFF!!**

No.14 780yen→390yen
特集 神秘とは何か?
佐山聡・大槻ケンヂ・プロボディガード清水自鳳・鈴木みのるたち格闘神秘を彫らます!/遠藤幸吉インタビュー

No.15 780yen→390yen
特集 インディペンデントの逆襲
あんた誰? 山口昇試練のインディー・レスラー10番勝負!/K-1とは何か? 石井館長・ターザン山本・サダハルンバ

No.17 780yen→390yen
特集 実況パワフル北朝鮮
あの北朝鮮での「平和の祭典」を語りまくる! アントニオ猪木&長島勝司・村松友視・破壊王・ブル中野

パンクラス公式読本「矛」「盾」 1260yen→630yen
97年当時のパンクラシストが勢ぞろい!! ゴッチさん、佐山聡、なぜか馬場さんも登場するパンクラス公式読本二部作!!

紙のプロレスRADICAL Back Number No.16→No.87

「紙のプロレスRADICAL」のバックナンバーは電話で注文できます!
03-5368-1797 [販売元]㈱ダブルクロス (平日13:00〜19:00)

No.16 1999.03 780yen
格闘ノストラダムス!
[表紙 前田日明]前田道場新エース・金原弘光/怪物か!? それとも……藤田和之座談会/壮絶なる格闘人生・藤原敏男

No.32 2000.10 840yen
"新"プロレスとは何か?
[表紙 小川直也]田村潔司に快勝! A・ホドリゴ・ノゲイラ/ドラゴンの大爆笑10 藤波語録/ラッシャー木村

No.34 2001.01 840yen
「猪木祭り」いよいよ開幕ーッ!
[表紙 小川直也]田村潔司に快勝! ノゲイラインタビュー/ドラゴンの大爆笑10 藤波語録/ボブ&オバチャンチン

No.35 2001.02 840yen
純プロレスを徹底検証!
[表紙 サクマシン(イラスト)]ZERO-ONE本格始動 橋本真也/プロレススーパースター列伝 ジョー樋口/杉浦貴

No.36 2001.02 840yen
燃えよ、闘魂の火種!!
[表紙 橋本真也(イラスト)]ノアから独立! 高山善廣を確認せよ!!/ヴォルク・ハン——ノゲイラに狼の伝言

No.38 2001.05 840yen
小川直也は是か非か?
[表紙・高田延彦(イラスト)]忘れ物の正体は。高田延彦/ヴォルク・ハンの最強の遺伝子 E・ヒョードル

No.39 2001.06 840yen
前田日明は是か非か?
[表紙 前田日明]前田道場新エース・金原弘光/怪物か!? それとも……藤田和之座談会・壮絶なる格闘人生・藤原敏男

No.40 2001.07 880yen
地上最強のプロレスとは?
[表紙 アントニオ猪木]蘇れ! Uインター&キングダム伝説! 高山善廣×金原弘光 熱いこの叫びを聞け! 大谷晋二郎

No.41 2001.08 880yen
"最後の黒船"WWF来襲!!
[表紙 ビンス・マクマホン・ジュニア]リングス10周年! ヴォルク・ハンが振り返る/真樹日佐夫×三池崇史

No.42 2001.09 880yen
アントンパワー大爆発!!
[表紙:アントニオ猪木]ドン荒川×橋本真也のトンパチ伝承対談/"ヒャッホーの真実"辻よしなり/高山×宮戸×金原

No.43 2001.10 880yen
聖戦「PRIDE.17」迫る!!
[表紙 桜庭和志]ブラジリアン・トップチーム3大柱インタビュー/金原弘光×サスケの新日本プロレス学校同窓会

No.44 20001.11 880yen
サク連敗と「PRIDE」の未来
[表紙 桜庭和志、ヴァンダレイ・シウバ]その修羅場の数々! シーザー武志/怪物伝承対談! 高山善廣&杉浦貴

No.45 2001.12 880yen
一寸先はハプニング!!
[表紙 アントニオ猪木(ホームレス姿)]悪魔の書、現る ミスター高橋/ジェラルド・ゴルドー人生相談

No.47 2002.02 880yen
WWE日本侵攻、5秒前!
[表紙 ビンス・マクマホン・ジュニア]"天才"武藤敬司が 紙プロ、驚愕の初登場!/噂の勉強がミスター高橋本を語る!

No.48 2002.03 880yen
桜庭、満開の日は近い!
[表紙 桜庭和志]奇跡のメガトン対談! 小川直也vsノゲイラ&スペーヒー/和田最強伝説が遂に現実に! 金原弘光

No.49 2002.04 880yen
究極の格闘技大戦争勃発!
[表紙 ミルコ、ヒクソン、小川、桜庭]和田さん快勝記念鼎談! 高山&金原&和田 菊田早苗とは何者か!?

No.50 2002.05 880yen
50号記念企画てんこ盛り号
[表紙 桜庭和志]「地方発世界」開始! 小川&橋本 リングスロシア軍団の軌跡/パンクラス取材解禁!

No.51 2002.06 880yen
揺るぎなきプロレスの確立
[表紙 橋本真也]両国国技館だよ、全員集合 橋本真也 「PRIDE」の魅力をマン開 小池栄子/武藤敬司人生相談

No.52 2002.07 880yen
戦慄の「LEGEND」前夜!!
[表紙 橋本真也、小川直也]全身プロレスラー・高山善廣 USAの渡世人トン フライ ロシアン・トップチーム

No.53 2002.08 880yen
「Dynamite!」ド直前号!
[表紙 桜庭和志]ノーフィアー×無謀渋・対談!! 高山善廣×鈴木輪育久 独占肉弾スクープ! マック・ガファリ

No.54 2002.09 880yen
「Dynamite!」を大総括!
[表紙 アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ]"首の皮一枚"ホイス&エリオグレイシー [illegible]ーネット

No.55 2002.10 880yen
高田vs田村、夢限大の真剣勝負!
[表紙 高田延彦]「真剣勝負」発言から7年、田村潔司が告白 金原が PRIDE 参戦!/メカトン級の男、ボブ・サップ!

No.57 2002.11 840yen
驚ガクの6周年記念号
[表紙 高山善廣]サップとタイマン勝負 高山善廣 新たなる"U"が始動!! 田村 ミスター高橋×大槻ケンヂ

No.58 2003.01 880yen
夢の対談、大連発号!
[表紙 武藤敬司&船木誠勝]夢幻のファンタジー対談 武藤×船木 Uスタイル対談 田村×高阪 宮戸×安生×鈴木健

No.59 1999.03 840yen
最後の皇帝、「PRIDE」上陸
[表紙 エメリヤーエンコ・ヒョードル]いざノゲイラ戦!! E・ヒョードル、アメリカン・ドリーム ダスティ・ローデス

No.60 2003.02 880yen
「PRIDE」は変貌&再生する!
[表紙 エメリヤーエンコ・ヒョードル]ノゲイラ撃破!! E・ヒョードル 驚愕の格闘芸術対談!! 武藤敬司×須藤元気

No.61 2003.04 880yen
セロワンvs新日5.2戦争!
[表紙 橋本真也&小川直也]裏番組をブッ飛ばせ 橋本真也×小川直也 1年間の沈黙を破った!! ヴォルク・ハン

No.62 2003.05 880yen
ミルコの首をカッ斬ってみろ!
[表紙 ミルコ・クロコップ]ファーと登場! 佐々木健介 現役復帰? 船木誠勝 ヒョードルが藤田を一刀両断!

No.63 2003.06 880yen
マット界、超絶リボーン!!
[表紙 橋本真也&小川直也 イラスト]「お前は男だ」劇場炸裂 高田延彦 PRIDE REBORNを大総括!!

No.64 2003.07 900yen
PRIDEミドル級GP直前!!
[表紙 桜庭和志]"異次元格闘技戦戦"田村潔司×吉田秀彦を大展望! PRIDEミドル級GP」出場全選手インタビュー

No.65 2003.08 880yen
皇帝vsミルコ闘争本能決定戦!
[表紙 ミルコ・クロコップ]最後の皇帝大炎上! ヒョードル ミルコついに皇帝戦へ 闘魂ストーカー・イズマイウ

No.66 2003.09 880yen
ミルコ 武士道 電撃出陣!
[表紙 ミルコ・クロコップ]ミルコ緊急インタビュー マッハを破った男、長南亮登場 東スポとは何か?

No.67 2003.10 880yen
ミルコvsノゲイラ、迫る!!
[表紙 ヴァンダレイ・シウバ]ノゲイラ戦緊急インタビュー! ミルコ、「PRIDEミドル級GP」決勝戦インタビュー

No.68 2003.11 880yen
大晦日・格闘技大戦決定!!
[表紙 高田延彦PRIDE統括本部長]大晦日 つ巴決戦、出撃宣言! 高田延彦 曙とは何者か!?/桜庭和志

No.69 2003.12 900yen
「ハッスル1」開催ド直前!
[表紙 橋本&小川]出てこい! 泣き虫! 橋本&小川 泣き虫 著者、金子達仁登場! 田村潔司/美濃輪育久

No.70 2004.01 880yen
04年末の格闘戦争を大総括!
[表紙 ミルコ・クロコップ]シウバに近藤有己が宣戦布告 健介&北斗Wの真実を語る!/紙プロ大賞&語録発表

No.71 2004.02 880yen
「ハッスル2」で大フィーバー!
[表紙 ハッスルイラスト]「PRIDE GP」優勝宣言! ミルコ&ノゲイラ 川田利明初登場 猪木vsアミン戦の真実

No.72 2004.03 840yen
「PRIDE」に格闘ロマンを見よ!
[表紙 ヒョードル、ミルコ、ノゲイラ]GPの大本命をオランダでキャッチ!! エメリヤーエンコ・ヒョードル/山本KID徳郁

No.73 2004.04 880yen
最も過酷な道を行く男!!
[表紙 小川直也]GP出場決定、緊急インタビュー! 小川直也/PRIDE・GP出場全選手 パーフェクトガイド

No.74 2004.05 880yen
感じろ、ハッスル魂!!
[表紙 小川直也]PRIDE・GPでハッスル成功! 小川直也/リベンジロード発進!! 桜庭和志/ミック・フォーリー

No.75 2004.06 880yen
英雄誕生の気運高まる!!
[表紙 小川直也、桜庭和志、吉田秀彦]ノルバ戦直前に大ハッスル宣言! 小川直也/奇蹟の独占インタビュー! 高田総統

No.76 2004.07 880yen
プロレス爆発へ最後の挑戦!
[表紙 桜庭和志]小川の"盟友"と"宿敵"が奇蹟の対談!! 破壊王×ノゲイラ 厳しくも、飄々と戦路を進む! 桜庭和志

No.77 2004.08 880yen
小川vsヒョードル決定!!
[表紙 小川直也]「相手がヒョードルだろうと俺はハッスルする!!」小川直也 狙うは皇帝の首ひとつ! ミルコ

No.78 2004.09 840yen
PRIDE GP徹底総括号
[表紙 小川直也]衝撃の敗戦直後、独占インタビュー! 小川直也/小川の敗戦をどう見る!? 高田延彦/谷川貞治

No.79 2004.09 840yen
髙田総統がビターンと降臨
[表紙 髙田総統]キャブァンに休息無し! 小川直也/特別付録・髙田総統ポスター/谷川さんも推薦「曙は是か否か?」

No.80 2004.10 880yen
守護神ミルコが外敵狩り!
[表紙 ミルコ・クロコップ]ミルコ独占インタビュー/ハッスルお家騒動、小川直也/「袋とじ企画」グリズリー岩本

No.81 2004.10 880yen
究極のSADAME、迫る!!
[表紙 桜庭和志]ヒョードルの弱点を発見!? ノゲイラ&ノゲイラママ/新日本でハッスル成功! 小川直也/草野仁

No.83 2005.01 880yen
ミルコ激白! 打倒皇帝!
[表紙 ミルコ・クロコップ]04年「PRIDE男祭り」を大総括/05年ハッスル大進撃発表! 小川直也/橋本×船木対談

No.84 2005.02 880yen
RTTが皇帝に宣戦布告!!
[表紙 セルゲイ・ハリトーノフ]"殺人落下傘"が3強越え宣言!! セルゲイ・ハリトーノフ、田村潔司がPRIDE GPを語る

No.85 2005.04 860yen
「PRIDE」vs「HERO'S」開戦!
[表紙 前田日明&髙田総統]PRIDE GP2005特集 桜庭、田村、高田 パンクラス2大王者対談 髙坂剛×近藤有己

No.86 2005.04 860yen
PRIDE GP直前大解剖号
[表紙 ヴァンダレイ・シウバ]大物再会! 超J級対談が実現!! 船木誠勝×田村潔司/ダンプ松本が全女解散を語る!!

No.87 2005.05 860yen
PRIDE GP開幕&大総括!
[表紙 吉田秀彦]敗れてなお咲く花あり! 吉田秀彦 船木誠勝×宇野薫 金原弘光×池田大輔

通販方法 No.91までのバックナンバーは書店で扱っておりません 下記の通信販売をご利用ください。❶電話注文⇒03-5368-1797(平日13:00〜20:00) ❷メール注文⇒kapra@kamipro.com

※通信方法はすべて代引きとなります。手数料は315円です(代引き金額によって異なります)。※送料は一律500円(何冊でも可。離島山間部は除く)となります。※郵便振替は現在受け付けておりません。ご了承ください

奇跡のワンナイトイベントの舞台裏を完全告白!!

やれんのか!
大晦日! 2007
Supported by M-1 GLOBAL MIXED MARTIAL ARTS

2007年12月31日／さいたまスーパーアリーナ

～DVD『やれんのか! 大晦日! 2007』発売記念～

『やれんのか!』は、こうして生まれた

元『やれんのか！』実行委員会

笹原圭一 & 篠田荘太郎

（DREAMイベントプロデューサー）

（株式会社リアルエンターテインメント 渉外担当）

ファンを熱狂の渦に巻き込んだ一夜限りの復活イベント『やれんのか! 大晦日! 2007』がDVDになって帰ってきた! 今回はこのDVD発売を記念して元『やれんのか!』実行委員会の笹原圭一氏、そして渉外を担当した篠田荘太郎氏にその舞台裏を直撃! 奇跡の一夜はこうして生まれた!!

聞き手／ジャン斉藤 写真協力／株式会社リアルエンターテインメント 大会撮影／平工幸雄

――この本が出る頃には絶賛発売中の『やれんのか！大晦日！2007』の公式DVDを一足先に見せていただいたんですが、凄くおもしろかったのと同時にあらためて「ピュアなイベントだったなぁ」と。

笹原　ちょっと、過去形で言わないでくださいよ！（笑）。僕らはいまでもピュアですから。

――（無視して）で、今回は『やれんのか！』のヒョードルの招聘に携わった篠田（鼎太郎）さんと、おもに広報業務をしていた笹原さんにピュアな舞台裏をうかがいたいと思います

篠田　あのときはホントに余裕がなかったんですよ。開催記者会見をしたのが11月21日で、チケット販売もマッチメイクもいっぺんにやらなきゃいけない。笹原さんのパソコンには「やらなきゃいけないこと」を書いた付箋がいっぱい貼ってあって（笑）、

笹原　モニターを一周して、ライオンのたてがみみたいになってましたから（笑）。

――その『やれんのか！』実行委員会は、知り合いの制作会社の事務所を間借りしてたんですよね。

篠田　ええ、僕らがいっぺんに入って、もの凄く狭くなっちゃいましたね（笑）

笹原　ただ、かなり無謀でしたよ。10月の頭に新生PRIDEの日本事務所から追い出されて、新たに事務所を借りようにも会社組織でもない人間が簡単に借りられるはずもなく、電話回線ですら引けなかったんですから。

――FMW旗揚げ時の大仁田厚以下でしたか（笑）。

笹原　じつは、その事務所に別回線を引こうともしたんですけど、マンションの構造の問題で引けなくて。しょうがないから、「その事務所の電話番号を『やれんのか！』実行委員会の問い合わせ先にしちゃおう」と。

――それはヒドイですねぇ。

笹原　完全に「ひさしを貸して母屋を乗っとる」状態でしたね（笑）。

篠田　しかし、あんなに人数が入る部屋じゃないのに、スタッフが10人以上いて、……凄く覚えてるのは、最初にうがい薬のイソジンを買ってきたんです。最小人数でやってるから、人が風邪をひいたら全員に伝染るから、うがいと手洗いを徹底したんですよ。

笹原　そこもピュアでしたね（笑）。でも、事務所を追い出されてすぐは、年末にイベントをやる話は出てなかったんです。

篠田　そうですね。その解雇されたあとに、アメリカのエリートXCの当時の社長が「一緒にやらないか」と言ってくれたんですが、大きな進展があるわけでもなく。そうこうしているうちに『ハッスル』の大晦日イベントがさいたまスーパーアリーナで決まって。

笹原　そうそう。『ハッスル』の話があって、エリートXCの話も出てきて、「じゃあ、大晦日どうしよう？」って話がやっと出てきたんですよ。

篠田　で、やるからには、やっぱり大会の象徴となるような選手がいないと始まらない。

笹原　シウバ、ノゲイラ、ミルコ……、みんなUFCに行っちゃったけど、ヒョードルだけが残っていたじゃないですか。じゃあ、ヒョードルを担ぎ出せないのか、という話になって。

篠田　それで11月頭に「ヒョードル側と話をしよう」「どうせなら会いに行こう」と思って、マネージメントのワジム（・フィンケルシュタイン）さんに連絡したら、「オランダにいる」と。それで次の日の飛行機のチケットをとったんですけど、へんな話……自腹だったんですよ（笑）。大会をやるなら経費で落とせるけど、なかったら自腹だから、交渉も鬼気迫る勢いで。

[illegible]DE チームと一緒に[illegible]をし[illegible]てました。07年11月、やれんのか！[illegible]記者[illegible]ヒョードルとともに[illegible]なワシム氏の[illegible]み会見での発言。まさに篠田氏をはしめとした[illegible]7と信頼関係を象[illegible]コメントだ

ヒョードル側に交渉しにオランダに行ったときもチケットは自腹でした（篠田）

――それは凄いモチベーションでしょうね（笑）。

篠田　彼らとオランダのホテルの喫茶店で朝から晩までずーっと話をして。向こうも協力的なんですが、ヒョードルはM―1グローバルと契約したばかりでしたから。こちらも大会のコンセプトを一から話したんです。「PRIDEが誕生して10年目という区切りの年に、自分たちの気持ちに幕を引きたい」「日本人は死ぬときは自分で死ぬんだ！」とか（切腹のポーズで）。

――間違った日本観までも引き出して（笑）。

篠田　ワジムさんとアピ（・エクテル、ヒョードル代理人）さんは、しっかり話を聞いてくれて。それまでの信頼関係が大きかったと思いますけど。僕はワジムさんの家や、ボートの部屋に泊まらせてもらったり。昼1時から夜8時まで続く飲み会に参加したりしてたんで（笑）。いままで飲んだウォッカの量が功を奏したのかなって

――その積み重ねで「コイツは信用できる」と。

篠田　06年には、ヒョードルの故郷のスタールイオスコルに夜行列車に12時間くらい乗って行ったことがあったんです。そのとき地元の大会にお偉いさんがいっぱい来てて、僕もPRIDEの人間として挨拶したんですが、そのことをヒョードルが自伝に写真つきで載っけてくれて「自分の故郷まで来てくれて嬉しかった」と書いてくれて。

――いい話ですねぇ。

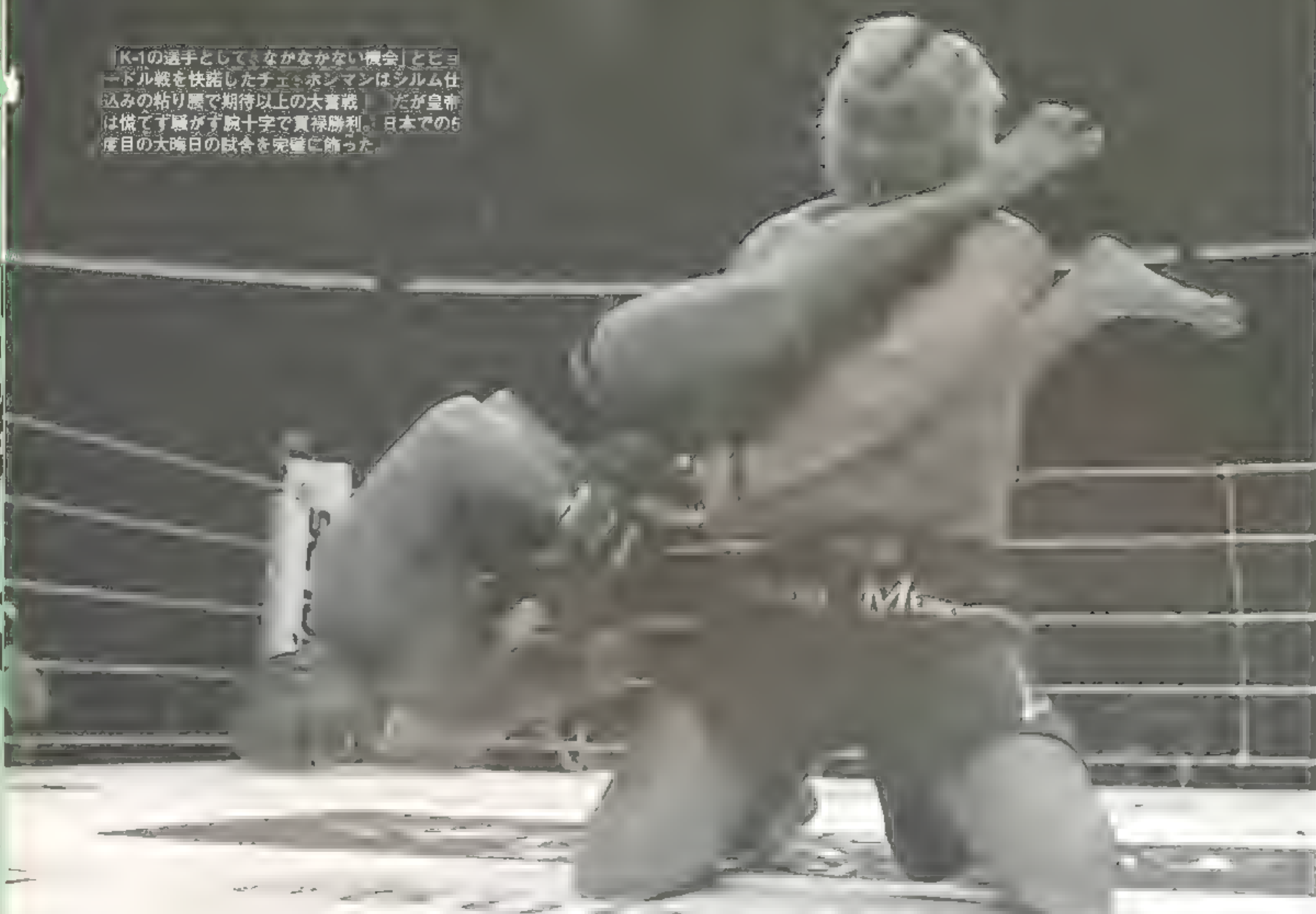
篠田　で、ワジムさんは「話はわかったけど、M―1グローバルに許可をとらなきゃいけない」と。それに翌年1月に「M―1グローバルの大会があるかもしれない」って話もあったので、オランダからアメリカのM―1グローバルの幹部を電話口に呼んで、僕とワジムさんとアピさんが会議電話で交渉したんです。とくにワジムさんはかなり援護射撃してくれて、クレイジー・ロシアンぶりを発揮してくれまして（笑）。

――ワジムさんは味方につけると頼もしいですね（笑）。

篠田　あと、僕がオランダに着いたときヒョードルはロシアにいたんですけど、まずオランダからヒョードルに電話したんです。「この交渉は難しいかな」って気持ちもあったんですけど、そのときヒョードルが弾んだ声で「シノダサ～ン！」「ワジムといい話をしてくれよ」って明るく話してくれたんです。その声に励まされましたねぇ。で、11月の頭に日本でM―1グローバル側も加えて、再度話し合うことになったんです。

――そこまでいったら勝算はあったんじゃないんですか？

篠田　いや、それでも半々でした。どんな条件を出してくるのかわからなかったし。実際に僕らがヒョードルに払えるギャラにも限度があったし、

「K-1の選手としてもなかなかない機会」とヒョードル戦を快諾したチェ・ホンマンはシルム仕込みの粘り腰で期待以上の大善戦。だが皇帝は慌てず騒がず腕十字で貫禄勝利。日本での6度目の大晦日の試合を完璧に飾った。

そこはホントに義理人情の世界で納得してくれて。

――へぇ～、ホントにピュアだ（笑）

篠田　ただ、M-1グローバルからは難しい話をされて……。2日間くらい滞在したんですが、過去にないくらい難航してしまって。確かにM-1グローバルは自分たちの大会を毎年の1月や2月の頭にやるって話はホントに動いてたみたいですね。結局、1回もやらなかったですけど、普通は自分たちがお金を払って契約した選手は自分たちのイベントで使いたいですよ。

――よく考えると、そんなムチャ話がよくまとまりましたね（笑）

篠田　あとは、「M-1グローバルって名前の大会にするなら、投資家にも顔が立つ」とか、「大会名にM-1グローバルと入れてもらわなきゃ困る」と言い出したから、「日本人にとって、名前を売るのは魂を売るようなものだ」と言い返したり（笑）

――たしかに「大晦日！ M-1グローバル」では困りますよ！（笑）

篠田　僕らは「supported by M-1グローバル」と入れるのならいい、と。そこでもお尻の部分に「supported by」と入れるのか頭に「presented by」と入れるのかでモメて。ただ、大会名の前には冠スポンサーがつく可能性があったんで、結局、Fieldsさんに入っていただくことができましたし。

篠田　それが11月の16、17日くらいになってたんです。で、21日には「記者会見をやる」って話になってたんです。で、ヒョードルを記者会見に呼ぶためには11月18日には話を絶対に決めなきゃいけなかったんです。

――メチャクチャ危険な綱渡りじゃないですか！（笑）

篠田　ホントに常にツーアウト満塁の状況というか（笑）

――で、笹原さんは別行動でいろいろと動かれてたんですよね？

笹原　ええ。会場やプロモーションもそうだし、スカパー！さんにはPPVの話をしなきゃいけなくて。当然大晦日放送の編成なんて終わってるわけですよ。でも、PRIDEの立ち上げから関わってくれていた担当者が「いつかお話がくると思ってました！」と言ってくれて。

――これまたいい話ですねぇ！

「やれんのか！」クロニクル　グラフィティ

「時は来た！」。07年末にウワサがウワサを呼んだ「やれんのか！」開催記者会見には高田延彦とヒョードルが奇跡の揃い踏みをはたした。

2007年

[illegible] PRIDE FC WORLDWIDEの日本事務所が突如閉鎖。所属スタッフは全員解雇処分に。

[illegible] PRIDE FC [illegible]本社が日本事務所の閉鎖に関するプレスリリースを発表。

[illegible] 高田道場主催「ダイヤモンド・[illegible]」に出演[illegible]五味隆典が「大晦日は必ずどこかの舞台でやる」と発言する。

10月23日 FEGが大晦日の「Dynamite!!」[illegible]桜庭和志vs船木誠勝戦を発表。

[illegible] 「M-1 MIXED FIGHT」（ロシアのサイト）にて、ヒョードルが「大晦日に日本で[illegible]」を発表。

[illegible] 「ハッスル」が大晦日にさいたまスーパーアリーナで「大みそかハッスル祭り2007」開催を発表。

[illegible] この日発売の「kamipro No.117」で旧PRIDE派が大晦日にさいたまスーパーアリーナで大会決行[illegible]と報道される。[illegible]日には[illegible]サイト「kamipro Hand」上でも同内容の記事を更新。

[illegible] 旧PRIDEスタッフによる大晦日「やれんのか！ 大晦日！ 2007」の開催記者会見を開催。会見にはヒョードル、高田延彦も登場。

11月23日 吉田秀彦が「やれんのか！」参戦に関して「決まれば誰とでも、ヒョードルとでもいい」と発言するも実現せず。

[illegible] 「M-1グローバル」のモンテ・コックスCEO、FEGの谷川代表、DEEPの佐伯代表が「やれんのか！」へ協力を発表。主催者として名前を連ねた。青木真也vsJZカルバンが発表。

[illegible] 「ダイヤモンド・キッズ・カレッジ」に登場した高田延彦が「今年もアレをやるよ」と太鼓パフォーマンスを示唆。

[illegible] 高田事務所が[illegible]田和之とPRIDE FC WORLDWIDEの契約解除を発表。大晦日への参戦がウワサされるも実現せず。

[illegible] 「やれんのか！」と「Dynamite!!」が合同記者会見を開催。Fieldsが両イベントの冠スポンサーとなり、ヒョードルvsチェ・ホンマン、秋山成勲vs三崎和雄が発表される。

[illegible] 五味が自身のホームページで「今回は不参加となります」と「やれんのか！」への不参加を表明。

[illegible]20日 吉田道場にて[illegible]藤本誠vsムリーロ・ブスタマンチが発表。

[illegible] DEEP道場にて本人出席のもとJZカルバンの負傷欠場を発表。青木のカードは直前で白紙に。

[illegible] 青木の対戦相手として[illegible]ン・ブギョン（韓国）の参戦が発表される。

[illegible] 大会前日、新宿ステーションスクエアで全選手出席の後援記者会見開催。秋山は[illegible]な「魔王」[illegible]ンで登場。

12月31日 「ハッスル」終了後の20時より、さいたまスーパーアリーナで「やれんのか！」開催。

2008年

[illegible] 「やれんのか！」実行委員会とFEGが合同記者会見を開催。新イベント「DREAM」を旗揚げ。

12月19日 DVD「やれんのか！ 大晦日！ 2007」が東北新社から発売。

笹原　嬉しかったですね……（しみじみと）。スカパー！さんには二人で一緒に行ったんですけど。泣けましたよ、ホント
――そのタイミングでFEGさんとも話し合ったんですか？
笹原　FEGさんは別の人間が話してたんですけど。それは11月末くらいかな。
篠田　その時点で、「ヒョードルの相手は誰なんだ？」って話になって　ヘビー級でヒョードルとやって話題になりそうな選手の候補にチェ・ホンマンが挙がりましたね。もちろんそこはFEGさんに話を通さなきゃいけない。名前を出すと広まっちゃうんで、ギリギリまで引っぱったんです。ヒョードル側も「相手を出してくれないとトレーニングできない。出さないならやらない」みたいなテンションだったのでなだめたり、すかしたりしてました　で、チェ・ホンマンが出た12月8日のK－1ワールドGP横浜アリーナ大会（vsジェロム・レ・バンナ戦）を観に行ったんですけど、「頼む、ケガをしないでくれ！」って感じで（祈りのポーズで）
――勝っても負けてもいいから（笑）。
篠田　で、ホンマンが負けた瞬間、ヒョードル側に「イケるんじゃないか」っていう話は入れておいたんです。
笹原　その時点ではホンマンサイドにはまったく話をしていなかったんですから、見切り発車もいいとこで
そもそもFEGは、この話には乗り気だったんですか？
笹原　そのときは、桜庭（和志）さんを貸し出してもらった『PRIDE・34』があったから　あれで向き合える下地ができてたので、基本的には前向きな姿勢でしたね。
――自分が凄く印象深いのが、谷川さんが『やれんのか！』との大連立会見に出たあと、記者を集めて懇親会をしたじゃないですか。
笹原　ありましたね。記者とケーキを一緒に食べるという懇親会が（笑）
あのときって、あるスポーツ新聞記者が谷川さんに険悪なムードで詰め寄ってたんですよね。
笹原　ありましたねぇ　谷川さんが「これはPRIDEの復活ではないので、そう書かないでほしい」と言ったら、その記者さんに「僕たちは報道機関だから、指図される筋合いはない」ってニュアンスで噛みつかれて。
篠田　たしか映像制作のスタッフがカメラを回してたら、その記者さんから「おまえは誰だ！　出ていけ！」って怒られてましたね。
そう怒鳴られても凄いガッツで引き続き撮影をしてましたけど（笑）。
篠田　ただ、谷川さんが「PRIDEの復活ではない」と言ったのは、PRIDEの権利がアメリカ側に移ってましたから。なので「PRIDEの集大成」みたいなことを、我々は言えないわけですよ。
笹原　僕らも谷川さんにそこを強く言ってたんです。谷川さんには酷な役割を押しつけてしまったと思うんですけど。……そういえば、『kamipro』さんはニヤニヤしながらケーキを食ってましたよね。
――いや、なんか「コイツらと横並びは納得がいかん！」みたいなもの言いをしてたので、申し訳ないなあ、と（笑）　最終的に元新日本プロレスで現FEG広報の渡辺（秀幸）さんが大演説をかましてその場がやっと収まったんですけど。
笹原　「いまは総合格闘技をやっても儲からないけど、この文化を絶やしてはいけない!!」と力説してましたね。ボクはあの演説にはシビれましたけどね。
さすが元新日本。新聞イズムの炸裂というか（笑）。
笹原　でも、それくらいあのときは権利問題には凄く過敏になってましたね
――「当日のオープニングでPRI

大会当日にPRIDEのテーマを流すって話は直前まであった（笹原）

DEのテーマを使う」と聞いていたのに、『ゲリラ・レディオ』（レイジ・アゲインスト・ザ・マシーン）に変わったり
笹原　開催会見のときに、「PRIDEのテーマを使おう」って話もあったんですけど、そのあとで、「PRIDEのテーマは使えない、ってことにして当日会場で流したら絶対にドッカーンとくるでしょ！」っていう話になって
――一度アングルを作っておいて、当日ひっくり返す、と。
笹原　数日前までワクワクしてたら、直前になって「やっぱり使うのはまずいだろう」って判断を下さざるをえなかったんですよね。でも『ゲリラ・レディオ』の太鼓もメチャクチャ格好よかったですよね。
――あとはじつに骨太なカードがいくつも並んだのもデカかったですよね。とくに秋山成勲の参戦も話題になって。
笹原　あのとき大阪ドームには桜庭さんが出たから、同じ会場に秋山選手も出るのは難しかったのかもしれませんね　FEGさんも使い場所に困ってたのかもしれない。
――1年前にヌルヌル事件が起きて、日本ではひさびさの試合でしたし。
笹原　だから、桜庭さんの試合（vs船木誠勝戦）が先に決まってなかったら、秋山選手が大阪ドームに出て、桜庭さんがさいたまに出る可能性もあったんですよね。

開催会見1週間後、M-1グローバル、モンテ・コックスCEO（当時）とFEGの谷川代表が電撃的に協力を発表！　"格闘界の大連立"を訴え、高田本部長と旧交も温めた谷川氏だったが、会見後の懇親会である記者との"事件"が勃発

――桜庭さんが『やれんのか！』に出ていたかもしれない。

笹原　桜庭さんも絶対に出たかったと思うけどなぁ。桜庭さんを大阪の『Dynamite!!』が終わったら、ヘリコプターで連れてくるっていうプランまでありましたから（笑）。

あと当日、試合順が変更になったのも大変でしたけど、ああいう可能性は予期してたんですか？

笹原　いや、当日までそういう話は全然ありませんでしたね。

篠田　石田（光洋）vs（ギルバート・）メレンデスの試合のとき、「判定までいったら、その可能性がある」って話が急に出てきた。僕はそれをヒョードル陣営に言いに行って。それぞれスタッフが青木選手や、（桜井）マッハ（速人）選手と長谷川（秀彦）選手のとこに行ったり。そのときヒョードルのほうは、アップ中でバシバシに仕上げてて、その場で簡単に説明したんですけど、興奮してるし集中してたんで、とにかく「わかった」と。でもコーチからは「こんなのは困る！」って猛抗議されて。

そりゃ、そうですね（笑）

篠田　それを言うのは、ホントにイヤでしたね。ヒョードルは最初から乗り気で日本に来てくれて、11月22日の会見のときも2日前に無理して来てくれてたし、こっちも「おまえが、メインじゃないと締まらないんだ！」とずっと言ってたのに……

笹原　あと、いろんな関係者に「最後はヒョードルが締めます」ということで交渉してたんで。

自分は、「ピュアな部分だけじゃ、イベントは成立しないんだ」っていい意味でとらえましたけど。

篠田　それでも進行のミスはなかったし。煽りVだけはうまくいかない部分はありましたけど。逆に、「始めからセットされてたわけじゃない」って証明になったから、ある意味よかったかな、と。

――この『やれんのか！』は、またやるんですか？　このまま終わってほしいような気持ちもありますけど。

篠田　その気持ちは凄く理解できますよ。

笹原　DVDの予約も好調みたいですし、「完全保存版でとっておきたい」と思い出に残るイベントだったんだろうなって（しみじみと）

篠田　最後に、一つ思い出したことがあるんですけど。じつはオランダに行く日に寝坊したんですよ（笑）　前の日の遅くまで仕事をしてて、11時30分くらいの飛行機なのに横浜の自宅で起きたのが9時40分くらいで。

――完全にアウトの時間ですね。

篠田　電車は絶対に間に合わないから、タクシーに飛び乗ってね、「これは経費で落ちないだろうな」と思いながら（笑）

――最終的には飛行機には乗れたんですよね？

篠田　何回も航空会社に電話を入れて「いま、ここまで来ました」って。それでも「時間が来たらクローズします」と言われたんですけど、その運転手さんが凄く頑張ってくれたんですよ。

――「任せとけ！　昔は慣らしていたもんよ」って感じで（笑）。

篠田　事情を話したら、凄く心配してくれて、しっかり間に合わせてくれまして

笹原　その運転手さんがいなかったら、『やれんのか！』はなかったかもしれない、と。

篠田　絶対にないですね（笑）。ヒョードルと運ちゃんが『やれんのか！』を作った、と。ぜひ、名乗り出ていただいて、DVDを進呈したいですね（笑）

【08年12月1日　都内・リアルエンターテインメント事務所で収録】

2万7128人（超満員）を動員し、大成功に終わった『やれんのか！』。エンディングでは「桜咲くころ、夢の続きを」と意味深なメッセージも。はたして『やれんのか！』ブランドは、このまま封印されてしまうのか？

奇跡の一夜をもう一度!!
DVD『やれんのか! 大晦日! 2007』絶賛発売中!!

あのピュアな歴史的イベントの興奮をいまこそ追体験！　07年大晦日、さいたまスーパーアリーナで行なわれた旧PRIDEスタッフによる奇跡の"一夜復活興行"『やれんのか！　大晦日！　2007』がついに2枚組で完全DVD化！

このDVDは、通常版（6090円・税込）とは別に現在では入手困難な『やれんのか！』記念Tシャツとミニグローブ型の『やれんのか！』キーホルダー、さらに特製リーフレット（通常版と同内容）までついた数量限定の初回生産限定版（8190円・税込）の2種類が東北新社から絶賛発売中!!

気になるDVDの内容は、大会の模様を完全収録した本編ディスクと、特典ディスクの2枚組。

まず本編ディスクでは、感動の大会オープニングから、"60億分の1"エメリヤーエンコ・ヒョードルvsチェ・ホンマンをはじめ、異様なヒリヒリ感に包まれたあの秋山成勲vs三崎和雄、まさかの大苦戦となった青木真也vsチョン・ブギョン、さらに石田光洋vsギルバート・メレンデスの大激戦など、白熱の全8試合を完全ノーカット収録。しかも煽りVや入場シーンまでキッチリと収録されているから、たまらない。

さらに、ファン垂涎といえるのが特典ディスク！　あの"60億分の1煽りVディレクター"こと佐藤大輔氏が監督し、大会準備期間から当日のバックステージの様子まで丹念に追った秀逸な大会ドキュメンタリー作品であり、今年PPVで放送されて大きな話題を呼んだ『ドキュメンタリーやれんのか！完結編』が収録されている。

しかも、今回DVD化されるにあたって、現在DREAMで活躍中のトップファイターや関係者に佐藤氏があらためて再取材を敢行！

いったい『やれんのか！』とはなんだったのか？　あの地熱をいまあらためて振り返る濃密なインタビューも含めた再編集バージョンでお届け！

すべてのPRIDEファン、格闘技ファンに捧げる永久保存版がここに登場。一年前の熱狂があざやかによみがえるこのDVD、はたして君は買えんのか？

DVD『やれんのか！　大晦日！　2007』（初回生産限定版）
■封入特典　"着れんのか！"Tシャツ、"付けれんのか！"ミニグローブ型キーホルダー、"読めんのか！"特製リーフレット（通常版と同内容）
価格　8190円(税込)

DVD『やれんのか！　大晦日！　2007』（通常版）
■封入特典　特製リーフレット
価格　6,090円（税込）
発売元、販売元：株式会社東北新社

イラスト　師岡とおる

第37回

本文ではふれてないけど、『UFC91』は
寝技一本が多くておもしろかったね

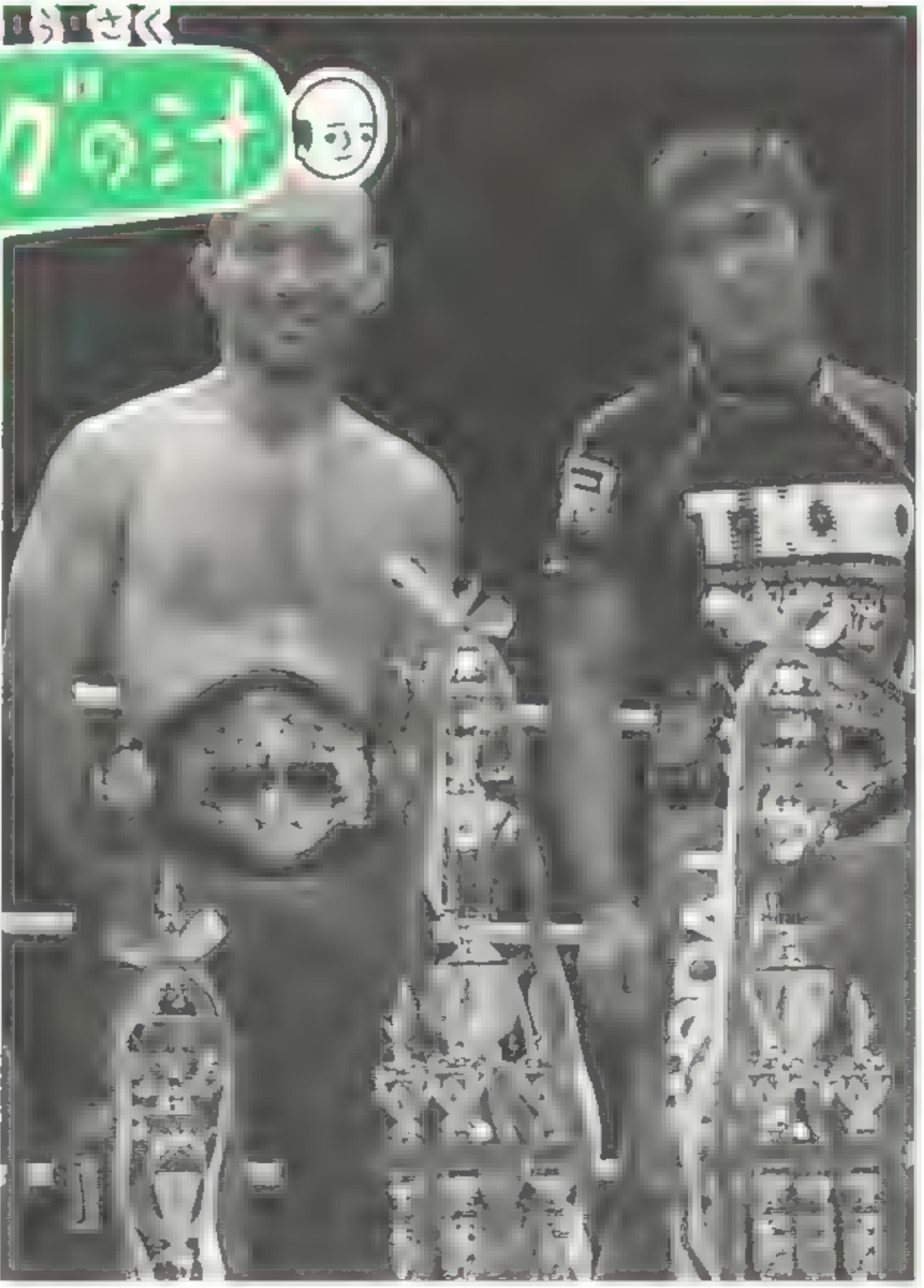
花くまゆうさく

豆リングの汁

注目してたこないだのZST のタッグマッチ（所英男&今成正和vs矢野卓見&横山大輔）はまだ未見ですが、観た人の話を聞くとあまり噛み合ってなかったようで残念。

タッグのおもしろみはいろんな組み合わせが見れることが一番で、タッチワークとかそういうのは、べつにおもしろいと思わないし、求めていないので、そこらへんが今後の課題じゃないでしょうか。人数が倍なので、三本勝負でもいいと思う。

その日の大会では、永田弟敗北が嬉しい知らせだった。階級下の所戦をいつまでも、熱望するのはどうかと思う。

こないだの修斗では、門脇判定負けがとてつもなく残念。試合をおもしろくしてるのは門脇たったし、男が応援したくなるカッコよさも門脇のほうでした。

ほかはチャンピオン・中蔵（隆志）とウエタユウの強さが際立ってた。

初めて観るウエタ強し。あの独特のスタンドは魅力的&強かった。顔が小さいので、パンチ当たらなそう。

寝技がどうなのか知らないが、もし寝技強かったら、完璧だね。

UFC92で
寝技テクも
ビジュアルも
よかった人
22才で
哲学者顔
ダスティン・ヘイズレット(22)

Hanakuma Yusaku
◎フフカンのPVに村田くん&K太郎くんに出てもらいました

サムライ三昧

サムライショック

COLUMN

©Josh Hedges(UFC)

年齢、体重、キャリアともに開きのあるクートゥアーを下し新王者に輝いたレスナー。来年には12月の「UFC92」でのノゲイラvsミア戦の勝者との対戦が決定済み

UFC91」。楽しみにしていた、ランディ・クートゥアーvsブロック・レスナー。クートゥアーはヒョードル戦が待望され、それはMMA初代世界王者決定戦としてふさわしいと考えられていたわけであるが見事に撃沈！　夢のカード実現の前に、あっという間にその価値は大暴落。夢のカードは、ライブドア株のごとく一瞬にほぼ無価値になったのであった

試合前半は、経験で勝るクートゥアーかあいかわらず固くて賢い自身のペースに引き込み、レスナーを〝クートゥアー・ワールド〟に閉じこめていたのだが、一発の決め手に勝るレスナーが恐るべきパワーのパンチで、一瞬に試合をひっくり返してしまった

過去にこのコラムでレスナーのUFCデビュー戦となる、フランク・ミア戦を評して、「どーも自分は、ポッと出のプロレスラーがMMAで勝つのが許せないらしい」と、その一戦で気づかされた自分の本心について書いたが、今回のクートゥアーvsレスナーでは、最初っからレスナーを応援

クートゥアーvsヒョードルは「MMA関係者か責任持って実現させなければならない一戦だ」なんて煽っておきながら、今度はクートゥアーが全然好きじゃないし、さほど評価していない（あの歳で第一線で闘うのは素晴らしいが）自分に気づかされるのであった

それにしてもブロック・レスナー、どえらい選手が現われたものだ。ルックス、経歴ともド派手で、怪物的な身体能力の持ち主。根性がある白いボブ・サップだ。ネガティブなニュースが続くMMA界であるが、レスナーがチャンピオンになったときの業界の牽引力は相当なものたろう

このレスナーとUFCのヘビー級王座を賭けて闘うべく、暫定王者の我らかノゲイラとレスナーを破ったミアが次の興行で闘う　ヘビー級最高のテクニシャン同士の闘い。楽しみである。もちろん、ミノタウロにはミアにもレスナーにも勝ってほしいのであるが……　ああ、ヒョードルの兄貴もここに加わってほしいなあ

サムライTV（以下・サムライ）から突然お手紙か届き、筆者か契約しているe2byスカパー！では放送時間が大幅に短縮されるという　なんたかよくわからなかったので、よく読んでいないが、一日の放送時間か8時間あまりになるという

サムライは修斗とDEEPのために入っているようなものだが、観る番組がなくなった朝方にサムライにチャンネルを合わせたときに観る三田さんから得る妙な安心感、そして時間を持て余した自分への寂寥感はなんとも言えない。もう仕方かないからオレ、サムライに最後までついていくよ！　静寂があってこそ音がする　喪失があってこそ発見かある　道かあってこそ留まることを選へる　人生は素晴らしい！（←意味不明）

そのサムライで修斗の試合をぶっ続けで観た。放送された興行の開催年度もいろいろで試合数もたくさんなので、さらにあまりの長時間視聴てほーっとして、頭の中がぐちゃぐちゃで不勉強で申し訳ないか、誰か誰でとーゆー状況なのかすへてを把握できないのだが、とにかく修斗は素晴らしい　凄い試合の連続た　ジャーマンで失神KOの試合が2試合もあった。さすが世界最古にして、最も完全な体系を確立し、そしていつの時代も前衛的な団体、試合内容までトンガっているね

なんでも今年の9月から後頭部への打撃か禁止され、来年1月からはダウンカウントの廃止のルール改正がされるとか大賛成。ダウンカウントがないのは、MMAというスポーツのアイデンティティの一部たと思う

修斗を観ていていいなと思うのは、明るい性格のヤツも、暗い性格のヤツも、不良も武道家も、若者か若者らしく自由で、「闘う理由は闘いたいからた」つーふうに感じることだ。ちゃんと試合をチェックしたいのだが、毎週何曜日のこの時間にチャンネルを合わせれば、修斗の最新の試合が観られるっつー状況にはならないものか？

年明けの「戦極」では、吉田vs菊田が決定したという。それほど盛り上がっていないようだが、筆者としては「おおっ！」と興奮した。周囲との温度差を感じしたが、それは筆者が菊田ウォッチャーだから？　吉田か菊田に負けたら大変なことたと思うのだが。受けた吉田は偉いと思う

菊田は『バリジャバ』で誰だか忘れたイラン人に（たぶん……中東の人であるのは確か）ヒザ十字にいって、逆にそのままホコられた試合を観てから、すーと観続けている。「ファンか？」「好きか？」と問われると、自分の本心がわからないフシかあるが、菊田もただの選手ではなく、存在が〝論点〟である選手。引退するまで気になるたろう

桜庭vs田村は会場に行こうと思っている　大晦日興行に足を運ぶのは初めてたおせちとかそばとか食いながらテレビ観戦をするのか毎年の楽しみであり、「年末の実感」なのであるからして、さいたまスーパーアリーナくんだりまで行くのはメンドーであるが〝UWF・ファイナル〟拝ませていただきます。そして、今年の泣き納めをしてクルック・ヘッドシザース！

1.4「戦極の乱」で実現する〝柔道世界一〟vs〝寝技世界一〟吉田秀彦vs菊田早苗戦。ライトヘビー級での闘いとなるため吉田は10キロ以上の減量か必要となるが、はたして吉田道場とクラバカのボス対決の行方は？

DDT外伝 by高木三四郎社長

リングを捨て町へ出よう!?

プロレスラーと2ちゃんねる 第7回

ターーーーー!! というわけで、今回はこのタイトルでコラムを書きたいと思います。題して『プロレスラーと2ちゃんねる』(笑)。

ぶっちゃけ、俺様は数年前まで2ちゃんねる中毒でした(爆)。自分でトリップつけて書き込んだりしたこともあったし、一時期はDDTスレに貼り込んでファンの皆さんからの質問や疑問に答えてたりしてた時代もあったぐらいです。

それだけ熱心な2ちゃんねらーだったのですが、数年前からあまり関心がなくなってきました。なぜかって? それは鍛えてるから……ではなく、自作自演が多いからです。なぜそういう結論になったかというと、じつは自分で2ちゃんねる型の掲示板を見つけてきて「3ちゃんねる」ってヤツをやってたんですよ。まあ、それだけ中毒だったわけですが

そこでいろんなスレを作ったり、できたりして、わりとDDT版の2ちゃんねるみたいな空間ができてたんです。で、ある程度できあがった段階で荒しを誘導するようなスレや書き込みをしてみたんですね。そして食いついた書き込みのIP(インターネットなどに接続されたコンピュータや通信機器などとの識別番号)を見てビックリ。ほとんどが自作自演だったんですよ。しかも、ほかのスレではわりと良心的なことを書いてた人と同一のIPもあったりで……。

こういうのもあった。「今日の大会を観に行ったけど、つまらなくてうんぬんかんぬん……」とか書いてたのがあって、確かに興行の1時間後くらいの書き込みだったんだけどIP見たら九州の人だったり(笑)。まあ速報とかあるからね。何かの速報を見て、その内容書いてつまらなかった、とネガティブなことを書いてるんだよな。なんの意図があるんだかよくわからない。

憶測なんだけど、たぶんストレスの発散だろうな そうやってネガティブなこと書いて、それに釣られて別の人間が書き込んだりするのを楽しんだり。まあヒマだよなと思うよ。そういうことがあってからは「ああ、こんなもんなのかな」と何か冷めちゃって、あまり見なくなっちゃいました

とまあ、俺様はもう卒業したんだけど、けっこうこの業界は2ちゃんねるの声に敏感だったりするんだよな。案外、名前を聞いたら「エッ!?」と思うような選手や関係者がじつは2ちゃんねるに過敏だったりする。そして大抵ネガティブなことを書かれてるの見て凹んでる。なんで、あまり書かないほうがいいぞ。けっこうみんな過敏に信じ込んじゃうからな(笑)。

熱心な2ちゃんねらーだったという三四郎社長だが、現在もブログを中心にメルマガやミクシィなどインターネットを有効活用している様子。特ダネ満載の三四郎ブログのアドレスはプロフィール欄をチェック!

DDTプロレスリングの社長兼レスラー
1970年1月13日、大阪府出身、趣味は高級時計収集。更新頻度もかなり多めで好評の高木三四郎の「新宿御苑ではたらく社長レスラーのブログ」アドレスは→http://blog.livedoor.jp/t346/

金ちゃんのどこまでやるの?

第30回 田村vs桜庭戦に期待!の巻

いに桜庭vs田村戦が決定したね!

やっぱりサクも田村さんもUインターで同じ釜の飯を食った仲間だから複雑な思いはあるけど、とにかくいい試合、プロの試合を見せてほしいね

俺たちはUインター時代、とにかくいい試合をすること、観客を満足させる試合をすることっていうのを、とことん叩き込まれたからさ やっぱり「Uインター出身者同士の試合は違うな」っていうところを見せつけてほしいよね。

俺たちが若手の頃、パンクラスが旗揚げして騒がれたとき、やっぱりUインター内でも若い選手たちは、みんなそういう試合がしたかったんだけど、「それをやってプロとして観客を満足させる試合ができるのか」っていうことが壁になって、なかなか難しかったんだよ。

当時、若手だった俺たちが宮戸さんから言われたのは「俺たちは、お客さんがチケットを買って観に来てくれるからメシが食えるんだ。いい試合をしないと、次にまたチケットを買って観に来ないだろう」ということだったんだよね。

その宮戸さんに言われた言葉は、そのままいまの格闘技界に対して、俺が思ってることでもあるんだよね。いまの総合格闘技って、プロ意識の足りない試合が多いと思うんだよ。だからお客さんが入らなくなって、どこも厳しくなってるわけでしょ?

当時、宮戸さんが危惧していたとおりのことが、格闘技界で起こってるんだよね ファンを満足させなかったら、俺たちは闘ってる意味なんてないんだからさ

そういう意味で、Uインター時代に田村さんと垣原さんが東京ベイNKホールでやった試合(95年2月)は素晴らしかったよ。あのスタイルでも魅せる試合はできるんだって証明してくれたから、あれを観て凄く嬉しかったんだよね、

ただ、それを当時、先輩後輩の間柄でやるのは難しい部分もあったんだよ。やっぱり、四六時中一緒にいるわけだからさ。相撲部屋の同部屋対決みたいなもんだからね。

桜庭と田村さんがUインターでやった試合もそうだよね。いまの総合は、両選手が試合に向けてコンディションを作って、しっかり相手の対策を練って試合するわけでしょ? でも、当時の桜庭はUインターの若手だからさ、雑用が山のようにあるし、自分が勝つための練習っていうのはなかなかできなかったんだよね。

だから、いまとは状況が全然違うんだよ。そういう意味で、今度の大晦日の試合は、二人とも試合に向けて準備して挑む試合だから、楽しみだよね。

そういえばさ、桜庭が田村さんと3試合やったあと、じつは俺が田村さんと試合できるはずだったんだよ。「やったー! 田村さんとできる」と思って喜んでたんだけど、田村さんはそのままリンクスに移籍しちゃって、ガックリきたよ。俺も田村さんと試合したいな~。桜庭とやったあと、俺とやってくれないかな~。

じつは01年のリングス10周年記念興行のとき、田村さんはもうリングス離脱してたんだけど、前田さんが、あらためて田村vs金原戦でオファーしたらしいんだよね。でも、拳のケガが治らないとかで断られちゃったらしいんだけど。それで俺の相手がマット・ヒューズになったんだよ(苦笑)

とにかく、田村さんとサクには「これがプロだ!」っていう試合を見せてほしいね 俺たちは宮戸さんをはじめとする諸先輩方から「プロとはなんぞや」「いかに観客を満足させるか」っていうことを叩き込まれてきたからね。そのUインター魂を見せてほしいよ!

本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

GO FOR BROKE!

RU-CHA

No.1 Commentator MASA RU-CHA 第8回

巌流島での"二次元"プロレス

—今回は前号に引き続き、マサさんにとって激動の一年だった１９８７年を振り返っていただきたいのですが、夏の新旧世代闘争かうやむやになったあと、再びマサさんとアントニオ猪木さんか決着をつけることになりましたよね

マサ　巌流島でしょ？　あれ視聴率よかったんだよね。巌流島は２時間５分闘ったけど、あれキネスブック載らないのかね？

—　確かにギネス級ですよね（笑）

マサ　いまだかつてレスラーで２時間以上やったのいないんじゃない？　なかなかできるもんじゃないよ。

—　前代未聞ですよね。まあ、あの年の猪木さんとマサさんって、前代未聞のことばっかりやってますけどね

マサ　なんかやったっけ？

—　"手錠マッチ"をやったり、ビートたけしをリングに上げて大暴動になったりしたじゃないですか（笑）。

マサ　あ、そうか（笑）

—　巌流島はその中でもとくに異質な闘いだと思いますが、無人島の野外で観客なしでプロレスをやるって決まったとき、どう思いました？

マサ　何やっていいかわからなかったよ。いくら考えてもさっぱりわからない。あの試合で決まってたのは日付だけ。あとはなんにも教えてくれないんだよ。試合開始時間さえもわからないんだから。ホントだよ！

—　ある意味、島に渡った時点から闘いは始まってる感じですか？

マサ　そうそう。でも、いつ闘ったらいいのかわからない。アントニオ猪木はテントから一向に出てこないしさ

—　結局、夕方始まったんですよね？

マサ　４時頃だったかな？　準備運動して、俺のほうから先にリングに上がって、仕掛けたんだよ。

—　そろそろ始めよう、と　それがまさか２時間もやると思わなかったわけですか？

マサ　２時間なんて普通、やれるわけないもん。どうやって終わるかもわからないから、ああなったんだろうな。ホントだよ。

—　シュート云々ではなく、究極の"ケツ決め"ナシというか。いわゆるハイスパートなんかもないわけですか？

マサ　全然ない。必要ないしね。かえってそのほうか楽だったけとね　全部自分の感性でできたから

—　いまの選手で、ハイスパート的なものがまったくナシで試合ができる選手なんて、ほとんどいないんじゃないですか？

マサ　そうかもね　でも、俺はあのときアメリカで20年闘ってきたキャリアがあったし、アントニオ猪木も百戦錬磨　だからできたんだろうな。

—　マサさんは、巌流島以外にまったくやることがわからない試合ってやったことありましたか？

マサ　ないね。

—　マサさんでも、やっぱり初体験ですか。猪木さんは"誰もやったことないことがやりたい"ってことで巌流島をやったんですかね。

マサ　俺はあの人が何を考えてるのか、わからないけどね。

—　しかも、あのとき猪木さんは、倍賞美津子さんと離婚したはかりで、それもあって精神状態が妙にハイというか、やけくそな部分もあったみたいですけど。

マサ　それは俺も試合の直前に聞いたよ。でも、それ（離婚）かホントかどうか信用してなかった。俺はあの人がやること信用しないから。

—どこで何をされるかわからない（笑）。究極の出たとこ勝負の試合だったんですね　マサさんにとってもあの試合は、最も印象に残る試合の一つですか？

マサ　そうだね。ただ、あれはレスリングと言えるかな？　レスラーっていうのは、お客かいて、ライトがあって、試合するもんでしょ。でも、あれはなんにもないじゃん。

—　お客の声すらないわけですよね。

マサ　やっぱりレスラーっていうのは、お客の声援を聞いて、レスリングを作るんだよ。でも、それがない中で、よくできたなって思ったね　やっぱり相手か相手だからできたんたろうな

—　闘ってるときの精神状態も普段の試合と違ったと思いますけと、どんな気持ちで闘ってたんですか？

マサ　あのときは、もうどうにでもなれーっていう気分でリングに上がったよね。そして闘ってる中で、20分ぐらい経ったら、自分が何をやってるかわからないような気分になって。ふっと気づいたら、日が暮れてて、夕闇の中でかがり火が燃えてるんだよ。いつ日が暮れて、誰が火を灯したのか、わからなかった。ホントに気づかなかったんたよ

—　それだけ闘いに没頭していたんでしょうね

マサ　ああいう周りが真っ暗な中で、かがり火の中で闘うと自分が変わっちゃうね。陶酔しちゃうっていうのかな。

—　意識か違うところに行っちゃう感じですか

マサ　そう　闘ってるときは、もう無意識。

—トランス状態というか、ハイになってたんでしょうね。禅の境地みたいな感じですね。

マサ　何も考えてないんだけど、身体だけは動いて闘ってるんだよ。不思議な感覚だったな。これはやったもんにしかわからないよ。

—やっぱり凄い試合ですね。試合が終わったときのことは覚えてますか？

マサ　覚えてる。寒くて寒くて、病院直行だったよ。身体がグタっときちゃったし、肩甲骨折れたしね。

—骨折もしていたんですか

マサ　アントニオ猪木の蹴りで折られたんたけとね。向こうも鎖骨か折れたみたいたけと

—　さすがにその日はビール飲んだりはしなかったんですか？

マサ　もちろん飲んだよ

—　もちろん飲みましたか（笑）

マサ　50本飲んたよ　身体が痛くて痛くてしょうがないから。ビールで紛らわして、部屋中ビールの空き缶だらけよ。

—　２時間闘った痛みをビールで紛らわすというのは、さすがですね（笑）。

マサ　俺もいい経験したよな。レスラーとして。

—　お互いのキャリアの集大成が見せられた感じですか？

マサ　そうたね　プロレスの二次元の世界に行ったよ。

—　二次元じゃなくて、異次元だと思いますけど（笑）。

マサ　違うの？

—　二次元じゃ、平面になっちゃいますからね（笑）

マサ　ふ〜ん、よくわからないけど。まあでも、誰もやったことがない貴重な体験たったな

マサ　60年代末〜80年代前半、アメリカンプロレス黄金期を腕一本で渡り歩いたプロレスラーの中のプロレスラーにして、男の中の男。カルピスが大好きだが、いまは甘いものを控えている

掟ポルシェの萌え萌え女々苑

イラスト ゴロ ちゃん

第30回 元気美佐恵(NEO)の巻

私・湘南マタンゴ息子こと掟ポルシェがお届けする 萌え萌え女々苑』。今回のゲストは今年大晦日の井上京子戦を最後に引退する元気美佐恵選手! 年内完全燃焼を目前にして緊急インタビュー!

引退後の仕事はもう決めてるんですか?

はい、井上京子さんが飲み屋の『あかゆ』をやってて、そこにレギュラーですっと7年近くお手伝いさせてもらってるんですよ。それで、京子さんが「あかゆの2号店として、山形名物の芋煮のお店を東京に出したい」と言われたんで、それを手伝えたらなって

実際、埼玉の入間のご出身で、芋煮にあまり親しみはありませんよね?

元気 そうなんですけど(笑)。でも、京子さんって、なんか言葉に説得力みたいなのがありまして。京子さんの山形のご両親はラーメン屋をやってるんですけど、芋煮も凄くおいしく作れて。「そんなのウチの清子に習えばできるから」って言われました(笑)

京子さんのお母さんに習え、と。プロレスラーらしいザックリ加減ですねぇ(笑)。いま、お通しの料理は元気さんが作られてるんですよね?

そうなんです。それまでは京子さんがずっとやってて。京子さんってスンゴい飲むんです、ワイン15本とか。

聞くところによると、店の酒を一番空けてるみたいですからね(笑)

間違いないです。選手が一番飲む店で(笑)

で、選手の飲み代はお客さんにつける、と?

そこはこちそうにならせてもらってます(笑)……そんなことを言うと悪い噂が立ちそうですけど(笑)。

いやいや、お客さんはプロレスラーの方々がとれたけ飲めるのか見てみたいんですからいいんです!

で、二日酔いだとか言いながら、京子さんは昼間にお通しを作って、夜は「あかゆ」で働くっていう生活をずっとして大変だったんですよ。だったらお通しを自分が京子さんの代わりに作れば、そのあいだの時間休めるじゃんって。

先輩思いですねぇ。

それまで料理は一切しなかったんですよ、自分。やっぱり、京子さんが大好きなんで。

NEOの選手はみんな京子さんのことをホントに好きなんですよね。で、いまのところ芋煮を作ったことは?

ないですッ!!(キッパリ)。

それはまずいです(笑)。引退までもう1ヵ月ちょっとしかないから早く作ってみてください! 元気さんのプロレス入りのきっかけは、元気が出るテレビ!!の女子プロレス予備校ですよね。誰か憧れの選手がいたとか?

クラッシュギャルズが大好きで。

クラッシュど真ん中世代で。でも業界入りは21歳と、かなり遅かったですよね

そうなんですよ。メチャクチャ引っ込み思案で自信がなかったので ホントは中学を卒業してすぐオーディションを受けたかったんですけど、何もしないであきらめちゃったんです。それから普通に就職して、テレビで深夜に対抗戦時代の女子プロレスを観たときに、冷めてた熱がバーって出てきちゃって。

女子プロレスの黄金時代ですね!

山田(敏代)さん、豊田(真奈美)さんの全盛期というか。でも、もう18すぎてたので、プロレスラーになれないと思い込んでたんです。でも『元気が出るテレビ!!』を観たら、21歳とかの人が出ていて。コーナーの最後に山本小鉄さんが出てきて、「あなたも夢をかなえてみないか!」ってテレビ画面からこっちを指差してるわけですよ!

「私のことだ!」と(笑)。

「自分のための番組!?」って思って。当時、部屋か2階だったんですけど、すぐに両親がいるところに行って、土下座して涙を流しながら「プロレスラーになります!」って言って(笑) 親はポカーンって感じで。「そんなこと言ってるんだったら、嫁に行きなさい」って言われて。

ガハハハハハ! 血迷ったか、みたいな扱いで。

それでテレビに出て、オーディションを受けたら受かってなれたので、ホントに自分のための番組だったなって

もう、出ちゃえば、親は反対しないですよね?

出た瞬間から応援してました(笑)真剣なのがわかれば、反対はしないですよね。だから、いまは自分の一番の応援団ですし。父親はとくに。

タッパはあるし、素質は見抜いてたでしょうしね。

とうなんですかねぇ? 私が負ける試合とかも観てるんですけど、いろいろとダメ出しするんです(笑)。

ファンが選手に上から目線で試合内容にモノ申すのは、厄介な女子プロファンの典型です(笑)。

で、甲田社長にたったかなぁ? ウチの親は「チャンピオンベルトはいくらで買えるんだ?」って言ったことがあったみたいで。要は八百長ですよね(笑)。

ガハハハ! ちょっと間違ってるけど、いい親御さんじゃないですか(笑)。

「金払うから娘を勝たせろ」みたいな、そういうことを言い出したことがあって。なんか発想がおもしろいんですよ。本気で思ってるわけじゃないと思うんですけど。あと、ウチの親はトロフィーも勝手に自分で作ってるんです。

身内のゴルフコンペじゃないんだから(笑)。

家に帰って、こんなのもらってないし」みたいな(笑)。「どうしたの?」って聞いたら、「お母さんには内緒な。俺が作ったんだ」って言って。それにお金を使ってることが言いにくいみたいで(笑)。

掟 チャンピオンの権利を買おうとしてるぐらいだし、きっとお金は持ってるはすなので大丈夫ですよね(笑) 引退は、故障か理由とかじゃなく2年前から決めてたみたいですね。

元気 そうですね。デビューしてからいままでケガとか病気で欠場したことが一度もなかったんですよ。

鉄人ですねぇ! 凄いことですよ!

べつにケガをしないように闘おうっていうプロレスをしてたわけじゃないんですけどね。それだけは自分は全プロレスラーに誇れることだなって思い始めたんですね いま15年目の35歳なんですけど、「キリがいいところで35で辞めよう」って、2年前にふと思ったんです。

35歳定年制を自分で敷いたわけですね。全女的には10年うしろ倒しになっちゃいましたけど(笑)。今後も名実ともに元気で頑張ってください!

げんき・みさえ■本名・渡辺美佐恵。1973年2月14日、埼玉県入間市出身。「天才・たけしの元気が出るテレビ!!」の女子プロレス予備校を経て94年8月に全日本女子プロレスでデビュー。97年にネオ・レディース(現・NEO)に移籍。今年大晦日の後楽園大会での井上京子戦で現役を引退。日本の現役女子レスラー最長身を誇り、リング上はもちろん、京子経営の飲み屋「あかゆ」(TEL 03-3785-8521)でも大暴れ!? 175cm、98kg。ブログアドレス→http://genki.kyoko-akayu.com/

NEO女子プロレス

08年11月12日のNEO後楽園大会で小島聡と一騎討ちを行なった元気。敗れはしたものの真っ向勝負を挑んだ元気のファイトはファン&関係者から大絶賛。試合後、小島は「とても引退する選手とは思えない」と仰天!

掟ポルシェ■掟ポルシェのバンド ロマンポルシェ。か、またまた東京でフィフバブオ・マンスト 2・6(金)19時~@新宿ロフト ゲストはスウェ・ティンコポ・プアイトルのパ・ラヒーンス他 タイトルは 合法ライブ へつにやましいことは何もないはず! (問)新宿ロフト(03-5272-0382) その他の情報は掟ポルシェbgを死ぬ気でチェック! 【http://blog.excite.co.jp/porsche/】

佐藤譲

イラスト エロコエロオ

第10回 ハードロックとフュージョンにシンクロするプロレス幻想と鈴木さん

1976年、静岡県生まれ。千葉県育ち。クラブ・ミュージックなど音楽の解説を書いたり放送作家やったりしています。携帯ゲームを作りました。タイトルは「GPS探偵」です。よろしくお願いします

「スター・プロレステーマ」こと作曲家の鈴木修さんの新作「STYLUS」の発売イベントに行ってきました。

当日はライヴとトークの二部構成。年配のファンが待ち構える中、いたって普通の格好で登場した鈴木さんは、あまりライヴ慣れしていない様子ながら、力一杯演奏を披露。まるで子どものために頑張るお父さんのようです。派手な入場曲のライヴなのに、妙に和んでしまいました。それにしても、こんな普通そうな方から数々の名曲が生まれたとは驚きです。

もともとテレビ朝日の音響係で「ワールドプロレスリング」担当たった鈴木さんが作曲を始めたのは90年代に移り変わる頃。当時はほかの番組も担当し、との番組でどんな音楽をかけても自由たったことから、新日内でオリジナル曲を作る機運が高まったのがきっかけたそう。以降、他団体でも船木さんの「RED ZONE」や田村さんの「FLAME OF MIND」などオリジナル曲が多数誕生することになります。ちなみにそれらの多くは「ハードロック+フュージョン」でした。

当時はガンズやモトリー・クルーなどハードロックやヘビメタの全盛期。また日本ではF1ブームもあってT-SQUAREの「TRUTH」が大ヒット。フュージョン人気に火がついた頃でした。つまりヘビーなギターとシンセのメロディで構成される鈴木さんの音楽には、当時の最新トレンドが融合していたのです。

そして、この二つの音楽が象徴していたのは「幻想の提供」でした。ハードロックとヘビメタはその奇抜なルックスを含め、いわゆる「ロックスター」を象徴するデカダンで破天荒なロールライフを体現した音楽。一方のフュージョンは高い技術が求められる音楽です。いずれも「普通の人には絶対になれない(できない)」のがポイント。これは、たとえば馬場さんや猪木さんが絶対に譲らなかったヘビー級重視の姿勢にもつながる「人であって人でない凄さ」を醍醐味とした、旧来のプロレスの魅力と重なると言えるでしょう。

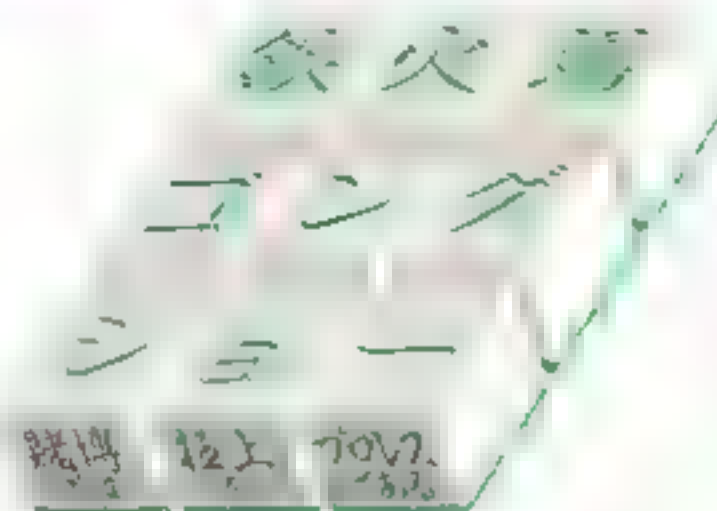
ライヴ終了後のトークで「武藤が1・5メートルのシイラを手で釣り上げた」「蝶野か馬に乗ったら馬か悲鳴を上げた」「橋本が沖縄空手のチャンピオンと乱取りして失神させた」など、三銃士の数々の武勇伝を楽しそうに語る鈴木さんは、まさにレスラーの「人ならぬ凄さ」を直に体験した人物。そして、そんな破天荒な超人たちに畏敬の念を捧げる「普通の人」たからこそ、鈴木さんはレスラーを神格化させる曲が書けたのでしょう

この後、90年代中期にはフュージョン人気も後退。ハードロックも、閉塞感漂う若者の心情をリアルに歌ったグランジに駆逐されていきます。そして、デカダンで破天荒たったプロレス幻想も徐々に崩壊し、世間の流れと乖離していきました。もしかしたらハードロックでフュージョンなオリジナル入場曲の隆盛は、プロレス幻想が受け入れられ、世の中の流れとリンクしていた最後の幸福な時代の産物だったと言えるのかもしれません。

たた、最近変化が起きそうな予感。なにせ今年はガンスが17年ぶりに新作をリリースし、世間的にもハードロック復権の兆しが見えた年。そういえば最近の新日もなんだか妙に調子が良さそう。プロレスか再び時流をとらえ復活するのか。もしかしたら、その運命はハードロックの盛り上がりと鈴木さんが握っているのかもしれません。

鉄火場ゴングショー

ドサ要素こそがプロレスだ!

日本プロ麻雀協会所属のフリープロ。"観戦記の鬼"として一部の麻雀ファンのあいだで根強い人気を誇る

「どうでもよいことは流行に従い、重大なことは道徳に従い、芸術のことは自分に従う」

今回はちょっと趣向を変えて、日本を代表する映画監督として世界的に評価されている小津安二郎氏の語録から。あまりにも日常的すぎる風景はかりを収めた氏の作品群は、その娯楽性の低さからか国内ではさほど人気を得ることはなかったか、逆に〝日本の日常〟を知らない海外の映画マニアからは絶賛されたという。

「娘が嫁に行く」という出来事をとてつもなく大きく捉えていた小津氏だからこそ、それ以外の事件が何も起こらない物語を最高級のクオリティで撮ることができた。が、娯楽を求めて映画館に向かう大衆が支持したのは、やはりギターを抱いた渡り鳥やマカロニウエスタンであったのた。そんな小津映画にまつわる小話をふまえたうえて、本題に移りたい。

すべての小津安二郎作品がそうであったように、良い映画からは作り手の価値観がなんとなくうかがえるものだ。そして作り手と観客それぞれの価値観が見事に一致したとき、そこに〝忘れられぬ一本〟というものが誕生することとなる。

もう長いこと〝プロレス的なもの〟と〝ギャンブル的なもの〟の共通性について語ってきた筆者たか、そうした価値観をとある一本の映画から教わっていることを唐突に告白してみたい。

その映画とは『ポルノギャンブル喜劇 大穴中穴へその穴』である。1972年に公開され、まったくかすりもしなかったこの作品において表現された価値観、あるいは世界観そのものが、じつは当コラムのお手本となっているのだ。

タイトルからなんとなく想像がつくとおりのお色気コメディであり、いまも昔も内容においては語られることのない〝忘れられた映画〟なのだが、注目すべきは山城新伍演じる主人公の設定だ。

自堕落で女好きのバクチ打ちというところまでは定番だが、職業はなんと女子プロレス団体の広報(というよりは興行の呼び込み?)。物語の大筋は、バクチ癖がたたって団体を追い出されてしまった主人公が〝日米女子プロレスワールドシリーズ〟開催のためにギャンブルで一攫千金を狙うというものになっている。

ヤクザや暴力を恐れず、インチキ商売やイカサマ賭博で金を稼いでゆく主人公のムチャクチャさ加減は、我々がプロレスに求める破天荒さそのものだ。プロレスラーにも負けぬ武勇伝を数多く持つという山城新伍の個性もまた、このキャラクターに大きな説得力を与えている。

1972年といえば、現実においてもまだまだ女子プロレスというジャンルが誕生したばかりの時代であり、興行としてはドサ中のドサもいいところ。暴力団との関わりも噂され、世間的には女相撲とさして変わらぬ類のものであったという。つまりは〝プロレスに関わるもの〟と〝ギャンブルに関わるもの〟に共通するやさぐれ感を、この映画は見事に描写してくれているのだ。

とちらかといえばギャンブル映画であり、リングを使った場面もほとんど存在しない本作ではあるか、その全編において〝プロレス的なもの〟が楽しめる逸品であることは間違いない。そしてこの映画の主題がギャンブルであったことにより、筆者の脳髄にはまたよけいな価値観が刻み込まれてしまったのだった。

プロレスには〝ドサ要素〟と考えるオールドファンの方々にも是非おすすめしたい一本である。また、ミル・マスカラスによる一連のルチャ映画を好むような皆々様にとっても、ひょっとしたら好みであるかもしれない。まずは観ろ! 話はそれからた!

携帯サイト『kamipro Hand』の更新の一時停止のお詫び

拝啓

平素は格別のお引き立てを賜り誠にありがとうございます。

このたびは携帯サイト『kamipro Hand』の更新の一時停止という事態を引き起こし、ユーザーの皆さまには多大なるご迷惑をおかけいたしましたことをお詫び申し上げます。『kamipro Hand』の運営は有限会社イプシロンが行なっており、編集・原稿入稿作業を弊社が行なっておりましたが、今回なぜ更新が一時停止したのかにつきまして経緯をご説明させていただきたいと思います。

弊社といたしましては、現在の携帯サイトにおいて豊富な動画や音声配信の必要性を感じ、新規携帯サイト『kamipro Move』の開始を決め、12月以降も従来どおりに『kamipro Hand』と並列していく意向でした。しかし、ギリギリまで交渉を重ねてまいりましたが11月30日の夜に『kamipro Hand』の運営を行なっているイプシロンとの交渉が決裂いたしました。

弊社は『kamipro Move』がオープンする12月1日以降も『kamipro Hand』に記事を提供して更新を続けていく意志はあり、その旨はイプシロンにお伝えしてまいりましたが、11月30日の夜にイプシロンから「12月1日0時以降、ダブルクロスのスタッフが管理画面へアクセスできないようにする」との通達を受けました。これを受けるかたちで、11月30日23時34分に弊社から「当面の更新を停止します」という旨の記事をアップしました。

12月1日も交渉を続けていく中で、イプシロンからは「イプシロン独自で取材・企画した『kamipro Hand』を運営したい」という打診がありましたが、『kamipro』編集部が携わらないサイトが『kamipro』の商標を使うというのは常識的に考えてもありえない話ですので、弊社はこれを拒否しました。その後、ユーザーの皆さまからのお問い合わせや苦情が殺到する中で、弊社は12月1日夕方に管理画面へのアクセス制限解除の通知をイプシロンから受けました。

しかし、その直後に諸般の事情により12月末日をもってdocomoの『kamipro Hand』の閉鎖が決定しました。弊社は更新停止の記事を下げ、1日夜から11月中までと変わらない内容でニュースやコラムの更新を再開いたしました。

結果的にはユーザーの皆さまの多大なる期待を裏切るかたちとなり、また『kamipro Move』オープンまでの告知が不徹底だったこともあり、大変混乱した状況を作り出してしまいました。ご迷惑をおかけいたしましたユーザーの皆さまにはあらためてお詫び申し上げます。

なお、『kamipro Hand』はdocomoが12月末日で閉鎖。au、Softbank、WILLCOMは2～3月で順次閉鎖させていただきます。『kamipro Hand』は2～3月をもって全キャリアで閉鎖することになりますが、月替わりのタイミングで引き続き『kamipro Move』をお楽しみいただければ幸いです。

今後はこのようなご迷惑をおかけすることのないよう、ユーザーの皆さまに信頼されるようなサイト制作を行なっていく所存でございます。今回の件につきまして、重ねてお詫び申し上げますとともに、今後とも変わらぬお引き立てのほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。

敬具

株式会社ダブルクロス

こ の前、甥っ子に「壊れそうなものばかり集めてしまう」と言われたが、さっぱり意味かわからないじゃないか　いったいどうなってるんた、ジャパン!　しかし、どうなってるかというと、年末年始のほうがクレイジーたな。Dynamite!! も 戦極 も、ニュージャパンも、困ったことかあったらいつでもオレに行ってこいよな。何もてきないけど、応援たけは一生懸命声出すからよ!　それじゃあ、読者のみんなも声出していくぜ!　一、十、百、ゼンコク! センコク!!

[illegible]

北岡悟の記事がよかった。北岡のマイクアピールは最高でした。いままで五味選手に対して面と向かって発言する選手がいなかったので、これでまたおもしろくなりました。
【福島県・[illegible]さん・会社員・29歳】

確かにサトルはやってくれたな。これは2009年一発目の大会になりそうだぜ。しかも今回の「kamipro」ではサトルの部屋がオープンになってるそうじゃないか。まったくkamiproのヤツらはなんでヤツらなんだ。まさかオレの部屋に来たりしないよな。豊島区には立ち入り禁止だぞ。

桜庭和志vs田村潔司の変態座談会がおもしろかった。変態座談会の大ファンなので。『U.W.F.変態新書』も買いました。あまりに目立つ表紙に、店頭で買うのが……アマゾンで買いました。
【千葉県・高橋朋子さん・販売業・29歳】

そんなにあまりに目立つ表紙だったのか……いったいなんのことだい。もしかして『変態』って字がアンタ、[illegible]。それじゃあ、ヘンタイのレベルとしてはブームは止まりだぜ。

森達也さんの「一刷新するテレビのモラル」がインパクトがありました。モザイクやテロップを使う映像マンとしてのプライドに感心します。それにしてもビデオリサーチが電通の天下り先と知っている人は少ないでしょうね。
【兵庫県・[illegible]さん・会社員・42歳】

オー、ミスター・ビデオリサーチ……オレも知ってるぜ。[illegible]の会社だろ。しかし天下りってのは[illegible]聞き捨てならんな。ただ、[illegible]も天下りできるならもちろんこのプロフレ[illegible]

三浦和義氏の急死について、交友のあるサスケバカ社長がしゃべりまくってて最高です。やはり怪しい人のところには怪しい人が集まるんですね。あと、サスケと一緒に写ってた女性が美しすぎ。さすが金髪マニア。女性に対する審美眼を、キングモーも見習うべし。モー・カールはちょっと……。
【宮城県・カトーさん・変態宮城支部長・37歳】

なぜ、サスケに[illegible]と一緒に[illegible]いるんだ

北斗晶の記事はおもしろかった。北斗という人は本当に適応力があって凄いと思う。やっぱりプロレスをわかっている人間はどの世界にいっても通用するのかなと思って嬉しくなった。でも、レスラー出身でここまでセルフプロデュースがしっかりできる人はほかにはいないと思います。
【石川県・[illegible]さん・不動産会社勤務・35歳】

セルフプロデュースといえば、オレが北斗[illegible]

土屋プロデューサーのインタビューは勉強になりました。地上波だからわかりやすくしないといけないという概念を根こそぎ覆すようなインタビューで衝撃を受けました。わかりにくくすることがヒントなんですね！　確かに「知らないの？」と言われたら、ちょっと気になって僕も観るかもしれないです。
【兵庫県・[illegible]さん・学生・23歳】

確かに「知らないの？」と言われるとカチンとくるな。オレも「IKZOって知ってる？」って言われてあわてて[illegible]。でも、見つからなかった

「UFC GAME OVER?」の記事を読んだのですが、本当にUFCは危な

NOVEMBER号
おもしろかった記事
RANKING

1 桜庭vs田村特集
2 北岡悟
3 亀田大毅
4 土屋敏男プロデューサー
5 UFC GAME OVER

やっぱりサクラバとタムラってヤツの試合は注目されてるんたな　ジャパニーズの感覚はあいかわらずサッパリわからないか、盛り上がるならおもいっきり盛り上かってくれよ!　ちなみに、オレ的にはサトルとタカノリの試合に目か離せないと思っている　しかし、こうやって話していると、オレもかなりヘンタイに近ついてきたな! アハハハハ!!

紅白なんか
見てる場合じゃないぜ。
でも、森進一にだけは
注目しろ!

『kamipro Hand』トンデモ迷作選

何やら「kamiproHand」近辺がにぎわってるらしいじゃないか。そんな目先のことに捕われているユーたちをぶっちぎって、オレはこんなお宝を発掘したぜ! これはどうやら05年5月14日の新日本・東京ドーム大会の原稿らしいな。こんなクレイジーな原稿を載せてたなんて……

さすがマット界の盟主というべきか。新日本ドーム大会は全日、ノアのトップである武藤、三沢が表敬参戦し、プロ格界からは、世界のTK、パンクラスの強豪ロン・ウォーターマン、闘魂代理人藤田、さらにはハクレ出戻り軍団とも言える、上井 "WRESTLE-1" プロレスの面々が集まった　また、実際に来場しなかったものの、橋本真也、前田日明というビッグネーム来場の噂もあり、観客にとっては、期待感あふれる、オールスター的な要素をちりばめたお祭りイベントとなった　ある意味、正しい「新日のドーム」と言えよう　しかし、今回の主催者発表の観客動員数か3万5000人と、今年1・4の4万6000人を下回り、新日本ドーム大会史上最低となったように、正直、場チカラの弱さを実感し、寂しさを覚えた　一部では「野球の5万5000人を基準にしていたのを、実数に変更したため観客動員数か減った」と報道があったか、これについてもすでに過去に耳にしたエクスキュース　実際に、ここ何年か会場に来ているファンなら、現実かわかるはずた　ハックネットから左右1塁側、3塁側にかけては席を設けていたが、もちろんステージの演出や映像の関係もあるのだろうか、ほとんどの席はツブされていた　ハッキリ言って、素人目には、なんのためにドームで興行を打っているのかわかりづらい　そして、その器か大きすぎることもあってか、会場内の熱は高まりにくかった　かつての新日本プロレスの栄光を知る者にとっては寂しい限りたろう

そんな中で、選手たちは素晴らしくクオリティの高いファイトを見せてくれたと思う　たた、気になるのは、意図の見えにくい試合か多かったこと。なんの前触れもなく組まれた試合の多さ。ブラック・タイガー出現や、みのる vs アレク、武藤 vs H2Oマンのあまりにも唐突なマッチメイク　三沢&藤波組にしても、もちろん、龍虎合体は素直に見られて嬉しいのだが、熱心なノアファンでさえも、いきなり発表されて、どうリアクションしていいのかわからない人は多かったはず　提示されたカードに対して、なかなか感情移入がしにくい　それとも僕のイマジネーション不足なのか、正直、悩んでしまう

ウタウタに終わってしまうマイク、中途半端な乱入劇。団体側は、レスラーたちか一つの場で掛け合わされば、自然発火的に何かか起こると考えているかも知れないし、それでうまくいった過去もあったのだろう。ただ、今日に関して言えば、僕はこの場から熱いものが生まれてくることを感じなかった　せっかく、観客は "何か" を期待して、盛り上がるための体勢で、"祭り" に来ているというのに、その期待感に応えられるものをキチンと提供せず、"投げっぱなし" にして、観客に火をつけることができない

メインのタイトル戦。なぜ、3冠も賭けないのか?　前回がWタイトル戦にもかかわらず、今回はIWGPだけの不自然なタイトルマッチ　ほんの少しの、顧客満足に対する意識　それが慢性的に欠乏するようなら、いつか観衆はその爆発の臨界点かあることすら忘れてしまう　場チカラの弱さは、観客の数だけの問題じゃない　観客のパワー の低下にも因るところが大きい　それを招いたのが、団体側たとすると、笑えない。プロレス界の盟主たる新日本には、プロレスの凄さを感じさせて欲しい　プロレスファンが、レスラーが、関係者が胸を張って、その存在をその活動を誇れるような空間を作ってほしい（上杉）

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

“読者ペイジ”
ジャクソン

いのでしょうか？　心配です！　PRIDEがなくなったいま、UFCに頑張ってもらわないとどうしようもないと思います。年末のUFCのヴァンダレイvsランペイジの試合も楽しみにしています！【埼玉県・ガガさん】

●心配するな。イベントってヤツはそんなに簡単になくなったりしないんだぜ。だって、ここ数年でなくなったイベントっていったらPRIDEぐらいだろ？　MARSだって潰れたってアナウンスはされてないんだからな！　え？　自然消滅じゃないかって!?　ミスター・アマノ、そうなのかい……？

TBS格闘技番組のプロデューサーは「わかりやすく」、土屋Pは「わかりにくく」ということを言っているのを読んで、結局テレビもかっちり決まった勝ちパターンというのがまだないんだなと思いました。そういう状況にさらされているDREAMやK-1って大変だと思います。【kamipro Hand投稿】

●ユーは素晴らしいことに気づいたな、ソノ！　そのネーム投稿なのがもったいないくらいだ！　そう、テレビだって先行きわからない水商売なんだよ。だから、いい番組をひたすら作ればいいってわけさ。クックック。ひさびさに知ったかぶりをやってしまった！

ひさびさの浅草キッドの登場が嬉しかった！　やっぱり『kamipro』で二人のインタビューが載ってないのは寂しすぎる。SRSがなくなって唯一よかったことは、浅草キッドがこうやってインタビューに出てきてくれることだ。バンザーイ！【千葉県・早野キッドさん・フリーター・30歳】

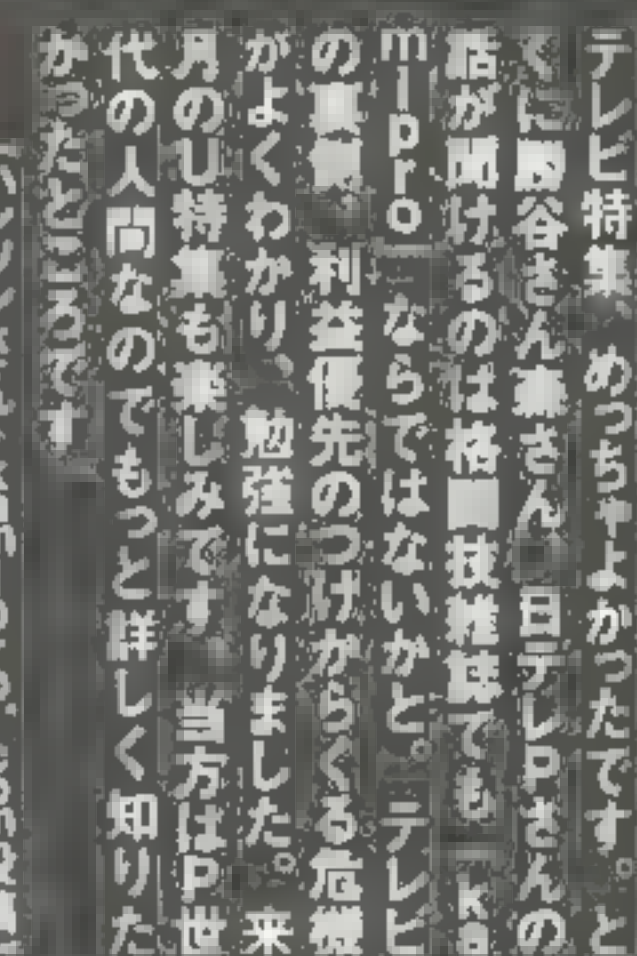
●キッド☆アサクサはなーんてパンクなんだ。写真といいトークといい、ヘブンな感じだぜ！　しかし、ミスター・タマブクロは平成教育委員会ではフルネームで出せないそうじゃないか。いったいジャパンのテレビワールドは何が起こってるんだい？

谷川さんのインタビューを読んで衝撃を受けた。あの魔裟斗さんの優勝を八百長と思ってる人がいたんですね。あんなに頑張っていたのに。その魔裟斗さんにケチを付けるなんてあんまりだと思いました。そして、他のファイターは知りませんが、魔裟斗さんが『Dynamite!!』に出られないのは仕方がないと思います。他の人はケガといっても、ちょっとよくわかりません。【広島県・木下翼さん・中学生・14歳】

●「八百長」って言葉はジャパニーズはやけに気にするみたいだな。確かに八百長って悲しいよな。「兄ちゃん、オレ、オレ」ってヤツの言うとおりにしてたら詐欺に遭っちまうんだからよお。

ターザンのテレビの記事を読んだけど、ハッキリ言って、テレビを観る以外にこの人は何もしてないなと思いました。それと、やっぱり歳をとるとNHKなのかなという気もしました。ターザンはたぶん大晦日も紅白歌合戦を観ると思います。【山口県・木村拓巳さん・学生・22歳】

●ターザンはもうとっくに還暦すぎてるんだからしょうがないよ。

テレビ特集、めっちゃよかったです。とくに[illegible]谷さん[illegible]さん、日テレPさんの話が聞けるのは格闘技雑誌でも『kamipro』ならではないかと。テレビの裏[illegible]、利益優先のつけがらくる危機がよくわかり、勉強になりました。来月のU特集も楽しみです。当方はP世代の人間なのでもっと詳しく知りたかったところです。【ハンソンさん・kamipro.com投稿】

●「U」ってのは、みんな好きだったらしいが、レゲエなオレはいったい何のことを言ってるのかサッパリだぜ。でも、「うp」とか「乙」とか「www」とかなら知ってるぜ！　最近はめっきりニコ動ってヤツに夢中なんだよ。アッハッハッハー！　ジャクソンZ―！

全体の感想ですが、ワンテーマで特集を組むのもいいと思いますが、ただインタビューを載せるのではなく、レポートなどの分析記事も読みたかったです。そうしないと、テレビと格闘技がどこまで行ってもつながっていきません。その点「HERO'S」テレビファイターの舞台裏」は読み応えがありました。次は『土屋vs石井』対談が読みたいです。【神奈川県・[illegible]下[illegible]さん・学生・24歳】

●[illegible]はなかなか[illegible]じゃないか。その調子だー！　この前[illegible]に[illegible]ったらオレの席にバイトのタカハシくんって[illegible]が座ってた[illegible]ちょっと[illegible]てやらなきゃいけないと思ってたが、ちょうどいいフレンズができたぜ!!

ダンディ坂野「テレビ界の天国と地獄」がおもしろかった。プロレスや格闘技と関係ないのに、関係ありそうな感じがおもしろい。【東京都・[illegible]さん・会社員・41歳】

●ゲッツはトンちゃん（トシヒコ・タバラ）が大好きなんだぜ。そして、じつはオレも大好きだ！

埼玉県・[illegible]さん／マサみたいなレジェンドはイラストにしてもホントにクールだぜ。しかし、オレを描いてくれるボーイズ＆ガールズはいないのかね。フー

神奈川県・亜衣さん／こりゃ、男前なタカノリだな！　今度はオモツヨってヤツを描くんだろ？　まったく楽しみでしょうがないぜ！

埼玉県・[illegible]さん／『今号もシンヤが表紙なのかい？ [illegible] みんな休暇中なのかい？

大阪府・剣洋人さん／『八百長★野郎』が評判だって聞いたぜ。いろいろ文句言っ[illegible] にはヘブンな1冊さ！

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、タメたしても、せーんせんキャッチ
するから安心しろって!　待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ

- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ！

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先&メールアドレスは
radical@kamipro.com
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6
パレ・ジュノ2F
（株）ダブルクロス kamipro編集部
「角砂糖」係まで

携帯サイト「kamipro Move」からの
投稿もできるぜ

団体INDEX

※50音順及びアルファベット順

■アパッチプロレス軍
☎03-5610-2609
〒130-0013 東京都墨田区
錦糸2-6-11第2赤木ビル303
http://www.apache-pro.com

■大阪プロレス
☎06-6636-6672
〒556-0002 大阪府浪速区
恵美須東3-4-36 フェスティバルゲート2F
http://www.osaka-prowres.com

■沖縄プロレス
☎098-861-9773
〒900-0014 沖縄県那覇市松尾1-3-1
エスプリコートビル5階
http://okinawa-prowres.jp/

■キングダム・エルガイツ
☎042-376-1639
〒206-8585 東京都多摩市
関戸4-8-18 TOHO聖蹟桜ヶ丘ビル
http://homepage3.nifty.com/...

■健介オフィス
☎048-982-0960
〒342-0041 埼玉県吉川市保1-4-12

■新日本プロレス
☎03-6407-3111
〒153-0042 東京都目黒区
青葉台4丁目4番5号
渋谷スリーサムビルデング8F
http://www.njpw.co.jp

■シュートボクシング(SB)協会
☎03-3843-1212
〒111-0033 東京都台東区
花川戸2-2-8 ワコー花川戸ハイツ
http://www.shootboxing.org

■[illegible]
☎050-3599-7872
〒113-0033 東京都文京区
本郷3-6-13 太平ビル2F
http://homepage2.nifty.com/...

■仙台ガールズ・プロレスリング
みちのくプロレスと同じ
http://plaza.rakuten.co.jp/sendaigirls

■全日本プロレス
☎03-3288-0610
〒102-0073 東京都千代田区
九段北1-5-10 岳南九段ビル6F
http://all-japan.co.jp

■大日本プロレス
☎045-321-1598
〒220-0073 神奈川県横浜市西区
岡野1-13-5 横浜西口サンエースビル7F
http://www.bjw.co.jp

■[illegible]
☎03-5749-5030
〒142-0062 東京都品川区小山3-6-6
ワールドパレス武蔵小山1F&B1
http://www.takada-dojo.com

■日本修斗協会
☎03-5984-3209
〒176-0012 東京都練馬区
豊玉北1-6-13 カエサル江古田B1-101
http://www.[illegible]

■ハッスルエンターテインメント
☎03-3221-2431
〒102-0075 千代田区三番町6-1
渡辺ビル2階
http://www.hustlehustle.com/

■バトラーツ
☎048-963-0005
〒343-0046 埼玉県越谷市弥生町9-8
http://www.bat-com8000v.jp

■パンクラス
☎03-5986-2260
〒171-0021 東京都豊島区
西池袋5-26-13 パッスト池袋702号室
http://www.pancrase.co.jp

■ビッグマウス・ラウド
☎03-3888-3375
〒120-0024 東京都足立区
千住関屋町20-16-703
http://www.bigmouthloud.com

■CHICK FIGHT SUN
ZERO1-MAXと同じ

■プロレスリング・ノア
☎03-3527-5311
〒135-0063 東京都江東区有明1-3-25
http://www.noah.co.jp

■みちのくプロレス
☎022-785-7755
〒984-0065 宮城県仙台市
若林区土樋236
愛宕橋マンションファッオ E-08
http://www.michpro.jp

■DRADITION
☎03-3402-2474
〒107-0062 東京都港区
南青山4-2-4
シャトー青山第3-204号室
http://www.muga-world.jp/

■ユニオンプロレス
☎03-5360-6653
〒160-0022東京都新宿区
新宿1-12-3 藤田ビル1F
http://union.ne07.jp

■ワールドビクトリーロード
☎03-3369-2211
〒160-0023 東京都新宿区
西新宿2-6-1 新宿住友ビル35階
http://www.sengoku-official.com/pc/

■DDT
☎03-5360-6653
〒160-0022東京都新宿区
新宿1-12-3 藤田ビル1F
http://www.ddtpro.com

■DEEP事務局
☎052-339-0303
〒460-0071 愛知県名古屋市
中区松原1-2-23 第3栄ビル3F
http://www.deep2001.com

■DREAM(DREAM事務局)
☎03-5775-5065
http://www.dreamofficial.com/

■DRAGON GATE
☎078-333-9797
〒650-0012 兵庫県神戸市中央区
北長狭通7-1-4 サンクチュアリビル
http://www.gaora.co.jp/dragongate

■El Dorado
☎03-[illegible]
〒136-0074 東京都江東区東砂6-13-2
http://sports.livedoor.com/battle/eldorado

■FEG(K-1事務局)
☎03-3796-2977
〒150-0001 東京都渋谷区
神宮前2-18-22 S&T神宮前ビル3F
http://www.so-net.ne.jp/feg

■GCM COMMUNICATION
☎03-3556-6201
〒102-0093 東京都千代田区
平河町1-4-3伏見ビル4F
http://www.g-c-m.net

■IGF
☎03-5159-3380
〒104-0061 東京都中央区
銀座1-15-2 銀座スイムビル3F
http://www.igf.jp/

■IWAジャパン
☎03-3352-3366
〒160-0022 東京都新宿区
新宿2-15-13 第2中江ビル402
http://www.iwajapan.jp

■JEWELS
☎03-5458-2536
〒150-0042 東京都渋谷区
宇田川町12-3-1103
株式会社マーヴェラスジャパン

■JWP
☎03-5849-2341
〒121-0052 東京都足立区六木3-6-4
http://www.jwp-produce.com

■KAIENTAI DOJO
☎043-214-6960
〒260-0001 千葉県千葉市
中央区都町3-4-17
http://www.k-dojo.co.jp

■LLPW
☎048-297-9587
〒333-0832 埼玉県川口市
大字神戸162

■NEO
☎044-422-8344
〒222-0002 神奈川県横浜市
港北区師岡町879
http://www.neoladies.com

■RIKIPRO
☎03-3754-6340
〒146-0085 東京都大田区
久が原3-31-1 RIKIPRO道場内
http://www.rikipro.com

■U-FILE CAMP
☎044-932-0282
〒214-0014 神奈川県川崎市
多摩区登戸1568
http://www.u-file-camp.com

■UKR
☎044-833-4130
http://www.hiromitsu-kanehara.com

■U.W.F.スネークピットジャパン
☎03-3337-1889
〒166-0002 東京都杉並区
高円寺北2-15-1 2F
http://www.uwf-snakepit.com

■VALKYRIE
☎03-3556-6201
〒102-0093 東京都千代田区
平河町1-4-3伏見ビル4F
http://valkyrie.livedoor.biz

■ZERO1-MAX
☎03-5730-3966
〒105-0014 東京都港区芝2-8-13-2F
(株)ファースト オン ステージ
http://www.zero-one-max.com

■ZST
☎03-5388-0808
〒151-0053 東京都渋谷区
代々木2-23-1
ニューステイトメナー833号室
http://www.zst.jp

マット界の周辺情報をお届け!!

kamipro Info

DVD

ホーガン、アンドレ、ブロディらがよみがえる!!

新日本プロレスに来日した最強ガイジンをDVDに収録!!

新日本プロレスに来日した外国人レスラーたちの衝撃&レア映像をDVDで一挙公開!! 金曜ゴールデンタイムで暴れまわったガイジンレスラーたちを、「怪物編」、「悪役編」、「世界王者編」、「実力者編」、「個性派編」、「マスクマン編」、「名タッグチーム編」、「覚醒レスラー編」、全8章にまとめて収録。ホンモノの怪物レスラーたちの記録を手に入れよう。

★「新日本プロレス 最強外国人列伝」(エイベックス・マーケティング)
★定価 7,140円(税込) 発売中 ★収録時間 180分

DVD

08年のK-1 MAXのクライマックスがDVDに!!

名勝負満載!! 魔裟斗二度目の戴冠! その激闘をDVDで振り返れ!!

MAX史上に残る名勝負となった魔裟斗vs佐藤嘉洋、世界一を懸けた魔裟斗vsキシェンコ戦の激闘をもう一度! 「K-1 WORLD MAX 2008」トーナメントのファイナルとファイナル8を収録したDVDが登場! 決戦の日まで激しく互いを意識する魔裟斗と佐藤嘉洋の大河ドラマ、"絶対王者"サワーの3連覇を懸けた激闘など、好カードを余すところなく収録! 魔裟斗の勇姿を目に焼きつけろ!

★「K-1 WORLD MAX 2008世界一決定トーナメント~FINAL8&FINAL~」
★定価 6,090円(税込) ★12月24日発売 ★制作 TCエンタテインメント

DVD

『Dynamite!!』前に、08年の激闘をプレイバック!!

08年、DREAMの最終興行を堪能しいざ、決戦の待つ大晦日へ!

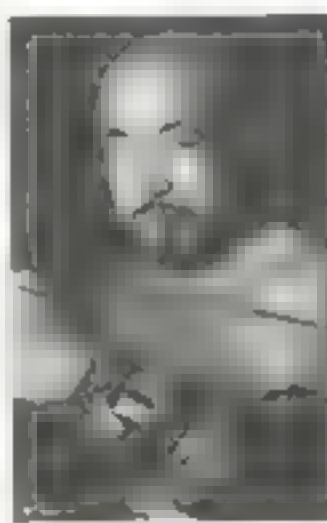
大晦日の『Dynamite!!』の開催を直前に控え、9.23「DREAM.6ミドル級GP決勝戦」のDVDが登場。DREAMの08年最終イベントのこの大会では、強豪ガイジンが勢揃いしたミドル級GP、そして船木誠勝vsミノワマンのパンクラス師弟対決、"Road to KID"の意味を持つ山本篤vs所英男。さらに秋山成勲、ミルコ・クロコップ、桜井"マッハ"速人らも参戦した豪華な面々による熱闘の数々はファン必見。

★「DREAM 6ミドル級GP2008決勝戦」(TCエンタテインメント)
★定価 5040円(税込) 12月24日発売

DVD

血まみれデスマッチ団体がDVDで帰ってきた!!

伝説のデスマッチ団体W☆INGその暴走ぶりを完全保存せよ!!

90年代前半に過激で奇想天外なデスマッチ路線で一世を風靡したプロレス団体・W☆ING。デスマッチのみならず、恐れを知らない松永光弘、金村ゆきひろ(現・キンタロー)、ミスター・ポーゴらによる命を削った破天荒なファイトで熱狂的な信者を生み出したW☆INGのDVDがリリース! いまでは半ば伝説化した血みどろデスマッチの数々を徹底収録! マニアは即買いだ!!

★「W☆ING伝説 vol.1~暴虐のレクイエム~」(ビデオメーカー)
★定価 10,500円(税込) 発売中 ★収録時間460分

DVD

『マッスル牧場CLASSIC』がDVDに!

"プロレスの向こう側"『マッスル』の魅力を凝縮!!

プロレスの定義を変えた『マッスル』の地上波初進出番組がファン待望のDVD化!! 「行こうよ! プロレスの向こう側」をキャッチコピーに徹底的に"魅せる"演出にこだわった舞台仕立てのプロレスが『マッスル』。本作品は07年10月からテレビ埼玉で放映された番組を収録した3枚組DVD-BOX。現在絶賛発売中の書籍『八百長★野郎』(『kamipro』編集部編)とともにどうぞ。

★「マッスル牧場CLASSIC DVD-BOX」(角川エンタテインメント)
★定価 10,290円(税込) ★収録時間 360分

GYM

ismの伊藤崇文と渡辺大介が直接指導!!

パンクラス・ゴールドジム湘南が入会金無料キャンペーン中!!

パンクラスism伊藤崇文と渡辺大介の2選手が、毎週火曜と土曜に「パンクラス・レッスン」を指導するゴールドジム湘南神奈川店(JR東海道本線辻堂駅南口徒歩1分)が、12月から無料体験&入会金無料キャンペーンを実施中! 本格的な総合格闘技の技術が学びたい人や初心者、女性もエクササイズ感覚で楽しみながら気軽に練習できるぞ!! 興味のある人はこの機会に入会しよう!

★「GOLD'S GYM湘南神奈川店」 ★時間 毎週火、土20:00~21:30
★神奈川県藤沢市辻堂2-7-1 湘南パールビル3-4F ★問 0466-30-5353

GYM

千葉県市川市に新道場がオープン!!

和術慧舟會『太田ジム』が年内まで入会金半額キャンペーン実施中!!

岡見勇信、宇野薫といった総合格闘技界のトップファイターを輩出した和術慧舟會が、千葉県に新しく『太田ジム』をオープン! JR総武線・下総中山駅から徒歩5分とアクセス良好、インストラクターも現役プロ選手が直接指導! さらにオープンを記念して年内は入会金半額キャンペーン中! 格闘技を始めようと思っているキミも、この機会に始めてみてはいかが?

★和術慧舟會『太田ジム』千葉県支部
★千葉県市川市高石神2-1 キョウエイシンビル2F ★問 047-333-7868

『ハッスル・マニア』に制御不能の爆弾投下!!

せ〜の!ダイナマイッ!!

この金髪豚野郎〜!!
『ハッスル・マニア2008』の"隠し球"はあの泰葉だった!
今年、ワイドショーを中心に世間を騒がせた
泰葉の電撃参戦は大晦日視聴率戦争にも効果は充分、
この制御不能の爆弾で『ハッスル』は何を見せようとしているのか?

構成 真下義之 撮影 タイコウクニヨシ 写真協力 ハッスルエンターテインメント

大晦日戦線、混沌!!
の"自由演技"炸裂か!?

例年以上に混沌をきわめる年末年始のマット界。そんな中、『ハッスル』が満を持して投下した「逆境でもハッスルできる芸能人」の正体は、泰葉だった。

昨年、落語家の春風亭小朝氏と離婚した元妻であり、その小朝氏をブログで「金髪豚野郎」と罵倒するなど、今年下半期のワイドショーを騒がしたタレント・泰葉。

小朝氏への脅迫メールを一日に100通も送ったり、その件に関する会見で泣き笑いしつつ「こんなとこ撮るな！」と報道陣を一喝したかと思えば、突然「低血糖なんで」と壇上の角砂糖をほおばる。その無軌道な暴走っぷりと、「天然」という概念を超えたブッ飛び具合で、何度もお茶の間を震撼させた。

まさしく『ハッスル』のお家芸である、お騒がせ芸能人のジャストタイミングな参戦であり、大晦日テレビ視聴率戦争にも充分な効果が見込める劇薬であることは間違いない。

じつは、今回の『ハッスル・マニア』の芸能人ワクに関しては、当初から『ハッスル』の山口日昇社長が「ズバリ言って、スポーツ選手ではない」「今回の大会のテーマでもある“逆境”に立っている方」「ある意味、タイガー・ジェット・シンよりも危ないところもある」「それも考えたうえでテレビ放送は一日おいて、大晦日に行なう」とヒントを出していたことから、さまざまな憶測が飛び交っていた。

当然、業界内では「泰葉にオファーを出したのでは？」とウワサは流れていたのだが、じつはそのあと「泰葉には断られたらしい」というウワサが確定事項のように流れた。そのため、一時的に泰葉はマスコミからノーマーク状態となっていた。

だが、じつは水面下では慎重に交渉が進められていた模様。それは、この交渉がまとまるまで『ハッスル』社内でも数人しか知らない超トップシークレット扱いだったことからも想像がつく。

それに泰葉の感情をセーブしない暴走ぶりは、確かに狂虎並みの危険度。関係者によると、12月9日に行なわれた参戦記者会見での髙田総統との絡みにおいても、すでに自己流のアドリブをバンバン加えていたというから凄まじい。

“ファイティング・オペラ”というある種、演者にはキッチリとした“規定演技”が求められる世界観の中で、我々の想像を超える突き抜けた“自由演技”を展開してくれそうな予感すらある。

そんな泰葉参戦に関しては、今回もあの和泉元彌の参戦時と同様にワイドショーやスポーツ新聞ネタとして、またもや世間を騒がせている。だが、いわゆるプロレスファンやプロレス業界からのリアクションといえば、かなり困惑気味。

とくに泰葉参戦発表の翌日は「東京スポーツ」制定のプロレス大賞発表でもあったから、プロレス界の話題的にはそちらに持っていかれた部分もあり、話題をシャットアウトする口実になった感すらある。

今年、世間からの過剰なバッシングにさらされた“逆境”状態の泰葉は、今度はプロレスファンとも向き合うことになる。

また、この泰葉劇場はメインストーリーとは独立した特別編であることも忘れてはならない。長引くプロレス不況の中で、『ハッスル』もこのショック療法のような“点”の話題を充分活用した上で、興行的にはいかにして“線”をつむいでいくか？　が問われる。

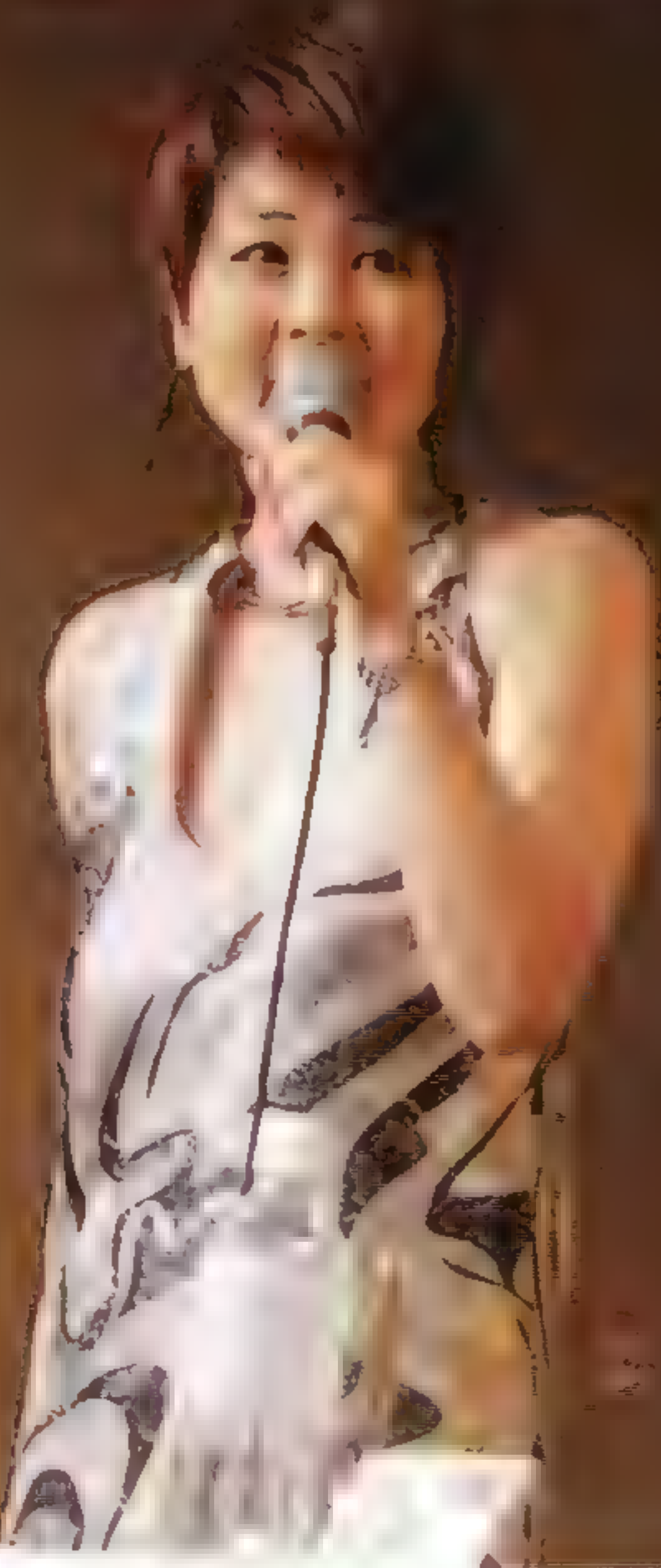
いずれにしても、世間か[illegible]めることは必[illegible]だけに『ハ[illegible]う舞台にとっ[illegible]も大勝負[illegible]の危なっか[illegible]も抜群に[illegible]料理してみるのかお手[illegible]

はたして泰葉と『ハ[illegible]境でハッ[illegible]ルできるの[illegible]日に「金[illegible]豚野郎!!」[illegible]

[illegible]まで[illegible]、各スポーツ紙に大きく取り上げられた『ハッスル』参戦。ワイドショーでトップニュースで取りあげる局もあったりだから効果は絶大だ。

泰葉といえばワイドショー。今回も多数のメディアが集合したが、山口社長の囲み会見では「ホントにいま試合をやることが決まったのか?」と食い下がる女性レポーターも。

『そこのオバちゃん、今日は角砂糖をなめなくていいのか?』と威風堂々と髙田総統が乱入！ 世間へのミソギとして「歌を歌いたいなら、試合で勝て」と参戦要求する総統劇場を展開。

泰葉会見のお約束である金屏風の前に、神妙な面持ちで登場した泰葉。「熱烈なオファーを送った」という山口社長から、試合でなく「歌だけの出演」が発表されたが……

泰葉の“

大晦日テレビ戦争に自ら、宣戦布告!!

「ライバルは『ガキの使い』です!!」

泰葉

**逆境でもハッスル!『ハッスル』に電撃参戦を決めた泰葉。
プロレスには縁遠い彼女がオファーをなぜ受けたのか?
そのモチベーションを直撃!
さらに裏番組やプロレスファンにも宣戦布告!?**

聞き手／真下義之

——泰葉さん、はじめまして。今日はよろしくお願いします!

泰葉 よろしくお願いしますっー(元気いっぱいで)。

山口(=日昇・ハッスルエンターテインメント社長) さ、とっととなんでも聞いてください(泰葉さんにピッタリ付き添って)。

——山口社長もインタビューにご同席いただけますか。さっそくですが、今回の『ハッスル』からオファーを聞いてどう思いました?

泰葉 お話をいただいたのは10月末だったんですけど、ビックリしましたねぇ。ある程度、ウワサは聞いてたんですけど。

——『ハッスル』のことはご存知だった?

泰葉 和泉(元彌)さんが出てたのは知ってました。ただ、それより何よりウチの現場マネージャーが『ハッスル』の大ファンだったんですよ!

——そうなんですか。じゃあ、交渉のキーマンはマネージャーさんだった?

泰葉 もう、オファーが来た段階で一人で勝手に盛り上がってましたから(笑)。でも、そのマネージャーの執拗なプッシュがなければ、出てなかったでしょうね。

山口 ホント、マネージャーさまさまですね(笑)。

泰葉 でも、会見でも言いましたけど、「おばあちゃんがプロレスファンだった」から、昔は観てましたけど。何年も前から格闘技への興味は途絶えてたんです。ただ、私的には〝オペラ〟っていう名前がついてるところに反応しまして。

——『ハッスル』のキャッチフレーズ、〝ファイティング・オペラ〟に反応しましたか。

泰葉 そのネーミングを聞いて「おもしろい!」と。名前の妙に惹かれましたね。これって山口社長がつけたんですか?

山口 どうもすいません(林家三平調)。当時は勢いでつけてしまいました(笑)。

泰葉 凄くいいじゃないですか! 私はクラシックの勉強をずっとやってたし、声楽もやってましたから。〝オペラ〟ってずっと出たかった憧れの舞台なんです。一度だけモーツァルトの舞台に出たこともありますけど……。だから、大晦日は私の全部の夢がかないます!

——あくまでファイティング・オペラなんですけど、大丈夫ですか?

泰葉 いいじゃないですか! 私は昔、日本武道館で観たフランク・シナトラがやった360度の円形ステージのコンサートに感激して、「ああいうのがやりたい!」と思ってたので、リングで歌えたら嬉しいですし、闘うことも大好きですし。

——先ほどの会見でも、「ケンカには自信がある」「最近も、ボコボコにしたことがある」とおっしゃってましたけど。

泰葉 あっ……、そこはノーコメントにさせてください。実際に被害者の方がいるので(笑)。

——シャレになりませんか(笑)。その『ハッスル・エイド』は12月30日に大会があり、番組は大晦日に放送されますが、いつも大晦日はどうすごされてたんですか?

泰葉 小さい頃もそうですけど、結婚してからもずーっと出入りの激しい噺家の家でしたので、大晦日ってホントに忙しいんですよ。家族でお正月の来客の準備や掃除をしたり、お年玉を詰めたり、年越しそばを食べたり……。ファミリーチックな感じで。

——じゃあ、今年は過去になくエキサイティングな日になりそうですね。

泰葉 人生始まって以来の大晦日になるでしょう。まさか私の人生にゴングの音が聴こえる日が来るなんて。

——除夜の鐘の音じゃなく、ゴングの音が鳴りますか……。

泰葉 (突然、大きな声で)アナタ、うまいことおっしゃる!! 座布団10枚ッッ!!

泰葉騒動ヒストリー

「金髪豚野郎」から『ハッスル』参戦まで

11月13日●東京・帝国ホテルで落語家の春風亭小朝氏と結婚20年目にして離婚発表会見。金屏風の前で夫婦揃って笑顔で出席という前代未聞の会見となった。

3月9日●東京・上野公園の『時忘れじの塔』式典で20年ぶりに歌手としてメモリアルソング『蓮花』を熱唱するも、酸欠状態になって、その場であおむけで倒れてしまう。

9月18日●自身のブログ『泰葉の革命プロジェクト』にて、母親と小朝氏のことで言い争いになったことから「勘当してもらった」と書き込み。母親・海老名香葉子さんはこの件を否定している。

9月28日●自身のブログ内にて、小朝氏のことを「金髪豚野郎」と表現。各ワイドショーにも取り上げられる。またブログも炎上し、アクセスが集中、サーバーがパンク状態となる騒ぎに。

10月23日●自身のブログを閉鎖。

10月26日●上野公園音楽祭の出演を急きょキャンセル。主催者は「急病のため」と発表するも当日の夜に、じつは小朝氏からの圧力があったとして、マスコミ各社にファックスを配信する。

10月29日●小朝氏との一連の騒動に関する記者会見を開催。舞台のキャンセルなどに伴なうトラブルに関して、小朝氏に脅迫メールを一日100通以上送ったことなどを告白するも、こうした騒動は「今日で終結」と宣言。会見中は泣き笑いを繰り返し、「血糖値が低いので」と角砂糖をほおばるシーンも。

11月4日●『キミハ・ブレイク』(TBS系)に生出演、12月発売の新曲 お陽様よほほえんで』を涙ながらに披露する。

11月15日●東京・日比谷公園小音楽堂で、復帰後初の単独ライブを開催。演奏中にペットボトルの水をかぶるパフォーマンスも披露した。

12月1日●フランス映画『マルセイユの決着(おとしまえ)』の試写会にゲスト出演。「自分の心とのおとしまえがついてない。自分を見つめ直して、決着つけます」と意味深に発言。

12月9日●都内・ホテルにて、12月30日に開催される『ハッスル・マニア2008』への参戦を電撃的に発表。

実家から勘当されていなければ、今回の参戦は絶対ありえません！

―恐縮です（笑）。そういえば、山口社長は11月の『ハッスル・マニア』開催会見で「危険な人にオファーしてるから、前日に大会をやらないと放送が危ない」とおっしゃっていましたけど、これは泰葉さんを念頭に置いた発言だったんですか？

山口　そうですね。本人を前にして言うのも失礼ですけど、ヘタするとオンエアできない可能性もありますから（笑）。

泰葉　正直……、私も危ないと思います（真顔で）。

泰葉さんは気持ちが先行して、たまに暴走しちゃいますし。

泰葉　たまにじゃありません。しょっちゅうです！（キッパリ）。でも、過去形にしておきましょうか。あまりムチャを言うと、エージェントに怒られるんで（笑）。

―過去にはそういうこともあった、と。大晦日と歌といえば、もう一つ国民的な歌の祭典がありますよね。

泰葉　『紅白歌合戦』（ＮＨＫ総合）ですね。もちろん憧れの舞台ではありますけど。今年ここまで世間をお騒がせして、たくさんのご迷惑をおかけしたような女が公共放送に出させていただけるわけはない……、と思っておりました。

―『紅白』をはじめ、大晦日は各テレビ局が勝負をかけますが、そういった状況はご存知ですか？

泰葉　知ってます！　とくに『ガキの使い（ダウンタウンのガキの使いやあらへんで！）』（日本テレビ系）。というか、私は先ほど、菅（賢治）プロデューサーに電話を入れましたから！

―泰葉さんが菅プロデューサーに？

泰葉　「視聴率はもらったぞ～！」と。すでに2回も電話を入れてますから。試合でも視聴率でも勝ちますよ。フフフフフ！

―すでに宣戦布告済みでしたか（笑）。確かに泰葉さんは、視聴率が見込めそうな強力な爆弾です。

山口　詳しい時間帯はわからないけど、『ガキの使い』は19時から21時くらいまでが、山崎邦正vsモリマンを軸としたリングを使ったお笑いをやるでしょ。そこにオーちゃん（小川直也）や武藤（敬司）さんも出るみたいだし。菅さんがスガ総統として君臨して、『スガッスル』という、どこかで聞いたことをやるみたいなんで（笑）。我々本家としては、同じリングものの中でお笑いじゃなければなんなのか？　格闘技じゃなければなんなのか？　つまり『ハッスル』とは何か？　ファイティング・オペラという部分をあらためて打ち出したいですね。

―オーちゃんはまたもやハッスルネタで商売しそうですか（笑）。逆にいうと、『ガキの使い』側も泰葉さんは出てほしかったんじゃないんですか？

泰葉　いや、オファーはなかったです。それに、私はすでにバラエティ番組は卒業させていただいてますから。

山口　こっちは、バラエティの要素はあるけど、状況が大会当日まで刻々と変化していくドキュメンタリーでもありますからね。

―ちなみに、和泉元彌さんやインリン様とか、いままでの芸能人の試合はご覧になりました？

泰葉　はい。「皆さん、頑張ってらっしゃるな～」とは思いましたけど、ただ一つ私が皆さんに勝てる武器は「歌が唄える」ことなんですね。試合をしたあと歌を唄う、という芸能人の方はいままでいらっしゃらなかったんじゃないかなって。

―じゃあ、歌を唄う瞬間は『紅白』に真っ向勝負する勢いで？

泰葉　試合に勝ったら、有明が揺れるぐらいの勢いで歌いきるつもりです！　やっぱり、テレビは視聴率が命ですし、そういう部分で熱心にオファーをいただいた『ハッスル』さんにも恩返しができると思います。ただ、意識しすぎると何もできなくなるんで、当日はそこまで考えませんけど。

―今年、ライブで酸欠状態になったこともありましたが、そのへんの心配は？

泰葉　あのときは過呼吸になってしまって。精神的にも一番忙しくてツラかった時期なので。マジな話、相当ヤバイ状態だったんです。一時期は外出恐怖症になってしまって。

―外出ができないほど、追いつめられましたか

泰葉　じつは昨日、ようやく外出できまして。スタッフみんなで映画に行ったんですよ。ローリング・ストーンズのドキュメンタリー映画（『ザ・ローリング・ストーンズシャイン・ア・ライト』）だったんですけど。年齢は関係ないなって。ストーンズだって60歳以上でも全然エネルギッシュですから。

―女性として最高齢ハッスラーの参戦となる泰葉さんも負けていられない、と。ただ、ご実家の海老名家は、落語界の厳格な歴史のあるお家ですから、以前だったら参戦するのは難しかったでしょうね。

泰葉　実家から勘当されてなければ、絶対にありえません！　絶対に反対にあったでしょうね。

山口　ただ、これもめぐり合わせというか、一つの縁だと思います。じつは、今年の『ハッスル・マニア』のテーマを「どんな逆境でも人はハッスルできる」と決めた瞬間に、泰葉さんの顔が浮かんでいたんですよ。

―当初から、泰葉さん投入プランがありましたか。

山口　いまは時代や国全体が逆境状態にあるからこそ、『ハッスル』自らが発光体となってハッスルしてないといけない。そういう意味で、我々は泰葉さんの満ちあふれんばかりのエネルギーに札を置いたというか。吉と出るか凶と出るかはボクもわかりませんけど（笑）。ファンがハッスルできるきっかけになれるようなものを作りたいと思いますね。

―これまでもバッシングは凄かったですけど、プレッシャーはないですか？

泰葉　ウチのスタッフはバッシングに関する記事なんかを全部見せてくれて、「この件はどうしますか？」とプロファイリングみたいに一つ一つ対応を検討していくんです。心は痛みますけど。その処置の仕方がとても素晴らしいので克服できてます。そこはスタッフに感謝です！　……いやっ、感謝はキライだあーっ!!（大声で）。

―ワハハハハハ！　突然、どうしたんですか？

泰葉　いや、安い感謝とかって大っ嫌いなんですよ！　人間って、そんな簡単なものじゃないですから。

―ただ、プロレスマニアみたいな人からはバッシングは来ると思いますけど。

泰葉　当然でしょう！　こんな素人がリングに上がっちゃうんですから。でも、そういう声には負けません！

山口　そこは避けては通れないけど、我々と一緒に跳ね返していきましょう。

―よくわかりました。では、最後に『ハッスル』参戦の心境を得意の謎かけで締めてもらっていいですか？

泰葉　「『ハッスル』とかけまして……」と言いたいところですが。私の謎かけはすっごく評判が悪いんで、もう封印しました！

―謎かけは打ち止めですか。

泰葉　あまりに評判が悪いので封印しました。ただ、何かしらギャグは披露したいなと思ってます。そこは落語家の娘なんで（笑）。

―では、『ハッスル・マニア』のご活躍、期待しています!!

【08年12月9日／都内・某ホテルにて収録】

やすは■1961年1月17日、東京都出身。初代林家三平の娘として知られ、シンガーソングライターとして活動。88年6月に春風亭小朝氏と結婚し、芸能界引退。07年11月に小朝氏と夫婦揃っての離婚会見で話題に。今年、ブログ上で小朝氏に「金髪豚野郎」と発言するなど、奔放な言動で世間を騒がせる。12月9日、「ハッスル・マニア2008」に電撃参戦。

ブレーキの壊れたシンガーソングライター!?

泰葉暴走語録!

走り出したら止まらない！ そのフリーダムな発言が注目を浴び続けている泰葉。あんな名言からこんな迷言まで、ワイドショーを駆け抜けた泰葉語録をドドンとお届け!!

「[illegible]」とかけて「[illegible]」ととく その心は（小朝[illegible]す）

★07年11月13日 小朝氏との離婚記者会見にて

金屏風の前で夫婦揃って笑顔満開！ 超異例の離婚会見を締めくくった謎かけがコレ。ネタといい立ち振る舞いといいまさに怖さ知らずの泰葉。だがこれは序章にすぎなかった

金髪豚野郎

★08年9月28日 ブログ『泰葉の革命プロジェクト』の書き込み

流行語大賞ばりのこの暴言は、自身のブログ内（現在は閉鎖）での発言 自分の母親を「ゲロ」呼ばわりされていた、という怒りが爆発 全国の金髪愛好者を震撼させた。

初めて無一文になりました

★08年9月30日 ドラマ『スターター・ワイフ』試写会会場

危うく同情するなら金をくれ状態!? この日、泰葉は「生活費が底をついた」と仰天告白。離婚後、自宅に引きこもって作曲活動していたという孤独生活を激白した。

私の生き方甘いもん

★08年9月30日 ドラマ『スターター・ワイフ』試写会会場

自分を見つめ直すために、「実家に勘当してもらった」という泰葉 「再出発は命懸け」と決意表明 たか、ある意味で腹をくくったことでその暴走は加速度的にエスカレート!?

断腸の思いです

★08年10月23日 ブログ『泰葉の革命プロジェクト』の書き込み

連日のワイドショー効果で泰葉ブログにアクセス集中！ なんとサーバ会社からも「対応できない」と通達される異常事態に、「叫びであり私自身」だったブログを泣く泣く閉鎖

切腹をしろ! 私が介錯してやる!

★08年10月29日
小朝氏への批判終結会見にて

小朝氏の舞台出演キャンセルからスタートした、小朝氏への脅迫メールの内容を「金髪豚野郎より、凄い内容」と次々紹介。一日100通、通算250通も送っていたのだからハンパない。

髪も薄いし、人間も薄いが、高座は凄い!

★08年10月29日
小朝氏への批判終結会見にて

小朝氏への批判や罵倒の陰で、落語家として尊敬の念を表明する言葉も。小朝氏を落語中興の祖「三遊亭円朝」襲名も嘆願するなど、愛憎が入り混じった泰葉劇場を展開

いい人ぶっちゃって!

★07年11月18日
『アッコにおまかせ!』（TBS系）
電話出演時

離婚会見後、和田アキ子が番組内で「電話して」とコメント。泰葉から電話が入り、義兄・峰竜太もやさしい言葉をかけるとこのガチ発言！ 峰も「迷惑してんだよ!」と応戦。

08年10月29日、小朝氏への批判終結会見で お騒がして「どうもすいません」ポーズの泰葉

こんなとこ撮るな!!

★08年10月29日 小朝氏への批判終結会見にて

実家に勘当を申し出たことで、弟の林家いっ平の「林家三平」襲名披露に関われない泰葉は、心境を聞かれて涙……。だが、カメラのフラッシュでキラーモードに突入！

武士ではないが、二言はない!

★08年12月10日『ハッスル・マニア2008』参戦会見にて

「総統だけに相当やるな?」と高田総統劇場にフリースタイルなギャグも交えて参戦表明した泰葉。「これがミソギということ」とキッパリ。はたしてプロレスやれんのか?

がんばったぞ～!

★08年10月29日 小朝氏への批判終結会見終了後

批判終結会見内では、ノンストップで泣き笑いを繰り返した泰葉。さすがに精根つきたか、会見終了後の控室へ向かう最中で倒れ込むも、すぐに立ち上がりこの一言。

ずっとクソババアの泰葉でいてほしい

★08年11月15日 日比谷公園小音楽堂

離婚後初のライブ後、勘当関係にある母から「根岸のクソババアだ。くたばるまで唄いやがれ」と激励の伝言があったことを明かしつつ、すかさずこう切り返すからさすがすぎる。

今年は、明治維新が起こったような激動の年

★08年12月1日『マルセイユの決着』試写会にて

ようやく泰葉劇場もクールダウンした12月頭 試写会に登場した泰葉は「自分におとしまえをつけたい」と発言。思えば、これが「ハッスル」参戦へのおおいなる伏線だった。

『ハッスル・マニア2008』直前情報!!
ムタ&ボノが親子タッグ!!
相手はまさかの川田親子!?

「ダイナマイッ！」な泰葉の参戦決定で、一気に山が動いた感のある今年の『ハッスル・マニア』。

会見で「自分におとしまえをつける」と宣言した泰葉だが、一方で『ハッスル』も一年間のストーリーの総決算として、おとしまえをつける必要がある。

そこで急浮上したカードが、ザ・グレート・ムタとボノちゃんの魔界親子タッグ結成。だが、その相手は今年の『ハッスル』栃木大会で、親子愛を展開した川田利明と川田父の親子タッグという、意表をついたマッチメイクだった。

「パパに会いたい」ことを物語の原動力にしてきたボノちゃん組はともかく川田父は70歳を越える高齢であり素人。栃木大会では、息子の応援に力が入りすぎただけで、心臓を押さえ病院に搬送されているのに、試合なんて泰葉以上に無理！

となると、このカードはあくまでも表向きで川田父の"代役"的な何かが仕込まれている可能性は充分。昨年の『大みそかハッスル祭り2007』では、大会ラストにさまぁ～ずの有田哲平扮する有田総統が登場したが、08年の最終興行でも想像を超えるドンデン返しをブチかますのか？

その答えはもうすぐ出る!!

ザ・グレート・ムタ&ボノちゃんvs"モンスターK"川田利明&川田父

「パパァ! 行かないで～!」。07年の『大みそかハッスル祭り』で初遭遇した"パパ"ムタとボノちゃんの親子が一年後に劇的再会! 一方、栃木大会で親子愛を見せつけた川田親子。この試合のストーリーのおとしどころはまさに予測不可能だ。

トッチギ！ トッチギ！ ハッスルGP決勝大会も収録 12月24日に最新DVD発売!!

トッチギ！ トッチギ！ 北関東の地方大会ながら、異様な盛り上がりで大爆発!!

ハッスル ファンを公言する高田延彦も自身のブログ上で「今日のイベントは間違いなく歴代のベストテンに入る」と絶賛した10・26栃木大会が早くもDVD化!!

今回は、真のハッスラーのナンバーワンを決定すべく高田総統がブチ上げた『ハッスルGP』の決勝大会が行なわれた栃木大会に至るまでの計4大会の模様を中心に収録。

まず9月17日の後楽園大会ではスランプ気味の天龍源一郎が、川田利明&島田工作員&小路二等兵とハンデ戦。なんとミスタープロレスが島田に踏みつけられながらフォールされる衝撃映像は要注目だ。

メインハッスルでは、準決勝で対戦する坂田亘とボノちゃんがパートナーを引き連れて過激な前哨戦。とくにボノちゃんが全体重をかけたデンジャラスきわまりないバックフリップは必見!!

9月28日の名古屋大会では、その坂田亘とボノちゃん、川田利明とゼウスの4人が決勝進出を懸けて潰し合いを展開。また、川田が地元・栃木での『ハッスルGP』決勝戦開催を詰め寄り、ついに実現させる高田総統劇場も見どころだ。

その栃木大会直前、10月16日の後楽園大会では、決勝で激突する川田と坂田がタッグで直接対決。準決勝の敗戦で、川田に共闘を申し出たゼウスと川田の意外なコンビネーションのよさにも注目だ。

最大の見どころである栃木大会では、宇都宮市長と川田の両親を加えたオープニングから、エンディングに至るまで、地元のヒーロー・川田の独壇場。試合中に起きたまさかのハプニングからクライマックスへ至る異様なグルーブ感はこのDVDのハイライトと言えるだろう。

今回、副音声で同じく栃木出身の野口大輔レフェリーと川田が栃木大会を振り返っているから、こちらも聞き逃せない。

最高の盛り上がりを見せた栃木大会をバッチリ復習して、君も『ハッスル・マニア2008』に備えよう！

1.4東京ドームは プロレス総力戦!!

構成／真下義之

中邑に三沢さんの究極エルボー炸裂か!?

[タッグマッチ]

三沢光晴&杉浦貴 VS 中邑真輔&後藤洋央紀

総合再挑戦、Dynamite!! 出陣プランもあったという中邑の1.4東京ドームの標的は三沢さんだった。ノア勢とは初遭遇となる中邑にハンパない破壊力のエルボーを持つ三沢さんにどこまで食い込めんのか? 今年、戦極に出陣した杉浦との絡みも要注目だ

プロレスの存亡を懸けたメインイベント!

[IWGPヘビー級選手権]

王者 **武藤敬司 VS 棚橋弘至** 挑戦者

ズバリ、今後のプロレス界の命運を左右するカード。半年以上にわたった外様王者・武藤敬司政権のドラマをつむいたことで、確実に新日本は一回り大きくなった。じっくり育てたこの物語の決着をどうつけるのか? 想像を超える"過程"と"結末"に期待したい

専修大レスリング部、因縁の先輩後輩決戦!!

[シングルマッチ]

秋山準 VS 中西学

ホ ノ! いつ何時も唯我独尊の"野人"が突如、GHC王者に挑戦表明! これを真正面から受けて立ったのが次期GHC挑戦者であり、中西の専修大レスリング部時代の後輩であり、合宿所では中西と相部屋だったこともある秋山。ドームを震撼させるド突き合いが展開か?

アクセル全開! 場外大乱戦でいいんちゃう?

[IWGPタッグ選手権 3WAYマッチ]

真壁刀義&矢野通 王者
VS **ブラザー・レイ&ブラザー・ディーボン** 挑戦者
VS **天山広吉&小島聡** 挑戦者

「ハッピーになってもええんちゃう?」と今年は友情タッグの分裂から、飯塚さんとの抗争劇で再ブレイクした天山。いつの間にか大人気の天コジがドームで挑むのは、史上初の3W

いよいよ待ったなし! ジャンボスタンド開放、やれんのか!?

写真は、07年の1.4東京ドームの会場写真。ここ数年はポッカリと空いたジャンボスタンドが印象的だったが、全勢力をつぎ込んでカード編成した今年は、はたして開放できんのか?

「いま、新日本がおもしろい!」とその絶好調ぶりを本誌もプッシュしてきた新日本最大の天王山、1・4東京ドーム大会がいよいよ近づいてきた。

かつて「プロレスファンの初詣」と言われたドル箱興行も、ここ数年は動員でも苦戦続き。しかし来年は東京ドーム進出20周年記念とあって、スタッフの気合いは当初からハンパなかった。

その証拠に年末年始イベントのどこよりも早く全カードを発表! じつに彩り豊かな豪華カードをズラリと並べてみせた。

このヤル気の裏側には、同日開催される『戦極』への対抗意識や、FEGの谷川代表がある雑誌で「昔、プロレスというのがあってね」とうっかり発言したことが新日本社員を燃え上がらせたことも関係あるようだが、ズバリ言って、背景にあるのはプロレスへの危機意識、そして意識改革だろう。

格闘技に勝負論を奪われた現代のプロレスは、圧倒的な観客論の時代に突

見てみい、このカード!!

年末年始は新日本が制圧!?

イチ押しはナッシュ!　日米レジェンドが結託!!

[8人タッグマッチ]

カート・アングル&ケビン・ナッシュ&長州力&蝶野正洋 vs ジャイアント・バーナード&カール・アンダーソン&飯塚高史&石井智宏

あの"ビッグ・セクシー"ケビン・ナッシュが04年の「ハッスル3」以来ひさびさに日本上陸。TNA版"レジェンド"こと"メインイベント・マフィア"のメンバーのカート・アングルと日本の"レジェンド"蝶野&長州と結託! バーナードとの巨人対決は必見だ

対抗戦最終章!?　やっちゃっていいんだね?

[シングルマッチ]

永田裕志 vs 田中将斗

敬礼!! ドームといえば永田さんのことを忘れるな。今年10月の両国大会の世界ヘビー級選手権で大熱戦を展開した両雄が、舞台をドームに移してまたもや再戦! 長引くZERO1・MAXとの対抗戦もいよいよ最終章!? 2009年も年始からオーロラビジョンに白目が浮かび上がる!?

超ノンストップ、未来型ハイスパート!!

[IWGP Jrタッグ選手権試合]

王者 ノーリミット **内藤哲也&裕次郎** vs 挑戦者 モーターシティ・マシンガンズ **クリス・セイビン&アレックス・シェリー**

TNAの近未来型プロレスを牽引する"モーターシティ・マシンガンズ"が新日本イチ押しのヤングコンビ"ノーリミット"の持つIWGP Jrタッグ戦に挑戦。ドーム前半戦を盛り上げる超立体的な高速バトルになることは必至。一瞬も目を離せないノンストップバトルが展開か?

ライガー20周年に"盟友"が緊急参戦!!

[8人タッグマッチ]

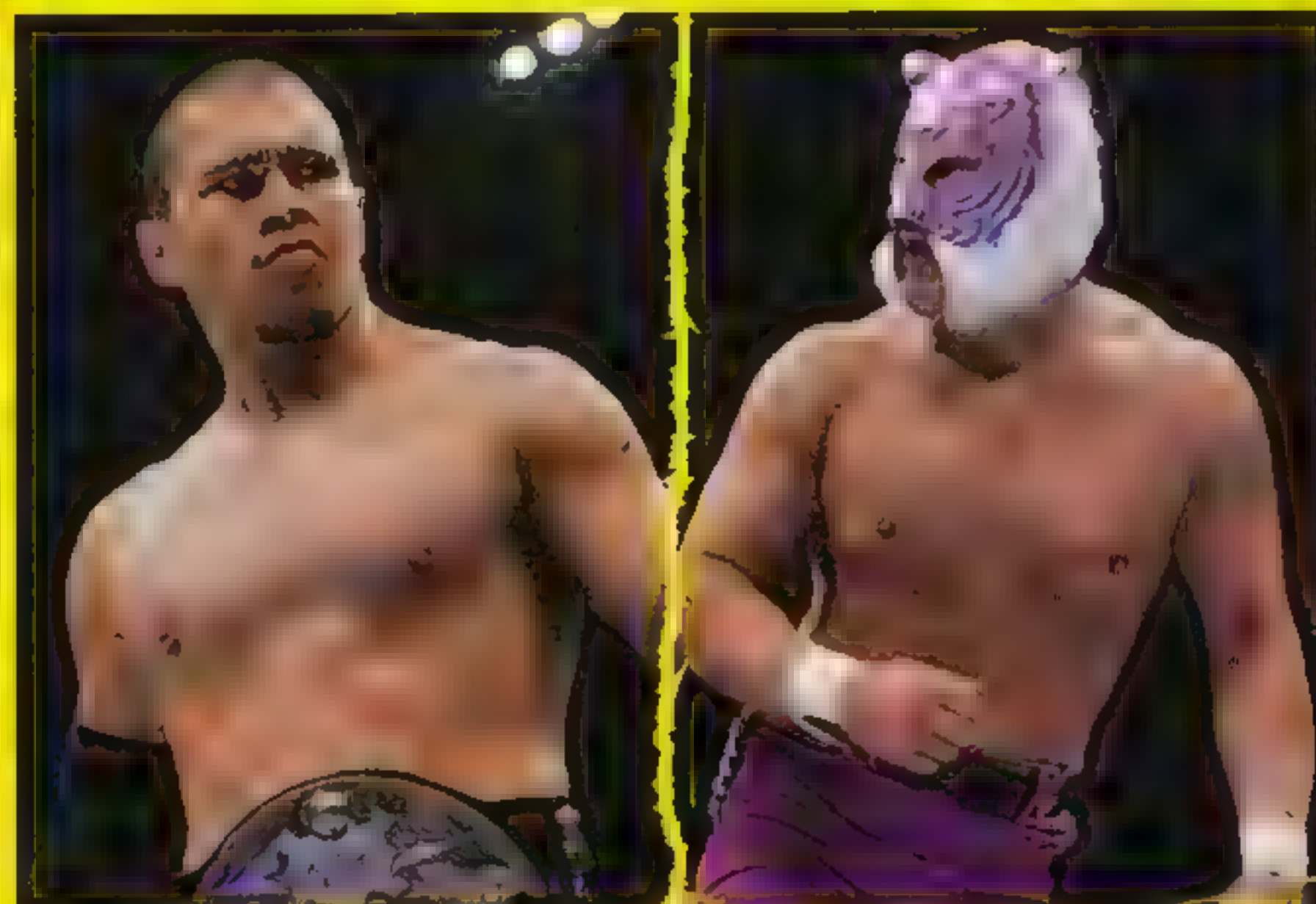
獣神サンダー・ライガー&佐野巧真 vs 金本浩二&井上亘

「燃やせ燃やせ、怒りを燃やせ～♪」と第1回東京ドームでデビューしたライガーも今年で20周年! この記念すべき試合に登場するのが、80年代のテンシャラスな新日本Jrをライガーとともに支えた男・佐野巧真。"最大のライバル"の登場に獣神がまたまた燃え上がる!

メキシコの"神の子"が日本初降臨!!

[6人タッグマッチ]

ミスティコ&プリンス・デビット&田口隆祐 vs アベルノ&邪道&外道

ルチャ版の"神の子"が待望の日本初上陸! エル・ドラドがブッキングした際にはビザのトラブルで来日中止も、今回は間違いなく来日する。メビコのライバルのアベルノも来日するから試合のクオリティも万全。オープニングマッチで神の技を堪能せよ!

あのタイガーvsD・キッドがリバイバル!?

[IWGP Jrヘビー級選手権試合]

王者 **ロウキー vs タイガーマスク** 挑戦者

日本のファンにも毎度おなじみの仕事ができる男、ロウキーがIWGPのJrベルトを引っさげて、タイガーマスクとドームで激突。21世紀版の突貫小僧と虎仮面によるスピーディかつパワフルな空中戦で、初代タイガーvsD・キッドの金曜夜8時伝説がいまよみがえる!?

新日本プロレス大会日程

『レッスルキングダムIII in 東京ドーム』

東京・東京ドーム

2009年1月4日(日) 開始16:00

チケット料金

ロイヤルシート 20,000円（スペシャルグッズ付）完売間近
アリーナA 10,000円
1Fスタンド A 5,000円　1Fスタンド B 3,000円
シニア・小中学生（1Fスタンド B）1,000円 当日のみ 要学生証

お問い合わせ

新日本プロレスリング株式会社
TEL.03-6407-3111

ロレスは、圧倒的な観客論の時代に突入。その呪いなきエッセンスはいまの新日本にも散りばめられている。

試合でも、観客の予想を裏切るドンデン返しを連発。とくにストーリーの主軸・武藤敬司のIWGP劇場は年間を通してタフなドラマを生み出した。

だからこそメインのIWGP戦の"過程"と"結末"は、プロレス界の命運を握るあまりに重要な一戦なのだ。

集客でも、ここ数年は2階席を開放せずミニマムに開催してきたが、今回は全盛期ばりにジャンボスタンドを開放できる最大のチャンスが到来。最終的にはチケットの伸び次第だが、新日本スタッフも「観客動員ではほかのイベントに勝ちたい」と意欲マンマン。

格闘技ファンも、この大会をよくあるプロレス大会の一つと考えず、ぜひ注目してほしい。なぜなら勝負論を格闘技に奪われたあとのプロレスだからこそできる、観客論主導の新しいドームプロレスだからだ。

圧倒的勝負論に比肩する、圧倒的観客論の真髄とは？　ついに呪いなきプロレスの新時代が幕を開ける！

――試合までちょうど1ヵ月ですけど、そろそろ追い込みに入る時期ですか？

三崎 そうですね、身体も相当疲れてきてますし。早く闘いたい気持ちもありつつ、もっと練習したい部分もあるって感じですね。まあ、限られた時間の中でできることをやるしかないですから。ただ、試合に向けての特別な練習というわけじゃないんですよ。いつもどおりの練習をしてリングに上がるように心がけてるんで。もちろんその中で戦略とかは考えますけど。

――10月にはUFCイギリス大会で郷野（聡寛）さんのセコンドについてましたけど、帰国してから本格的な練習を始めた感じですか？

三崎 いや、本格的な練習は11月に入ってからです。9月にはアメリカで自分の試合（9月20日、ストライクフォース）もありましたし、まずは身体の疲れを完全に抜こう、と。気持ちもリフレッシュさせてからじゃないと、やっぱり練習もあまり集中できないですし。だから10月あたりはほとんど何もしないで、旅したりいろいろ出かけたりしてましたね。

――ちなみにイギリスでは現地の女性にかなり目を奪われていたという証言を得たんですけど（笑）。

三崎 ちょっ……それどこから仕入れた情報ですか？

――三崎さんの素晴らしいチームメイトの方からです（笑）。

三崎 いやあ、これからはチーム内の情報漏洩に気をつけないといけないですねえ（苦笑）。これは向こうに行って気づいたことなんですけど……イギリスの女性ってきれいなんですよ。

――きれいでしたか（笑）。

三崎 みんなでごはん食べに行ったときに、女子大生ふうの集団が10人ぐらいで入ってきたんですけど、もう日本だったらみんな即モデル事務所にスカウトされますよ！　それぐらいかわいかったな～（しみじみと）。

――相当ポテンシャルが高かったみたいですね。

三崎 だけど残念なことがあって、若いときはかわいいんですけど、いずれみんな太るんですよね。やっぱり食文化がパスタとかジャンクフードとか油っこいものが多いんで。

――フィッシュ＆チップスの国ですからね。

三崎 で、街を行き交う人々もみんな何かしら食べながら歩いてて（笑）。

――そりゃ太るよ、と（笑）。

三崎 自分はけっこうデブ専なんで、嫌いじゃないんですけど……って、話がだいぶそれてるじゃないですか！（笑）。

――今日は「三崎和雄の女性観」がテーマですから。

三崎 そんなわけないじゃないですか！（笑）。話を元に戻してください！

――では、いまはイギリス滞在中とは正反対な、節制した生活が続いているわけですか？

三崎 すごくシンプルな生活ですね。これは食べ物であったり、練習だったり、あらゆることがシンプルになってます。ちょっと話は変わっちゃうんですけど、先日、エコのイベントでゴミ拾いをしたんですよ。それに参加したときに、やっぱり人間は本来、自然の中で生かされてるんだなっていうのをあらためて感じて、いままで以上に自然に対する考え方が高まったんです。そうすると自分の周りの必要ないものがたくさん見えてきたんですよね。だから、そういうものをどんどん排除していって。

1.4『戦極の乱』でジョルジ・サンチアゴと大一番！

「試合に保険をかけてる人間には観客に何も与えられない」

三崎和雄

昨年大晦日の秋山成勲戦を経て、今年は「戦極」を主戦場とした三崎。9月にはストライクフォースにも出場、"愛国の志士"として幅広い活躍を見せた。そんな三崎が年明け早々に強豪サンチアゴとの戦極初代ミドル級王座決定戦に出陣！大一番を目前にした神風ファイターがその独自の格闘技理論を語ってくれた！

聞き手／堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫

――たとえばどういったものでしょう？

三崎　食事にしても科学調味料やジャンクフードみたいなものは、本来人間が生きるにあたって必要じゃないものかなと思ってますし。やっぱり自然の中で生きるってことですよね。だけど、僕がいま苦しいトレーニングで身体を追い込んだり、筋肉細胞を無理に破壊して強くしたり、これらはみんな非自然なことなんで。完全に身体にとって優しくないことをしてるわけですし。これはちょっと矛盾しちゃうんですけど。

――それは確かに言われるとおりですね。

三崎　だけど、格闘技を神様から与えられた使命だと思ってる僕としては、この部分をよりシンプルなものにすると格闘技を辞めなきゃいけなくなっちゃうので。だからこそ、その中でトレーニングにしろ食事にしろ、なんでもできることはやりきろうって思ってます。自分の私生活も、もっとシンプルで人間らしい生き方をしようと心がけてますし。

――そうすることでどういった効果がありますか？

三崎　あんまりムダな感情を持たなくなってくるんですよ。だからいま、確かに試合前で不安はあるんですけど、それも自然なことだと受け止められますし。おそらくリングに上がったときに、逆に感情が爆発するかもしれないですね。穏やかに生活できてるぶん、リングでは怖いものなく闘えるというか。

――抑えていた野蛮をリングで解放する、というか。

三崎　そこは本能ですよね。生きるためにリングの上で自分の命と引き換えに相手の命を獲りにいくっていうか。だから試合までに緊張しなくてもいいかなって

勝ちたい気持ちはありつつも そこだけにはとらわれてない

思いますし。試合になったら勝手にスイッチが入るだろうと想定しながらいま練習をやってます。

――三崎さんって、格闘家としてのへんな欲みたいなものをあんまり感じないんですけど。

三崎　へんな欲っていうのは？

――たとえば自分の名前を上げたいとか。もしくは三崎さんは1年前に秋山成勲に勝利して（ノーコンテストに変更）、大きく名を挙げましたけど、それによって試合をすることに消極的になったりとか。

三崎　自分は勝ち負けへの不安はまったくないですね。それは天気みたいなものというか、晴れの日もあれば雨の日もあると思うんで。まあ、負けたら負けたで、また次に向けて頑張ろうと思うし。勝ったら勝ったで、次の目標が見つかりにくくなるかもしれないし、どっちがいい悪いっていうのはわからないですね。それより自分本来の生き方ができればいいかなって。

――自分の築いてきたいまの位置を守りたいっていう気持ちは？

三崎　ないですね。ダメだったらダメで、そこでまた自分らしく生きればいいだけのことなんで。もちろん、そりゃ勝ちたいですよ。それは大会に出る全選手、もっと言えばアマチュアだってみんな勝ちたいわけですから。ただ、結果は自分で決められないことで、神様が与えてくれるものだと思ってますから。だから「負けたらどうしよう」ってことばかり考えると、自分の本当にやるべきことがなかなか見えてこないと思うんですね。

――勝敗はあとからついてくるものだと。

三崎　目の前のやりたいことに向かって、自分の足で歩いてることが大事であって、そこさえ脱線しなければ結果はべつに。ただ、さっきも言ったように、格闘技やってたら勝ちたいのはあたりまえなんですよ。でも……なかなかニュアンス的に表現しづらいですが、勝ちたいって気持ちはありつつも、そこだけにはとらわれてないっていう感じです。

――では、マッチメイクで自分の勝てそうな相手を選びたいとかそういう気持ちも？

三崎　まったくないですね（キッパリ）。それは僕の中ではちょっとつまんないですね。

――闘う意味合いが見いだせない、と。

三崎　中にはそういう選手もいますけど（笑）。

――三崎さんと因縁深い選手ですか？（笑）。

三崎　いやいや（笑）。まあ、それは本人がどんな人生を歩みたいかですから。名前を売りたい、金を稼ぎたいのであれば、べつに勝てそうな相手とやればいいし。もっと言えば、引退したあとのビジネスプランまで見据えて、いまのうちに格闘技で名前を売ろうというのであっても、それは自分の好きなようにやればいいだけですし。でも僕はいつもいまを生きてるから、先のことよりもいまやりたいことをやることに幸せを感じるので。だから、より強い相手とのカードを組まれても、自分が苦しい道に突っ込んでいくほど快感があるんじ

崖っぷちのほうが人間は真の姿を見せることができるんじゃないかと思う

ゃないかなって思うんです。……どんだけMなんだって話ですけど（笑）。

――いま『戦極』のミドル級戦線は「ロード・トゥ・三崎」のようになってますけど、そういう立場は本意ではない？

三崎　個人的に本意じゃない部分はありますよ。僕はどっちかっていったらやっぱり追う立場のほうがいいんで。でも、それは僕が『戦極』に身を置いて闘ってる以上は、やっぱり一つの〝商品〟なんで。どう僕をコントロールするかはプロモーター側で決めることなので、僕がどうこう文句を言うことでもないですし。

――いま、三崎さんのような考え方の格闘家が少なくなってきてるのが、ちょっと格闘技界の問題なのかなって思うんですよ。

三崎　そうですか？　僕はあんまり周りを見ないからよくわかんないですけど。

――選手の意向がやたら強くて、なかなかカードを組めなかったりとか。

三崎　ああ……どうなんだろうなあ？　まあ、それはどっちがいいか悪いかはわかんないですね。それに、僕は自分のことはワガママだと思ってますから。自分のやりたいように好きなことをやらせてもらってますし。僕は結婚してないし子どももいないので、自分一人で好きなことをやってますけども、やっぱり結婚して子どももいる格闘家だったら考え方は違ってくるかもしれませんね。家族のために何かを犠牲にしなきゃいけない、それが結果的には勝てる相手を選ぶということなのかもしれないし。

――試合を選ぶ選ばないの話だと、郷野さんもUFCではそういう権限がないんですよね。

三崎　そうですね。でもそういうところで闘ってる郷野さんはカッコいいなと思いますよ。格闘家だな、職人だなっていうか。ワガママ言って好きなようにできる人間とは違いますから。ホントに常に崖っぷちにいて、生きるか死ぬかっていうところで闘ってるわけですからね。

みさき・かずお■1976年4月25日、千葉県出身。01年7月にパンクラスでプロデビュー。04年よりPRIDEに出場し、06年に『PRIDEウェルターGP』で優勝。昨年大晦日には“魔王”秋山成勲をKOするも、その後ノーコンテストに。現在は『戦極』を主戦場としている。GRABAKA所属。179cm、83kg

――闘う者としての覚悟の問題ですね。

三崎　やっぱり本物を見せるためには自分も本物でなければいけないですから。ホントにこれが終わったら次がないんだっていう、そういう崖っぷちでいたほうが人間は真の姿を見せることができるんじゃないかなと思うんですけどね。……と言いながら、僕ももちろん将来のことは考えてますけど。それに向かっていまできることをやればいいかなって思いますね。

――観客もただ試合を観るために、クソ高いチケット、買ってるわけじゃないと思うんですよね。選手の生き様を観たいというか。

三崎　そうですよね。クソ高いチケットを買って観に来るっていうのは、ショーを観に来てるわけじゃない。何かを得たいからだと思いますし。だからプロとして払ってもらったお金以上のものを、選手は見せなければいけないし。やっぱり何か保険をかけて試合してるような人間には「ホントにそんな試合で観客に何かを与えることができるの？」って僕は思っちゃいますね。明日があるのかないのかわからない状況で試合をしていたほうが、おそらく提供できるものがあると思うんですよね。

――それを観て何か感じてもらえれば、と。

三崎　はい。自分の生き方をリングの上で見せて、「あ、おもしろいな」って言ってくれる人がどれだけいるかっていうことが重要で。そういう人が一人でも多ければ僕も嬉しいですから。そのために努力をしないといけないですし。

――そういうものを見せるために、いま頑張っているわけですね。

三崎　そのためのいまですね。

は勝ち負けだけじゃなくて、そこに高いお金を払って観に来てくれた人たちが「年頭から来てよかった」って言ってくれるような試合ができればと思います。だから絶対に何がなんでもベルトを獲って、みんなに恩返しがしたいな、と。

――相手のジョルジ・サンチアゴは相当な実力者ですけど、日本では最近名前が出てきた選手ですよね。おいしいかおいしくないかで言ったら、おいしくないというか。

三崎　まあ、おいしくないですよね（笑）。彼、強いですからね。『戦極』でも優勝してますけど、その前にはストライクフォースのトーナメントでも優勝してますし。そのときは佐々木（有生）が出る予定だったんで、僕も現地に行って生で彼の試合を観てるんですよ。KO勝ちするのを観て「いい選手が世界にはいるな」って思ってたら、『戦極』で闘うことになって。なんだか運命を感じましたね。

――そのぐらい前々から気にはなってた選手だ、と。

三崎　名前があるないに関係なく、僕が前から目をつけてたっていうことは、それだけ魅力がある選手なんだって思いますよ。失礼な話ですけど、いまだに僕は格闘家の名前とか全然知らないんですよ。僕は〝人〟ってところでしか見ないので。サンチアゴの場合も、格闘家っていうよりも動物としてこいつはおもしろいって感じたんです。

――野生の勘みたいなもんなんでしょうね。

三崎　彼には何かそういう秘めた力がある気がします。『戦極』でさらに昇り調子になってますから、その波に飲まれないように気をつけたいですね。

――大変な試合ですけど期待してます！

【08年12月8日／都内・パワーオブドリームにて収録】

1.4「戦極の乱2009」で三崎和雄と
初代戦極ミドル級王座を懸けて激突!!

戦極ミドル級GP覇者、ATT一期生物語

ジョルジ・サンチアゴ

「ミサキよ、もう逃げも隠れもできないぞ!」

立ってよし寝てよしの隙のない、アメリカン・トップチームらしい闘いぶりで、見事に戦極ミドル級GP優勝をはたしたサンチアゴ。
1.4「戦極の乱2009」では、いよいよ初代「戦極」ミドル級王座を懸けて三崎と対戦するが、
その試合を前にサンチアゴの強さのバックボーンを探ってみた。ATT一期生の成り上がりストーリーをお届けしよう。

聞き手 堀江カンツ 試合写真 乾普也

Santiago

戦極ミドル級GP優勝おめでとうございます!

サンチアゴ ありがとう! 優勝したのは嬉しいが、俺の腰にベルトかないのが残念だな

ベルトは三崎選手と闘って勝ったほうが、初代チャンピオンとなって贈呈されるみたいですけどね。

サンチアゴ 本当にベルトを巻くへきなのは、トーナメントを勝ち抜いた人間だけさ。へつに俺はシアー(・バハトゥルサダ)、ナカムラ(中村和裕)を倒したあと、ミサキともう一試合やってもよかったんた まだまだスタミナも残ってたしな。ミサキに対しては「もう逃げも隠れもできないぞ!」と言いたいね

では、今回の戦極ミドル級GP優勝で、あらためてサンチアゴ選手に興味を持ったファンも多いと思うので、バッククラウント的なことからうかがっていこうと思うのですか 総合格闘技を始めたきっかけはなんだったんですか?

サンチアゴ 子どもの頃から空手や柔道、柔術といった格闘技をやっていたんた。その中でMMAというものを知って、MMAが持つ闘いの幅の広さに魅せられたのか一番たね。

総合格闘技はどうやって知ったんですか?

サンチアゴ 格闘技のマガジンたよ。そこにUFCの闘いが載っていて興味を持ったんた、そして最初はUFCのビデオをレンタルビデオ屋で借りて観ていたんたけど、98年たったかな、PRIDEと出会ってね さらにMMAに夢中になって、自分もやってみたいと思ったんた

当時のあなたのアイドルは誰てしたか?

サンチアゴ 最初はやっぱりUFCのホイス・クレイシーたね。そしてPRIDEがスタートしてからは、ヴァンダレイ・シウバに魅せられた いまはエメリヤーエンコ・ヒョードルとアンデウソン・シウバを尊敬しているよ 彼らは常に新しい技術を求め、クリエイティブな闘いをする 自分もそういう選手でありたいと思っているので、彼らの闘いは凄く意識してるね。

総合格闘技を始めた頃は、ブラジリアン・トップチーム(BTT)にいたんですよね?

サンチアゴ イエス。まずBTTにいたんたけど、ヒカルド・リボーリオが「新しいジムを立ち上げるから、一緒にアメリカに来ないか?」と誘ってくれたので、02年からアメリカに移り住んで、アメリカン・トップチーム(ATT)所属になったんた

ということは、ATTの一期生なんですね

サンチアゴ そうだね。自分がアメリカに行ったとき、ATTは6人しかいなかった。それがいまや40人の選手を抱える大きなジムになったんだ。

でも02年当時、BTTといえば、ブラジル最大のチームたったわけじゃないですか そこからアメリカに移るというのは、大きな決断が要ったんじゃないですか?

サンチアゴ いや、そんなに悩むことはなかったよ。当時、BTTでは柔術、ボクシンクなどはジムの中たけでできたんだけど、それ以外の練習かしたいときは、出稽古しなきゃならなかったんだ。それがATTでは、すべて一カ所でできる。リボーリオも「アメリカのジムは最高たぞ 柔術もボクシンクもフィジカルも一カ所ですへてできる。究極のジムたぞ」と言っていたし「アメリカなら、スポンサーも見つけやすい」と聞いていたから、リボーリオのことも好きだったたし「行っちゃおうかな」と思ったんだ(笑)。

ミドル級の世界トップ3はアンデウソン、パウロ・フィリオ、そして俺だ！

――リボーリオに口説き落とされたわけですね。

サンチアゴ それでアメリカに行くと決めたら、リボーリオに「じゃあ、来週からアメリカに来い」って言われちゃってね（笑）。

――そんな急な話でしたか（笑）。

サンチアゴ おふくろに「来週からアメリカに引っ越すことになった」と伝えたら凄くビックリして泣かれたんだけど、もう次の週にはアメリカに移り住んだんだ。

――でも、BTTはPRIDEとの結びつきが強かったじゃないですか。たとえば三崎選手が優勝したPRIDEウェルター級GPなんかも、「BTT所属だったら俺も出られたのに」とか思いませんでしたか？

サンチアゴ いや、自分が正しい練習さえしていれば、チャンスは必ず巡ってくると信じていたし、そういったジェラシーはなかったね。俺はもともとBTTの選手たちの大ファンでもあるから、ミノタウロ（アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ）やパウロ・フィリオらの試合をファンのような気持ちで応援していたね。

――三崎選手が優勝したPRIDEウエルター級GPでは、決勝の相手が同門であるATTのデニス・カーンでしたけど、あの試合はどのように感じましたか？

サンチアゴ とてもショックを受けたよ。デニスの強さを信じていたからね。ただ、あのときデニスは心身ともに非常に厳しい状態だったんだ。上腕二頭筋が断裂した状態で、テーピングを施した試合だった。それに試合前は、婚約者が亡くなるという不幸もあった。それでも強い心で挑んでいった試合だったので、俺も力が入ったし、負けたときは凄く悔しかったよ。

[08.11.01 戦極～第六陣～]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○vsシアー・バハドゥルザダ
1R 1分10秒 TKO

三崎を追い込んだバハドゥルザダに対し、サンチアゴは巧みにグラウンドに持ち込むと、一気にヒールホールドで一本勝ち。修斗世界ライトヘビー級王者をなんと、ほぼ一方的な秒殺で下してGP決勝に進出した

――あのときから「俺が三崎を倒す」という気持ちはありましたか？

サンチアゴ そういう気持ちになったね。俺がセンゴク初参戦時、ササキ（佐々木有生）に勝ったあと、マイクで「これで1対1になったぞ！」と言ったのを覚えているかい？ あれは「ミサキはデニスに勝ったが、俺はササキに勝った。これでATTとグラバカは1勝1敗だ。次は俺がミサキに勝って、決着をつけてやる」という意味だったんだよ

――なるほど。

サンチアゴ ようやくそのチャンスが巡ってきたわけだからね。必ず倒してみせるよ

――ATTのミドル級というとデニス・カーンのイメージが強かったんですけど、いまのナンバーワンはやはりサンチアゴ選手ですか？

サンチアゴ いや、デニスもまだ生きてるからね（笑）。それはどうかな？ ただ、ATTは次から次へと強い選手が生まれているんだ。今日、ナンバーワンだからといって、明日ナンバーワンとは限らない。チーム全体が日々、成長しているんだよ もちろん、俺もこれからとんとん強くなるけどね。

――とくにサンチアゴ選手のミドル級は、世界的にも層が厚い階級ですけど、現時点でミドル級世界トップ3は誰だと思いますか？

サンチアゴ そうだなあ……まず俺だろ（笑）。アンデウソン・シウバ、そしてパウロ・フィリオだろうな。

――やっぱりアンデウソン、パウロ・フィリオは、サンチアゴ選手が認めるほどの実力者でしょうか？

サンチアゴ そうだね。やっぱり彼らこそが世界の最高峰だ。試合展開についても、ほかの誰にも負けない武器を持っている。しかもオールラウンドに武器が多い選手だと思う

――彼らを超えるために、あと何が必要だと思いますか？

サンチアゴ 必要なものは『チャンス』だよ。今回もセンゴクからチャンスをもらえたことで、トーナメントに優勝して、名前を知ってもらうことができた。このチャンスがなかったら、また俺は日本で無名なままだったろう 俺は日々、自分に挑戦しているから、チャンスさえもらえたら、自分の実力を証明してみせるよ。

――では、次の三崎戦はやっと巡ってきた大きなチャンスなわけですね

サンチアゴ 大きな一戦だと思う。ミサキがタフな相手だとわかっているよ。でも、彼はPRIDEでパウロ・フィリオに完敗を喫している。それを考えると、俺が彼から一本勝ちする可能性は充分あるよ。

[08.11.01 戦極～第六陣～]
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
vs中村和裕
3R 0分49秒 KO

戦極ミドル級GP決勝の相手は、中村和裕。不退転の決意でUFCから日本マットに復帰したカズに、2Rまでは劣勢に立たされるが、3R、カウンターの打撃でダウンを奪い、逆転KO勝ち！ 見事にミドル級GP優勝をはたした。

――これからの目標は？ たとえば将来的にUFC王者になりたい気持ちなどありますか？

サンチアゴ とにかくミドル級の世界最高のファイターになりたいんだ。UFCとかセンゴクとかDREAMとか関係なく、最強の男になりたいんだ。1月4日のミサキ戦は、その大きな一歩になると思うよ

――最後に、まったく関係ないんですけど、なぜリング上でもサングラスをしているんですか？

サンチアゴ いや、単に俺は普段からこういう格好をしているから、キャラクターを作るというより、リングでも普段の自分を見せたいと思っているんだ。だから普段とおり、サンクラスをかけるし、サーフパンツを穿いて試合もしている。

――なるほど。かなりサーフィンはやられるんですか？

サンチアゴ 大好きだね。子どもの頃からヒマさえあれば、サーフィンをやってるよ

――じつは三崎選手もサーファーで、格闘家になる前は一年で350日ぐらい海に出ていたらしいですよ

サンチアゴ 350日？ そいつは凄いな。ただ、サーフィンのテクニックだったら負けないぜ。日本にはいいウェーブがあるって聞いてるから、リングで決着をつけたあとはミサキとサーフィンで勝負してもいいね（笑）。でも、どちらも勝つのは俺だぜ！

［08年11月2日／都内・某ホテルにて収録］

Jorge S

JORGE SANTIAGO■80年10月9日、ブラジル出身。02年にMMAデビュー。柔術黒帯の寝技と卓越した打撃を武器に07年ストライクフォースミドル級トーナメントで優勝。『戦極』では4戦全勝。「ゴールデン・ヒザボンバー」というイマイチなニックネームで呼ばれている実力者だ。185センチ、84キロ

“どうかと思う”キモ強ワールドにようこそ!!

マイメロディちゃんが待つ北岡悟のお部屋に潜入!!

1.4『戦極の乱2009』五味隆典戦へ、いざ!

北岡 悟

北岡悟の存在感がどんどん大きくなっている。『戦極』というリングで過剰な自意識を気持ちよく爆発させ、ついにライト級の頂点である五味隆典戦へとたどり着いた北岡。その“どうかと思う”北岡の世界観の源流を探るべく、若者たちが非常に多い都内の繁華街のすぐ近くにある北岡宅に潜入取材を行なった。そこで我々が見たものとは……!?

聞き手/坂井ノブ` 撮影&橋渡し/梅木麗子　試合写真/乾普也

自分の試合のDVDをもらったんで何回も何回も何回も何回も観ました

―今回のインタビューは「北岡ワールドとは何か?」ということで、北岡さんの自宅で取材をやらせてもらってるんですが……。

北岡　なんなんスか、北岡ワールドって?

―北岡さんはあんまり喜んでないと思うんですけど、本誌でずっとやってる〝キモ強〟路線……。

北岡　(さえぎって)〝どうかと思う〟路線ですね(キッパリ)。

本誌前号でも言ってましたけど、「〝キモい〟と言うな。〝どうかと思う〟と言え!」と。でも、最近の『Number』に北岡さんの記事で〝キモ強〟って単語が載ってますね。

北岡　そうですね、布施(鋼治)さんが書いてくださったんですけど、あの言葉を使ってましたね。〝どうかと思う〟って。

―それがもうすでに変換されてますけど(笑)。

北岡　はい。……自分で買ったんですよ、これ(と雑誌の山から引っぱり出す)。もらってませんから。

―そこは強調しておきましょう(笑)。

北岡　(その場で『Number』をめくりながら)『Number』に載ったら親が喜ぶだろうから教えようと思って。凄いですよね、太字で出てますよね。〝どうかと思う〟って。

―自動変換で読むと、「ただいま昇り調子の〝どうかと思う〟男」と。記事も凄いですね。「入場時の大映しになることを意識した顔の作りかたに……」って、どんな紹介のされ方なんでしょうか(笑)。

北岡　そんなに意識してないですけどね。「あ、映ってる」とは思いますけど。

―いや、べつに意識するのはプロとして悪いことじゃないですよ。

北岡　いや、だから意識してないんですよ!　作ってるわけじゃないですから。

―という感じで、ここにきて北岡株はかなり急上昇してますね。優勝してから生活は変わりました?

北岡　変わらないですね。ちょっと嬉しかっただけです。声もよくかけられます。こんなとこに住んでるから、家の近くで若者に声をかけられて、家がバレないように遠回りして戻ったりとかして。あとは、自宅を出たらパッと目が合って話しかけられて、「出てきたばっかりなのに」みたいなこともありますね。原宿のゴールドジムに歩いて行く途中でも何回も握手を求められて、疲れてて面倒くさいなと思うときも正直あります…(苦笑)。握手するときに「よく見かけます」とか言われたり。

―ハハハハ!

北岡　じつは、さっき言われたんですけどね(笑)。

―まさかこのへんに住んでるとは思わないですもんね。

北岡　以前まで近所のタケオキクチでキャンペーンをやってて、五味(隆典)選手と僕のパネルが置いてあって、練習行くたびに店の外から遠目でチラ見して、「まだあるかな?」みたいな感じで前を通ってたら、こないだ店員が会釈してきて「気づいてたのか!」っていう(笑)。

―どうかと思いますね、ホントに(笑)。あいかわらずでよかったです。

北岡　何も変わらないですね。

―部屋もあんまり生活感がないというか、ホントに格闘技一色ですもんね。

北岡　はい。趣味がないのがまるわかりですよね。DVDも……エロはちょっとだけしまってるんですけど(笑)。格闘技のDVDだと、マイブームはやっぱりUFCですね。WOWOW(の中継)が復活してから、キムチマン(金井一朗)にダビングをしてもらって、1からナンバーを書いてしまってあるんです。

毎日トレーニングで忙しいとは思うんですが、映像を観る時間はあるんですか。

北岡　練習を終えて帰ったら凄いしんどいんですけど、ごはんを食べながらずっと映像を流してるんです。あとは『戦極G!』を何回も観たりとか、自分の試合の映像をDVDでもらったんで、それをずっと何回も何回も何回も何回も観てましたね。横田選手の入場曲がけっこう気に入っちゃったぐらい(笑)。

―それは観すぎでしょう(笑)。しかし、見事に男の一人暮らしって感じですね。しかも格闘技一色に染まってて。マイメロちゃんも若干ありますけど(笑)。

北岡　05年に朝のテレビ番組でやってて、たまたま何回か観たらおもしろくて。ファンシーなだけじゃなくて、けっこう風刺が効いてるというか、大人がふざけてる感じなんですよ。おもしろいですから、一回騙されたと思って観てください。

―なるほど。マイメロちゃんのぬいぐるみも多いですね。

北岡　関係者の方からプレゼントでいただいたりするんです。

―ちなみに抱いて寝たりしてるんですか?

北岡　そんなことしないですよ!　大事に扱ってるんで。

―きれいですもんね。

北岡　まあ、練習で疲れすぎるとたまに話しかけたりはしますけど。

―……。

もう「キモい」とは言わせない!

北岡悟ファッションチェック!

じつは北岡悟はオシャレさんだ。本人はこだわりはない、と言いながら人に見られている自覚は誰よりも強いはず。そんな北岡のプロ意識をファッションの側面から見てみよう。

キャップ

いつもはNIKEとジョーダンの北岡も07年大晦日に青木のセコンドについたときは、青木とお揃いのNEW BALANCEで登場!　目深に被りすぎたキャップのせいで顔がよく見えなかったが、「出たかったです!」と絶叫!

エア・ジョーダンとメダル

NIKEがスニーカーとアパレルを展開しているエア・ジョーダン。スニーカーともども北岡はジャージを愛用中。トーナメント優勝のメダルは11.1「戦極～第六陣～」の帰りの埼京線の中でもぶら下げており、立派なファッションの一部だ

NIKEのスニーカー

ハイカットのスニーカーがじつによく似合うよく手入れされているのがわかる。ちなみにグリーンのグラデは撮影日に買ってきたばかりだという。北岡の強烈な個性を足元から支える頼もしい逸品が並ぶ

ラッシュガート

北岡が最近、公開練習の際に着用しているラッシュガード。茶色ベースにモザイク状のカモフラ柄という、なんだかよくわからないが危険きわまりないデザイン。北岡の持つ〝危険性〟をストレートに表現したファッションと言える。

北岡　いま、どうかと思ったでしょ？
——いえ、凄いなぁとは思いましたけど（笑）。
北岡　最近は忙しいんで観れてないんですけど『おねがいマイメロディ』はハードディスクに録って消さないようにはしてるんですよ。
——ハードディスクレコーダーの録画リストも凄いですね。『戦極G！』、『おねがいマイメロディ』、『格闘王』だけ。完璧ですよ。
北岡　はい（笑）。
——さっきチラッとRｉｏさんのエロ本を見せてもらいましたけど、エロＤＶＤとかはかなりの本数を封印してある状態なんですか？
北岡　秘密ですが、とりあえずRｉｏが好きっていうのだけは公言しておきます。

（左）つい最近までとっちらかった状態だったという北岡宅 取材時はキレイに整頓されていた マイメロちゃんは1体のみ外にいたが、ほかのはご覧の状態で保管されていた！（右上）「戦極G（ゴールド）」を録画するために買ったというハードディスクに残っているのは、ホントに「戦G!」、格闘王」、「おねがいマイメロディ」の3番組のみ！（右下）「DEEP」「PRIDE武士道」「アブダビコンバット」、修斗、パンクラス、「HEROS」などの大会のDVD、「足関十段 今成正和」、「中井祐樹 柔術バイブル」、神の子 山本KID徳郁」などの一人にクローズアップしたものと一緒に「もののけ姫」、天空の城ラピュタ」、「エヴァンゲリオン」、ガチャピンチャレンジシリーズ」など。そしてここでも「おねがいマイメロディ」を発見！（中下）エロDVDは片づけられており、撮影も不許可！ いったいどんなコレクションが……!? 唯一公開してくれたのは大人気女優Rioのエロ本だけでした。

カメラマン梅木さん　私、彼女とたまに食事に行ったりしますよ。
北岡　え〜〜〜〜〜っ！ マジっスか？（固まる）。格闘技とか興味ないですかね？ 今度ボクの試合にご招待しますんで……、ぜひ一度！
カメラマン梅木さん　じゃあ、聞いてみますね。
——意外なところで接点ができましたね（笑）。
北岡　声を大にして好きだと言えます。Rｉｏですからね。
——ぶっちゃけ、格闘技のＤＶＤとエロのＤＶＤ、枚数的にはどっちが多いですか？
北岡　……格闘技じゃないですかね。まあ、そういうのやめましょうよ。
——あんまり触れられたくないようなので、じゃあほかの話題に……ざっと部屋を見渡して目につくのはスニーカーですね。
北岡　ぜんぜんこだわってはいないですけどね。ＮＩＫＥがカッコよくて好きですが。
——商品提供とかそういうスポンサー契約ではなくて？
北岡　まったくないですね！ 光岡（映二）さんとか宇野（薫）さんはＮＩＫＥと契約してますよね……。光岡さんとの試合前は「ＮＩＫＥのもんタダで着やがって！」とか言いながらミット打ちとかやってましたね（笑）。
——嫌なミット打ちだなぁ（笑）。
北岡　でも、自腹だからこそ楽しいのはありますから。
——そりゃそうですよ。頑張ったごほうびとか、自分で買うから喜びも大きいですもんね。
北岡　今日もこの緑色のスニーカーを買ったんですよ。あとはジョーダンの服が好きです。これもＮＩＫＥなんですけど別ブランドで。ジョーダンは凄い好きなんですよね。まったくバスケットはできないですけど（笑）。
——マイケル・ジョーダンが好きとか？
北岡　それもないですね、単純に服がいいなって。だからべつにこだわってるわけじゃないですね、全然。格闘技と自分自身にはこだわりはありますけど。
——格闘技だとどのへんが一番影響強いんですか？
北岡　昔はパンクラスに凄いこだわってましたよ、入りたかったですから。入るまでの過程の部分が、「入れるかな、どうなのかな？」ってドキドキみたいなのが凄い大きかったですね。身長が低いんで、たぶん難しいんだろうなって思って。「ちっちゃい」っていまだに言われたりするんですけど、そういうコンプレックスはパンクラス入った時点でなくなったんですよ。
　パンクラスに入れたっていうところで。
北岡　そうですね、「関係ないんだ」ってわかった。あとはなんだろうな……、最近ちょっと、そういうのがわからない部分もあるんですよね、自分の状況が急に変わったっていうのも、多少は影響があるんで。
——いまからちょうど一年前に「やれんのか！」で「出たかったです！」と言ってた頃とは、かなり状況が変わってきてますよね。
北岡　こないだ（足関）十段（今成正和）に「五味まであっという間でしたね」とか言われて。十段に会うのって、僕が試合の一ヵ月前ぐらいに集中的にＤＥＥＰジムに行く時期だけで、試合が終わったら、3〜4週間まったく行かなくなる。だから十段からするとそういう感覚なのかなとは思うんですけど、僕的には短くも濃厚な一年でした。

Satoru Kitaoka

インタビューの途中ですが……

声に出して読みたい 北岡悟語録

ここ2年、北岡悟のテンションは着実に急上昇している。その発言は語録の宝庫。声に出して読みたい発言のオンパレードだ。口に出して言えば気分が高揚するのは間違いない！　さあ、みんなでとうかと思われよう!

こんな顔をして読もう!

■08・11 Fight&Life vol・9

青木真也に「UFCファイターのジョー・スティーブンソン[illegible]って北岡さんにそっくりですよ」と言われ

「似てねえよ(怒)!!」

▼似てるか似てないかで言えば、たぶん凄く似てると思う　というわけで、ケニー・フローリアンのパンチが炸裂した瞬間のジョー・スティーブンソンの写真と見比べてみてください

photo：Josh Hedges(UFC)

■07・8・10 パンクラス記者会見

現役復帰する船木誠勝に挑戦状

「いまの現実と闘え！逃げんな」と言いたい」

パンクラス創設者の復帰に噛みついたが、このとき船木は「俺をボコボコにする選手はほかにいます　北岡がやらなくてもいいと思います」と挑戦を拒否。しかし、北岡はのち、船木と和解していたことを明かした

■07・9・6 パンクラス一夜明け記者会見

前夜の試合でかなり[illegible]

「ご覧のとおり凄いことになってます(笑)。でも、さっきも病院に行って検査してきたんですけど、骨も脳も異常なしと。相手の方は右手を骨折したみたいなんで、そこでもボクの勝ちかなと」

■08・11・1『戦極～第六陣～』試合後のコメントスペース

「いやあ凄かったですねえ～、ボク(笑)」

▼負けず嫌いだか、自虐ネタもイケてるのが北岡たるゆえん。このときは昆布の貼り方、サンクラスのチョイス、全体的なコーディネート、この写真の中での立ち位置などすべてが絶妙だった

■08・11・1『戦極～第六陣～』大会パンフレット

戦極ガールに[illegible]

「えっ!?　似てないですっ！」

▼戦極ガールの久美井ひなちゃん曰く「犬みたいな絵文字あるじゃないですかー」ということらしい。これにはさすがの北岡も「……。」と言葉に詰まっていた。これが新作「アキレス犬」トーシャツにつながったり

■07・12・31『やれんのか！ 大晦日！ 2007』大会後のリング上

「北岡悟ですっ！試合したかったですっ！」

▼試合はなかった北岡にマイクが回ってきて元気いっぱいに挨拶した。幻のライト級トーナメント唯一の出場決定者が北岡である。ちなみに紹介のとき、「北岡サトシ」と紹介されてしまった。

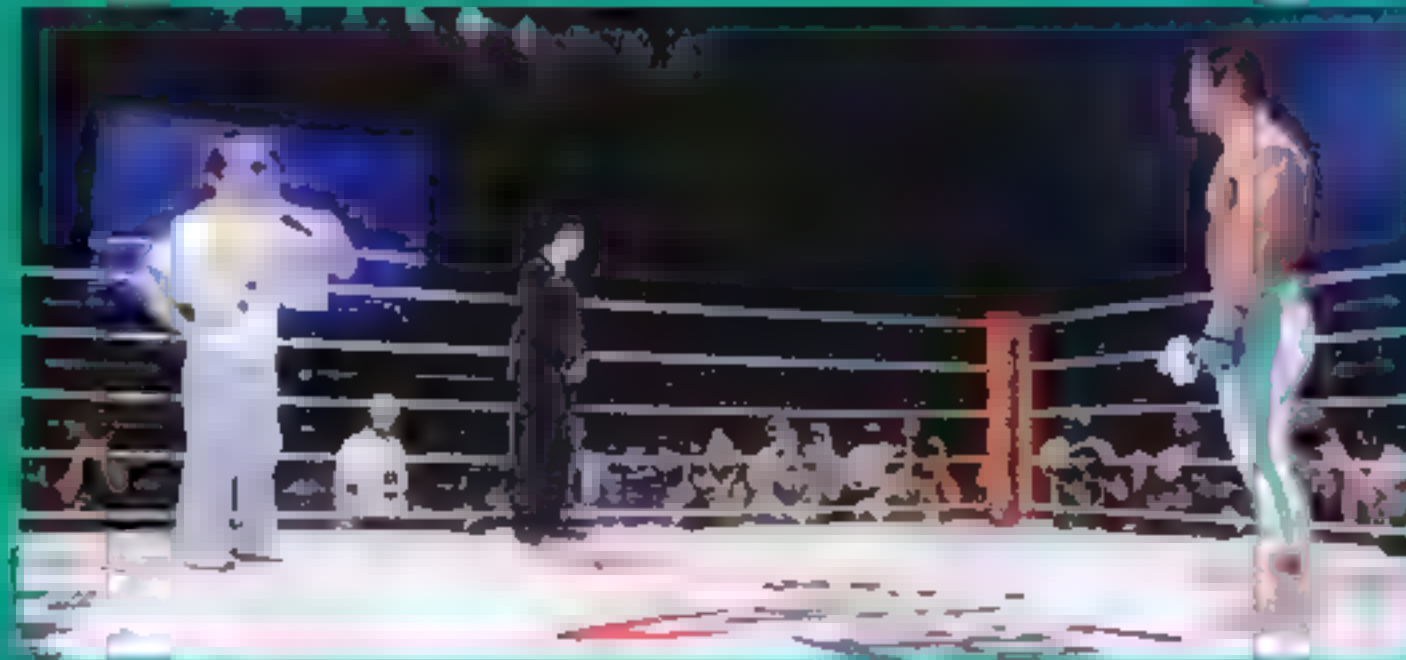
■08・9・28『戦極～第五陣～』S4としてリングで挨拶

「自分はいま二つ不愉快なことがあります。一つは最短試合記録が、シア！パハドゥルザダ選手に破られてしまったこと、それから、S4、で4人でまとめられるのが凄いイヤです」

▼『戦極～第四陣～』においてクレイ・フレンチから1R31秒でタップを奪った北岡だったが、戦極～第五陣～で記録を破られた。観客的には最短記録はどうでもいいのか、リアクションがイマイチだったような……。

■07・2・28 PANCRASE 2007 RISING TOUR 試合後のリング上

「グスタボPCは、世界の強豪なんてそれに勝った僕も世界の強豪なんじゃないかって勝手に思ってます。パンクラスはポートンクと提携しました。でも……。僕が上がりたいリングはPRIDEです。世界最高峰のリングに上がりたいです！」

▼その後、DEEPで行なわれたPRIDEライト級トーナメント出場枠を懸けて闘ったファブリシオ・ピトブル・モンテイロ戦に勝利。しかし、ライト級トーナメントは開催されず……残念

■08・11・1『戦極～第六陣～』トーナメント優勝後のリング上

「今日は負けちゃいましたけど、かかってこい」と五味に言われ

「その挑戦、受けて立ちます！」

▼まったく無名のロシア人セルゲイ・ゴリアエフに負けた五味隆典がバツが悪そうにリングに上がり、トーナメント優勝者の北岡に「かかってこい」。対する北岡は上から目線でこのコメント！

スターになっちゃうと思うんスよ。俺はどうなっちゃうんだろう？

──パンクラスから『戦極』に舞台が変わることで当然、注目度も変わったと思うんですけど、実感として違いはありますか？

北岡 そうですね、凄く横暴なことを言っちゃうと、選手にとって『戦極』や『DREAM』というマスのリングでの一試合の結果は、悪いですけどその下のリングの10試合ぶんぐらいの価値はありますよ。一回負けたら10敗ぐらいだと思いますし。パンクラスのファンが聞いたら怒るようなこと言いましたけど、さまざまな影響力的には実際そうだと思うんで。

──PPVや地上波放送されると反響が全然違いますからね。

北岡 僕の試合そのものはパンクラスと変わらないですよ。いままでパンクラスのリングでやってきたことですからね。もちろん技術的には伸びた部分があるし、70キロに絞ったっていうのもあるし。レベルの高い選手と闘うってことで注目も集めるし。

──そうなると次は載る雑誌も『Number』から『FRIDAY』になったりして。Rioさんと密会とかコンパとか載るかもしれないですねぇ。

北岡 コンバはけっこうです（苦笑）。川村（亮）も凄いAV好きなんですけど、会ったとしても川村と一緒に上品なお食事会くらいがいいです。

──なんですか、上品なお食事会って（笑）。

北岡 エロい感じじゃなくて、楽しい感じがいいっス。普通にごはん食べて「どうっスか？」みたいな。1対1じゃなくていいし。ディープな方向の発展性は求めてない。そういう人たちは映像を観るための存在だと思うんで、触ったりしなくていいと思うんですよ。

──いままで映像で観てた人と直接お会いする機会はありましたか？

Satoru Kitaoka

北岡 まあ、パンクラスの先輩たちがそうですね。

ああ、確かにそうですよね。

北岡 あとは、DREAMでセコンドについたときに青木裕子アナがいましたよね。けっこう好きなんですよ。背が高かったですねぇ。僕が氷入れて青木（真也）を冷やすヤツを作ってたんですよ。氷を触って「冷たっ！」とか言ってたらクスクス笑ってくれました。

──それ、横に青木アナがいるのを意識してやってますよね？

北岡 いや、ナチュラルです（キッパリ）。

──本当かなぁ……。映像で観てたパンクラスの先輩方と会ったときは緊張しました？

北岡 いや、意外とそうでもないです。もう俺はそこに入るんだって思いでずっと観てたから。「混ぜられてる俺、すげえ！」みたいな感じですね。

──「俺、すげえ！」ですか（笑）。

北岡 きっと五味選手と対峙しても、「五味と対峙してる俺、かっこいい！」「五味とやるときの俺って強いんだろうな」みたいな感じですよ。

──北岡さんって相手に飲まれたことないんですか？

北岡 ありますよ。

──その発言からはとても信じられないですけど（笑）。

北岡 飲まれて負けちゃったことありますよ。その経験が大きいです。

──でも、そんな調子なら1・4は勝ちますよね？

北岡 いや、わかんないです。相手は強いですから。僕も弱い部分があります。だけど勝てるものを用意してリングに上がれると思います。悲観的なものはまったくないです。

──対戦相手の発言とかは、気にしてますか？

北岡 嫌でも耳に入ってきますからね。五味選手は「彼は自分のことだけ考えてやってるから楽ですよね。僕はイベントのことも考えてやらなきゃいけないから大変ですよ」みたいなことを言ってたらしいんですよ。

──言いそうだなぁ（笑）。

北岡 「はぁ？ おまえより間違いなく俺のほうがイベントのことも団体のことも考えてやってんだろ！ そんなこともわかってねえのか」と思いましたね。わかってないヤツがまだいたと思って。まあ、こないだ蹴散らした人たちも、負けたけどわかってないと思うんですよ。試合後のコメントを聞くと。でも、それはそれで負けた人たちだからいいやって思ってますけど。

──負けたからすぐ気づくってもんでもないんですね。

北岡 逆に安心しましたね。たぶん僕との差は縮まらないままだと思います。

──五味さんの場合、微妙に空気が読めない発言は多いような……。

北岡 僕も「空気読めない」ってよく言われますけど（笑）。

──五味さんの場合は周りが見えてないってことだと思うんですけど、北岡さんの場合は……。

北岡 気にはしてますからね。デリケートではあるんで。

──でも、こないだちょっといい話を聞きましたよ。佐伯（繁・DEEP代表）さんとしなし（さとこ）さんと青木さんと北岡さんで飯を食いに行ったときの話を。

北岡 ああ、練習後に4人で昼飯に行きました。

しなしさんと北岡さんがずっと自分のことだけをしゃべってて、だんだんイライラしてきた佐伯さんが途中で怒りだして「もうワシ帰る！」って帰っちゃったって。

北岡 「俺は『戦極』で夢をつかむ。『戦極』でDREAM！」とか言いながら飯食ってたんですけど。そういえば青木と佐伯さんは、なんかよくわかんないですけど黙って首を振ってましたね。「スターになっちゃうと思うんスよ。俺はどうなっちゃうんだろう？」みたいなことを言いながら飯を食ってました。

──ハハハハ！

北岡 店はサイゼリヤでしたけど。

──凄く夢がありますよね。ぜひ1・4でスターになっちゃってください。

【08年11月30日／都内・北岡悟自宅にて収録】

新日本を一度、Uインターを二度退団……

プロレスラーになれなかった男の栄光と挫折

菊田早苗

運命の吉田秀彦戦を前に赤裸々告白

1・4「戦極の乱2009」で吉田秀彦戦が決定した菊田早苗。アブダビコンバ[illegible]勝、パンクラスライトヘビー級王者と輝かしい戦歴を誇る菊田だが、ここ数[illegible]いったインパクトを残せていないのも事実。菊田にとってり[illegible]戦を前に、柔道時代から、あまり知られていない新日本[illegible]ているUインター時代など、波瀾万丈の格闘人生を振り[illegible]

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也

—今日は、吉田秀彦戦という大一番の前ということで、菊田さんのこれまでの格闘家人生の集大成的なインタビューをさせていただければと思ってます。

菊田　それはいいんですけど、今回のインタビュー、前のほうに載っけませんか？　たまにしか出ないんだから。

—そういうこだわりがあるんですか？

菊田　全然ないんですけど（笑）、たまにしか出ないし、郷野（聡寛）くんとか三崎（和雄）くんとかいい感じで出してもらってるみたいだから。

なぜか、ボスはなかなか登場しないという（笑）。

菊田　まあ、つまんないですからね、俺（笑）。おもしろいこと絶対言わないから。あと、なんかトラウマがあるんですよ、『kamipro』は。

—菊田さんといえば数年前にウチのインタビューで言った「天山、小島はロクな死に方はしない」発言がずっとつきまとってるような感じがありますからね（笑）。

菊田　そうなんですよ～。それウィキペディアにも書いてるんですよ。

—そんな名言でおなじみの菊……。

菊田　（さえぎって）いや～、もうぶり返さないでくださいよ！（笑）。あの発言は間違いですから。それに話すと、なんであああいう発言をしたのか説明したくなっちゃうんで。発言の前後とか。

—いや、話してくださいよ（笑）。

菊田　でも載せないですよね？　載せてくれるんならちゃんとしゃべりますけど。

—長くなりますか？

菊田　いや、短い、短い（笑）。

—じゃあ、短めにお願いします！

菊田　当時はね、プロレスと格闘技が完全に対立してたんですよ。で、格闘技で勝ってる選手をプロレスのリングに上げて違う世界を作るようなことがよくあったんですよね。そうすると真面目に格闘技やってるほうは「それはないんじゃないの」って思うわけですよ。「そういうことをやっちゃダメだよ」って言いたかったんだけど、趣旨がずれてきちゃって。やっぱり文面って難しいじゃないですか。

見出しだけを取り上げると、強烈だったりしますからね。

菊田　そう。ただ、ほかの職業のことをとやかく言うものではないし、ボクもプロレスラーの方をいっぱい知ってるんで、あのときは言いすぎたな、と。

当時はそういうことを言いたい格闘家もたくさんいたんでしょうけどね。

菊田　そうそう。当時はフリーだったし若いから、なんでも言える立場だと思って、一人で相当責任感を持って言っちゃったなっていうのはありますね。

チョロ（当時の編集担当）　その後、ほかの媒体で言った言わないとかアピールしてましたけど、ちょっと前にそのときのテープを発見してそれを聞いてみたら、「天山、小島はロクな死に方はしない」とは言ってないんですよね。

菊田　言ってないですよね。え、テープがあるんですか？

チョロ　はい、ありますよ。

菊田　じゃあ、証拠を載せましょうよ！

チョロ　いいんだったら載せますけど、確かに「天山、小島」とは言ってないんですが、プロレスラー全員を指して、結局、同じことを言ってるんですよ。

菊田　アッハッハッ！　ウソーッ!?（笑）。

チョロ　で、原稿チェックのときに、それはまずいだろうってことになって……。

菊田　そうだったんだっけなぁ……。俺（苦笑）。ただホント、天山さん、小島さんに対しては何もなかったので、申し訳ない気持ちでいっぱいですね。

—ではロクな死に方をしな……。

「天山、小島はロクな死に方はしない」ってボクは絶対言ってませんから

菊田　（さえぎって）もういいや、違う話題にしましょう！（笑）。

—わかりました（笑）。そんな名言を残してる菊田さんでも、昔はプロレスファンだったんですよね？

菊田　そうです。タイガーマスクのファンで。でも、いま思えば小学校、中学校時代だけかなって感じがしますね。

—柔道を始めたのはプロレスラーになりたいからではなかったんですか？

菊田　ちょっとは関係ありましたね。大人になったらプロレスラーになろうと思ってたんですけど、それまでは自分の強さって誰もわからないじゃないですか。それを証明するものが何かほしいと思って中学のときに柔道を始めたんですよ。

—高校時代はUWFが人気があった頃だと思うんですけど、UWFに入りたいっていうのはなかったんですか？

菊田　ありましたね。その頃はプロレスももうテレビの時代じゃなくなってたんですね。それよりはUWFみたいに一ヵ月に一回試合をやって、練習だけしてっていう生活をしたいなって思って。そういうのがやりたいなっていうか、やるんだなっていうのはありましたね。

—これが俺の進む道だと？

菊田　そうですね。で、宮戸（優光）さんが知り合いだったんで、お願いすることになるんですけど。

—宮戸さんはいつぐらいから知ってるんですか？

菊田　小6から知ってるんですよ。佐山（サトル）さんのスーパータイガージムに入ったときからよくしてくれて。

—小6でタイガージムに入るっていうのも凄いと思うんですけど、スーパータイガーみたいになりたかった、と？

菊田　タイガーマスクには憧れましたけど、そのあと方向性が若干わかんなくなって、しばらく柔道に没頭してましたね。

—柔道一直線だったわけですね。

菊田　凄い熱中したんですよ。で、そのときのヒーローが古賀（稔彦）さんや吉田秀彦さんで。当時の柔道ってもの凄くおもしろかったんですよ。プロレスのテレビ中継も毎週ゴールデンタイムでやってた頃ってワクワクしたじゃないですか。あれとまったく一緒なんですよ。

—強豪ひしめく群雄割拠の時代だったわけですか。

菊田　トーナメントのこっちのブロックは誰々が上がってきて、反対側からは誰が上がってきて、それで吉田さんが何人抜きして優勝したりとか、凄いドラマみたいで、そっちに夢中になっちゃって。

—なるほど、なるほど。

菊田　でも、最終的に柔道も最後は実業団とかに行くんで、そうすると自分の思い描いてた職業ってサラリーマンになっちゃうじゃないですか。それはちょっと違ったんで、プロの世界に行きたいっていうのがありましたね。

—プロの世界イコール、UWFとかそういうのしかなかった時代ですよね。

菊田　そうですよね。修斗とかはまだ確立されてなかったんで。結局、ほんのわずかな人だけがプロとして成り立ってるだけで、そこには入れないと思って。柔道も究められなかった人間がそこに入るのは難しいから、やっぱり練習生で

波瀾万丈の格闘人生
菊田早苗ヒストリー

★小学6年のときに、佐山聡主宰のスーパータイガージムに入門。

★中学から柔道を始め、明大中野高校在学中に高校柔道国体86キロ級で優勝。その後、進学した日本体育大学では古賀稔彦の指導のもと柔道に励むも、紆余曲折あって中退。

★新日本プロレスに一度、UWFインターに一度入門するも、ほどなくして退団。その後、オーストラリアに渡り、スタン・ザ・マンも通うジムでキックボクシングを習う。帰国後、アマチュアシュートボクシング全国大会重量級で優勝、96年&97年にはトーナメント・オブ・Jで優勝。

★98年3月、初参戦となるPRIDEで強豪ヘンゾ・グレイシーと対戦。50分以上の長期戦となるも、最後はフロントチョークで一本負け。

★00年6月、菊田、石川英司、須藤元気、松永裕央ら4人で菊田軍団を結成。チーム名をファンから一般公募し、翌月チーム名がGRABAKAに決定。

★01年4月、アブダビコンバット88キロ未満級を制し日本人初の王者となる。

★01年9月、美濃輪育久とのパンクラスライトヘビー級王者決定戦でTKO勝利し、第2代王者に。

★02年4月、PRIDEに4年ぶりに参戦。大会前から悶着あったアレクサンダー大塚相手に判定勝利。

★02年8月、「UFO LEGEND」でアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラと対戦するも、右ストレートでKO負け。
02年12月、都内・東中野にGRABAKAジムをオープン。

★03年11月、パンクラスライトヘビー級タイトルマッチで近藤有己相手に防衛戦を行なうも、KO負けし王座陥落。

★05年12月、「PRIDE男祭り」でシドニー五輪柔道金メダリストの瀧本誠と対戦し判定勝利。

★06年6月、都内・新大久保にGRABAKA柔術クラブをオープン。

★08年6月、「戦極」に初参戦。クリス・ライスと対戦し、腕ひしぎ十字固めで約一年半ぶりの勝利。

★09年1月、「戦極の乱2009」で吉田秀彦と対戦。

入って、じっくりやるしかないと思ったんですけど、逆にそっちのほうがボクに合ってなかったっていうか（苦笑）。
——菊田さんはＵＷＦインターの新弟子だったことは少し知られてますけど、じつはその前に新日本プロレスの入門テストも受けてるんですよね？
菊田　受けてるっていうか、一瞬入ってますよ。
——あ、一瞬入ってましたか（笑）。
菊田　坂口征夫と憲二が高校の後輩で凄く仲が良くて、そのツテっていうか、坂口（征二）さんの紹介で入ったんですよ。
——ビッグ・サカからの紹介でしたか。それはいつ頃の話なんですか？
菊田　それこそ、小島さんと一緒ですよ。
——あ、ロクな死に方しないでおなじみの（笑）。
菊田　だからぶり返さないでくださいよ！（笑）。あとは池田（大輔）さんとかも一緒ですね。それで同期で一番売れたのは（ショー）フナキさんですよ。
——いまはＷＷＥで活躍中ですからね。結局、長くは続かなかったわけですか。
菊田　そうですね。いま思えばですけど、紹介とかで入るとダメなんですよね。よけいキツいというか。
——それは人間関係的にですか？
菊田　そういう関係なしにキツかったですよね。馳（浩）さんや（佐々木）健介さんに教わってたんですけど。
——健介さんに教わった選手はみんなトラウマになるほど厳しかったって言いますよね。
菊田　でしょうね。いまテレビでよく観ますけど、当時を知ってる人は考えられないと思いますよ。
——でも、菊田さんは柔道の世界で、それこそツライ練習だったりとか経験してきてるわけじゃないですか？
菊田　いや、柔道は実力主義じゃないですか、完璧に。たとえ先輩でも結果的に自分が強ければいいんです。柔道でもちょっとイジメはありますよ。でも道場に行っちゃえば、頭からブン投げようが関係ないんですから。そういうのと違って、プロレスは一方的に練習をやらせるじゃないですか。厳しさが違うというか。
——「闘ったら俺のほうが強いのに」っていうのもありましたか？
菊田　いや〜、でも最初は裸でやるスパーリングのやり方って、わかんないからどんなにアマチュアで強くてもやられちゃいますよ。それにプロレスラーはホントに体力ありますからね。小原（道由）さんとか西村（修）さんとか一緒に練習すると、やっぱり自分は劣ってましたから。そこが何も文句も言えないところで。たとえばスクワット1000回やったあとに、いきなり「次は50回ジャンピングスクワットを10セット」って言われてもやっちゃうんですよ。あれはビックリしましたね。それで自信なくしたっていうか。
——この人たちにはついていけない、と。
菊田　そうですねえ。で、最終的に同期は小島さんだけ生き残って、あとは全員辞めちゃったんですけど、小島さんが一番プロレスが好きだったんだなっていう情熱の差は凄く感じましたね。
——プロレスＬＯＶＥがないと続かない世界だ、と。
菊田　そう思いましたね。凄い後悔しましたけどね。まあボクの場合、完全にクビ的な感じだったんですけど（苦笑）。
——あ、そうなんですか（笑）。
菊田　べつに問題を起こしたわけじゃないんですけど、1週間も経たずに馳さんに「おまえは体力もないし、出てけ！」って言われてバッグごと外に出されて、追い出されたんですけどね（苦笑）。
——そんなことがありましたか（笑）。
菊田　いま思うと、馳さんの優しさだったんじゃないかなって思うんですけどね。……まあ、入って1週間も経ってないんですけどね（笑）。
——それが一回目のプロの挫折ですか？
菊田　そうですね。そのときは大学を休部みたいな感じで行ってたんですけど、辞めて、また大学に戻ったんですよ。非常に非難を浴びましたけど。ま、苦しみを味わったうえで、学園生活をエンジョイしてましたね。
——そのあと、Ｕインターですか？
菊田　そうなんですけど、Ｕインターは10日ぐらいしかいなかったんですよ。宮戸さんの紹介で入ったんですけど、そのときはプロレスに入門するってことが、いろいろとわかってたんでテストに対応できるように1年かけて鍛えて行ったんですよ。だから、テストは凄い高得点で合格したみたいですね。
——傾向と対策はバッチリだった、と。
菊田　そうですね。で、Ｕインターは強さっていうのをみんな求めてるから、キツいんですけど、理にかなった練習をするんですね。でもそういう練習よりもキツかったのは外出禁止だったんですよ。
——合宿所の話ですか？
菊田　そうです。デビューしたら外出できるかと思ったら、金原（弘光）さんや高山（善廣）さんとか、みんな同じ部屋にいて外に出ないんですよ。それを見たときに「ヤバイな」って（笑）。
——プロになっても外出できないんじゃないか、と。
菊田　そうなんですよ。デビューしてる選手もコソコソ買い物に行ったりしてて。田村さんが「いる？」とか「なんかあったら言ってくれ」とかしゃべってるのを聞いて、ちょっとおっかなくなってきて。
——伝説の田村寮長時代ですか？
菊田　そうそう、モロですよ。新日本と違って巡業があるわけじゃないから時間的に余裕があるかなと思ったら、まったくなくて。柔道のときはキツくても日曜日は外に出れるからリフレッシュできるんですけど、出れないっていうのが監獄的な感じで（苦笑）。
——Ｕインターの合宿所は監獄（笑）。
菊田　でもやっぱりね、ボク自身が何につけても甘かったんですよ。当時は自分は辞めてもなんかできるみたいな

SANAE K

菊田早苗秘蔵写真館

小学生時代の菊田と佐山サトルのスーパータイガージムでの2ショット。うしろにはトレーナーを務めていた山崎一夫の姿も。この頃、菊田はジャニーズに応募していた過去もあったりする

Ｕインター退団後、しばらく引きこもり状態だったという菊田が心機一転、向かった先はオーストラリアのスタン・ザ・マンのジム。約1年後、菊田はＫ−1ファイターを目指し帰国。

グラバカ設立前、菊田が新宿スポーツセンター（通称・新宿スポセン）で練習していた頃の一枚。マッチョバディの菊田の周りには高阪、郷野、マッハ、マーコート、うしろには三崎の姿も

01年4月、菊田が日本人初のアブダビコンバット王者に輝いたときの記念撮影。このとき日本チームの団長として参加した谷津嘉章と意気投合したという菊田。いまもメル友なんだとか

高校時代の先輩後輩の間柄になる菊田と坂口憲二。兄の征夫が総合格闘家に転向した際に菊田に相談したというのは有名な話。菊田自身もビッグ・サカルートで新日本へ一度入門しているのだ。

のがちょっとあったんですよ、たぶん。ホントの挫折を知らなかったんで、辞めちゃったのかなって思いますね。

——ある種、自分を捨ててバカにならなきゃ生き残れない世界なんでしょうね。

菊田　ホントそうだと思いますよ。そのとき宮戸さんの紹介で入ったのに、挨拶もしないで辞めちゃったんですよ。それがずっと心残りで。で、2年ぐらい経ってから「もう一回だけやろう」と思って、また練習を始めたんですよ。

——それはいくつぐらいのときですか？

菊田　もう23ぐらいになってたんですけど。そのときに、どこに入ろうかなと思ったときに、やっぱり一回辞めたところに頭を下げて行くしかないと思って。それで宮戸さんの自宅に行ったんです。

——直接自宅に行ったんですか？

菊田　そうなんです。土下座して、「もう一回やらせてください！」って言ったんですよ。最初はブン殴られるかと思ってたんですけど、宮戸さんは「いま、おまえには二つの道がある。一つはここで自分を使ってテストを受けることもできるし、あきらめることもできる。どっちを取るかはおまえ次第だから」と言ってくれて。

——で、もう一回テストを受けることを選んだわけですよね。

菊田　そうです。自分が一回辞めてることを気にしてたら、宮戸さんに「そんなの気にするな。高山もそうだし、みんなそういう（辞めたいという）衝動は絶対にある。そんなことを気にするより、いまこの瞬間を大事にしろ」みたいなことを言われたときにね、「いや、凄い人だなぁ」って思いましたねぇ。宮戸さんは挫折とかしてないのに、そういう人の気持ちをわかるっていうのは凄いなぁと。ボクは挫折した人の気持ちなんかわかってなかったし、挫折する人っていうのは努力が足りないとしか思ってなかった。そこでボクは自分の人生観が変わった気がしますね。

——たしかそのときの入門テストでヤマケン（山本喧一）に腕を脱臼させられてしまうんですよね。

菊田　そうなんですよ。それが3回目の挫折で（苦笑）。

——でも、入門テストってスパーリングはするもんなんですか？

菊田　最後にちょこっとやったんですけど、ボクはもうボロボロでしたからね。入門テストなんで、走ったり、スクワットとかしたあとですから、もうクタクタなんですよ。そこに準備万端の山本さんが来るわけですよ（苦笑）。

——それは相手にならないでしょうね。

菊田　ヘトヘトになったところをバーンって腕取られて、腕が外れちゃって。結局そこまでやるってことは初めから潰しに来てたと思うんですよね。そういう感覚は自分にはなかったんですけど。

——ヤマケンはスパーリングの前に先輩から「わかってんだろうな」って言われてたみたいですからね（笑）。

菊田　そういう意味ではボクが甘かったんでしょうね。自分は出戻りだったんで、やるかやられるかぐらいの気持ちでやらなきゃいけなかったと思うんだけど、そういう意識はなかったんですね。でも、それであきらめがつきました。

プロレスやUWFをやっていてもトップにはなれなかったと思います

——プロになるのをあきらめた？

菊田　プロっていうか、この世界ですね。プロレスというかUWFというか、その世界は3回目だし、もうあきらめなきゃいけないのかなって。いまでも忘れられないです（苦笑）。そのあと完全に引きこもりになりましたね。あのときの夏の暑さは

——挫折から引きこもりですか。

菊田　外とか歩けなかったですね。それで、しばらくして、当時の友だちが「こんなにちっちゃくても頑張ってる人がいるよ」って言って見せてくれたのがスタン・ザ・マンのビデオだったんですよ。

——今度は立ち技ですか。

菊田　そうなんですけど、やっぱり、家でモジモジしてても気分が晴れないし、プロレスに行ってたら巡業とかいろんなことがあって忙しかったろうから、そう考えたときにプロレスに行ってたらできないことをやろうと思って。それでスタン・ザ・マンのジムがあったオーストラリアに行ったんですよ。

——柔道やUWFを目指したあとで、なんでスタン・ザ・マンのところに行ったんだっていう気もしますけど（笑）。

菊田　マニアックですよね（笑）。でも、その頃はK—1がちょっと出始めた頃で、光がポッと来るのはそういうところしかなかったですね。それで行ったんですけど、1年経って日本に戻ってきて、一つだけ答えが出たんですよ。

——どういう答えが出たんですか？

菊田　いろんなところで「自分は絶対成功する！」って吹いてたんですけど、どこでも成功できなくて。そしたら最低でもリングには上がらなきゃいけないなって。みんなに言った手前、そこだけはね。もう、生活はあきらめるしかないけど、40歳ぐらいまではアルバイトしながらでもリングに上がるんだって思って。40から何をやろうとしたかは不気味なんですけど（笑）。

——確かに（笑）。オーストラリアから帰国後は、どこで練習してたんですか？

菊田　そこからは平（直行）さんがやってた正道会館柔術ですね。平さんも知り合いだったんで。で、「K—1やりたいです」って平さんに言ったんです。

——もしかして、K—1に出ようと思ってたんですか？

菊田　そうなんですよ。で、そのとき平さんと本間（聡）さんは総合の練習をやってたんですけど、「総合ってなんなんだろうな？」って思ってたんですよ。

——UFCができたての頃ですか？

菊田　ホイス（・グレイシー）がちょうど出てきた頃で。で、UFCの試合とかちょっと観たんですけど、さすがに命がもたないし、怖いし、自分がやることじゃないなって思ったんですよね。

——初期UFCを観て「やりたいな」とはなかなか思わないですよね。

菊田　思わなかったですよ。当時はあそこに出るのはちょっと変わってる人っていうイメージだったんで。昔の彼女にも「あれに出るんだったら考える」みたいな感じで言われたんで（笑）。

——アハハハハ！

菊田　だから全然考えてなかったんですけど、実際練習してみて、気持ちが少し変わりましたね。それに柔道時代は寝技とか好きじゃなかったんですよ。

——そうなんですか⁉　全然グラップリングバカじゃなかった、と（笑）。

01年4月、アブダビコンバットで日本人初のチャンピオンに輝いた菊田。同年9月にはパンクラス王者にも輝くなど絶好調の菊田は、なんとこの年のプロレス大賞の技能賞を受賞。今度の吉田戦で狙うはベストバウトか？

菊田　まったく違いましたね。寝技は弱いし全然好きじゃなかったんですけど、ひさびさにやったら身体が凄く動くんですよ。「絶対こっちのほうが向いてる」って周りからも言われて。

――そこで寝技に目覚めた、と。

菊田　そうですね。そこに田村さんがK-1でパトリック・スミスとバーリ・トゥードをやるってことで合流して「あ～、ひさしぶりですね」ってなったんです。

――田村寮長と再会ですか（笑）。

菊田　そうなんですよ。そのあたりから『トーナメント・オブ・J』で優勝したり、『バーリ・トゥード・ジャパン』にも出していただいたり。それは負けちゃいましたけど、その頃になってようやくですね。格闘技だけで基盤ができるかもしれないなって思ったのは。

――いまになってみて、Uインターに残らなくてよかったと思います？

菊田　いま思えばですけどね。やっぱり、運命の腕十字という思いはありますねぇ……（しみじみと）。

――ある意味、ヤマケンに感謝ですか？

菊田　そうですね。あのまま残ってたら、逆にどうなっていたのか……。まあ、グラバカはないですよね、絶対。そう考えると不思議なものを感じますね。

――ちなみにUインターに入るときって、いわゆる「プロレスはプロレス」だっていうことはわかってたんですか？

菊田　いや～、深くは考えてなかったですけど、エンターテインメントというのに憧れてたのは事実ですね。

――リアルに実力の世界だけじゃないということは理解していた、と？

菊田　う～ん、やっぱり柔道が長かったんで、小川（直也）さんじゃないですけど真剣なだけの勝負はイヤだったんですよ（苦笑）。実際、それでみんな柔道を辞めちゃうんで。真剣な練習と真剣に臨む試合で、集中しすぎて疲れちゃって。

――それがひたすら続くわけですよね。

菊田　さすがに心臓がもたないっていうか。だからエンターテインメントみたいなのを望んでたかもしれないですね。ただ、いま思えば、身体も硬いし、プロレスに行こうがUWFやろうがトップには行けなかったでしょうね。そう考えると、遠回りしたような、近道を行ってたような、よくわかんないんですけど（笑）。

――でも、プロの世界で実績を積み重ねて、吉田秀彦と大舞台でやることになるっていうのも凄いですよね（笑）。

菊田　そうなんですよね。田村さんとアブダビで会ったのも不思議でしょうがなくて。「なんでUインター辞めてるのにアブダビで会ってるんだ?」って。それがUインターを辞めてから10年後ぐらいで、今度は柔道を辞めて17年経って吉田さんとプロの世界でめぐり会うっていうのが不思議でしょうがない。

――運命的なものを感じます？

菊田　そうですね。ボクが先に行ってるんだけど、なぜかみんなが同じところに来るみたいな感じで。なんかちょっとへんな運命は感じますね。

――そこで勝つことで自分がやってきたことは正しかったっていうふうに思いたいんじゃないですか？

菊田　もちろん自分がやってきた道を否定したくないんで、個人的にはそういう思いで闘って勝ちたいっていうのはあるんですけど……、これが運命だとしたら、ボクが勝つと思うんですよ。

――運命だったら自分が勝つ（笑）

菊田　ただ、あの人のこれまでの歴史を見ると、完全にそういう星の下に生まれたスターなんですよね。そのストーリーでいくと、あの人が勝つんですよ。

――吉田秀彦ストーリーで考えると、吉田さんが勝つ（笑）。

菊田　そう思いますね。いつでもそうですもん。だけど、これがボクに回ってきた運命だとしたらボクが勝つ、みたいな。

――ぶっちゃけ、総合ルールだったら自信があるんじゃないですか？

菊田　いや、そんなことはないですよ。それは逆で、作戦を練ろうとすればするほど違うんですよ、ほかの選手とは。柔道では向こうはエリートだし、力も強いし、崩すのはホントに難しい。ただ、今回の試合は負けたら、いろんな意味で大打撃を受けるんで、なんとしてでも勝たなきゃっていうのはありますけどね。

――これまでの闘いの中でも大一番っていう感じはありますか？

菊田　ありますね。自分の中では2001年のアブダビ決勝戦以来の、一生でそんなにない大一番かなって思ってます。

――失礼ながら、菊田さんって凄い試合を選んできたイメージがあるんですよ。

菊田　いやいや（苦笑）、ボクは選んでるんじゃなくてやりたくない試合はやりたくないだけなんですよ。もう後悔したくないんで。今回の吉田戦っていうのは、複雑な感情はあったんだけどやらなきゃいけない相手だと思うし。

――でも、菊田さんは実力でトップに上がってきた選手じゃないですか？　だから、もったいないなっていう時期もあったんですよ。ここ3～4年は。

菊田　それはですねぇ、たぶん、やる気なくしたんですね（苦笑）。

――じゃあ、しょうがないですね（笑）。

菊田　いや、やる気なくしたって言ったら誤解されるけど、リングに上がることが夢だったのがすぐにかなって、しかもベルトまで獲ったわけじゃないですか。だから、自分の想定以上に早く行きすぎちゃって、そこで一回怖くなったっていうのはあるかな。それに、そこから試合数が激減するじゃないですか？

――見事に激減しましたよね（笑）。ここからがスターダムだろって思って期待してたんですけど。

菊田　ホントはそうですよね（苦笑）。まあでも、また生まれ変わったんですよ、この歳で。要はタイミングなんですよ。マッチメイクもいいのがなかったんで。

――満足できるオファーがなかった？

菊田　まあ、中にはファンも喜んでくれそうなカードもあったんですけど、潰れてしまった試合も多かったのは事実で。

――水面下ではいろいろあった、と？

菊田　そういうことです。そういうことにしましょう！（笑）。

――わかりました（笑）。では、今回は菊田さんのバックボーンがわかったところで、吉田戦を期待したいと思います！

菊田　バックボーンの話だけ盛り上がって終わっちゃいましたね（笑）。こんなんで大丈夫ですか、『kamipro』的に。

――大丈夫です。タイガージム、新日本道場、Uインターも2回経験してる菊田さんは、じつは相当な〝変態〟エリートだということがわかって共感する人も多いと思いますので（笑）。

菊田　そうなんですかね（笑）。まあ、おもしろかったならいいんだけど。

――いやいや、充分おもしろかったです。

菊田　自分ってエリートに思われることが多いんですけど、実際はこのとおり全然違って。でもホント、これまでいろんな人に助けられたし、挫折した人間でも必ずチャンスをつかめるっていうことを学びましたね。次の試合は期待に応えられるよう頑張りますよ！

【08年11月27日／都内・グラバカジムにて収録】

きくた・さなえ■1971年9月10日、東京都練馬区出身。中学から柔道を始め、高校時代は国体86kg級で優勝。卒業後も日本体育大学で柔道を続けるも中退。その後は修斗、リングス、PRIDE、パンクラス、アブダビコンバットなど、さまざまな舞台で活躍。現在の主戦場となっている「戦極」の旗揚げ前の07年12月には本誌No.118で吉田秀彦との対談も実現している。176cm、89kg
菊田早苗日記→http://blog.livedoor.jp/kikuta_sanae/

最初に総合のビデオを観たときは「サイテーなスポーツや!」と

——今日は、『kamipro Move』の毎日ブログも絶好調のMIKUさんに本誌に初登場いただきました!!

MIKU ありがとうございます〜!(元気よく)。

でも、ブログを毎日書くのは大変ですよね?

MIKU そうですねぇ。やっぱり、最初の1カ月はホントに大変でした。でも、だいぶ慣れましたし、なんかしら書きたいことがあるからネタにも苦労しませんし。ある意味、大事な収入源の一つでもありますし(笑)。

恐縮です(笑)。いまやDEEPのチャンピオンですけど、もともと普通のOLさんだったんですよね?

MIKU いや〜、あれをOLと言っていいんですかね。ほんの1年間で、ホントにダメOLでしたから。相当ヤバイですよ……いまだになんの会社だったか、よくわからないですから。

——それはヒドイですね(笑)。

MIKU たぶん空調関係の会社だったと思うんですが……。

そんなに曖昧でしたか。

MIKU 仕事でもいろいろやらかして、営業のボックスに入ってた見積書の書類を自分でチェックして、勝手にシュレッダーで廃棄しちゃったり。

新人が自己判断で書類廃棄(笑)。

MIKU 大変な騒ぎになっちゃって。でも、上司にはあんまり怒られなかったんです。「勝手に判断したらダメだよ〜」とかやさしい感じで。

——「おめえはそれでいいや」と。

MIKU 失敗は山ほどあるんですけど。それをいいことにサボってばっかりだったから、会社的にも辞めてよかったんだろうな、と(笑)。

そのあと、留学のお金を貯めるため、就職先の大阪から実家の富山に1年間戻ったときに柔術に出会うんですね

MIKU ええ。富山に戻ってきたときに、ボクササイズみたいなライトな感覚で、「週に一回くらい空手道場に行こうかな〜」と。でも、以前から「そういうのが得意かな」って気持ちも少しあったんです。そういう……暴力的なことが(笑)。

——あ、暴力には自信アリ

MIKU 柔術は22歳のときに始めたから、今年で5年目なんですけど、球技とか団体競技は苦手で、そのわりに力が強かったし、兄弟ゲンカでもいつも勝ってたり(笑)。最初は、空手道場を紹介してもらうついでにクラブ・バーバリアン(MIKUが所属する富山の総合格闘技、ブラジリアン柔術ジム)を見学したんですけど、ブラジリアン柔術なんて見たことも聞いたこともないから、漠然と見てて。

——K-1とかも知らなかった?

MIKU いや、テレビでやってたら観てましたよ。あのう……ホストさんとか?(自信なさそうに)。

それはアーネスト・ホーストさんですね(笑)。ちなみにプロレスは?

MIKU (表情を曇らせて)う〜ん……、プロレスはあんまり好きじゃないですね しょっちゅう血だらけになってたりするじゃないですか。大仁田(厚)さんとか。女子プロでもイスで頭を叩いたり。ああいう、卑怯なのが基本的に許せないっていうか。

——卑怯ですか(笑)。ただ、総合格闘技もよく知らなかったようで。

MIKU ジムの看板に「総合格闘技」って書いてあったので「コレ、なんですか?」って聞いたり(笑)。で、ジムの人から修斗のビデオを借りたんです。○○○○さんの試合だったんですけど。寝てる人を殴るってのが「ありえへん!」と。

パウンドも許せない、と。

MIKU いまでこそ、技術があるのはわかるんですけど、当時はメチャクチャ殴ってケンカ強いヤツが勝つ! って感じで。お母さんと「サイテーなスポーツや!」「二度と観たくないわ!」って、凄い嫌悪感で、しばらく観ませんでしたから……もちろんいまはそんなことないですけど(笑)

そこまで悪印象でしたか。

福本吉記(クラブ・バーバリアン代表) 最初にジムに見学に来たとき、ウチには女子の部がなかったから、正直、「困ったなぁ〜」って思ったんですよ。そのときパルバロ44って選手の試合前の追い込みのトレーニングをやってたんですけど、MIKUはそれを長時間見てたから、「そんなに一生懸命見なくてもいいよ」って。それで空手の道場を紹介して、「やれやれ」と思ったら、次の日に「ココに決めました!」って来たからビックリして

厄介払いしたと思ったら、ヤル気マンマンで来ちゃった、と。

MIKU なぜか、空手道場には行かずにバーバリアンに決めちゃったんですよ。とくに理由はなかったんですけど、ピンときた感じで……。

——MIKUさんって最初から才能は感じました?

福本 僕は最初に初心者と柔術の練習をやると、必ず手を使わずに足だけでひっくり返すんです。でも、この娘はブリッジしてポーンと戻ってきた。それで「この娘はちょっと違うな」と。

——ハンパな身体能力じゃなかった、と

MIKU それまでスポーツ経験も全然なかったんですけどね。でも柔術を始めて2〜3ヵ月経ったら、福本さんに「試合に出るぞ!」って言われて。

——未経験なのに、いきなり試合に。

MIKU それでドンドン柔術が好きになって。ただ、留学するお金を貯める目的で富山に1年間帰ってきたのに、優先順位が変わってきて。ジムのみんなにも「辞めないほうがいいんじゃない?」とか言われても、「留学するって決めてるんで」って言い聞かせるみたいな雰囲気になってきて。

でも、心は柔術にあった?

MIKU 心は全然柔術なんですけど、優先順位が上なのを認めずに結論を先延ばしにしてて。1年経ったあと、留学の手続きをするために1カ月くらいジムを休んだんですけど……。最終的には柔術を選ぶことになって。

——じつは、そのとき大阪と富山で

遠距離恋愛をしてた彼氏さんがいたとか。

MIKU　そうなんですよ！（笑）。その大阪の彼氏にも「留学するためにお金を貯めるから」って約束で1年間だけ、富山に帰ったんです。しかも、彼氏には柔術をやるのも反対されてたけど「週にほんの数回だから！」って言って、なだめてたんですけど。

——確かにスポーツ歴のない彼女がいきなり格闘技を始めたら心配しますよね。

MIKU　普通は、男だらけの中にいるだけでも心配ですよね。でも、「女の子としかスパーリングしてないから」ってウソをついて。ホントはジムに女性なんかほとんどいなくて、男子と毎日ガンガンスパーやってたんです（笑）。

——それで「格闘技に専念する」って言われたら、理解できないですよね。

MIKU　「なんのために富山に帰ったんだ？」って大反対されて……。そもそも遠距離自体、反対されてたんです。そのときは「留学って夢をあきらめられないから」って説得したのに、最終的に全然違うことを言い出したわけですから。それに、最初の留学は「英語を勉強するためにイギリスに行こう」と思ってたんですけど、その頃は同じ留学するなら、「柔術修行するためにブラジルに行きたい！」って感じで。

——方向性も場所も正反対で（笑）。

MIKU　さすがに彼氏にキレられましたね。しかも最後は「俺か、格闘技かどっちかを選べ」って話になっちゃって。

——うわ～、まさに修羅場というか。

MIKU　そんなこと言われるのイヤじゃないですか！　で、最終的にはスッキリと柔術を選びまして（笑）。

——柔術を選びましたか（笑）。

MIKU　そういうふうに自分のやりたいことを反対されてる状況がイヤだったんですよ。留学の夢っていうのは、いま考えると漠然としたちっぽけなもので「やめろ」と言われたらやめたかもしれないけど、柔術は自分の中で大事なものになってましたから。……でも、だいぶあとで試合を観に来てくれたんです。

——元カレが試合観戦に？

MIKU　その彼は関西の大学を卒業したあと、東京で働いてたんですけど、たまたま連絡をとったとき、軽い感じで「観に来てよ」て言ったらホントに来てくれて。会場は両国国技館（『MARS01 New DEAL』、相手はカリーナ・ダム）だったんですけど。

——初めて観る試合が両国（笑）。元カレも「どこまで出世してんだよ？」って感じで。

MIKU　それで、「そこまで真剣に打ち込んでいたんだ」って感動したみたいで。しかも、その試合は凄い殴り合いで、自分では「かなりいい試合だった」と思ってるんですけど（笑）。

——そりゃあ、感激するでしょうね。

MIKU　その試合のあと、その人が言ってくれた言葉があるんです。「あのとき、柔術をやめさせなくてよかったよ」って……。

——メチャクチャいい話じゃないですか！

MIKU　そうなんですよ！　でも、よく考えると、「アナタはやめさせられなかったんじゃないの？」って（笑）。

——確かにそうですね（笑）。

MIKU　でも「それだけ、やりたかったことだったんだ」と理解してもらってよかったです。……ただ、その彼氏は後日談があって。彼が、東京のバーかどっかに飲みに行ったら、「私、格闘技やってるんです」って女の子と偶然知り合ったみたいで。そこで、凄い最悪なんですけど「MIKUって知ってるか？」とか言ったみたいなんです（笑）。

——それまた、ありがちな展開というか（笑）。

MIKU　そしたら、「お知り合いなんですか？」って食いついてきたから、「いや、じつは元カノなんだよ」って言ったらしくて。「そんなこと言わんといてよ！」って怒ったんですけど。

——すっかり飲み屋の自慢話状態ですね。でも、MIKUさんは最近まで観るほうは興味がなかったみたいで、ちゃんと観だしたのが、『やれんのか！』からとか。

MIKU　そうです、そうです。でも、いまはDREAMに夢中で。「PRIDEも勉強し直したい」と思ってるくらいですから。

——『やれんのか！』のエンディングではリングに上がって、ヒョードルやいろんな選手と写メを撮ったり。

MIKU　ええ。ただ、あの頃はヒョードル選手の凄さがわかってなくて。チェ・ホンマンさんに苦戦してた小さい人って感じで……（と小さな声で）。

——ワハハハハハ！

MIKU　そのときも、みんな恐縮して全然声をかけなかったんですけど、私だけ気軽な感じで「写真撮ってよ～！」って話しかけたら、「いいよ～」って感じでニッコリしてくれて。〝60億分の1の男〟に気軽に写メを（笑）。

MIKU　もう絶対に、そんな失礼なことはできないですけどね！

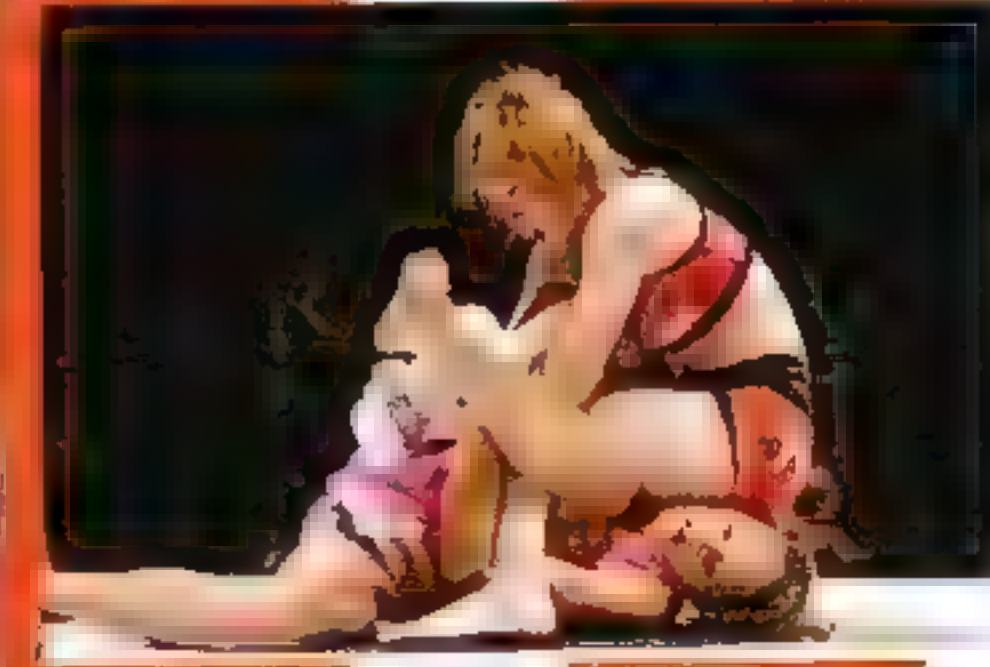
——でも、試合で会場に行けば、有名な選手もいたと思うんですけど。

——「フ～ン」みたいな感じです

MIKU　ええ、当時は「フ～ン」でしたね。周りがギャアギャア言うから、「凄い人なんやろな」って思うく

［シュートボクシング 11.24「S-cup2008」］
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○MIKU vs レーナ×
（3R終了 判定3-0）
MIKUがシュートボクシング初出陣！過去にキックルールで引き分けた女子高生ファイター・レーナと第1試合で激突もMIKUは打撃＆投げで試合を圧倒。フルマークの判定勝利を収め、満面の笑みを浮かべる快勝劇！

［2008.8.17「DEEP 37」］
東京・後楽園ホール
vs龍本美咲（2R [illegible]分40秒 KO）
MIKU時代到来！　初防衛戦は4度目の対戦となる龍本。熾烈すぎる打撃戦のはて、左ミドルを的中させてKO勝利。試合内容でも高い評価を集めた

［2007.8.5「DEEP 31」］
東京・後楽園ホール
vs渡辺久江（2R終了 判定2-0）
〝超新星〟が本領発揮！ ジョシカクのアイコン的存在だった渡辺久江を熱戦の末に下し世代交代。デビュー3年目で第2代DEEP女子ライト級王者へ

［2006.8.26「MARS 04」］
東京・両国国技館
vsカリーナ・ダム（2R終了 判定3-0）
元カレも観戦したMARSでの一戦。この1カ月前の不可解な敗戦のリベンジ戦だったが見事に圧勝。ちなみにカリーナはホドリゴ・ダムのお姉さん。

元カレが私の試合を観たあとに「柔術をやめさせなくてよかった」って

らいで。

——アメリカ（パンナム柔術大会）では、ジョシュ・バーネットに声をかけられても、知らなかったという。

MIKU あ、知らなかったんですよ、ジョシュのこと（笑）。ジョシュのほうは超マニアックで、「MIKU～！ ボクはキミのことをこんなに知ってるよ」みたいに向こうからドンドン話しかけてくれてたんですけど……。

——まさか、自分を知らないとは思いもせずに（笑）。

MIKU そのときはACCの藤井（恵）さんたちと一緒にいたから、「藤井さんのお友だちのおもしろいガイジンさん」って感じで。一日ずっと一緒にいて、最後に握手して別れたあとに「で、あの人誰やったん？」って聞いたら、みんなにビックリされて（笑）。いまはジョシュとも仲がいいですけど、そのときは一番ひどかったですね。

——ほかにも失敗がありました？

MIKU 会場に座ってたら、隣にアサイー（南米が原産のフルーツ）を食べてるオジサンがいて。そのときはSAYAKAって選手と一緒にいたんですけど、「おいしそうだね～」とか普通にしゃべって、アサイーをもらったりしてたんです。その人の腕に顔のタトゥーが入ってて、「誰の顔？」とか聞いたら、「尊敬する父の顔だ」っていうから、「へぇ～、お父さん凄いんだ！」なんて話してたら、いつの間にか周囲に凄い人だかりができてて、よくよく話を聞いたらサウロ・ヒベイロさんだったという（笑）。

——ヒクソンの一番弟子にもそんな気軽に（笑）。あとDREAMで一番好きなのはエディ・アルバレスとか。

MIKU ええ。アルバレスはどの試合を観ても全力投球じゃないですか？ ああいう守りに入ることがない姿勢が「凄くいいな！」って。ただ、私が言っていいのかわからないけど……おもしろくない試合をする選手も、たまにいるじゃないですか？

——いわゆる"塩漬け"みたいな膠着した試合もありますよね。

MIKU ああいうことをする意味がホントにわからないんですよ！ 確かに勝ちも大事ですけど、アマチュアじゃないんですから。（ヨアキム・）ハンセンとかもそうですけど、アグレッシブな選手を尊敬するし、自分も常にそうありたいなって。

みく■1981年6月26日、富山県富山市出身。本名は松本未来。クラブ・バーバリアン所属。04年9月にCROSS SECTIONの石山絵里戦でデビュー。08年8月にDEEPで渡辺久江に判定勝利、第2代DEEP女子ライト級王者に。総合格闘技は通算23戦19勝4敗。破竹の8連勝中。さらに活躍が期待されるジョシカクの"新女王"「kamipro Move」で毎日ブログ「MIKUの格闘ブロガール!!」を好評連載中。160cm、50kg

——あと、"DREAMの大黒柱"青木さんとも交流があるんですよね？

MIKU ええ。年下で、まだこんなに有名になる前からよく知ってたから、いまだに「青木くん」とか気軽に言ってるんですけど、メチャクチャ凄いですよねぇ。ホントに天才肌ですし、それに私にもちょっとしたことでアドバイスをくれたりするんです。

——ワオ木さんがそんな気遣いを。

MIKU 「このあいだの試合のあそこはこうしたほうがいい」とか。あと、試合だと私はいつも集中して、セコンドの声しか聞こえなくなるんですけど、青木くんの声は客席からでも凄くよく聞こえるんです。「MIKUちゃん、そこはこうして！」とか。寝技の攻防のときなんか、その指示で試合が大きく動いたりしますから。

——確かに、青木さんは凄く声が通りますよね。ただ、ウチの誌面の青木さんはジョシカクでイヤらしい話してる感覚しかないですが。

MIKU いや、青木くんは全然マシなほうじゃないですかね。

——青木真也でまだマシですか（笑）。

MIKU ただ、DEEPジムとかに行くと、スッポンポンになってる人とか、いろいろな被害に遭ったりしますけど……。さすがに慣れました（笑）。

——否応なく慣れましたか（笑）。このインタビューはシュートボクシングの試合前（3R、判定3－0でレーナに勝利）にうかがってるんですけど、今後の試合の予定は？

MIKU とりあえず、12月の『DEEP』の試合に集中してますね。

——先日、『ヴァルキリー』と『ジュエルス』というジョシカク団体が旗揚げしましたけど、両方とも観戦されましたよね？

MIKU ええ。『ヴァルキリー』のほうは生で金網の試合を観たのは初めてだったんですけど、ちょっとイメージとは違ってたというか……。もっと「ガシャーン！」とか金網をフル活用するのかなと思いましたけど、意外にロープが金網になっただけって感じで。実際に金網に入ったら、プレッシャーがあるのかもしれないけど。

——参戦を表明しているDEEP系の『ジュエルス』は？

MIKU 『ジュエルス』のほうが、全体的な試合の満足感は多かったかもしれないです。ただ、私も相手がいない状況なんで。来年は、『DEEP』でも『ジュエルス』でも相手に恵まれれば、いつでもやりたいなって。

——8月の防衛戦（瀧本美咲戦、2RKO勝利）は内容も評判がよかったですし、ジョシカクの中心軸になる方ですので、今後も期待してます！

MIKU ありがとうございます！ ただ、ある飲み会の席で試合のことは凄くほめてくれたんですけど、試合後のマイクのことをボロクソに言われてしまって。……所（英男）さんと修斗のBJさんなんですけどね。

——所さんもそんなにマイクがうまいのか？ って気がしますけど（笑）。

MIKU 二人が言うには、「アピールが苦手な選手は、そもそもマイクを持つべきじゃないんだよ！」って。とくに所さんはかなり酔っぱらってて、超ハイテンションだったんで。

——酔った所さんはタチが悪い、と。

MIKU 「あのマイクのおかげで、確実に試合の感動が台なしになったね！」とか「話がまとまってないのにしゃべっちゃダメ！」とか。メチャクチャ厳しいんですよ！ ……でもせっかくの先輩たちからの助言なので、これからのマイクは手短にしていこうかな、と（笑）。

——試合はアグレッシブかつマイクは手短で、頑張ってください！

【08年11月23日／都内・スカパー！社内にて収録】

kamipro SHOPPING

通販カタログ

マッスル スターウォーズ Tシャツ[☆]
[S・M・L・XL イエロー]¥3,150(税込)

青木フンドシ Tシャツ[☆]
[M・L・XL ブラック]¥3,990(税込)

一、十、百、戦極!! 戦極!! Tシャツ[☆]
[M・L・XL ブラック]¥3,990(税込)

マサ斎藤Tシャツ[☆]
[M・L・XL ブラック]¥3,150(税込)

I編集長"殺し"Tシャツ[☆]
[M・L・XL ブルー]¥3,990(税込)

KamiproマスクTシャツ[☆]
[S・M・L・XL ホワイト×レッド]¥3,990(税込)

100号記念特製
巨大バスタオル
[タテ132cmヨコ68cm
ブルー×オレンジ]
¥3,150(税込)

"殺し"キャップ
[フリー ネイビー×ホワイト]
¥3,150(税込)

ザ・モンスター℃ Tシャツ
[130・140・XS・M・L・XL ブラック]¥3,675(税込)

高田総統と愉快なモンスターズ Tシャツ
[XS・M・L・XL ブラック]¥3,990(税込)

ボノちゃん どすこいTシャツ
[100・120・140 グリーン]¥3,150(税込)
[XS・M・L・XL グリーン]¥3,990(税込)

坂田亘 LOVE & HUSTLE Tシャツ
[100・120・140 レッド]¥3,150(税込)
[XS・M・L・XL レッド]¥3,990(税込)

MONSTER K "ON STAGE"Tシャツ
[100・120・140 ブラック]¥3,150(税込)
[XS・M・L・XL ブラック]¥3,990(税込)

『kamipro』通販方法

- 通販はすべて代引きです。お支払いは、現金、デビットカード、クレジットカードの中から選べます
- 全国どこでも送料一律500円です
（何枚でも可。離島・山岳部の方はお問い合わせください）
- 代引き手数料は315円です
（代引き金額によって異なります

(株)ダブルクロス TEL.03-5368-1797
(平日13:00～20:00)

[kamiproオリジナルTシャツ サイズ表]

単位はcmです

サイズ	S	M	L	XL
身丈	66	70	74	78
身巾	49	52	55	58
袖丈	19	20	22	24

※価格はすべて税込みです

電話一本でカンタン注文!!

通販専用ダイヤル(平日13:00～20:00)

TEL.03-5368-1797

(株)ダブルクロスで絶賛受付中!!

「kamipro大賞2008」に投票しよう!!

kamipro PRESENTS

応募要項

[illegible]

【質問事項】 郵便番号・住所・電話番号 2氏名 3年齢・職業 4希望商品 5おもしろかった記事&その理由 6つまらなかった記事&その理由 7 2008年のMVP&ワーストMVPは? 8 2008年のベストバウト&ワーストバウトは? 9 2008年のベスト興行&ワースト興行は?

【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス kamipro_編集部
「切腹しろ!」係まで

応募締切 2009年1月15日(木) 当日消印有効

PRESENT*01

1名様

ART JUNKIE×キン肉マン ポスター

[ART JUNKIE 1,260円(税込み)]

アートジャンキーとキン肉マンがコラボした友情パワーシリーズ開幕戦ポスターです。ありそうでなかったキン肉マンのポスターもの。かわいらしくデフォルメされたキン肉マンのキャラクター大集合です! 一家に一枚!

PRESENT*02

1名様

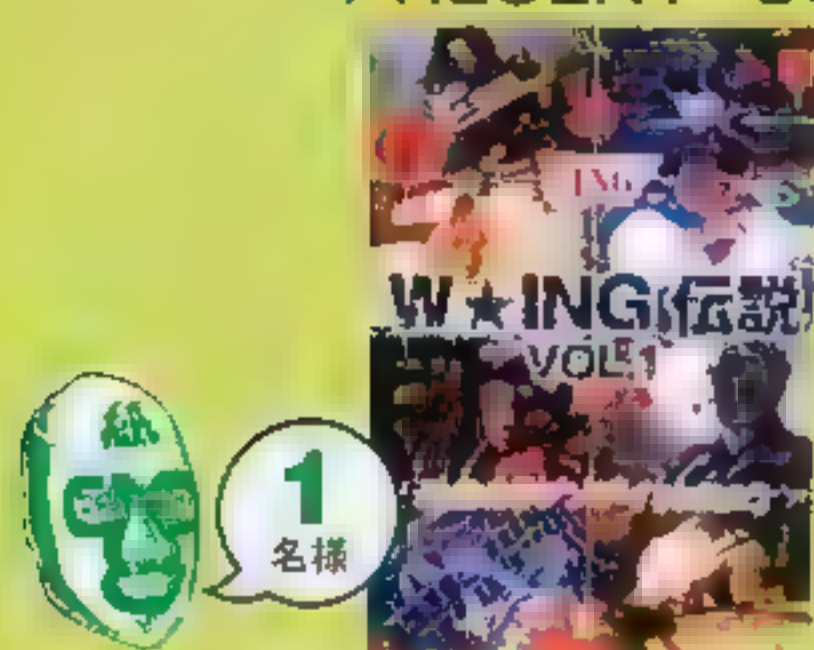
ネプチューンマン マスク狩りTシャツ

[ART JUNKIE 4,200円(税込み)]

「キン肉マン」夢の超人タッグ編でキン肉マン&キン肉マングレート組と闘ったネプチューンマン&ビッグ・ザ・ブドー。そのネプチューンマンのマスク狩りをモチーフにしたTシャツが登場です。こちらのTシャツ、サイズはLです

ART JUNKIE ■ http://www.artjunkie.jp/

PRESENT*03

1名様

DVD『W☆ING伝説 VOL.1 暴虐のラプソディ[狂詩曲]』

[株式会社クエスト 10,500円(税込み)]

伝説のデスマッチ団体W☆INGの名勝負&名シーンをたっぷりと収録! 破天荒な経営で幻の団体となってしまったが、その血みどろのデスマッチは多くのマニアをとりこにした。2枚組で470分という凄まじいボリューム! 必見!

PRESENT*04

1名様

DVD『流智美 Presents プロレスの神様 カール・ゴッチ その真実と真髄』

[株式会社クエスト 5,880円(税込み)]

流智美氏が発掘した秘蔵映像がついに発売! "神様"カール・ゴッチvs"火の玉小僧"吉村道明の幻の名勝負に加え、ゴッチの歴史を振り返る映像、さらには生前のインタビューまでも収録。ゴッチ研究家たちのコメントも収録

PRESENT*05

1名様

DVD『小林 聡 全日本キック 実戦テクニック 徹底解明vol.2』

[株式会社クエスト 5,880円(税込み)]

"野良犬"小林聡GMが数多くの名勝負の中から、超絶技巧、最先端のテクニック、壮絶KOシーンを抜粋してお届けする徹底解明シリーズ第二弾。勝敗を分ける一瞬のテクニックを、GMが丁寧に実演・解説する

QUEST ■ http://www.queststation.com/

PRESENT*06

1名様

DVD『地上最強のカラテ 結集篇』

[株式会社クエスト 5,880円(税込み)]

日本映画史上に残る大ヒット作となった「地上最強のカラテ」「地上最強のカラテPart2」の映像素材を吟味し、より完成度の高いドキュメンタリー映画として、ドラマチックに再編集した特別版。伝説の「熊殺し」を目撃せよ!

PRESENT*07

1名様

DVD『極真カラテ 第9回全世界空手道選手権大会 カラテ世界大戦 名勝負55番 奪回への光』

[株式会社クエスト 7,800円(税込み)]

松井章圭館長率いる極真会館の第9回全世界空手道選手権大会から、名勝負55試合を厳選しノーカットで収録! エヴェルトン・テイシェイラが優勝した今大会で日本選手で唯一ベスト8に入賞をはたした村田達也を徹底取材!

QUEST ■ http://www.queststation.com/

PRESENT*08

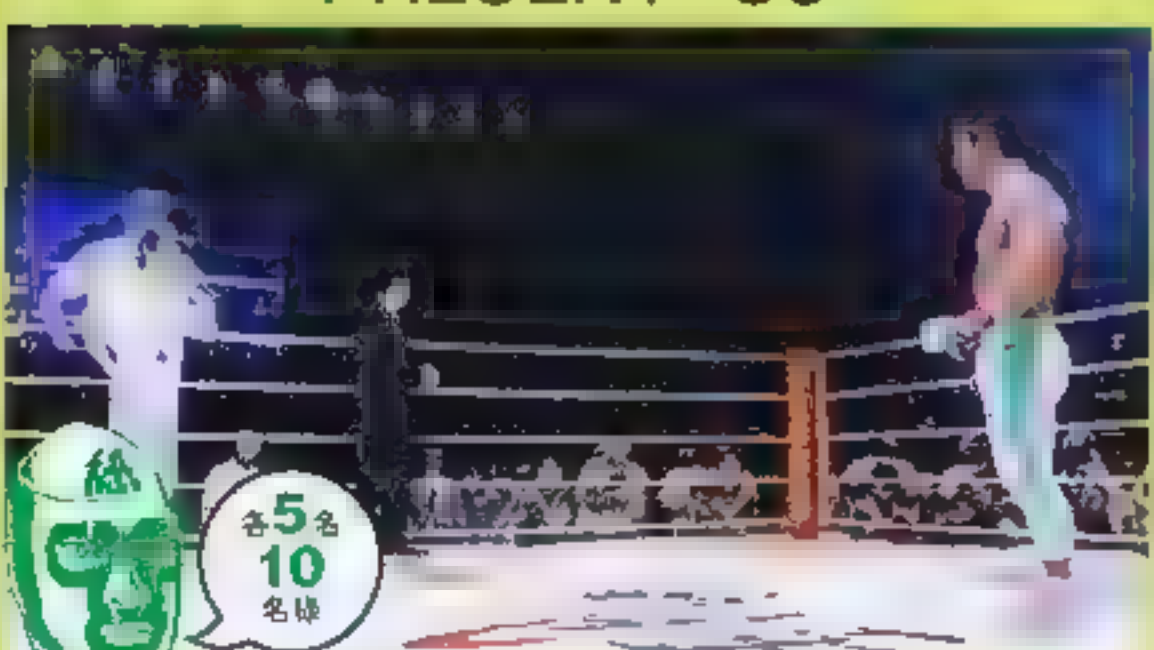
1名様

DVD『GLADIATOR 2008/8/16』

[CMA 非売品]

8月16日に岡山の桃太郎アリーナで開催された日韓親善国際格闘技大会の模様を収録。ミノワマンvsトン・フライ、ゲーリー・グッドリッジvs天田ヒロミ、ヘルナール・アッカvs高森啓吾など有名選手も多数参戦! マニア必見!

PRESENT*09

各5名 10名様

戦極パブリックビューイング招待券 東京&大阪

[株式会社ティ・ジョイ 4,500円(1ドリンクつき)]

「戦極の乱2009」のパブリックビューイングが1月4日16:00から東京・新宿バルト9と大阪・梅田ブルク7で開催される。このプレゼントのみ、応募は2008年12月26日必着とさせて頂きます。必ず希望する劇場を明記してください

新宿バルト9 ■ http://wald9.com/index.html 梅田ブルク7 ■ http://burg7.com/index.html

PRESENT*10

1名様

WWE サイバー・サンデー08 Tシャツ

[WWE JAPAN]

インターネットやモバイルの投票で内容が決まる時代の波に乗ったPPVイベント「CYBER SUNDAY」。スペシャルゲストレフェリーに"ストーンコールド"スティーブ・オースチンも登場した。TシャツのサイズはMです

WWE JAPAN ■ http://www.wwe.co.jp/

PRESENT*11

1名様

rvddw「BACK TO SCHOOL SET」

[リバーサル 2,625円(税込)]

リバーサルはウェアだけじゃない! ロゴ(表面)、金網柄(裏面)のクリアファイル。4色(黒、赤、緑、青)ついているボールペン。厚みのあるカンペンケース。ステッカーセットまでついて、学校、仕事場などで大活躍してくれそうだ

リバーサル ■ http://www.rvddw.com/

kamipro130 応募券
金髪豚野郎

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!

こちらでも毎週プレゼント実施中!!

http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス
No.130
2009年1月3日 発行

発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
編集統括本部長
ジャン斉藤
編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
大川義之
スズキィ
八木賢太郎（長男猛特訓のため非番）
終身名誉バイザー
吉田 豪
助っ人
ジャイ子
能登"読者ページ"ジャクソン
高橋くん
編集次長（K-1マンセー!）
松林 貴
デザイン大将
出田さん（TwoThree）
デザイン司令長官
金井ヒサくん（TwoThree）
デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木みのる（以上、TwoThree）
トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 專英
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
丸山剛史
お勘定
工藤ちゃん
流行語大賞
入江アラフォー（TwoThree）
雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
助っ人営業
上野宏樹
業務部
樽本"ジェット・シン・マニア"義之
編集庶務
原 正典
山内ユリコ
終身名誉編集庶務
高木由美子
編集チアガール
金川奈津子
宮沢美奈
編集チアマダム
廣橋久美子
発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）
印刷
図書印刷株式会社
協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

キンボもマット界も
そしてアナタも
来年はいいことがありますように!!

NEXT ISSUE

Dynamite!!、UFC、ハッスル、戦極から
新日本まで、年末年始格闘大戦速報号!

kamipro Special 2009 FEBRUARYは1月10日（土）発売予定!

リアルで公明正大なkamipro大賞を発表するぞ!!

No.131は1月22日（木）発売予定!

※地域によっては多少発売日が遅れるぞ!!